大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIII

1993年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人　大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告　XIII

1999. 3

本書には、長原古墳群中における最古・最大級の古墳、一ケ塚古墳と塚ノ本古墳に係わる調査成果を収録する。両者は4世紀末から5世紀初めにかけて築造された、直径50mクラスの円墳である。前者に関して、古墳の規模を明らかにするとともに、周濠から出土した多数の埴輪を報告した。特に、家形埴輪には良好な資料が多く、高殿風の入母屋家は大型で注目される。長原古墳群の初期における埴輪組成を考える上での基礎資料となろう。後者に関しては、これまでの調査成果を含めた検討を掲載した。

また、有茎尖頭器の新資料3点、古墳時代の集落に伴うと推測される区画溝、長原・瓜破遺跡の境付近にある「馬池谷」内の土地利用状況、その支谷に当る「小谷」の確認など、後期旧石器時代から近世に及ぶ調査成果を収録した。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIII

1993年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人　大阪市文化財協会

一ケ塚古墳

「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XIII　正誤表

頁	個　所	誤	正
135	表11の単位	mm	cm

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIII

1993年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

本書は、大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果を収めた『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズの13冊目に当るものである。

ここには、1993年度に実施した発掘調査で得られた、旧石器時代から江戸時代にかけての調査成果が収録されている。なかでも、長原古墳群で最古・最大級の円墳、一ケ塚古墳と塚ノ本古墳に関する成果は注目すべきもので、とりわけ一ケ塚古墳から出土した数多くの埴輪は、かつてこの地域を支配した有力者の姿を彷彿させるであろう。しかし、これまでの調査成果によれば、その栄華は時代の流れとともに忘れ去られ、その後、律令国家を支えた穀倉地帯に変貌していくことが明らかになっている。

本事業が始まった頃の長原には、まだ、その当時を想わせる田園風景が残されていたが、開発とそれに伴う発掘調査の進展とともに、こうした田園風景も新しい都市景観へと姿を変え、昔日の面影をしのぶことも稀になってきている。それだけに、これまで二十年余りに及ぶ地道な発掘調査の積重ねによって得られた膨大な量の考古資料を、より有効に活用し、新しい時代をつくるための糧としていくことが、われわれに課せられた課題であるといえよう。

最後に、発掘調査および報告書作成に当って、ご理解、ご協力を賜った関係各位に、心より御礼申し上げる次第である。

1999年３月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　　佐治　敬三

例　　言

一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1993年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎(現調査部長)の指揮のもと、同主任藤田幸夫(現調査課長代理)・田中清美(同前)・京嶋覚(現同課長)、調査員趙哲済(現同課主任)・高橋工・岡村勝行・小田木富慈美・松本百合子・久保和士・大庭重信、嘱託調査員大成可乃(現東京大学埋蔵文化財調査室)・筒井史(旧姓板野)・高橋真由美(旧姓瀬尾)が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。

一、木製品および金属製品の保存処理は調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。

一、本書の執筆は、第Ⅱ章第2節と第Ⅳ章の石製品を大庭が、第Ⅱ章第4節を田中が、第Ⅴ章第3節を高橋工が、石器遺物と第Ⅱ章第2節の石製品を松本が、有茎尖頭器459を小田木が分担し、その他を上記調査員との検討や調査記録をもとに主として久保が行った。英文要旨の作成はRobert Condon氏が行い、岡村と宮本康治(調査課調査員)がこれを助けた。本書の編集は各執筆者の協力を得て、久保が行った。

一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永圀治氏に委託した。

一、動植物遺体の詳細な報告は別途機会を設けて行う予定である。

一、発掘調査にはGaidah Chapman(英国ボーンマス大学学生)・都ラジ(韓国東亜大学校学生)の両氏の参加を得た。また、石器遺物について山中一郎氏(京都大学)、一ケ塚古墳出土の形象埴輪について高橋克壽氏(奈良国立文化財研究所)にご教示を賜った。記して、深謝の意を表する次第である。

一、発掘調査および資料整理・作図には財団法人大阪市文化財協会に所属する多くの補助員諸氏の参画を得た。厚く御礼申し上げる。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡　例

一、本書において用いる地層名は原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済1997]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原○層とし、図表等ではNG○層とした。現段階の標準層序は別表(159頁)に示した。また、断面図における粒径表記も同文献に従って行った。

一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。

一、遺構名の表記には、塀・柵(SA)、掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、石器集中部(LC)、その他の遺構(SX)、自然流路(NR)の略号を用いた。略号の後ろには各調査次数ごとの通し番号を付し、遺構の大まかな検出層準が区別できるように、長原4層層準の溝にはSD4○○、長原7層層準の土壙にはSK7○○のように表記した。

一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○○mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。

一、遺物実測図中において、黒色土器A類では内面、同B類では内外面、形象埴輪では剥離面にスクリーントーンを付した。また、石器遺物に関しては報告番号の下に石器遺物登録番号を括弧を付して記した。

一、石器遺物の図版の縮尺は約2／3である。

一、石鏃の型式分類の基準および各部位の名称は、[菅榮太郎1995]に準拠した。

一、本書で頻繁に用いた土器編年は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、円筒埴輪：[川西宏幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会編1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、瓦器：[森島康雄他1995]

本 文 目 次

序文

例言

第Ⅰ章　調査の経過と概要 …… 1
　第1節　1993年度の発掘調査と報告書の作成 …… 1
　　1)発掘調査 …… 1
　　2)報告書の作成 …… 2
　第2節　発掘調査の経過と概要 …… 3
　　1)瓜破遺跡東南地区 …… 3
　　2)長原遺跡西地区 …… 3
　　i)93－34次調査　ii)93－68次調査
　　iii)93－71次調査　iv)93－82次調査
　　3)長原遺跡西南地区 …… 5
　　i)93－6次調査　ii)93－7次調査
　　4)長原遺跡南地区 …… 7
　　i)93－22次調査　ii)93－31次調査
　　5)長原遺跡中央地区 …… 8
　　6)長原遺跡東南地区 …… 9
　　i)93－4次調査　ii)93－5次調査　iii)93－8次調査

第Ⅱ章　瓜破遺跡東南地区・長原遺跡西地区の調査結果 …… 11
　第1節　UR93－14次調査 …… 11
　　1)層序とその遺物 …… 11
　　2)遺構とその遺物 …… 12
　　i)江戸時代から近現代　ii)江戸時代
　　iii)室町時代　iv)飛鳥～奈良時代　v)古墳時代

3)小結 …… 18
第2節　NG93－34次調査 …… 19
1)層序とその遺物 …… 19
i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 23
i)室町時代　ii)鎌倉時代
iii)古墳時代　iv)旧石器・縄文時代
3)小結 …… 36
第3節　NG93－68次調査 …… 38
1)層序とその遺物 …… 38
i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 41
i)江戸時代　ii)平安・鎌倉時代　iii)奈良時代
3)小結 …… 43
第4節　NG93－71次調査 …… 44
1)層序とその遺物 …… 44
i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 53
i)江戸時代　ii)室町時代
iii)平安・鎌倉時代　iv)飛鳥時代以前
3)小結 …… 58
第5節　NG93－82次調査 …… 59
1)層序とその遺物 …… 59
i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 61
i)江戸時代　ii)室町時代　iii)鎌倉時代
iv)平安時代後期　v)飛鳥・奈良時代　vi)飛鳥時代以前
3)小結 …… 70

第Ⅲ章　長原遺跡西南地区・南地区の調査結果 …… 71
第1節　NG93－6・7次調査 …… 71
1)層序とその遺物 …… 71

i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 78
i)中世・近世　ii)古墳時代後期～奈良時代
iii)一ケ塚古墳(長原85号墳)
3)小結 …… 109
第2節　NG93－22次調査 …… 113
1)層序とその遺物 …… 113
i)層序　ii)各層の出土遺物
2)遺構とその遺物 …… 115
i)江戸時代　ii)室町時代
iii)平安・鎌倉時代　iv)飛鳥時代
3)小結 …… 118
第3節　NG93－31次調査 …… 119
1)層序とその遺物 …… 119
2)小結 …… 120

第Ⅳ章　長原遺跡中央地区の調査結果 …… 121
第1節　NG93－76次調査 …… 121
1)層序とその遺物 …… 121
2)遺構とその遺物 …… 123
i)江戸時代　ii)平安時代中期
iii)平安時代前期　iv)飛鳥時代
v)古墳時代　vi)弥生時代後期　vii)縄文～弥生時代中期初頭
3)小結 …… 140

第Ⅴ章　長原遺跡東南地区の調査結果 …… 141
第1節　NG93－4次調査 …… 141
1)層序とその遺物 …… 141
i)層序　ii)縄文時代以前の石器遺物
2)遺構とその遺物 …… 143
i)平安時代　ii)縄文・弥生時代
3)小結 …… 145

第2節　NG93－5次調査 …… 146
1)層序とその遺物 …… 146
i)層序　ii)縄文時代の石器遺物
2)遺構とその遺物 …… 148
i)平安時代後期・鎌倉時代　ii)古墳時代後期
iii)弥生時代　iv)旧石器時代
3)小結 …… 150
第3節　NG93－8次調査 …… 151
1)層序 …… 151
2)遺構とその遺物 …… 151
i)鎌倉時代　ii)塚ノ本古墳(長原1号墳)
3)塚ノ本古墳に関する検討 …… 155
i)古墳の立地　ii)墳形と規模
iii)墳丘の外表施設と墳丘の築造方法・埋葬施設
iv)周濠と遺物の出土状況　v)墳丘体積の試算

別表　長原遺跡の標準層序1995 …… 159

引用・参考文献 …… 160

あとがき・索引

英文要旨

報告書抄録

原色図版目次

1 一ケ塚古墳　埴輪出土状況
　周濠内円筒埴輪出土状況
2 一ケ塚古墳　近景
　上：近景
　下：周濠近景
3 一ケ塚古墳　家形埴輪
　上：家形埴輪1・2
　下：家形埴輪1

図版目次

1 瓜破東南地区UR93－14次調査地　北区地層断面・古代の遺構
　上：地層断面とSD601
　下：7・8(NG6)層下面完掘状況
2 瓜破東南地区UR93－14次調査地　南区遺構
　上：完掘状況
　下：SK701断面
3 長原西地区93－34次調査地　地層断面・古墳時代の遺構
　上：北壁断面
　下：古墳時代の遺構全景
4 長原西地区93－34次調査地　古墳時代の掘立柱建物
　上：SB701
　下：SB702
5 長原西地区93－34次調査地　古墳・鎌倉時代の遺構
　上：SD706遺物出土状況
　下：鎌倉時代の遺構全景
6 長原西地区93－68次調査地　地層断面
　上：東壁断面と22(NG6Ai)層上面の状況
　下：22層以下の地層断面
7 長原西地区93－68次調査地　奈良・鎌倉時代の遺構
　上：22層上面検出足跡の完掘状況
　下：15(NG4Bii～iii)層上面の水田
8 長原西地区93－71次調査地　地層断面
　上：東区　地層断面
　下：西区　地層断面
9 長原西地区93－71次調査地　西区「馬池谷」
　上：「馬池谷」西斜面全景(西から)
　下：「馬池谷」西斜面全景(東から)
10 長原西地区93－71次調査地　東区古代・中世の遺構
　上：SD404杭列および断面
　下：3b(NG3)層上面の水田
11 長原西地区93－82次調査地　地層断面・「小谷」
　上：西壁断面
　下：「小谷」完掘状況
12 長原西地区93－82次調査地　古墳・飛鳥時代の遺構
　上：完掘状況
　下：7e(NG7A)層上面須恵器165出土状況
13 長原西地区93－82次調査地　飛鳥～室町時代の遺構
　上：飛鳥時代の遺構
　下：室町時代の遺構全景
14 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳(一)
　上：調査地遠景
　下：一ケ塚古墳全景
15 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳(二)
　上：円筒埴輪出土状況

下：周豪完掘状況
16 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳(三)
上：鍛346・棒状木製品348出土状況
中：鍛346出土状況
下：鍛347出土状況
17 長原西南地区93－6・7次調査地　地層断面・飛鳥時代の遺構
上：一ケ塚古墳周濠断面
下：SD601遺物出土状況
18 長原南地区93－22次調査地　近景・地層断面
上：調査地近景
下：東壁断面
19 長原南地区93－22次調査地　飛鳥～江戸時代の遺構
上：SD701
下：中世・近世の遺構全景
20 長原中央地区93－76次調査地　弥生～平安時代の遺構
上左：弥生・古墳時代の遺構検出状況
上右：同完掘状況
下左：飛鳥時代の遺構検出状況
下右：平安時代中期の遺構検出状況
21 長原中央地区93－76次調査地　地層断面・古墳時代の遺構
上：南壁断面
中：SD701断面
下：SD701・702断面
22 長原中央地区93－76次調査地　古墳時代の遺構
上：SD701ヨコヅチ387出土状況
中：SD701木製品388出土状況
下：SX703遺物出土状況
23 長原東南地区93－4次調査地　全景・平安時代の遺構
上左：西区　全景(西から)
上右：西区　全景(東から)
下左：東区　全景
下右：東区　SE401
24 長原東南地区93－5次調査地　全景・地層断面
上：完掘状況
下：西壁断面
25 長原東南地区93－5次調査地　旧石器～弥生時代の遺構
上：NR1501断面
中：8(NG12～13)層石鏃470出土状況
下：SD901
26 長原東南地区93－8次調査地　全景・地層断面
上左：南区　全景
上右：南区北半　塚ノ本古墳墳丘盛土上面
下左：南区北半　完掘状況
下右：北区　地層断面
27 瓜破東南地区UR93－14次・長原西地区93－34次調査地　遺構・包含層出土遺物
28 長原西地区93－34次調査地　遺構出土石器遺物
29 長原西地区93－34次調査地　遺構・包含層出土遺物(一)
30 長原西地区93－34次調査地　遺構・包含層出土遺物(二)
31 長原西地区93－34次・71次調査地　遺構・包含層出土遺物
32 長原西地区93－71次調査地　遺構・包含層出土遺物
33 長原西地区93－82次調査地　包含層出土遺物
34 長原西地区93－82次調査地　遺構・包含層出土遺物
35 長原西南地区93－6・7次調査地　遺構・包含層出土遺物
36 長原西南地区93－6・7次調査地　遺構・包含層出土埴輪
37 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の土器・円筒埴輪
38 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の円筒・朝顔形埴輪

39 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の家形埴輪(一)
40 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の家形埴輪(二)
41 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の家形埴輪(三)他
42 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の家形埴輪(四)
43 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の家形・盾形埴輪
44 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の衣蓋形埴輪
45 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳の靭形・草摺形・不明形象埴輪
46 長原西南地区93－6・7次調査地　一ケ塚古墳周濠内出土木製品
47 長原中央地区93－76次調査地　遺構・包含層出土遺物
48 長原中央地区93－76次調査地　遺構・包含層出土遺物
49 長原東南地区93－4次・5次調査地　遺構・包含層出土遺物

挿図目次

図1　土地区画整理事業施行範囲と調査地 …… 2
図2　UR93－14次調査区配置図 …… 3
図3　瓜破遺跡東南地区および長原遺跡西地区の調査位置 …… 4
図4　93－71次・82次調査区配置図 …… 5
図5　長原遺跡西南地区および南地区の調査位置 …… 6
図6　93－6・7・18次調査地の区分 …… 6
図7　長原遺跡中央地区の調査位置 …… 8
図8　長原遺跡東南地区の調査位置 …… 10
図9　UR93－14次調査地の地層断面 …… 12
図10　8層出土の石鏃 …… 12
図11　北区遺構平面図 …… 14
図12　南区遺構平面図 …… 15
図13　SE301実測図 …… 16
図14　SD602断面図 …… 16
図15　遺構出土の石器遺物 …… 17
図16　遺構出土の土器・土製品 …… 17
図17　93－34次調査地の地層断面 …… 21
図18　各層出土の土器 …… 22
図19　各層出土の木製品・鉄製品 …… 23
図20　鎌倉・室町時代の遺構平面図 …… 24
図21　古墳時代の遺構・地山上面平面図 …… 25
図22　SB701実測図 …… 26
図23　SB702・703実測図 …… 27
図24　古墳時代の遺構出土土器 …… 28
図25　韓式系土器・陶質土器 …… 30
図26　石製品 …… 31
図27　LC1201石器遺物出土位置および捕集微細遺物分布図 …… 32
図28　石器遺物(1) …… 35
図29　石器遺物(2) …… 36
図30　93－68次調査地の地層断面 …… 40
図31　各層出土の土器 …… 41
図32　15層上面検出水田平面図 …… 42
図33　93－71次調査地の地層断面 …… 46
図34　1～3層出土の遺物 …… 48
図35　4～7層・SD401出土土器 …… 50
図36　4・5層出土の瓦塼 …… 51
図37　5a層出土石器遺物 …… 52
図38　7a層出土鉄製品 …… 53
図39　遺構平面図 …… 54

図40 SD404実測図 …… 56
図41 木製品 …… 57
図42 93－82次調査地の地層断面 …… 61
図43 各層出土の石器遺物 …… 61
図44 中世・近世の遺構平面図 …… 63
図45 古代の遺構平面図 …… 64
図46 古墳～奈良時代の遺構断面図 …… 65
図47 「小谷」など出土の土器・土製品 …… 66
図48 「小谷」出土の須恵器(1) …… 67
図49 「小谷」出土の須恵器(2) …… 68
図50 93－6・7次調査地の地層断面 …… 72
図51 各層出土の土器 …… 74
図52 各層およびSD601出土の円筒埴輪 …… 76
図53 各層およびSD601出土の朝顔形・形象埴輪 …… 77
図54 遺構平面図 …… 79
図55 SD601実測図 …… 81
図56 一ケ塚古墳周濠断面図 …… 82
図57 周濠内円筒埴輪出土状況平面図 …… 83
図58 周濠内木製品・円筒埴輪出土状況平面図 …… 84
図59 木製品出土状況断面図 …… 85
図60 一ケ塚古墳出土の土師器 …… 85
図61 円筒埴輪(1) …… 86
図62 円筒埴輪(2) …… 87
図63 朝顔形埴輪 …… 88
図64 家形埴輪1 …… 90
図65 家形埴輪2 …… 92
図66 家形埴輪2～4 …… 93
図67 家形埴輪5(1) …… 96
図68 家形埴輪5(2) …… 97
図69 家形埴輪6・7ほか …… 99
図70 衣蓋形埴輪 …… 101
図71 盾形・靫形・草摺形埴輪 …… 103
図72 不明形象埴輪(1) …… 105
図73 不明形象埴輪(2) …… 106
図74 木製品 …… 108
図75 一ケ塚古墳復元図 …… 110
図76 家形埴輪5模式復元図 …… 111
図77 93－22次調査地の地層断面 …… 114
図78 出土遺物 …… 115
図79 遺構平面図 …… 116
図80 93－31次調査地の地層断面 …… 119
図81 93－76次調査地の地層断面 …… 122
図82 12層出土土器 …… 123
図83 平安～江戸時代の遺構平面図 …… 124
図84 平安時代の掘立柱建物実測図 …… 125
図85 平安時代の遺構出土土器 …… 126
図86 SE401実測図 …… 128
図87 弥生～飛鳥時代の遺構平面図 …… 129
図88 SD701・702断面図 …… 130
図89 SD701遺物出土状況平面図 …… 131
図90 弥生～古墳時代の遺構出土土器 …… 132
図91 SD701出土木製品(1) …… 133
図92 SD701出土木製品(2) …… 134
図93 SX703実測図 …… 135
図94 SX703出土臼玉 …… 135
図95 臼玉計測値の分布 …… 135
図96 SX704実測図 …… 136
図97 縄文～弥生時代の遺物分布図 …… 137
図98 SX902出土土器 …… 138
図99 石鏃 …… 138
図100 93－4次調査出土の石器遺物 …… 142
図101 遺構平面図 …… 143
図102 平安時代の遺構出土土器 …… 144
図103 93－5次調査地の地層断面 …… 147
図104 縄文時代の石器遺物 …… 148
図105 SD701断面図 …… 148
図106 遺構平面図 …… 149
図107 93－8次調査区実測図 …… 152
図108 塚ノ本古墳周辺と93－8次調査区の位置 …… 154
図109 塚ノ本古墳模式断面図 …… 155

表目次

表1　1993年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧 …… 1
表2　UR93－14次調査地の層序 …… 11
表3　93－34次調査地の層序 …… 20
表4　93－68次調査地の層序 …… 39
表5　93－71次調査地の層序 …… 45
表6　93－82次調査地の層序 …… 60
表7　93－6・7次調査地の層序 …… 71
表8　93－22次調査地の層序 …… 113
表9　93－31次調査地の層序 …… 120
表10　93－76次調査地の層序 …… 121
表11　SX703出土白玉計測値一覧表 …… 135
表12　石鏃一覧表 …… 139
表13　93－5次調査地の層序 …… 146
表14　93－8次調査地の層序 …… 151
表15　塚ノ本古墳とその周辺に関する既往調査と成果 …… 153
別表　長原遺跡の標準層序1995 …… 159

写真目次

写真1　93－82次調査風景 …… 5
写真2　93－6・7次調査現地説明会風景 …… 7
写真3　一ケ塚古墳の保護砂による埋戻し …… 7
写真4　93－22次調査前の状況 …… 8
写真5　93－5次調査風景 …… 9
写真6　UR93－14次調査SE301 …… 13
写真7　93－68次調査12層上面水田 …… 43
写真8　SX601 …… 43
写真9　93－71次調査SD404杭列検出状況 …… 56
写真10　「馬池谷」動物遺体出土状況 …… 58
写真11　93－6・7次調査SE301 …… 80
写真12　SK302 …… 80
写真13　93－22次調査6層上面朝顔形埴輪出土状況 …… 115
写真14　93－31次調査地全景 …… 120
写真15　地層断面 …… 120
写真16　93－76次調査8層上面ウシ足跡 …… 123
写真17　SE401 …… 127
写真18　SX704遺物出土状況 …… 136
写真19　93－4次調査地の地層断面 …… 141
写真20　SE401検出状況 …… 143
写真21　NR901西川辺川検出状況 …… 145

第Ⅰ章　調査の経過と概要

第1節　1993年度の発掘調査と報告書の作成

1)発掘調査

1993年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は13件、発掘総面積は2,522.8㎡であった(図1、表1)。そのうち瓜破遺跡東南地区が1件166㎡、長原遺跡西地区が4件964㎡、同西南地区が2件787㎡、同南地区が2件131.8㎡、同中央地区が1件210㎡、同東南地区が3件264㎡であった。

現場での作業は1993年4月19日に開始し、1994年3月18日に終了した。各調査とも検出した遺構・遺物は写真や実測図によって記録し、保存処理が必要なものはそのつど処理した。各調査の調査地番・面積・調査期間・担当者などは表1に記したとおりである。

なお、調査次数は遺跡略号UR(瓜破遺跡)・NG(長原遺跡)の後に年度、次いで各年度における開始順の番号を付けて表記するが、本書ではNGのみ省略することもある。

表1　1993年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

調査次数	調査地番	面積	調査期間	担当者
瓜破遺跡東南地区				
UR93－14次	平野区瓜破東8丁目	166㎡	1993年6月21日～1993年8月28日	松本百合子
長原遺跡西地区				
NG93－34次	同　長吉長原西2丁目	367㎡	1993年7月27日～1993年12月21日	久保和士・大庭重信 瀬尾真由美
NG93－68次	同　長吉長原西2丁目	188㎡	1993年11月17日～1994年2月2日	松本百合子
NG93－71次	同　長吉長原西2丁目	263㎡	1993年11月29日～1994年2月10日	田中清美
NG93－82次	同　長吉長原西2丁目	146㎡	1994年1月24日～1994年3月12日	久保和士
長原遺跡西南地区				
NG93－6次	同　長吉長原西4丁目	590㎡	1993年4月19日～1993年9月30日	京嶋覚・岡村勝行・久保和士 大成可乃・瀬尾真由美
NG93－7次	同　長吉長原西4丁目	197㎡	1993年4月19日～1993年9月30日	京嶋覚・岡村勝行・久保和士 大成可乃・瀬尾真由美
長原遺跡南地区				
NG93－22次	同　長吉川辺1丁目	95㎡	1993年6月21日～1993年7月16日	趙哲済
NG93－31次	同　長吉川辺1丁目	36.8㎡	1993年7月19日～1993年7月27日	板野史
長原遺跡中央地区				
NG93－76次	同　長吉長原3丁目	210㎡	1993年12月17日～1994年3月18日	小田木富慈美
長原遺跡東南地区				
NG93－4次	同　長吉川辺3丁目	168㎡	1993年4月19日～1993年7月20日	藤田幸夫
NG93－5次	同　長吉川辺3丁目	74㎡	1993年4月19日～1993年6月1日	松本百合子
NG93－8次	同　長吉長原東3丁目	22㎡	1993年4月19日～1993年4月27日	高橋工

2)報告書の作成

遺物の水洗・マーキング・接合などの作業、図面・写真資料の基本的な整理作業は、発掘調査終了後ただちに調査担当者のもとで行った。報告書の作成のための遺物・図面の整理作業は1997年度に行ったが、調査担当者が整理期間中に現場作業などほかの業務に当っていたため、遺物の復元・実測・写真撮影、製図などの作業は田中・久保のもとで、原稿執筆は例言に記したような分担で行った。報告書の編集には調査部長永島の指揮のもと、久保が当った。

報告書の版下の作成は[高井健司1992]で紹介された方法に基づいて行い、当協会が近年刊行した報告書同様、できあがったデジタルデータを印刷所に直接入校した。

図1　土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節　発掘調査の経過と概要

1)瓜破遺跡東南地区(図3)

当地区は瓜破遺跡の東南端に当り、これまでの調査では、その南西部において7世紀代の掘立柱建物群や橋・井戸など官衙的な建物群が分布することが明らかとなっている[南秀雄1987、大阪市文化財協会1992・1994]。本年度は北東端でUR93−14次調査を行った。

UR93−14次調査区は長さ74m、幅約2.2mで、阪和貨物線に平行して北東から南西へ緩くカーブしている。耕地への出入口を確保するために調査区を南北に2分し、北区から調査を始めた(図2)。現状の道路を敷設する際に大幅な客土を行っていることから、まずこれを機械掘削し、それ以下は人力で調査を進めた。遺構検出は4面で行い、奈良時代の溝などを検出した。また、縄文・弥生時代の石鏃や古墳時代の土製紡錘車などが出土した。掘削深度はもっとも深いところで約1.5mで、中位段丘構成層に達した。

2)長原遺跡西地区(図3)

当地区では1983年度以降多くの発掘調査が実施されてきた。地区内では南南東から北北西に延びる「馬池谷」と呼称する幅約100mの埋没谷の存在が明らかになっている。本年度の調査地のうち、NG93−34次は谷底の東斜面、同93−68次は谷底、同93−71次は谷底から西側の肩部、93−82次は「馬池谷」の西肩から、この谷から派生する小支谷(本書で「小谷」と命名する)の東肩にかけての範囲に相当する。

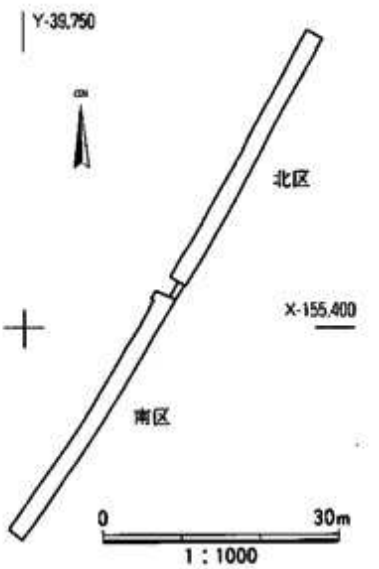


図2　UR93−14次調査区配置図

ⅰ)93−34次調査

調査区は幅約21mの東西方向の計画道路の北半において、幅約9m、長さ48mの長方形に設定した。「馬池谷」にかかることが予測されたことから地山までの深さを確認するために、まず、7月27日に調査範囲の東西両端2個所で試掘を行った。その結果、調査地が馬池谷の東斜面に当ることが予測でき、現地表面から地山までの深さが西端では3mに及ぶことがわかった。

そのため、安全を期して調査区の周囲にH鋼と横矢板を用いた土留めを行って、調査を進めることとなった。8月18日からH鋼の打設を開始し、同31日から現代作土層を重機で掘削した後、それ以深を人力で掘削・調査した。ただし、長原5層および同6層相当層が厚く、調査期間の制約もあったことから、期間途中に再度重機を導入して同層を掘削した。また長原5層相当層以下を掘削するには、H鋼の土留め能力の許容範囲を越えたため、H鋼の内側をテラスとして残したまま調査面積を縮小しなければならなかった。これによって、現地表下3.2mまで掘削し、長原15層からなる地山面に達した。遺構検出は7面で行い、縄文時代の有茎尖頭器を含む石器集中部、古墳時代中期の建物群、飛鳥時代以降の耕作遺構などを検出した。

ii)93－68次調査

調査区は幅約21mの南北方向の計画道路の西半において、幅約6.5m、長さ約29mの長方形に設定した。本調査地は谷の中心部かあるいは西側の斜面に該当すると予想されたため、過去の調査結果から調査深度に留意し、H鋼と横矢板による土留めを行いながら調査を進めた。調査は地層観察用のテラスを残して現代客土から長原2層相当層までを機械掘削し、それ以深を人力で調査・掘削した。また、安全を期するため平面的な調査は地表下3.5mにとどめ、それ以深は2個所に深掘りトレンチを設定して地層の堆積状況を確認した。遺構検出は4面で行い、古代以降の耕作遺構を検出した。また、

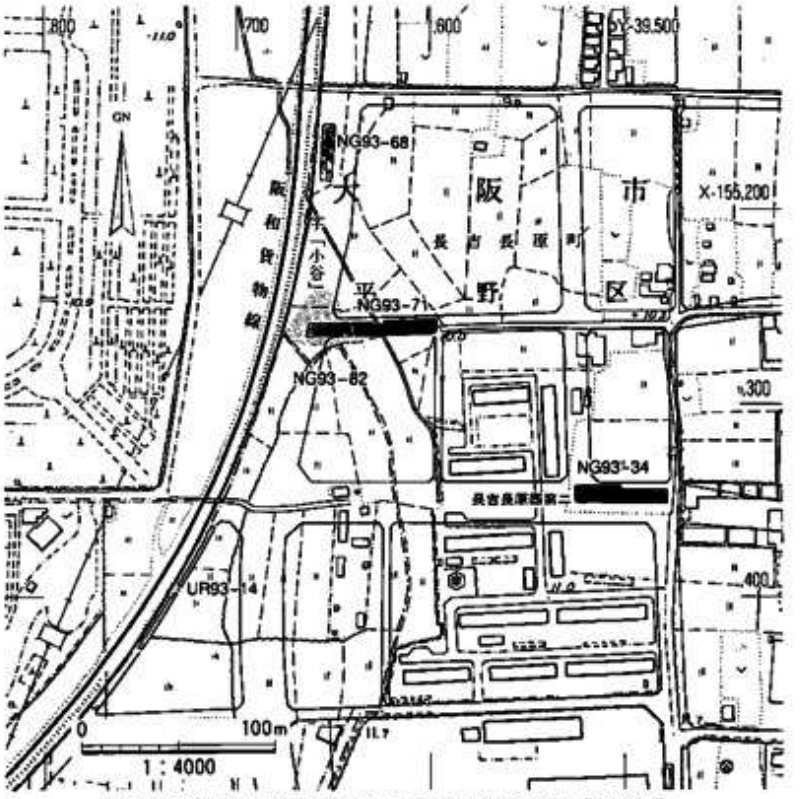


図3　瓜破遺跡東南地区および長原遺跡西地区の調査位置

「馬池谷」の底を現地表下5.2mの深さ(TP＋約５m)で確認し、過去の調査例の中ではもっとも深かった。

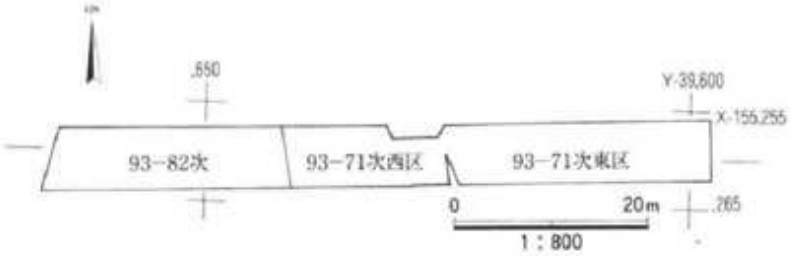


図４　93−71次・82次調査区配置図

iii)93−71次調査(図４)

調査区は幅約９mの東西方向の計画道路内において、幅6.5m、長さ約44mのほぼ長方形に設定した。調査範囲を横断するように北流する水路以西を西区、以東を東区と呼称する。西区は次に述べる93−82次調査地と西端で接する。調査は、道路敷内の不法投棄物および現代客土を重機で除去した後、これ以深は人力で調査・掘削した。しかし、H鋼による土留めが行われなかったため、テラスを幾層にも設けた結果、長原6B層相当層の上面では調査区の幅が１m弱となり、これ以深の平面的な調査は断念せざるをえなかった。したがって、谷底の地層堆積状況は数個所の深掘りトレンチによって、長原7B層相当層まで確認したにとどまる。なお、水路の部分についても、水路を付替えた後、補足調査を実施した。遺構検出は７面で行い、奈良時代以降の水田遺構、「馬池谷」の西側の肩と斜面を検出した。

iv)93−82次調査(図４、写真１)

93−71次調査地の西隣に位置し、同調査区につなげて幅6.5m、長さ約24m調査区を設定した。調査は現代作土を重機で掘削した後、以深は人力で掘削・調査した。遺構検出は８面で行い、西端でこれまで未確認であった「馬池谷」の小支谷と考えられる谷地形「小谷」が見つかった。また、それを埋積する地層中から多量の飛鳥Ⅰに属する遺物が出土し、「馬池谷」の西側における古地形・集落の存在を推定することができた。

写真１　93−82次調査風景(東から)

３)長原遺跡西南地区(図５)

今年度は一ケ塚古墳の西部で、２件の調査を行った。一ケ塚古墳については1993年度までに３次にわたる発掘調査を実施している(図75、110頁)。

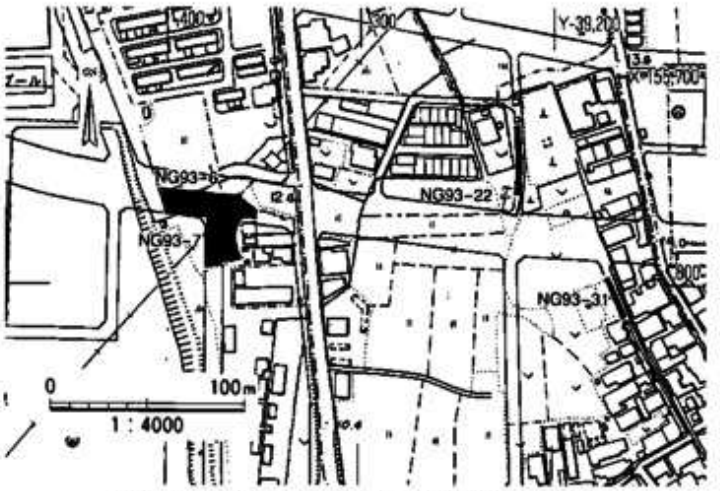


図5　長原遺跡西南地区および南地区の調査位置

NG82－27次調査は最初の発掘調査で、東へ張り出す造出しと思われる部分を発掘した[大阪市文化財協会1990a]。この調査では周濠内から壺形・家形・囲形・盾形・草摺形・鞆形などの形象埴輪が多量に出土し、5世紀初頭の古墳であることが明らかになった。また、地籍図に残る「一ケ塚」と呼ばれる円形の土地から、墳丘の形状は帆立貝形ではないかと推測された。

91－54次調査は一ケ塚古墳の墳丘北部の調査で、周濠内から円筒埴輪のほか家形・衣蓋形・盾形・鶏形などの埴輪や加工された板などが出土した[大阪市文化財協会1997c]。また、墳丘の裾部が奈良時代以降の耕作によって1.5m近く削込まれていたことから、墳丘が「一ケ塚」の範囲よりひとまわり大きかったことが判明した。この調査時点で、一ケ塚古墳の墳丘は造出しをもつ円墳の可能性が強まった。また、墳丘上の長原13層から石器遺物も出土した。

91－81次調査地は82－27次調査地の北に接する位置で、周濠外縁部に当る[大阪市文化財協会1997c]。この調査では周濠外縁に接するようにして、一ケ塚古墳と同時期の小方墳が発掘された。この方墳から円筒埴輪や壺形埴輪などが出土している。

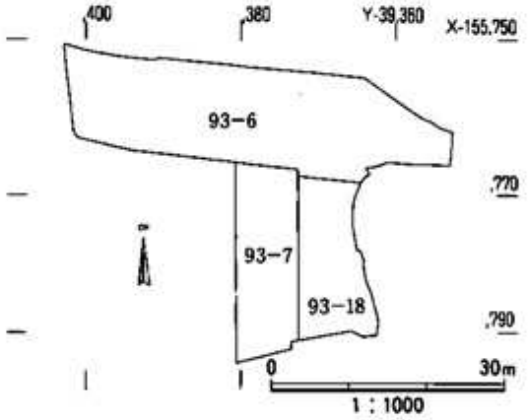


図6　93－6・7・18次調査地の区分

今年度の調査は、一ケ塚古墳西半部での初めての調査であり、同古墳の規模が確定されることが期待された。

ⅰ)93－6次調査(図6、写真2・3)

幅21mの東西方向の計画道路の南半部において、幅12m、長さ約50mの調査区を設定した。北壁・西壁・東壁・南壁の東端には安全を期するため、H鋼による土留めを施して調査した。調査は現代作土を重機で

写真２　93－６・７次調査現地説明会風景

写真３　一ケ塚古墳の保護砂による埋戻し

掘削した後、以深は人力で掘削・調査した。

ii)93－７次調査(図６、写真２・３)

93－６次調査地にほぼ直交する幅９mの計画道路において、幅８m、長さ約25mの調査区を同調査区につなげて設定した。調査は93－６次調査と同時に行ったので、本報告では双方の調査成果を一括して報告する。また、墳丘規模や形状を確認するために、東南に接する敷地で国庫補助事業として実施した93－18次調査の成果[大阪市文化財協会1995b]についても、本報告書作成に伴って再検討を行った。

これらの調査の結果、一ケ塚古墳の周濠の１／５ほどを完掘することとなり、一ケ塚古墳の規模を明らかにすることができたほか、多数の埴輪や木製の鋤などが出土した。また、飛鳥時代以降は周濠内が耕地として継続的に利用されていたようすが判明した。それらの成果を市民に伝えるため、93年７月31日に現地説明会を開催し、多数の参加を得た(写真２)。また、埋戻しは、古墳保護のため砂を底に敷いてから行った(写真３)。

４)長原遺跡南地区(図５)

本年度は旧東除川の周辺で２件の調査を行った。東除川は古墳時代後期末に開削されたと考えられ、古代・中世のたびかさなる改浚の後、1704年の大和川の付替えによってその機能を失った埋没河川である。

ｉ)93－22次調査(写真４)

調査地は旧東除川の西岸付近に当る。墓地西側の幅４mの計画道路において、南北約36m、幅約2.6mの調査区を設定した。調査地では旧東除川の滞水層に由来すると考えられる湧水が多く、斜面崩壊を防ぐために法面工法を用いたため、平均深度1.9mの最終調査面で

写真4　93－22次調査前の状況(南から)

は充分な面積を確保できなかった。しかし、近世から古代にかけて、3面で遺構・遺物の検出を行い、旧東除川の開削年代に関する従来の知見を検証するとともに、いくつかの新たな資料を得た。

ii)93－31次調査

調査地は東除川の東岸付近に当り、小字名は「新田」である。生活道路の確保と現在使用中の下水管保護のため、幅4mの計画道路のほぼ西半分において、幅1.5m、長さ約24mの調査区を設定した。現代客土および作土を重機で掘削し、以下は人力で掘削・調査した。調査区の幅が狭かったことから、掘削は地表下1.1mまでにとどめた。ただし、北端から約5mの区間をさらに1m掘り下げ、層序の確認を行った。狭小な調査であったこともあり、平面的な調査を行うことができず、断面の観察と記録のみを行った。

5)長原遺跡中央地区(図7)

周辺の調査でこれまでに古墳時代の集落や古墳、飛鳥～奈良時代の水田遺構、平安～室町時代の集落遺構などが検出されている。今年度は1件の調査を行った。

93－76次調査地は東西方向の現行道路の拡幅予定地に当り、幅6.5m、長さ約39mの調査区を設定した。掘削深度や安全性を考慮して、調査区の周囲にH鋼による土留めを行いながら調査を行った。機械掘削は現代盛土および現代作土までとし、以下は人力で掘削した。平安時代の遺構面以深は、道路側から幅1mの部分をテラス状に掘り残して安全の確保に努めた。その後、古墳時代の遺構が全域に拡がることが明らかとなったため、調査終了直前に、テラス部分を掘削して遺構の全容の確認を行った。遺構検出は9面で行い、平安時代の集落遺構、古墳時代の集

図7　長原遺跡中央地区の調査位置

落遺構、古代以降の耕作遺構などを検出した。また、縄文・弥生時代に属する石鏃や縄文時代晩期の土器片も出土した。

6)長原遺跡東南地区(図8)

当地区では市道川辺町線の南側で2件、北側で1件の調査を行った。前者ではこれまでの調査と同様に、旧石器～弥生時代の流路や溝、石器遺物、平安時代の集落遺構が検出された。後者は長原古墳群中で最大の規模をもつ塚ノ本古墳上に位置する。

i)93－4次調査

大正川に北接する東西方向の幅4mの計画道路において、幅2.5m、長さ72mの調査区を設定した。現在の大正川は護岸整備されて直線的な河道となっているが、以前は若干曲折していた。また、周辺の耕作地の整備に伴って、調査地も盛土されたことが判明していた。したがって、調査幅に比して調査最終面が深くなることが予測されたため、安全確保のためにシートパイルを打設して調査を行った。また、調査区は東西に長いため2回に分けて順次調査を実施した。西側を西区、東側を東区と呼称する。遺構検出はおおむね2面で行い、西区から東区西端にかけての範囲では平安時代の集落遺構が見つかった。また、有茎尖頭器も2点出土した。

ii)93－5次調査(写真5)

本調査地は93－4次調査地の西方約60mにあり、一連の計画道路上に位置する。幅2.7m、長さ約27mの調査区を設定した。最終調査面の深度は周辺の調査結果などから比較的浅いと予想されたので、土留めの設備を用いずに調査を行った。現代客土と作土を重機によって掘削し、それ以深は人力で掘削・調査した。遺構検出は6面で行い、東半部では長原12～13層が良好に残っていることが判明し、石器遺物の有無を確かめるために、土壌を採集し水洗選別を行った。中央部では長原15層段階の自然流路を検出し、底を確認するために検出範囲の北半において深掘りを行った。

写真5　93－5次調査風景(西から)

iii)93－8次調査

本調査地は長原古墳群の中で最古にして最大の規模をもつ塚ノ本古墳の北半部を、

ほぼ南北に縦断するように位置する。大阪中央環状線の東側歩道拡幅に伴い擁壁を建設することとなったため、調査を行った。調査区は進入路・土地境界のブロックを避け、現存の擁壁から0.8m幅でトレンチを設定した。進入路の北側を北区、南側を南区と呼称し、土地境界ブロックの保護のためそれぞれがさらに2分された。狭小な調査区のため、掘削・埋戻しはすべて人力で行った。また、北区は古墳周濠部分に当り、長原4層下面まで掘削した段階で現行の擁壁の基礎がむき出しになったため、調査区全面の掘削は断念し、3個所の試掘壙で下位層の確認を行った。南区では塚ノ本古墳の墳丘盛土を検出し、上面と下面で精査を行った。

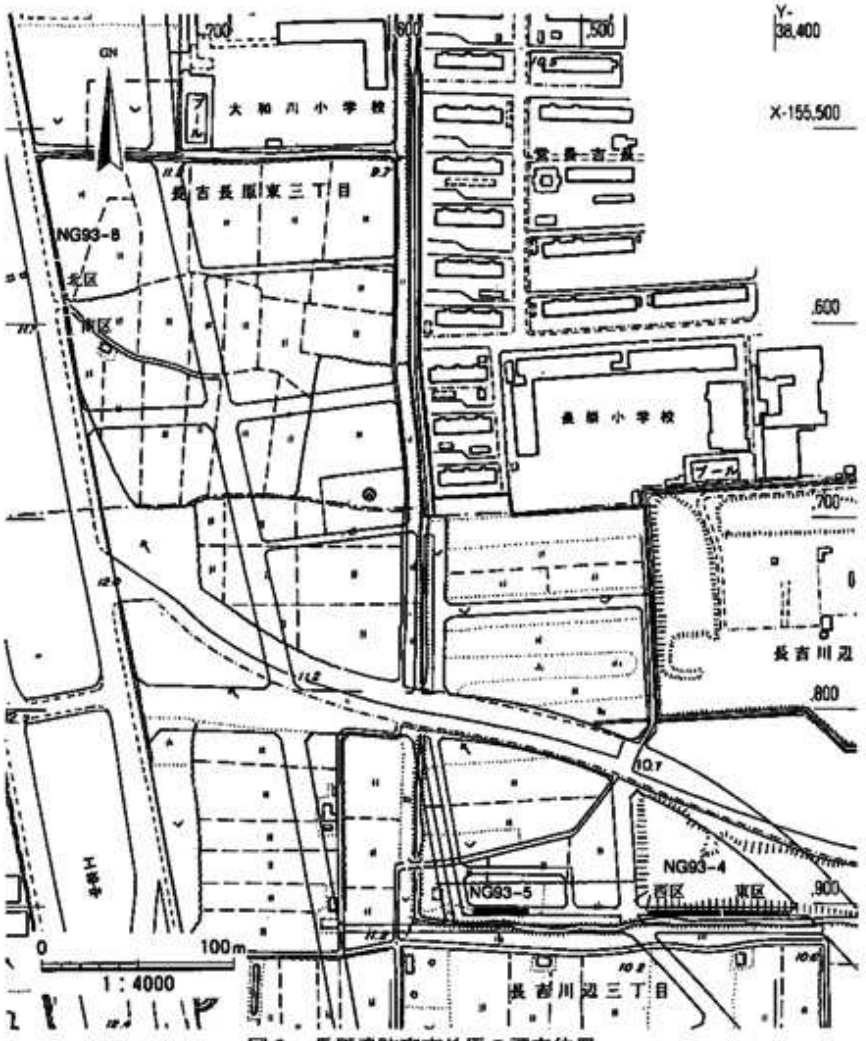


図8　長原遺跡東南地区の調査位置

第Ⅱ章　瓜破遺跡東南地区・長原遺跡西地区の調査結果

第１節　UR93－14次調査

１)層序とその遺物

調査区と阪和貨物線との間にある水路によって、北区・南区ともに西半分が大きな攪乱を受けていたため、東側の壁面を観察・図示した。長原０～７層に相当する地層が良好に遺存していた(図９、図版１、表２)。このうち１～６・８層は作土で、４層(長原４層)以上はほぼ全域に分布するが、南区南端で途切れて地山が一段高くなることから、耕地に段があったと思われる。一方、５層(長原4B層)以下の沖積層は北区に分布し、６層(長原６層)下面で検出された溝SD601に影響された地形に堆積していた。地山の標高は南端では11.4ｍ、北端では10.4ｍで、北に緩く傾斜した地形である。

北区SD602の南側では、地山直上の８層下面から石鏃が２点出土した(図10、図版27)。1は凸基無茎式石鏃である。いわゆる木葉形で、Ｇ－１類に相当する。図右面の下部に素材

表２　UR93－14次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代盛土				
NG1	1層	現代作土	厚い	▼SD101　SK101・102		作土
NG2	2層	含粗粒砂にぶい黄褐色(10YR4/5)砂質シルト	≦25	▼撹乱,SD201,SK201,SX201	ナイフ形石器	作土
NG3	3層	含粗粒砂明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト～含中粒砂にぶい黄橙色(10YR4/6)粘土質シルト	≦15	▼撹乱　SD301・SE301		作土
NG4	4層	含粗粒砂明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト	≦15	▼撹乱		作土
NG4B	5層	含中粒砂暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト～砂質粘土	≦30		土師器・瓦器	作土
NG4C	6層	含中粒砂黄灰色(2.5Y5/1)砂質粘土	≦20	▼落込み	土師器・黒色土器	作土
NG6	7層	黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト～シルト～粗粒砂			須恵器	水成層
	8層	にぶい黄褐(10YR3/4)～黄褐色(2.5Y5/3)砂質粘土	≦7	SD602～605　SD601	石鏃	作土
NG7	9層	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト～暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質粘土	≦5	▼SD701・702　SK701	土師器・須恵器・紡錘車・石鏃	
	10層	含偽礫褐灰色(10YR4/1)砂質粘土				
NG13	11層	黄橙色(10YR7/8)粘土質シルト	≒10			
NG14以下	12層	明黄褐色(10YR6/7)砂質シルト～砂礫				

▼：下面検出遺構　↓：基底面検出遺構

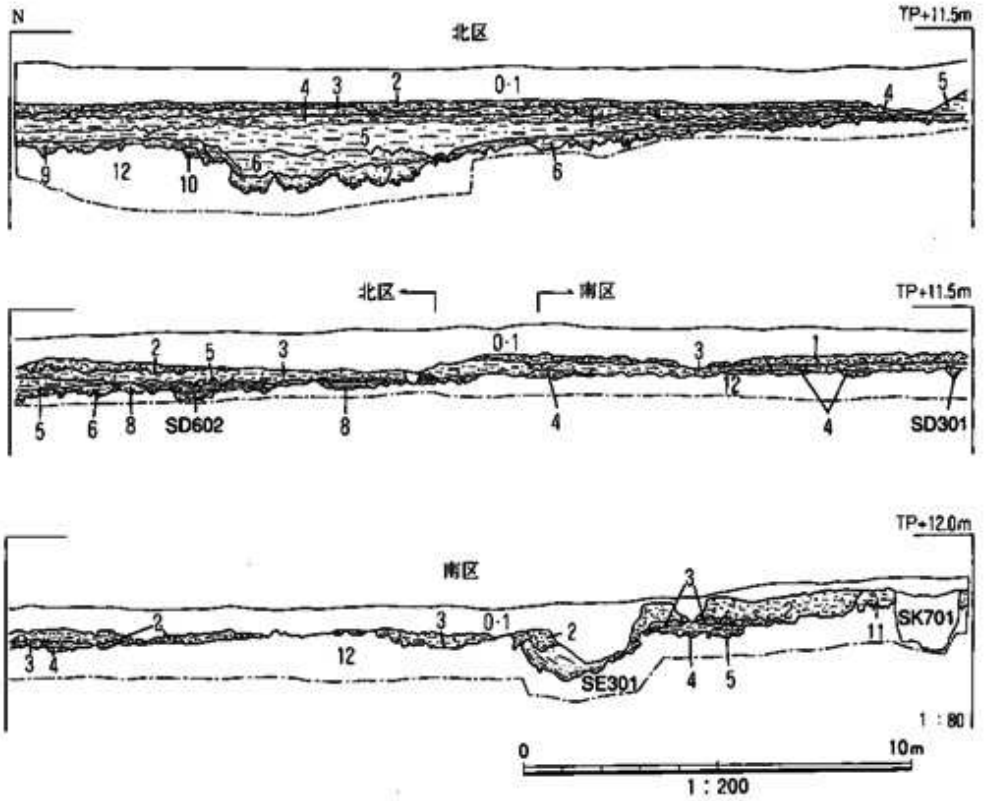


図9　UR93－14次調査地の地層断面

の剥片の主要剥離面が残る。切先角は45°で、重さは1.25ｇである。弥生時代前～中期のものである。2は凹基無茎式石鏃である。基部の抉りが深いことからＤ－１類に相当する。図右面の中央に素材の剥片の面を残す。切先の先端の角度は65°で、作用部のそのほかの部分は25°である。重さは1.37ｇである。縄文時代早～前期のものである。

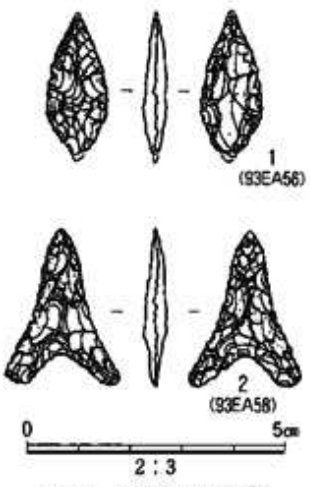


図10　8層出土の石鏃

2）遺構とその遺物

ｉ）江戸時代から近現代（図11・12）

SD101　北区の１層下面で検出した幅2.0m、深さ0.15mの浅い溝である。近現代の水田耕作に伴う区画の名残りと考えられる。

SK101　南区の1層基底面で検出した長径2.0m、深さ0.7mの土壙で、平面形は楕円形、断面形はU字形である。底部には細粒砂が薄く堆積し、大半は地山の偽礫を多く含んだ土で埋められている。近世の土取り穴と考えられる。

SK102　南区の1層基底面で検出した長径1.5m、深さ1.2mの土壙である。平面形は不整な楕円形で、壁は垂直に掘られている。埋土の状況は**SK101**に近似しており、**SK101**と同じく土取り穴と考えられる。

ii)江戸時代(図11・12)

2層下面で検出した遺構である。

SD201　北区で検出した幅0.4m、深さ0.07mの南北方向の溝で、次に述べる東西方向の撹溝より新しい。

撹溝　幅約0.2m、深さ平均0.04mの小溝群で、方向はほぼ東西である。全域に分布する。

SK201(図15、図版27)　南北長1.5m、深さ0.1mの土壙と思われる。完掘していないので、溝である可能性もある。土師器や瓦器の細片が出土しており、遊離した状態でナイフ形石器3(図15)も出土した。

3は横形剥片を素材とする小型のナイフ形石器である。基部は折れている。背面は主要剥離面とほぼ同じ方向から加撃された先行剥離面と、底面である広いポジティブな面とで構成される。背部の上端には原面が残り、細部調整はすべて素材の主要剥離面から背面に向けて行っている。重さは0.97gである。後期旧石器時代のものである。

SX201　南区の南端から北に向って2段に落ちる段で、1段目の落差は0.2m、2段目は0.3mである。2段目を下った個所は皿状に窪んでおり、これは下位層準の**SE301**に影響されたためと考えられる。耕作地の区画と考えられる。18世紀代に属する肥前磁器・丹波焼・唐津焼・瓦などが出土した。

iii)室町時代(図11・12)

南区の3層基底面で検出した遺構を報告するが、出土遺物がなく遺構の正確な年代は不明である。

SD301　幅0.3m、深さ0.1mの東西方向の溝で、埋土は地山の偽礫を含むシルト質粘土である。

SE301(図13、写真6)　検出面での南

写真6　UR93－14次調査SE301(東から)

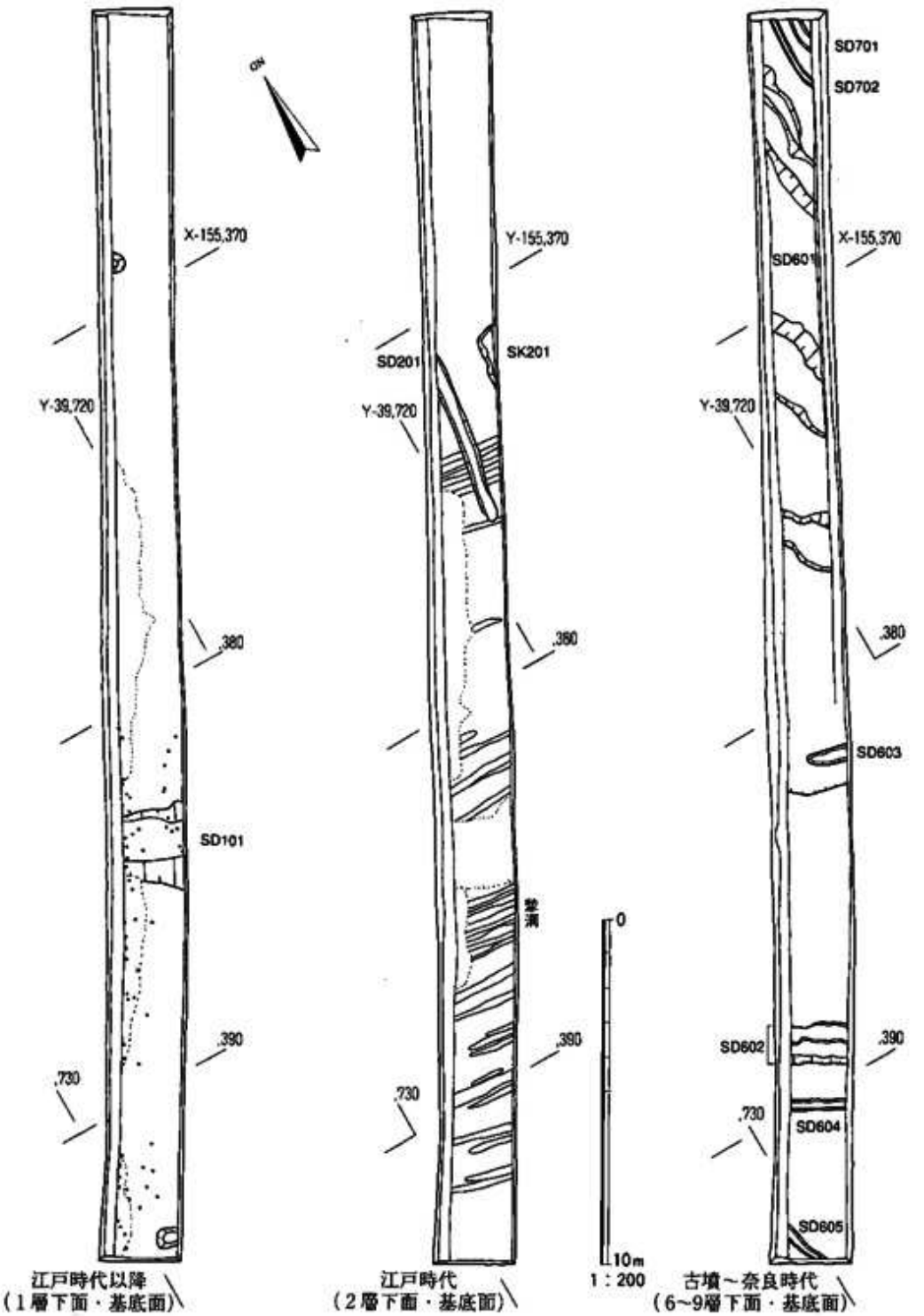

N
X-155,370
Y-39,720
380
SD101
390
730
江戸時代以降
（1層下面・基底面）
Y-155,370
SD201
SK201
Y-39,720
380
390
730
撹乱
江戸時代
（2層下面・基底面）
0
10m
1：200
SD701
SD702
X-155,370
SD601
Y-39,720
380
SD603
SD602
390
730
SD604
SD605
古墳～奈良時代
（6～9層下面・基底面）

図11　北区遺構平面図

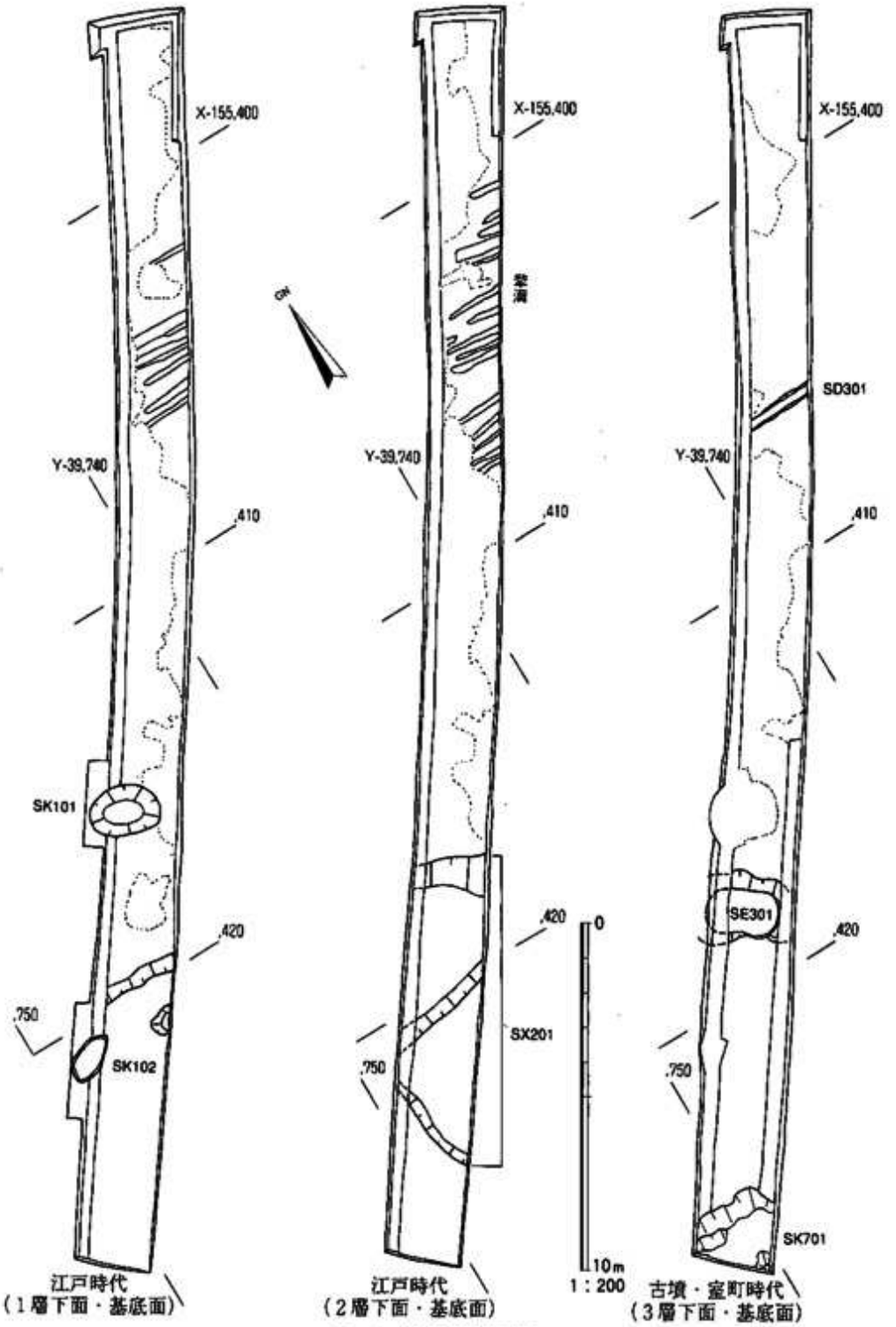
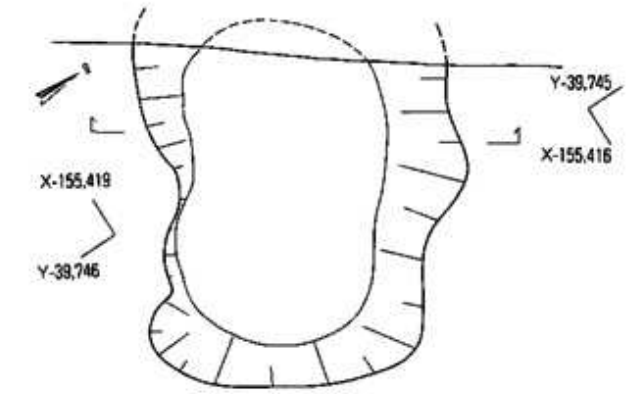
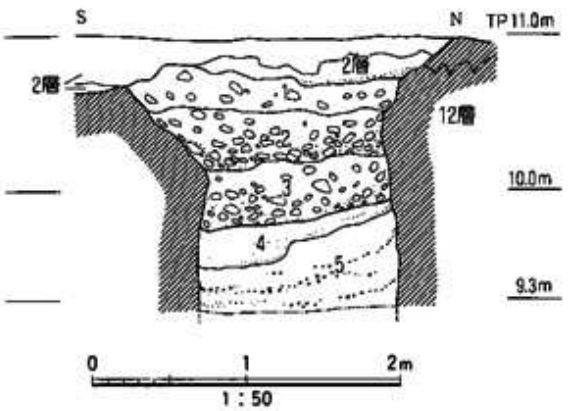

X-155,400
Y-39,740
,410
,420
,750
SK101
SK102
江戸時代
(1層下面・基底面)
X-155,400
Y-39,740
,410
,420
,750
SX201
江戸時代
(2層下面・基底面)
0
10m
1:200
X-155,400
SD301
Y-39,740
,410
SE301
,420
,750
SK701
古墳・室町時代
(3層下面・基底面)

図12　南区遺構平面図

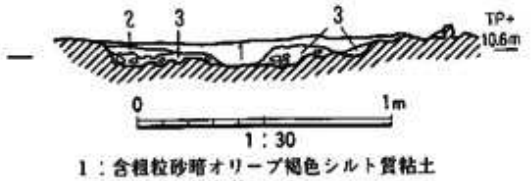
北幅が2.0m、平面形が楕円形の素掘りの井戸である。湧水による壁面の崩落が著しく、底まで完掘できなかった。TP+9.7m以下は粘土や砂からなる水成層で埋没しており、それ以上は地山の偽礫を多く含む砂質粘土で埋められている。





1：含偽礫灰色砂質粘土　4：暗オリーブ灰色粘土～シルト
2：含偽礫灰色砂質粘土　5：暗緑灰色粗粒砂
3：含偽礫暗緑灰色粗粒砂

図13　SE301実測図



1：含粗粒砂暗オリーブ褐色シルト質粘土
2：灰黄褐色粘土質シルト
3：含偽礫暗灰黄色シルト質粘土

図14　SD602断面図

iv)飛鳥～奈良時代(図11・12)

SD601(図16、図版1)　北区北部の6層基底面で検出した南北方向の溝である。下半は地山が削られて二次的に堆積した水成層である7層によって埋没している。この部分の幅は3.7m、深さは0.5mである。壁面を削り込む部分も見られることから、しばらくは水が流れていたことがわかる。底面は凹凸が顕著で、人為的に掘削された溝と推測される。そして、平安時代の作土層である6層に覆われているので、この段階には溝としての機能を失い、周囲よりも低い耕作地となっていたようである。6層の分布は溝の東側で狭く、西側に拡がっているので、溝の西側の肩が不明瞭になっている。

遺物は7層から土師器皿6、須恵器壺7・平瓶8が出土した(図16)。8はTK217型式に、7は奈良時代に属するものと思われる。

SD602(図14・15、図版27)　北区の8層基底面で検出した幅1.2m、深さ0.15mの溝である。底は2段に掘られており、埋土は3層

に分れる。土師器・須恵器の細片が含まれ、1層から石鏃5(図15)が出土した。

5は円基無茎式石鏃である。やや幅広の柳葉形を呈するもので、G－2類に相当する。両面の中央に素材の剥片の面を残す。切先角は50°で、重さは1.96gである。弥生時代中期のものである。

SD603～605　いずれもSD602周辺の8層基底面で検出した幅0.3～0.4m、深さ0.05mの浅い溝である。埋土はいずれも暗褐色シルト質粘土である。SD604とSD602は平行する。

v)古墳時代(図11・12)

SD701・702(図15、図版27)　北区北端の9層下面で検出した幅0.2～0.4m、深さ0.05mの浅い溝である。SD601に平行する。SD701から石鏃4(図15)が出土している。

4は平基無茎式石鏃である。平面形が五角形を呈するもので、F類に相当する。両面に素材とした剥片の面を残すが、背面に当る剥離面は風化のため加撃の方向は不明である。切先角は65°で、重さは1.22gである。縄文時代晩期のものである。

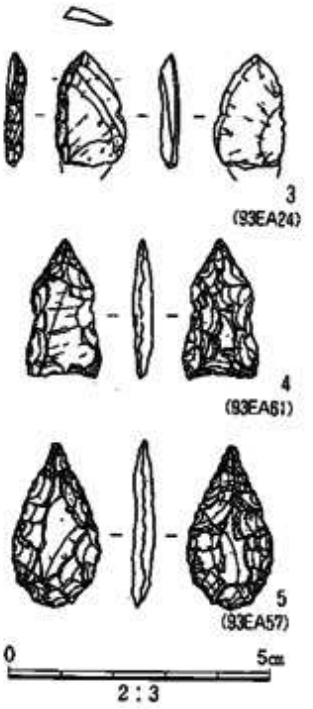


図15　遺構出土の石器遺物
SK201(3)、SD602(5)、
SD701(4)

SK701(図16、図版2・27)　南区南端の11層上位の1層基底面で検出した幅約2.0m、

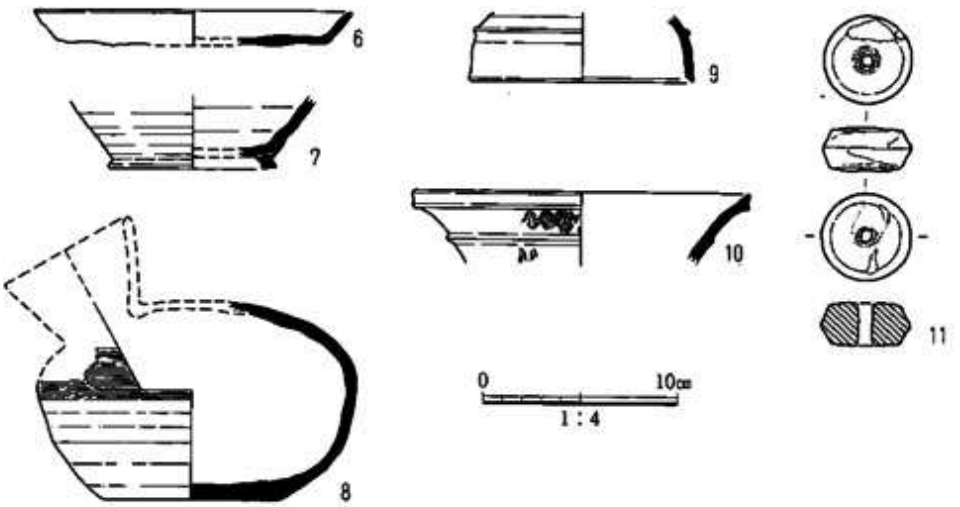


図16　遺構出土の土器・土製品
SD601(6～8)、SK701(9～11)

深さ0.6mの不定形な土壙である。遺構は東西の調査区外に続くため、全体の形は不明である。埋土は底部に水成のシルト～細粒砂が薄く堆積し、その上位の大半が地山の偽礫を多く含む黄褐色砂質シルトと、これを含まない黄褐色粘土質シルトで埋められている。遺物は最下層から須恵器杯蓋9・壺10、土製紡錘車11などが出土した(図16)。すべて古墳時代のものであったため、当期の遺構と推測した。

9は口径が11.5cmで、TK23型式と考えられる。10は口径17.2cmの壺で、口縁部の中位に断面三角形の稜線が巡り、その上下に波状文が施されている。TK208型式に属すると思われる。11は紡錘車の紡輪で、[櫻井久之1993]が算盤玉形紡錘車と呼ぶ形態に当る。焼成は良好な土師質で、色調は明黄茶色を呈する。表面はナデて仕上げ、側面の稜線は横方向のナデによって丸みをもっている。平坦面の片方には焼成後の擦痕がある。直径4.5cm、厚さ2.2cm、重さは46.8gである。

3)小結

本調査地周辺には古墳時代の集落の存在も想定されたが、遺構の遺存状態が悪かったため、その様相は明らかにできなかった。しかし、算盤玉形紡錘車は、[櫻井1993]によれば古墳時代中期に渡来した集団との結びつきが強い遺物とされ、注目される。こうしたものが「馬池谷」の西側で出土したことは、長原遺跡に群在する集落の系譜を考える上で、重要な資料となる。一方、飛鳥時代以降には耕作地として利用されていたことが明らかとなった。SD601はその北流する基幹水路と考えられる。また、SD601よりも年代がさかのぼる溝が北区に集中することは、この北側に谷頭部をもつ「小谷」の地形的な影響が本調査地にまで及んでいた証左となるかもしれない。

第2節　NG93－34次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図17、図版3、表3)

調査地は南東から北東方向に延びる開析谷「馬池谷」の東斜面に位置する。本調査では層序を27層に細分し、それぞれ長原遺跡標準層序の長原0、2、3、4Bi、5A、6A、7A、7B、13、15の各層に対応し、各層の特徴および対応関係は表3のとおりである。地山より上位の地層は西にいくにつれて厚く堆積しており、これらは水成層の堆積による谷の埋没過程と土地利用との係わりから、5つの層群に分けることができる。

まず、2～8層は鎌倉時代以降の作土層と水成層の堆積の繰返しである。2層は調査区西半に残存する近世の作土層で、長原2層に相当する。4a・4b層は調査区全域に分布する室町時代の作土層で、長原3層に相当する。4b層は4a層に比べて粗粒で、4a層上面で畦畔を、4a層下面で東西方向の耕作溝を検出した。5a～8層は出土遺物からみて長原4Bi層に相当する。8層は調査区全面に分布する作土層で、その上を7層の水成層が覆った後、7層を起源とした客土(6層)によって島畠を造成している。5a～5c層は島畠の周囲に分布していた作土層および水成層である。

9層は調査区全面を覆う氾濫性の水成層である。斜行葉理が顕著に発達し、調査区西半では下位層を大きく削剥している。本層の上部から完形の須恵器および土師質のミニチュア竈などが出土しており、長原5A層に相当する。層厚は最大で0.8mに及び、本層の堆積によって谷が一気に埋没したことがわかる。

10a～10e層は作土層と水成層の互層堆積で、長原6A層に相当する。これらの層は平面調査を行わず、断面による土層の観察のみを行った。これによると、地形の傾斜に合わせるように畦畔を段状に設けて水田面を造成しており、谷の中心部に近い西側では細粒砂～粗粒砂からなる水成層が厚く堆積している。この段階に始まった谷内部の水田化が、谷の埋没を進行させる要因となっている。

11層は調査区中央に存在する窪地の埋土で、長原7A層に相当する。下部は粗粒砂、上部にいくにつれ細粒化している。12・13層は長原7B層に相当する暗色帯で、12層は調査区西半、13層は調査区全域にそれぞれ分布する。12層上面で古墳時代中期の掘立柱建物群を検出した。

表3　93－34次調査地の層序

標準層序	層序	岩相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	1層	現代客土	50	小溝跡,井戸		
NG2	2層	含礫黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂	≦30	▼段	近世陶磁器	作土
NG3	3層	にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒～極細粒砂	≦25			水成
	4a層	含礫暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト	≦20	▲SR401･402　▼溝	土師器･瓦器･瓦質土器	作土
	4b層	黄褐色(2.5Y5/4)含礫シルト質細粒砂	5			作土
NG4Bi	5a層	含礫にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質細粒砂	20		土師器･須恵器･瓦器･平瓦	作土
	5b層	黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂	10			水成
	5c層	黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂	20	▼鳥足,耕作痕	土師器･須恵器･瓦器	作土
	6層	黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂	10			客土
	7層	灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂	40		土師器･須恵器･瓦器	水成
	8層	含礫黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土	15	▲踏込み	土師器･須恵器･瓦器･平瓦	作土
NG5A	9層	青灰色(5BG6/1)礫～シルト	≦80		須恵器壺･ミニチュア竈	水成
NG6A	10a層	暗オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質極細粒砂	10	▲畦畔(断面)		作土
	10a2層	緑灰色(7.5GY5/1)極細粒砂	5			水成
	10b層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂	10	▲畦畔(断面)		作土
	10b2層	緑灰色(7.5GY5/1)細粒砂～粗粒砂	6			水成
	10c層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細砂質シルト	10	▲畦畔(断面)		作土
	10c2層	緑灰色(7.5GY5/1)シルト質極細粒砂	5			水成
	10d層	暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質粘土	15	▲畦畔(断面)		作土
	10d2層	灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト～極細粒砂	20			水成
	10e層	含礫オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土	20	▲畦畔(断面)　▼溝,杭列	鉄製品	作土
NG7A	11層	緑灰色(5G6/1)粘土～灰色(5Y6/1)粗粒砂	10	SD707	土師器･須恵器･モモ核	水成
NG7B	12層	含礫オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂	10	▲SB701～703,SD701～706	土師器･須恵器･木製品など	
	13層	含礫黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト	15	▲SD708･709	土師器･須恵器･石製品など	暗色帯
NG12/13	14層	含中粒砂灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂～シルト	20	←LC1201	有茎尖頭器･剥片	含火山ガラス
NG13	15層	含粗粒都砂灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト	20			
NG15	16層	緑灰色(10Y5/1)細礫～中礫				

▲：上面検出遺構　←：地層内検出遺構　▽：下面検出遺構　↓：基底面検出遺構

西部の窪地内に分布する14層は、火山ガラスを多量に含むことから長原12／13層漸移帯を起源とした二次堆積物と考えられる。本層内から石器集中部LC1201が検出された。

16層は長原15層、15層は長原13層にそれぞれ相当するいわゆる地山である。東から西へ緩やかに下がる傾斜をなしており(図21)、調査区の東西端で1.4mの比高がある。

ii)各層の出土遺物(図18・19、図版29～31)

9層から12～17が、10e層から18・20・23が、11層から19が、12層から21・22がそれ

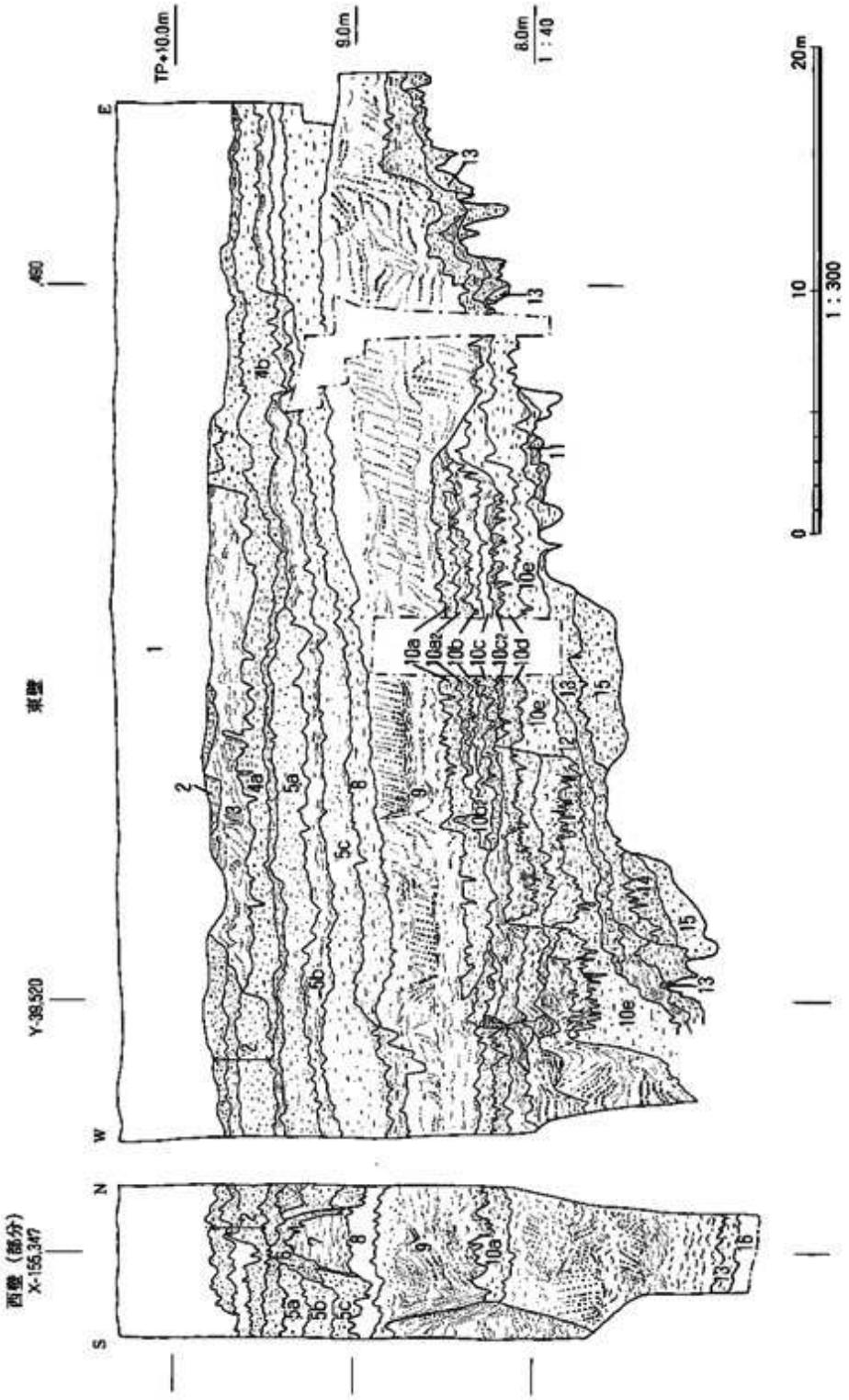


図17　93－34次調査地の地層断面

ぞれ出土した。

13は口径8.6cm、器高7.7cmの須恵器短頸壺である。口縁部は短く外湾し、端部を丸くおさめている。体部下半をヘラケズリ調整している。口縁部から底部にかけて縦方向にヘラ記号が施されている。14は須恵器壺底部である。高台は断面台形で、体部に近い位置にある。高台径は9.6cmである。15は口径20.6cmの須恵器甕である。口縁部は短く外反し、端部に外傾した面をもつ。器壁は厚く、体部外面に平行タタキメ、内面に同心円状の当て具痕が残る。16は土師質のミニチュア竈で、受口径6.1cm、底部径12.1cm、器高10.0cmである。粘土紐を積上げ体部を成形した後、ヘラ工具で切取って焚き口と受け口をつくる。庇の表現は省略されている。内外面ナデ調整で、内面に一部ハケメが残る。以上の遺物は9層に直接伴うものと考えられ、時期は8世紀代である。特に、13および16は近接した位置からほぼ完形の状態で出土しており、意図的に投棄された可能性がある。

12は口径13.2cmの須恵器杯身で、TK10型式である。下位層からの混入品である。17・18・20は扁平なつまみをもつ須恵器杯蓋で、8世紀代のものである。19は口径14.4cmの土師器甕である。調整は体部外面がタテハケ、内面がナナメハケの後タテ方向のナデで、口

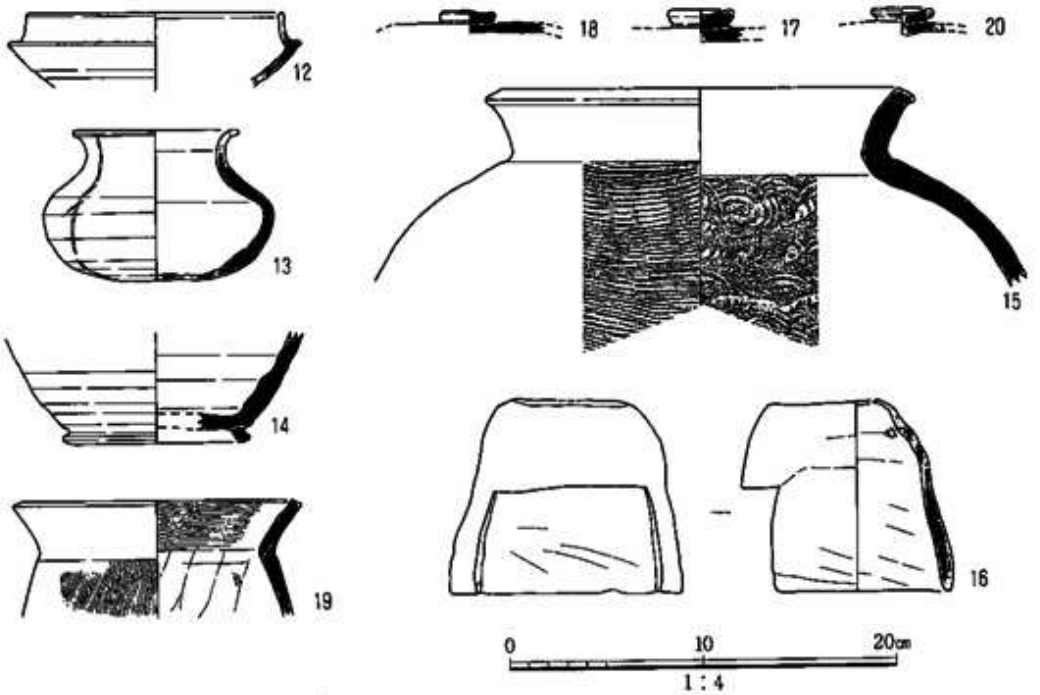


図18　各層出土の土器
9層(12～17)、10e層(18・20)、11層(19)

縁部が外面ヨコナデ、内面ヨコハケである。

22は曲物底板の破片である。厚さ0.5cmで、復元すると直径19.2cmになる。側板と結合するための孔が2個所にある。図の左面には縁に沿って弧線が刻まれており、こちらが内側と考えられる。21は用途不明の棒状木製品で、長さ26.8cm、最大厚2.0cmで、先端は細くなっている。これらは出土層準からみて5世紀後半代のものであろう。

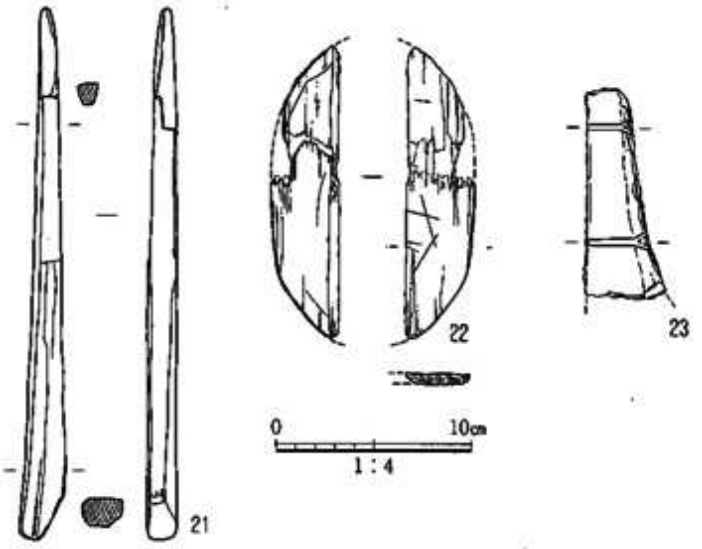


図19　各層出土の木製品・鉄製品
10e層(23)、12層(21・22)

23は鉄製の鋤先あるいは鍬先の破片である。出土層準から奈良時代のものと考えられる。

2)遺構とその遺物

i)室町時代(図20)

水田　4a層上面で検出した。南北方向のSR401・402が約11m間隔で見られる。畦畔を境に水田面に段差を設けており、「馬池谷」の中心部に近い西側が低くなっている。

ii)鎌倉時代(図20、図版5)

島畠　調査区西側の5c層下面で東西方向の島畠を検出した。島畠は7層の水成層を盛り上げた6層で造成されており、周囲には造成時の掘削痕と考えられる溝が巡っていた。これによると島畠の範囲は東西22.5m以上、南北2.5m、調査区西端での盛土の高さは0.45mである。島畠の周囲は作土化されており、5c層下面では東西方向の耕作痕を多数検出した。

iii)古墳時代(図21、図版3)

a．掘立柱建物

掘立柱建物SB701～703を検出した。これら3棟の建物は東西にほぼ等間隔に並んでいることから、併存していた可能性が高い。1996年度に本調査区の南隣で行った96－71次調査で建物の拡がりが確認され、規模を確定することができた。ほかにも、これらと組み合わない柱穴SP701～703を検出した。

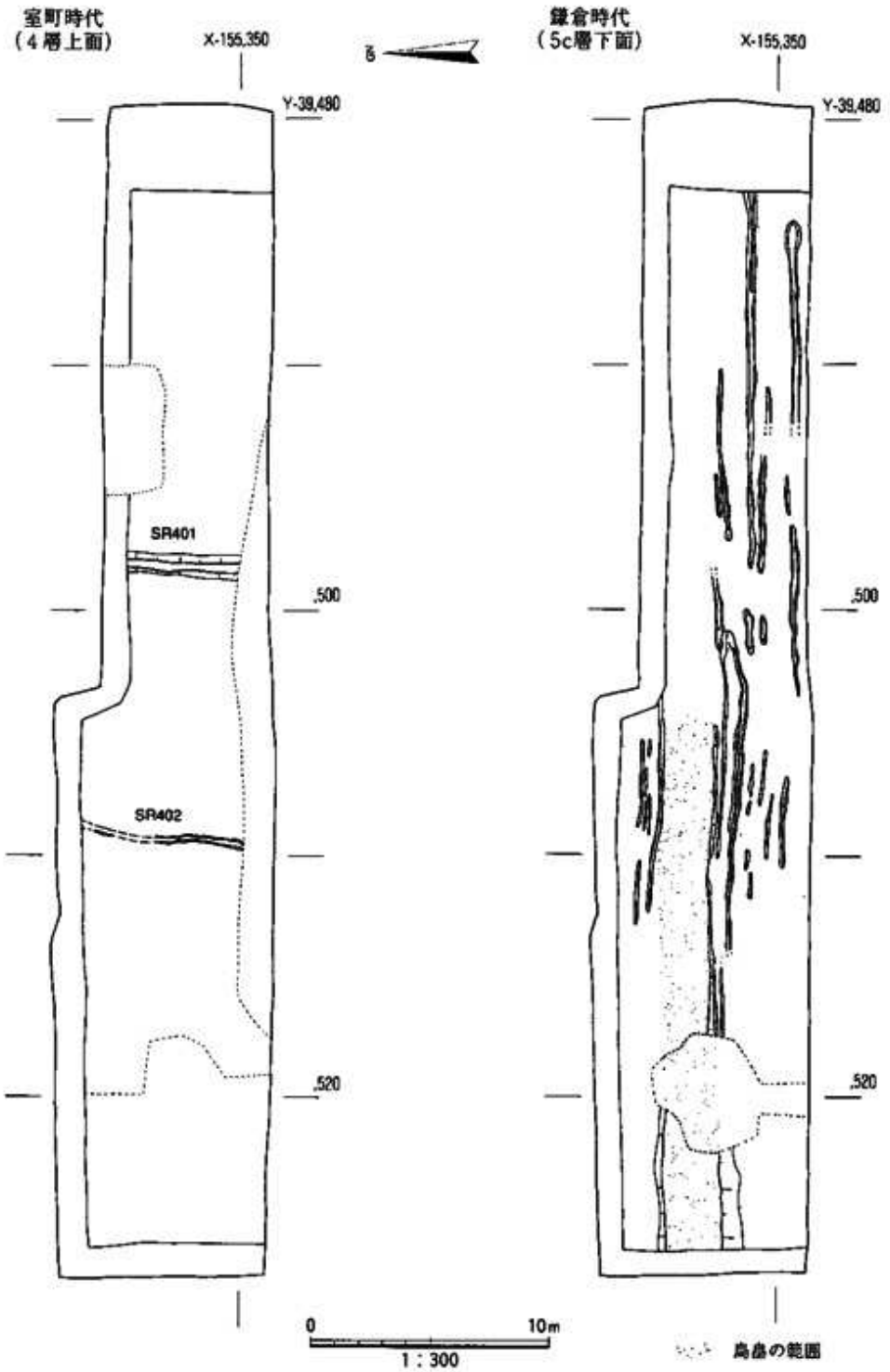


図20　鎌倉・室町時代の遺構平面図

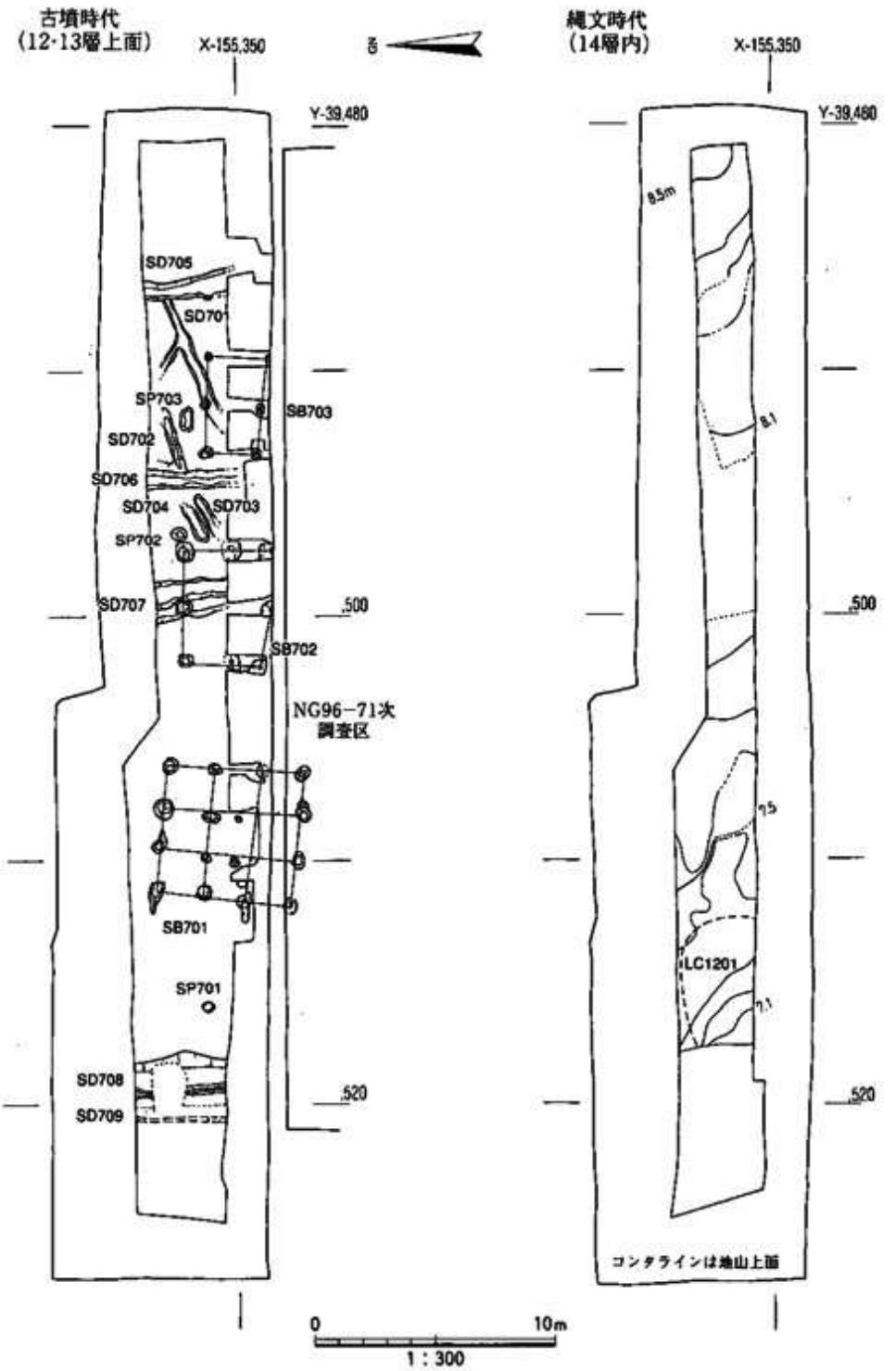


図21　古墳時代の遺構・地山上面平面図

SB701(図22、図版４)　もっとも西側に位置する南北棟と思われる建物である。96－71次調査で建物の南端の柱列が確認され、南北が３間(5.7m)、東西が３間(5.2～5.5m)の総柱建物に復元できた。柱間は桁行が1.7～2.0m、梁行が1.8mで、南側の束柱の柱穴は不揃いである。側柱の柱穴は直径0.5～0.8mの円形で、深さが検出面から0.3～0.4m、束柱のものは直径0.2～0.5mの円形で、深さが0.2mである。柱はすべて抜き取られていた。棟方位はN6°Eである。柱穴内から５世紀後半代の土師器高杯が出土した。

SB702(図23、図版４)　中央に位置する東西棟建物である。南側のNG96－71次調査地側には建物が延びておらず、東西の桁行が２間(4.5m)、南北の梁行が２間(3.2～3.7m)の側柱建物に復元できる。柱間は桁行が2.2m、梁行が1.3～2.0mで、西南隅の柱穴が若干ずれた位置にある。柱穴は直径0.4～0.8mの隅丸方形に近い円形で、深さが0.4～0.5m、柱痕跡の直径が13cmである。棟方位はE0°Nである。柱穴内から土師器・須恵器および製塩土器の破片が出土した。

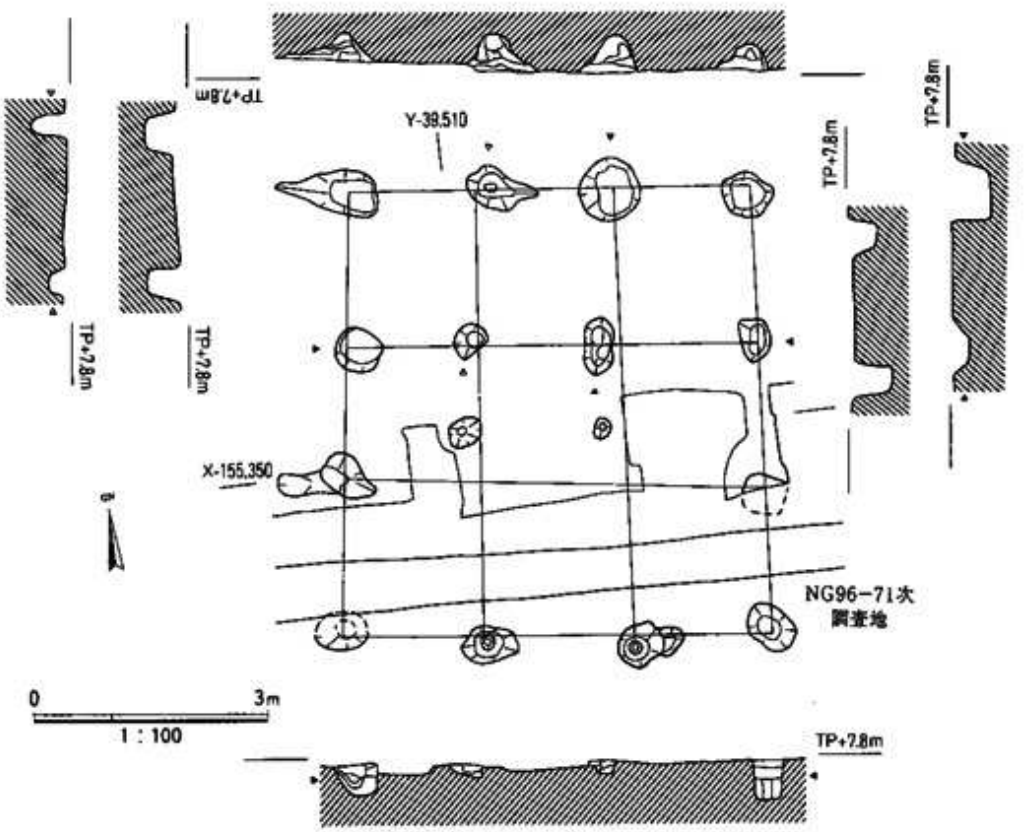


図22　SB701実測図

SB703(図23・24、図版29)　もっとも東側に位置する東西方向の側柱建物である。東西の桁行が2間(4.0m)、南北の梁行が1間(2.2m)で、桁行の柱間は2.0mである。柱穴は直径0.4～0.6mの円形で、深さが検出面から0.2m、柱痕跡の直径が10cmである。棟方位はE4°Sである。柱穴内から須恵器片24・31(図24)および土師器・製塩土器の破片が出土した。

24は須恵器有蓋高杯蓋で、鋭く整形された扁平なつまみをもつ。TK208型式である。31は須恵器大甕の口縁部で、口径32.4cmである。口縁部外面には突帯文と波状文を交互に巡らす。TK23型式である。

b．溝

SD701～709を検出した。

SD701～704　調査区東部で検出した北東から南西方向に平行する溝群である。規模は幅0.4m前後、深さ0.1～0.2mである。SD701はSB703の柱穴およびSD705を切っており、方位の異なるほかの遺構よりも新しい。SD701からTK43型式の須恵器小片が出土した。

SD705(図24・26、図版29・30)　SB703の東側でこれと平行する南北方向の溝である。位置関係からSB703と併存していた可能性が高い。幅0.7～0.8m、深さ0.15mで、溝内には灰色シルト質細粒砂が堆積していた。埋土中から土師器30・須恵器25・26・29(図24)、

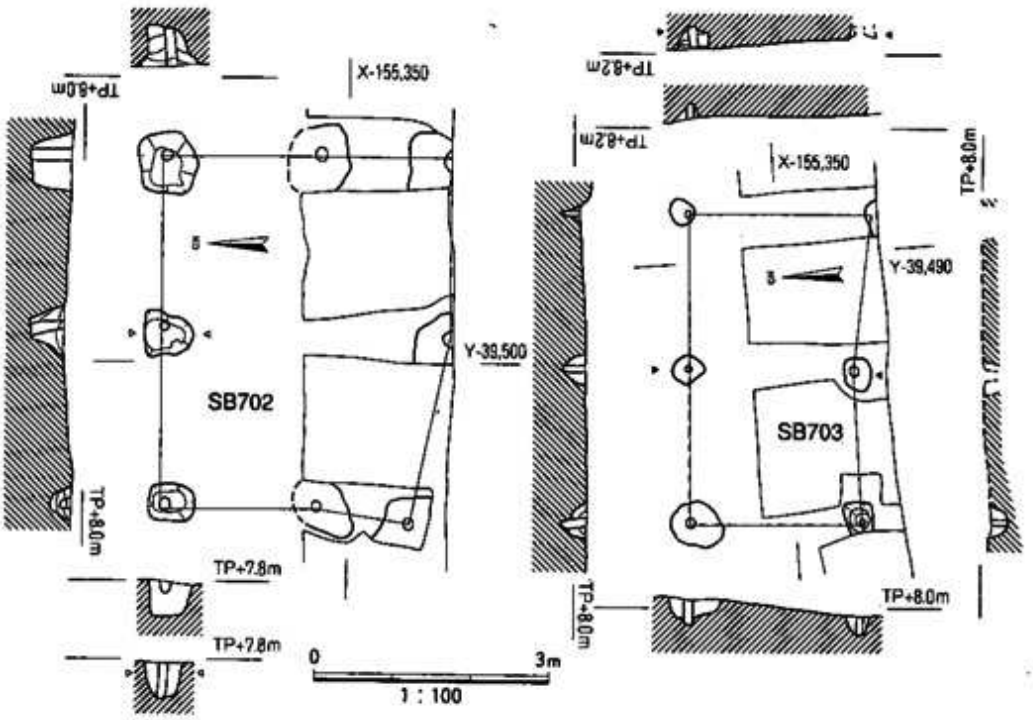


図23　SB702・703実測図

滑石製の勾玉50・臼玉52～58(図26)、製塩土器片などが出土した。臼玉は土を持ち帰って水洗選別して捕集したもので、モモ核や炭化種子などの植物遺体も採集されている。

30は口径19.2cmの土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデ調整により外湾しており、体部外面には縦方向のハケメ、内面には縦方向のナデが残る。29は口径11.6cmの須恵器杯身である。立上がりは直立ぎみで、端部は内傾した面をもつ。TK23型式である。25・26

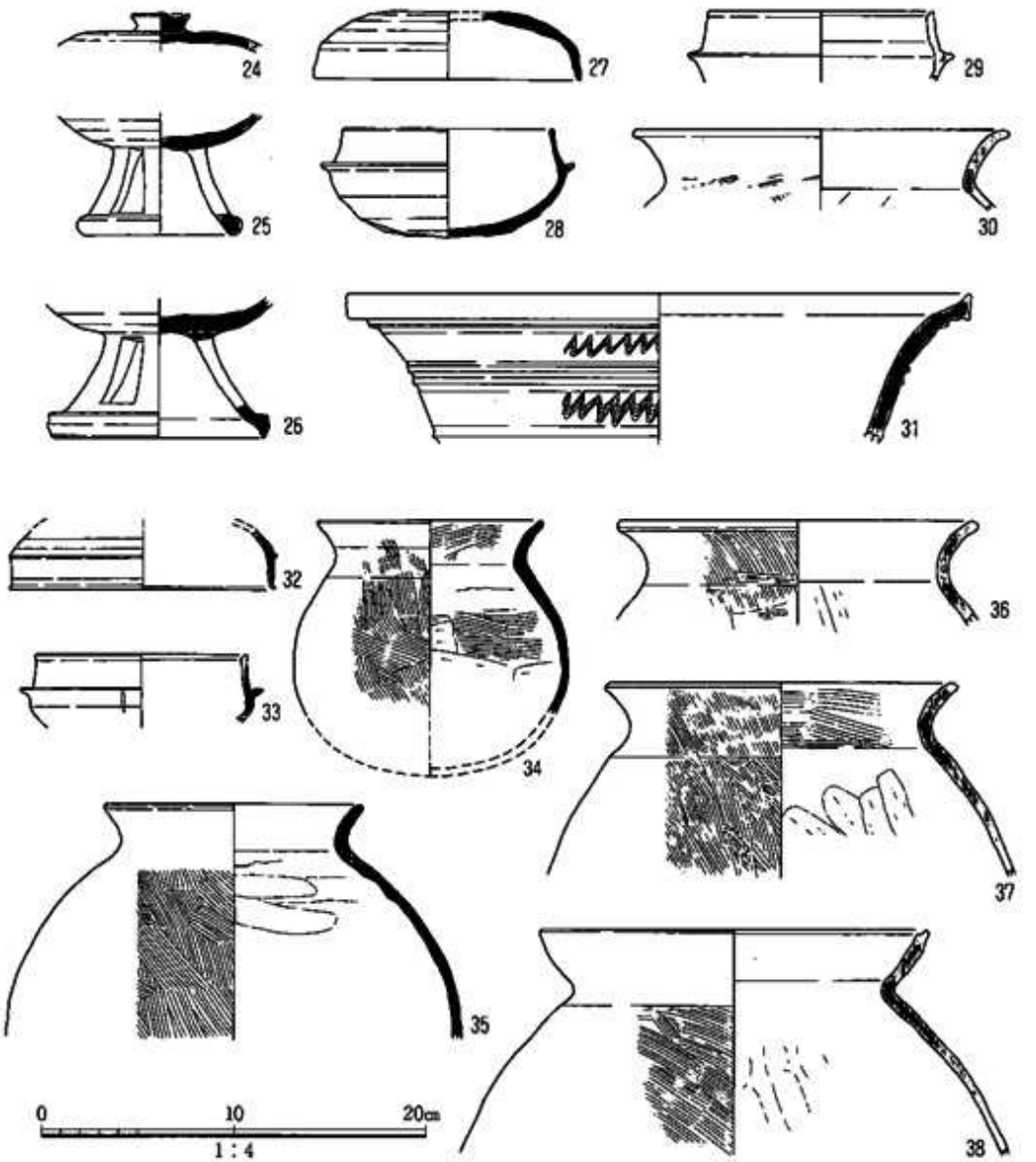


図24　古墳時代の遺構出土土器
SB703(24・31)、SD705(25・26・29・30)、SD706(32・33・34～38)、SD707(27)、SD709(28)

は須恵器高杯の脚部である。脚部は短かく、長方形のスカシ孔を3方に穿つ。脚端部の突帯は25が丸くおさめ、26が上下に突出させている。TK23型式である。

SD706(図24、図版5・29・30)　SB702とSB703の間に位置する南北方向の溝で、SD705同様、建物と併存していた可能性が高い。幅0.6m、深さ0.25mで、埋土の上半から多量の土器が出土し(図版5)、須恵器32・33、土師器34～38(図24)が含まれていた。

32は口径13.8cmの須恵器杯蓋である。口縁部端面は内傾し、先端は鋭い。TK208型式である。33は口径10.9cmの須恵器杯身である。立上がりは直立し、端部は内傾した面をもつ。TK23型式である。

34は口径11.6cmで、球形に近い体部をもつ小型の甕である。体部外面はハケ調整、内面下半はハケ調整を行った後、横方向にヘラケズリ調整を施す。35は口径13.2cm、36・37は口径18cm前後の甕で、緩やかに外反する口縁部をもつ。35は頸がすぼまった形態である。ともに体部外面の調整は左上がりのハケで、体部内面の調整は35が横方向のナデ、36が縦方向のナデ、37が縦方向のヘラケズリである。38は口径20.0cmの甕で、口縁部は内湾しながら屈曲しており、口縁端部は内傾して段を有する。布留式甕の系譜を引くものと思われる。体部外面は左上がりのハケで、内面はユビナデである。38は胎土中に1mm前後の石英・長石粒などの混和材を多量に含む点で他の甕と異なっている。これらは5世紀後半～6世紀初めにかけてのものである。

SD707(図24、図版29)　調査区中央の10e層基底面で検出した南北方向の溝で、幅0.7m、深さ0.4mある。埋土は灰色粘土質シルトで、須恵器27(図24)が出土した。

27は口径13.9cmの須恵器杯蓋である。天井部と口縁部を分ける稜はなく、端部は丸くおさめている。TK43型式である。

SD708・709(図24、図版29)　調査区西端の13層上面で検出した南北方向の溝で、SD708は幅1.2～1.5m、深さ0.2m、SD709は幅1.0m以上、深さは確認できなかった。SD709から須恵器28(図24)が出土した。

28は口径11.0cmの須恵器杯身である。底部は深くて丸みを帯び、口縁端部は丸くおさめている。底部外面に×字形のヘラ記号がある。ON46段階であろう。

c．韓式系土器および陶質土器(図25、図版29・30)

39～46は軟質の韓式系土器である。41・43は10e層、39・40は11層、44・46は13層、42は11～13層、45はSD701からそれぞれ出土した。39～44は小型の鉢あるいは壺の体部破片で、外面に格子タタキを施す。同一個体と思われ、色調はにぶい黄橙色で、胎土中に

長石・石英・雲母・チャート粒を含む。45は壺の体部下半の破片で、外面に格子タタキを施した後、下半に縦方向のハケ調整を行っている。色調は黄灰色で、胎土中に長石・雲母・角閃石粒を含む。46は外面に鳥足文タタキが施された壺の体部破片である。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。

47～49は陶質土器の甕の体部破片である。47は10e層、48は10e～13層、49はSD701からそれぞれ出土した。3点とも同一個体と考えられる。色調は表面が暗紫灰色、断面がセピア色を呈し、砂粒をほとんど含まず極めて硬質な焼き上がりである。体部外面に縄席文タタキを施した後、螺旋状沈線を巡らし、内面に縦方向のナデを施す。沈線は幅0.1cmと細

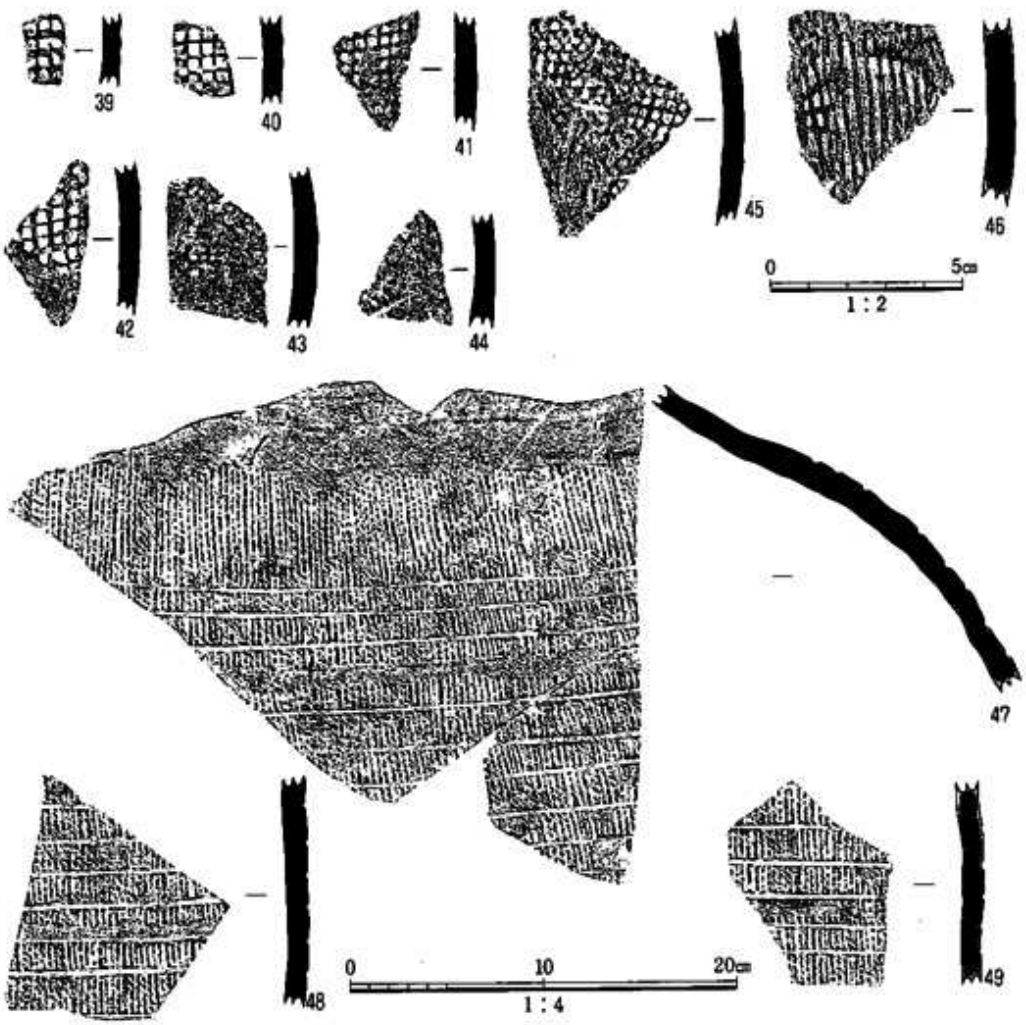


図25　韓式系土器・陶質土器
SD701(45・49)、10e層(41・43・47)、11層(39・40)、13層(44・46)、10e～13層(48)、11～13層(42)

く、沈線の間隔も0.6～1.0cmと狭い。

d．石製品(図26、図版30)

50はSD705から出土した滑石製で板状の勾玉である。厚さ0.4cm、長さ3.2cm、中央部での幅1.6cmで、孔の直径は0.1cmである。孔は片側から開けられている。表裏両面を不定方向に研磨し、背側面を横方向に、腹側面を縦方向に研磨して面取りをしている。

51はSP702から出土した滑石製の管玉である。直径0.5cm、長さ2.4cmで、孔は両端から開けられているが、真っ直ぐに繋がらずに側面に突き抜けている。孔の直径は0.1～0.2cmである。

52～58はSD705から、59は調査区西偶の13層中から出土した滑石製の臼玉である。直径0.4～0.5cm、厚さ0.2～0.3cmで、孔の直径は0.2cm以内である。側面を縦方向に面取りしているため、かすかに稜線が認められる。

e．製塩土器

12・13層および古墳時代の遺構から、若干の製塩土器が出土した。1辺1cm以上の破片をカウントすると44点ある。出土状況から時期が限定できるものがないため、一括して記述する。外面にユビナデ調整もしくは指掌痕の見られるものが29点、タタキメの見られるものが15点で、前者が多い。外面の特徴が前者のばあい、胎土中に砂粒を含まず、色調は

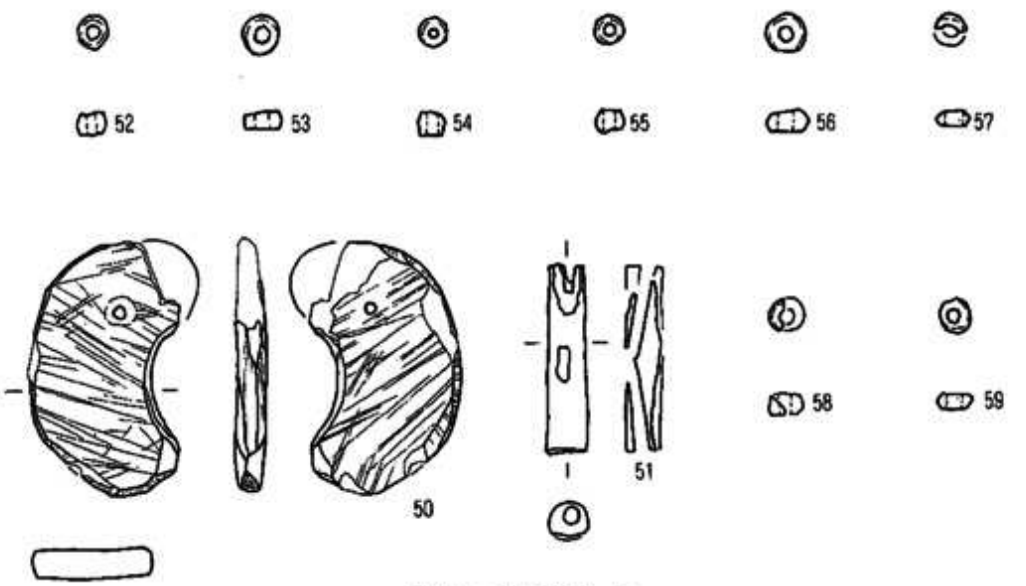


図26　石製品(実物大)
SD705(50・52～58)、SP702(51)、13層(59)

白～桃白色を呈するものが大多数を占め(27点)、酸化鉄粒がめだつものが6点あった。ほかにも砂粒を比較的多く含み、色調が黄灰～灰褐色のものが2点あった。外面の特徴が後者のばあい、砂粒を少量含む胎土に限られ、色調は灰褐色を呈するものが多く(13点)、黄褐色を呈するものが2点あった。後者のうち1点は胎土中に結晶片岩粒を含んでおり、紀伊からの搬入品と考えられる。

iv)旧石器・縄文時代(図21・27)

ここでは14層内で検出した縄文時代の石器集中部と遊離資料の石器遺物を報告する。

a．石器集中部

LC1201(図21・27・28、図版28・29)　調査区西部の14層内で検出した。遺物の平面的な分布は出土位置を記録したもので直径5.0mの範囲に収まるが、高低差は約0.4mある。また、周囲の土を持ち帰って水洗選別したところ多くの微細遺物が捕集されたことから、本来の分布範囲はこれよりも若干広い。LC1201は14層の形成過程からみて、長原12／13層漸移帯が窪地に再堆積しながら形成されたものと考えられる。

石器遺物はすべてサヌカイト製で、器種ごとに述べる。

74は他の石器遺物と比べて高い位置から出土した有茎尖頭器である。体部は細長く、

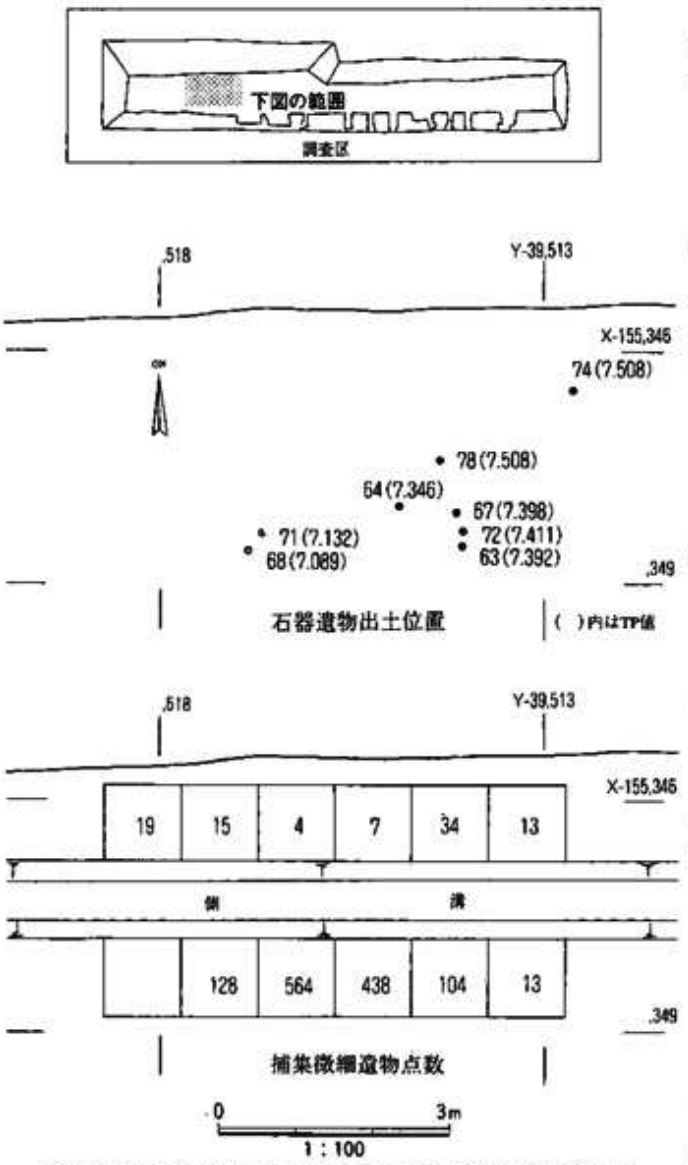


図27　LC1201石器遺物出土位置および捕集微細遺物分布図

側辺は外湾している。茎部は末端が古い折れによって欠損しているが、比較的細長いものである。逆刺は左右対称でなく、一方は丸みを帯びている。調整は先端から体部にかけては両面とも左斜め下方や右斜め上方への樋状剥離が並んでいるが、大きさはまちまちである。特に右側縁からの剥離面は石材の傷に影響されて末端がステップを起している。側辺の形を修正するための細かな調整は、先端と茎部では両面から行われているが、体部では主として両面とも右側辺に行っている。重さは6.30ｇである。

78は原面上打面の板状剥片を素材とした削器である。背面は広いネガティブな面と、主要剥離面とほぼ同じ方向から加撃された先行剥離面とで構成される。刃部は図右面の左側縁に直線的に作られ、背面側から極厚形細部調整を施している。重さは13.52ｇである。

73は全面に細部調整を施した小型の石錐である。平面形は鉤形で、図の下端に錐部を作り出している。錐部の断面は菱形で、使用痕はない。重さは0.21ｇである。

75＋76は３辺に細部調整を施した剥片で、平面形が三角形で、比較的薄いことから石鏃未製品と考えられる。図右面の下部に素材の剥片の主要剥離面を残し、背面には原面を残す。３辺にはそれぞれ両面から押圧剥離による細部調整を行う。最終的には主要剥離面側からの押圧剥離を行った際に75と76に折れている。重さは75は0.20ｇ、76は1.83ｇである。

60～70は小さな剥片である。60は剥離面打面の横形剥片で、背面にも同様の剥離面がある。0.04ｇ。61は点状打面の横形剥片で、背面にも同様の剥離面がある。0.05ｇ。62は点状打面の横形剥片で、背面にも同様の剥離面が複数ある。0.09ｇ。63は剥離面打面の横形剥片で、背面は大きな広がりをもつネガティブな面である。主要剥離面の左側は折れている。0.07ｇ。64は点状打面の横形剥片である。背面には大きな広がりをもつ面と、それを切る主要剥離面と同じ方向から加撃された剥離面がある。0.06ｇ。65は剥離面打面の横形剥片である。背面には大きな広がりをもつ面と、それを切る主要剥離面と同じ方向から加撃された剥離面がある。0.11ｇ。66は剥離面打面の縦長の剥片である。背面には主要剥離面と同様の剥離面が並んでいる。0.05ｇ。67は剥離面打面の縦長の剥片である。背面には主要剥離面と同様の剥離面と、下方から加撃された剥離面の末端が見える。0.06ｇ。これらのうち66・67は、75＋76に見られるような押圧剥離の結果できた剥片と考えられる。そのほかについても、細部調整に係わる剥片が多い。

68は、剥離面打面の横形剥片である。背面は主要剥離面と同様な剥離面と、末端がステップとなる剥離面が並んでいる。0.35ｇ。69は点状打面の縦長の剥片である。背面には主要剥離面と同様の剥離面が並んでいる。0.75ｇ。70は剥離面打面の横形剥片である。剥片の

末端は折れている。背面には大きな広がりをもつネガティブな面と、それを切る上方からの細かな剥離面が並んでいる。0.69ｇ。これらは石核調整剥片と考えられる。

71・72はクサビ剥片と考えられる。71は主要剥離面側に上下方からの複雑な剥離面が見られ、背面にも下部に細かな潰れがある。また、４辺が不規則に折れたり割れたりしている。重さは2.17ｇである。72は図左面の左上に原面を残す。打面付近および側縁とも剥離時に同時折れを起している。よって剥片の全体は不明である。重さは0.98ｇである。

また、図27に示したように石器遺物が出土した周辺の土を１ｍ区画で持ち帰り、水篩選別を行った。結果は、側溝によって失われたところを別としても、合計1,300点余りのサヌカイト製の石器遺物が見つかった。図27に出土位置の記載がないものはすべてこの作業で得られたもので、その大半は図28の60～67のような細部調整に係わる微細な剥片であった。73と75＋76も含まれることから、同様な石器を製作していた可能性が高い。

これらの石器遺物は先にも述べたように、分布状況がそのまま石器製作址を示すものではない。しかし、剥片の出土量や種類からみて、谷の縁辺部にあったものがまとまって窪地に流れ込んだ可能性がある。時期については、細部調整がある遺物を見る限り縄文時代の古い時期が考えられ、有茎尖頭器も含めると縄文時代草創期から前期にかけてのものといえよう。

ｂ．遊離資料(図28・29、図版27・29)

上記のほかにも古墳時代以降の遺構や包含層に含まれる遊離資料が見られた。

77は10a～10d2層から出土した底面をもつ横形剥片を素材とした国府型ナイフ形石器である。上下両端を欠損している。背部の調整は主要剥離面から背面に向けて行われたものが主であるが、図の下部では逆方向にも施しており、対向調整となっている。刃角は約50°である。刃縁には刃こぼれ状の微細な剥離がある。重さは6.98ｇである。

79・80は調査区東半の13層から出土した。79は剥離面打面の剥片で、末端は剥離時に折れている。背面は横方向から剥離された広いネガティブな面と、小さな先行剥離面で構成される。重さは2.64ｇである。80は厚さ約1.5㎝の剥片を利用した石核である。作業面は図の上辺と下辺の２個所である。上辺の剥片剥離は打面と作業面を交互に入れ替えて行っている。下辺の剥離は主として図の左面側に行っている。重さは12.60ｇである。

83はSB702の柱穴から出土した細部調整のある剥片である。剥離面打面の横形剥片で、主要剥離面は石材の潜在的な傷によって不安定に波打っている。背面は原面と横方向からの加撃による剥離面とで構成される。細部調整は主要剥離面が背面の先行剥離面を切取る

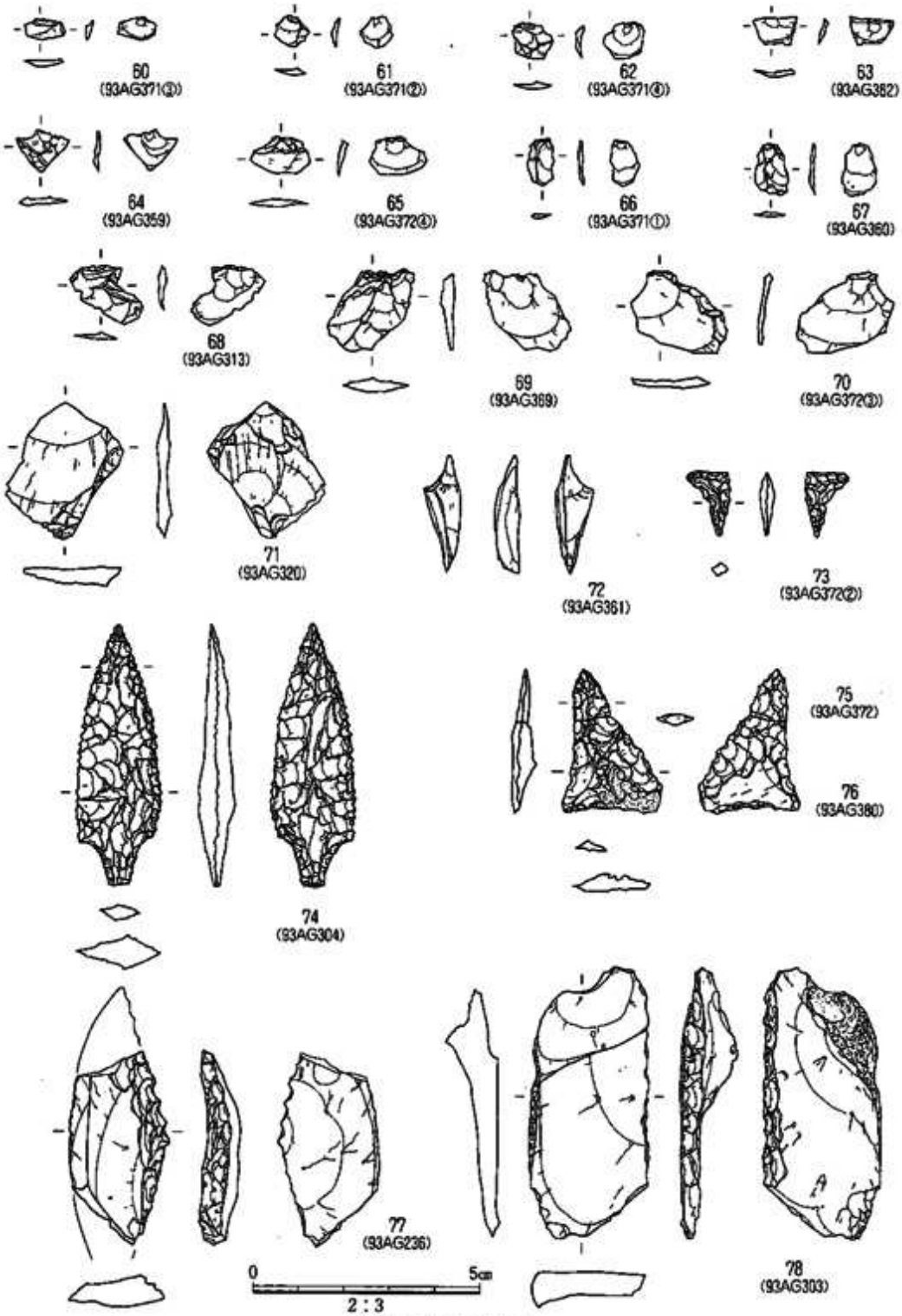


図28　石器遺物(1)

LC1201(60～76・78)、10a～10d2層(77)

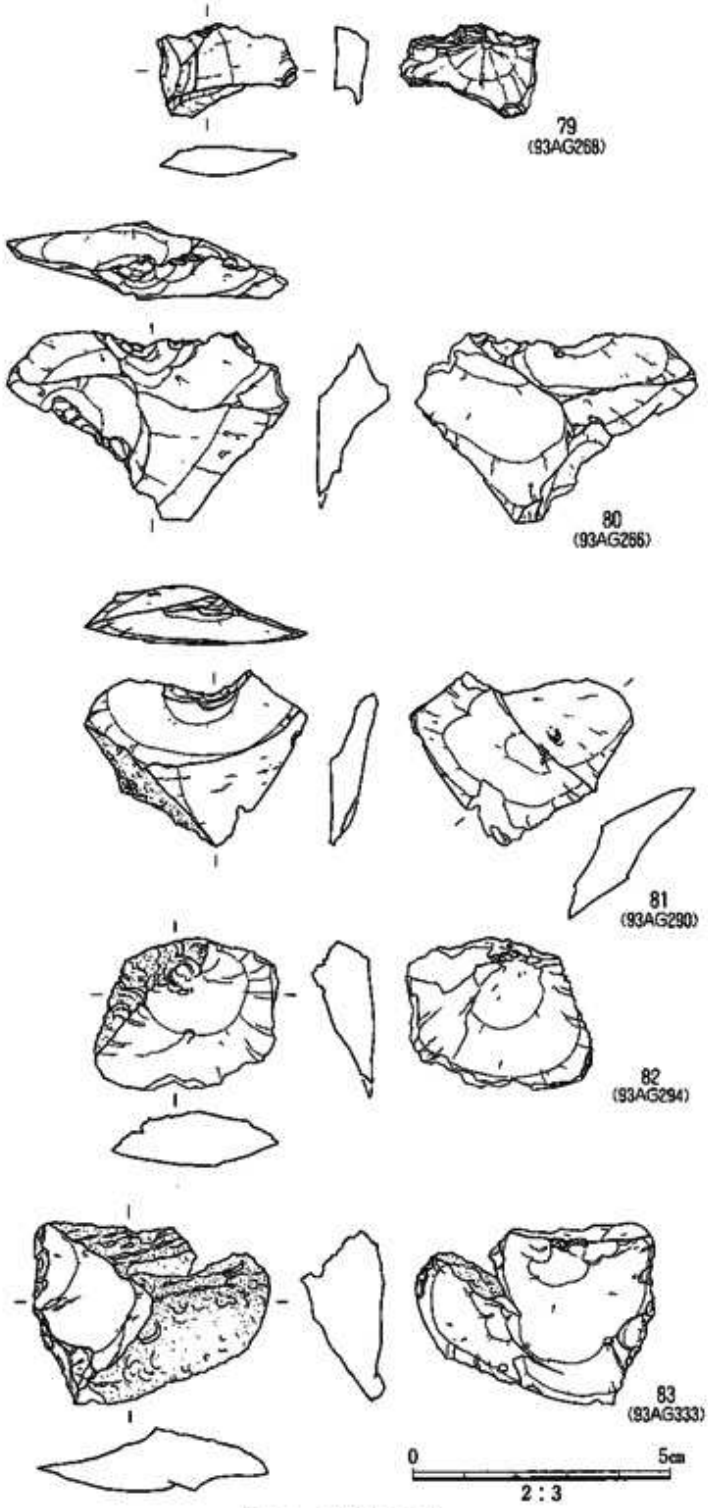


図29　石器遺物(2)
SB702(83)、SD701(82)、SD708(81)、13層(79・80)

辺に、両面から施されている。重さは22.39gである。

81はSD708から出土した剥離面打面の横形剥片を利用した石核である。作業面は素材となる剥片の側縁部に設定されており、主要剥離面と打面の頂点を叩いて背面側に横形剥片を取っている。取られた剥片の幅は約4cmである。背面には原面が残る。原面の右側に接する平坦な面は、素材の剥片に由来するネガティブな面である。重さは9.34gである。

82はSD701から出土した剥離面打面の横形剥片である。背面には原面と、原面を叩いて剥離した大きなポジティブな面が見られることから、石核調整剥片と考えられる。重さは11.40gである。

3)小結

今回の調査では、古墳時代の遺構として、東西に並ぶ3棟の掘立柱建物SB701～703と溝SD705・706を

検出した。これらは併存していた可能性が高く、時期は5世紀後半、須恵器の型式でいうTK208型式～TK23型式の段階である。

検出した3棟の建物はそれぞれ規模や構造が異なっており、西端の総柱建物SB701は床面積約30㎡と比較的大型であるのに対し、東側の2棟はSB702が床面積約16㎡、SB703が約9㎡で、柱痕跡の直径も10～13㎝と小さい。規模からSB701は主屋と考えられるが、SB702・703は住居以外の機能を想定する必要がある。SB703に付随するSD706では、溝の廃絶に際し、甕を中心とした土器をまとめて投棄しており、建物の機能を考える上で参考になるかもしれない。また、本調査区南隣の96－71次調査地では本建物群に伴う井戸が検出されている。

これまで長原遺跡の古墳時代集落の調査では、竪穴住居1棟と2・3棟の掘立柱建物からなる集落内部を分割する単位が確認されており[京嶋覚1993]、今回検出した建物群も同様の単位と考えられ、これが集落内部での生活の基礎単位となっていた可能性が高い。また、建物群の東辺を画する溝の位置にあるSD705からは滑石製の勾玉・臼玉が出土しており、祭祀を行う一単位でもあったようである。

この建物群は長原遺跡西部集落域の南端に位置する。上記の建物群に先行する遺構には、ON46段階の須恵器が出土したSD709があり、また直接遺構には伴わないものの、陶質土器や鳥足文・格子タタキが施された韓式系土器も出土している。当地における集落の形成は初期須恵器の段階にさかのぼると考えられる。

また、LC1201は二次堆積物で構成される可能性があるとはいえ、縄文時代草創期～前期の石器生産に係わる資料が「馬池谷」内部で見つかったのは初めてのことで、当該期の集落立地や活動領域を考える上で注目すべきことであろう。

第3節　NG93－68次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図30、図版6、表4)

本調査区は西側の農業用水路からの湧水が著しかったため、東側にテラスを設定して地層を観察した。層序は35層に細別され、大半が沖積層上部層Ⅰからなる。特に作土層と水成層の互層からなる長原2～4層が厚く堆積しており、本調査地周辺の特徴といえる。

作土の可能性がある層準のうち、もっとも下位に堆積するのは26(長原7A)層で、次に、24(長原6Bi)・22(長原6Ai)層がある。これらは古墳時代後期～奈良時代のものであるが、上面にはヒトの足跡が顕著に見られるものの(図版6・7)、南北23mの調査区の中に畦畔は認められず、作土としての確証はない。足跡の分布のようすは南側が密で、北側になるにつれて疎になる。明確な作土は18(長原4B)層以上に認められる。このうち12(長原4B)・9(長原3)・7(長原3)層段階には、調査区中央に島状の高まりが見られるので、島畠が形成されていたと推測される。水成層は長原5層に対比される19～21層、長原4B層中の10層、長原4A層に対比される6層が厚く堆積する。特に、10層は調査地北部で下位層を南東から北西方向に削剥しており、これをもたらした水流の勢いが本調査地付近で激しかったことが推測される。

耕作されていたことを推測しうる以前の地層は、湿地性の堆積物の層相をもっていた。27・29・30・32層が暗色帯を形成し、27層には材などの植物遺体が多く含まれていた。

ii)各層の出土遺物(図31)

土師器・須恵器・瓦器などが出土したが、ほとんどが作土中に含まれる細片であった。

84～88は15層から出土した。84は口径9.9cmの瓦器小皿である。炭素の吸着が不十分で、器面は灰白～乳白色を呈する。口縁端部は丸くおさめており、外面は口縁端部から1.3cm幅のヨコナデを行い、底部もていねいなナデによってユビオサエ痕を消している。ヘラミガキは内面にのみ施す。85は口径9.6cm、器高2.2cmで、84より丸みのある瓦器小皿である。口縁端部は弱い面をもち、見込みに太い平行暗文を施した後、内面を密にヘラミガキ調整する。86は口径15.2cmで、口縁端部をナデによって丸くおさめた瓦器椀である。見込みに粗く太い平行暗文を施した後、内面を密にヘラミガキ調整するが、口縁付近には及ばない。外面は口縁以外はユビオサエのまま未調整である。87は高台径5.1cmの瓦器椀の底部で、見

表4　93－68次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代盛土				
NG1	1層	現代耕土	35			
NG2	2層	含細粒砂灰白色(5Y7/1)砂質シルト	10～20	▼撹乱		
	3層	含中粒～粗粒砂オリーブ灰色(10Y6/2)シルト	≦20			
	4層	含中粒砂灰白色(10Y7/2)砂質シルト～細粒砂	≦20			一部作土
	5層	含細粒～中粒砂明オリーブ灰色(5GY7/1)砂質シルト	≦20			作土
NG4A	6層	明緑灰(7.5GY7/1)・黄橙(7.5YR7/8)・灰白(2.5GY8/1)細粒～粗粒砂,明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト～粘土	≦70			水成
NG4B	7層	含粗粒砂オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト質粘土	≦20			作土
	8層	灰色(7.5Y5/1)細粒～粗粒砂	≦15			水成
	9層	含粗粒砂灰白(10Y7/1)～灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粘土	≦40	▼島畠		作土
	10層	明褐(7.5YR5/8)～灰白色(10Y8/2)細粒～粗粒砂	≦100			水成
	11層	灰オリーブ色(7.5Y5/2)極細粒砂	≦10			水成
	12層	含粗粒砂オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質粘土	≦10	▲耕作	瓦器	作土
	13層	灰白色(7.5Y7/1)細粒～粗粒砂	25			水成
	14層	緑灰色(5G6/1)シルト～極細粒砂	≦10			水成
	15層	含粗粒砂灰白色(7.5Y7/1)砂質シルト,含細粒～中粒砂灰色(10Y6/1)シルト質粘土	10～20	▲SR401～404,耕作痕跡,足跡	土師器・瓦器	作土
	16層	含細粒砂オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト	5～10			作土
	17層	灰白色(5Y7/1)粗粒砂	≦10			水成
	18層	含中粒～粗粒砂緑灰色(7.5GY6/1)シルト質粘土	10～20	▼踏込み	土師器・須恵器・瓦器	作土
NG5A	19層	明緑灰(7.5GY7/1)・明緑灰(10GY7/1)・オリーブ灰色(5GY6/1)極細粒～粗粒砂	10～20			水成
NG5B	20層	暗緑灰(10GY4/1)・緑灰色(7.5GY6/1)シルト～極細粒砂	15～30	？踏込み		水成
	21層	緑灰色(7.5GY5/1)シルト～粘土	10			水成
NG6Ai	22層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土		▲踏込み,SX601・602		作土?
NG6Aii	23層	緑灰(10GY5/1)・暗オリーブ灰(5GY4/1)・浅黄(2.5Y7/3)・暗緑灰色(5G4/1)極細粒砂～シルト～粘土	25			水成
NG6Bi	24層	暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土	25	▲踏込み　▼掘込み		作土?
NG6Bii	25層	オリーブ黒色(10Y3/2)シルト～粘土	≦10		土師器	水成
NG7A	26層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土	25	▲踏込み　▼踏込み		作土?
NG7Bi	27層	オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土	25			暗色帯
NG7Bii	28層	黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂	5～10			水成
NG7Biii	29層	含細粒砂緑黒色(5G2/1)含むシルト	≦10			暗色帯
	30層	オリーブ黒(5Y3/1)～緑黒色(5G1.7/1)粘土質シルト	20			暗色帯
NG8C?	31層	暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂～小礫	25			水成
NG9層以下	32層	含礫粗粒砂黒色(2.5Y2/1)粘土	25			暗色帯
	33層	緑灰色(10G6/1)粗粒砂～礫	10			水成
NG15層以下	34層	緑灰色(10G6/1)細粒砂～礫				

▲：上面検出遺構　▼：下面検出遺構

込みに太い格子状暗文を施す。高台は断面三角形で、端部は平坦である。88は土師器の台付皿の脚部と思われる。底径は4.9cmである。これらは12世紀末頃のものと思われる。

89・90は調査区北部の18層から出土した。89は口径14.8cmで、口縁端部の内面に沈線が施される瓦器椀である。ヘラミガキは内面が細かく、外面は粗い。楠葉型あるいは大和型

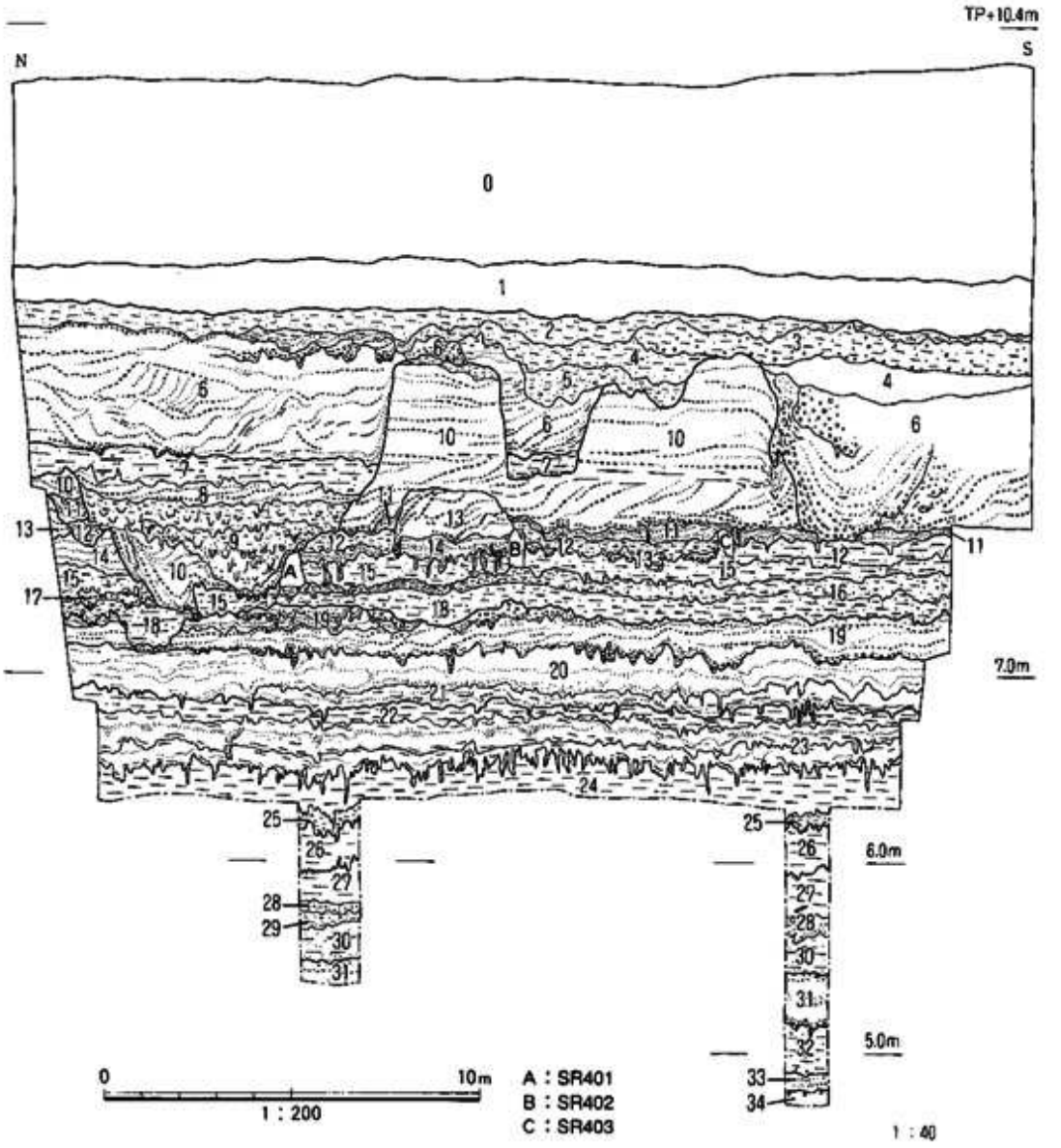


図30　93－68次調査地の地層断面

に属するものである。90は口径14.4cmで、口縁端部をヨコナデによって丸くおさめた瓦器椀である。見込みに細い斜格子状暗文を施した後、内面を粗くヘラミガキで調整する。外面は口縁端部から1.1cm幅のヨコナデを行い、下位は細かいヘラミガキで調整する。これらは12世紀後半頃のものと思われる。

91は20～23層のいずれかから出土した高台径9.2cmの須恵器杯である。奈良時代のものである。

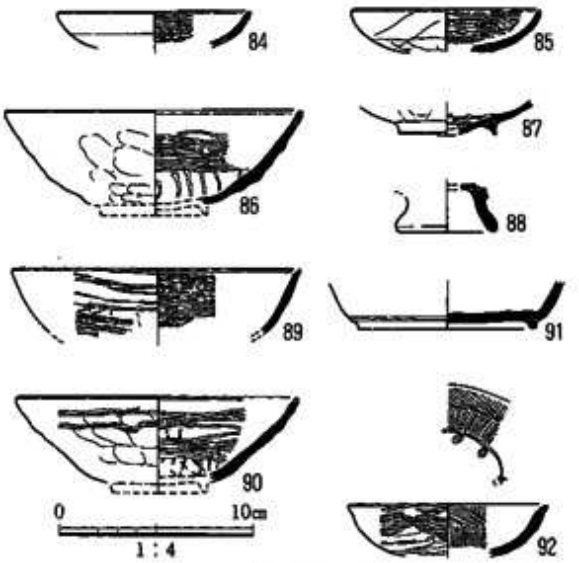


図31　各層出土の土器
15層(84～88)、18層(89・90)、20～23層(91)、25層(92)

92は25層から出土した口径10.2cmの土師器杯である。口縁端部はヨコナデによって丸くおさめており、やや外反する。内面はていねいなヨコナデの後、側面下段に密な正放射状暗文を施した後、上段に斜放射状暗文と見込みに螺旋状暗文を施す。外面は底部を幅約0.5cmのヘラケズリによって整えた後、側面に4～5分割の弧状のヘラミガキを施している。飛鳥Ⅱに属するものと思われる。

2)遺構とその遺物

i)江戸時代

墾溝　2層下面で近世の条里に沿った東西方向の墾溝を確認した。機械掘削の途中で確認したのみで、平面的な記録はしなかった。

ii)平安・鎌倉時代(図32、図版7、写真7)

島畠　9層の下面で10層を削り残して形成された島畠状の高まりを確認した。機械掘削の途中で確認したのみで、平面的な調査はできなかったが、断面観察によって記録した。東西方向のものと思われ、畠の耕作痕は削平のため失われていたが、周囲には水田が検出された。水田面は高まりの北側で良好に遺存し、また、作土は9層と7層の2枚が水成層を介在して堆積していた。7層の分布範囲は9層のそれに比して広く、水田域が拡張されたことがうかがえる。南側では作土層の大半が6層によって削剥されていた。

水田(図32、図版7、写真7)　12・15・18層の上面で検出した。すべて長原4B層準に

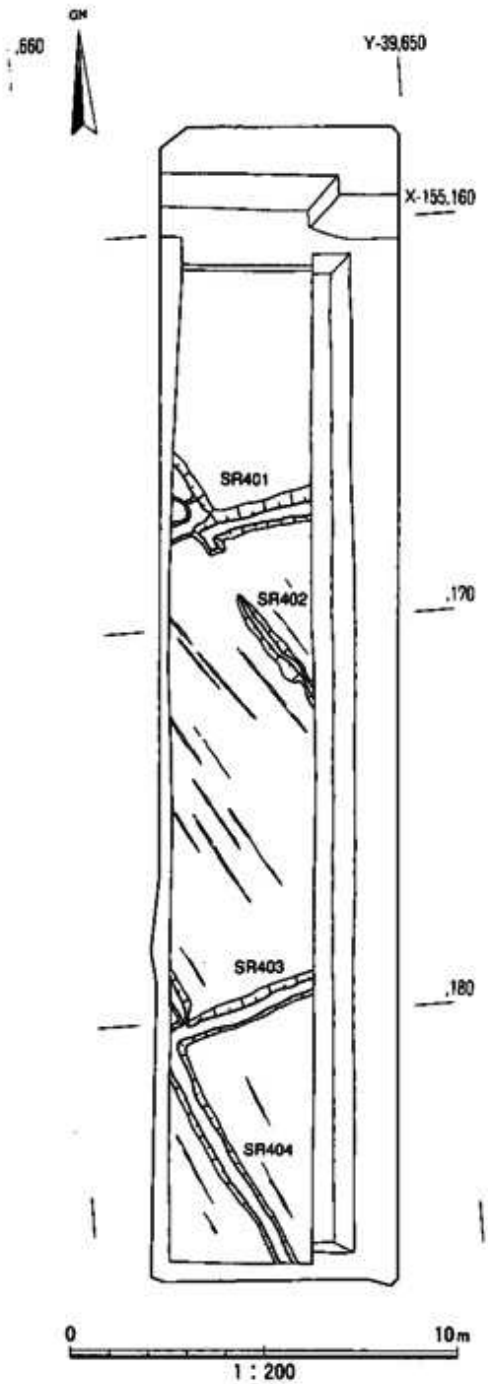


図32　15層上面検出水田平面図

相当する。もっとも遺存状態のよい15層上面の水田面を図32に示した。これによると、畦畔は4条あり、その方向は北で西に振るか、これとほぼ直交方向である。規模は幅約0.3～0.4m、高さ0.15mであるが、SR401は耕地の段を区画するため幅0.7mと規模が大きい。SR402がSR401との交点の南側で途切れるのは、12層段階の耕作によって壊されたためである。これらによって区画された水田は6筆確認でき、上面のレベルはSR401以南ではどれもTP+8.1m前後で高低差はほとんどないが、SR401の北側の区画は約0.1m低い。SR402とSR403によって区画された水田は、長辺12m、短辺7mの菱形を呈すると思われ、一筆の面積は約84㎡である。上面には長辺と同じ方向の耕作痕があり、それと同方向のヒト・ウシの足跡も見られた。

12層の上面では、SR403・404が踏襲され(写真7)、調査地中央と北端には13・14層を削り残した高まりがある。水田面の高さはほぼ均一である。

18層の上面は大半が削平されていたが、調査区北端では15層上面同様に一段低くなっていたことが断面観察から判明した。

iii)奈良時代

SX601・602(写真8)　22層の上面で検出した直径0.20～0.25cm、深さ0.05mの円形の窪みで、用途は不明である。19～21層を一括して掘下げたため、正確な掘込み面はつかめなかった。埋土は19層の粗粒砂に似てい

写真7　93－68次調査12層上面水田(南東から)

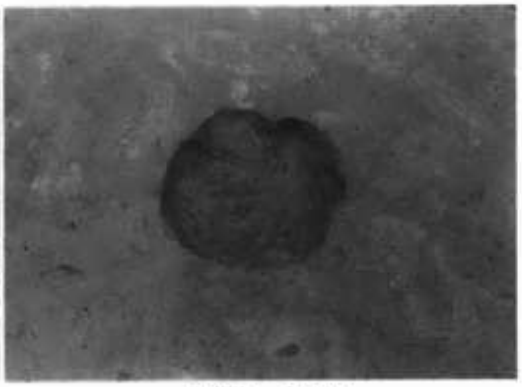


写真8　SX601

たことから、20層上面検出遺構の可能性もある。

3)小結

本調査地は「馬池谷」の中央部に当ると推測され、谷の内部で現代客土から地山まで35にのぼる地層の堆積を確認した。長原7B層以下は湿地性の環境、長原4B層以上は度重なる水害に見舞われた水田や島畠の景観が想定されるが、谷底の耕地としての開発がいつから始まったのか、確たる証拠を得ることができなかった。また、中世水田面の畦畔が条里地割の方向とは合致せず、「馬池谷」の地形に沿って作られていることもわかった。

また、谷中心部で谷底を部分的であれ確認することができた。谷底のレベルはTP+約5mで、長原遺跡で過去に調査された中ではもっとも深い。谷底付近には3層に大別できる暗色帯を確認したが、調査区の狭小さも原因して時代を決定できる遺物が出土せず、人との係わりも不明であった。これまでの調査によって谷の縁辺部に古墳時代の集落跡が広域に分布することが明らかにされており、その経済基盤を知るためにも、今回のデータをもとにして、今後近辺での面的な調査を行うことが課題であろう。

第４節　NG93－71次調査

１)層序とその遺物

ｉ)層序(図33、図版８、表５)

調査地はTP+9.3～9.8mで、東から西に向って緩やかに傾斜して下っており、層厚0.2～0.6m前後の現代客土の直下は、長原１層に相当する水田作土がほぼ水平に拡がっていた。これより下位の地層も、基本的には長原遺跡標準層序に対応したが、長原８～11層については調査区が「馬池谷」に当り、掘削深度に限界があったことから確認できなかった。以下、層序について順を追って記述する。

長原２層に相当する層準は３層に分けられ、水成層の2b層を挟む2a・2c層の作土からなっていた。2a層は18世紀代の肥前系陶器・瀬戸美濃焼・京焼を含み、2c層は16世紀後半の備前焼・瓦質土器などの細片を含んでいるが、ともに江戸時代に属する地層である。なお、2b層が厚く堆積した東区東部では、2c層も層厚が0.4mに及び厚かった。

長原３層に相当する層準は２分され、水成層の3a層と、水田作土の3b層からなる。3a層の層厚は0.3m前後あり、東区東端では東南から北西方向の流水を示す砂粒のラミナが顕著であった。3b層の層厚は0.1～0.2mあり、東区東部の上面で畦畔、下面で溝などが確認された。この水田の時期は、3b層内から出土した14～15世紀代の瓦質土器の細片などからみて、室町時代以後と思われる。なお、両層とも東区中央部以西ではほぼ水平に分布していたが、以東では東に向って層厚を増す。なお、西区東部の3b層上面で検出した溝SD201は層序検討の結果、２層段階の遺構であることが明らかとなった。

4a～4e層は長原４層に対比される。長原4A層相当の4a層は水成層で、層厚は東区東端で最大0.8mあり、下位層を大きく削剥していた。中央部以西の層厚は約0.1mであった。

長原4Bi層に相当する層準は３分され、水成層の4b2層を挟む4b1・4b3層の作土からなる。層厚は4b1層が0.1～0.2mで、4b3層は0.15m前後あり、ともに12～13世紀代の土師器・瓦器・青磁などの細片を含む。長原4Bii層に相当する4c層は水成層で、層厚は0.2～0.3mある。12～13世紀代の土師器・瓦器の細片が少量出土した。長原4Biii層に相当する層準は西区東部から東区で２分され、4d1・4d2層の作土からなる。層厚は0.2～0.4mあり、東区西部の4d1層上面から南北方向の畦畔が検出されたほか、各所でヒトや偶蹄類の足跡群が確認された。西区西部の本層下面では南北方向の溝が検出された。９～12世紀代の土師器・須

表5　93－71次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代客土	20-60			
NG1	1層	現代作土				
NG2	2a層	含砂礫黄灰色(2.5Y4/1)シルト	16		陶磁器	作土
	2b層	含シルト灰白色(5Y7/1)砂礫				水成
	2c層	黒褐色(10Y3/2)砂礫質シルト～含砂礫粘土質シルト		△SD201	陶磁器	作土
NG3	3a層	赤褐色(5YR4/8)砂礫	30			水成
	3b層	含礫粒砂オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土質シルト	10-20	△SR301・302,足跡 ▽SD301・302	瓦器・瓦質土器・瓦・モモ核	作土
NG4A	4a層	灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂礫	10-80			水成
NG4Bi	4b1層	含礫粒砂灰色(7.5Y5/1)シルト	10-20	△水田,流路	土師器・黒色土器・瓦器・青磁	作土
	4b2層	含シルト灰色(10Y4/1)極細粒砂				水成
	4b3層	含細粒砂灰色(10Y6/1)粘土質シルト	15		土師器・黒色土器・瓦器・青磁	作土
NG4Bii	4c層	含礫灰色(10Y5/1)礫粒砂	20-30		土師器・瓦器	水成
NG4Biii	4d1層	含極細粒砂灰色(10Y4/1)粘土質シルト		△SR401,足跡	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦	作土
	4d2層	含砂礫灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト	20	▽SD401～403	ミニチュア鍋(SD401)	作土
NG4Ci・ii	4e層	含礫灰色(10Y4/1)礫粒砂～細粒砂質シルト	20-70	SD404	土師器・須恵器・瓦器・瓦	水成
NG5A	5a層	灰(7.5Y5/1)～緑灰色(10GY6/1)砂礫	50-70		土師器・須恵器・瓦	水成
NG5B	5b層	灰色(10Y5/1)極細粒砂～極細粒砂質シルト	15		土師器・須恵器	水成
NG6Ai	6a1層	含細粒砂オリーブ灰色(5GY5/1)シルト	10-20	△畦畔,足跡　▽落込み	土師器・須恵器(奈良)	作土
NG6Aii	6a2層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルト	5-20			水成
NG6Bi	6b1層	灰色(10Y5/1)極細粒砂質シルト	5-10			水成
NG6Bii	6b2層	含細粒砂灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト	30	▲足跡	土師器・須恵器・製塩土器・鉄製品・木製品・ウシorウマ骨・モモ核	水成
NG7A	7a層	含細粒砂褐灰(10YR4/1)～黒褐色(10YR3/1)シルト	35		土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器・鉄製品・木製品・ウシorウマ骨・植物遺体	水成
NG7B	7b層	黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土	≧20			水成
NG12	8層	含細粒砂・暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト		馬池谷		含火山ガラス
NG13A・B	9層	含細粒砂灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト	10			
NG14	10層	含礫粒砂灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト	20			
NG15	11層	含粘土灰色(7.5Y6/1)砂礫	≧50			

△：上面検出遺構　▼：下面検出遺構　！：基底面検出遺構

恵器をはじめ、12世紀代の瓦器・瓦の細片が出土しており、平安時代末期以降に属すると考えられる。

長原4Ci・ii層に相当する4e層は水成層で、層厚は0.2～0.7mである。東区中央部に位置する杭列を伴った溝SD404内で層厚を増し、西区では薄い。8世紀代に属する須恵器や11世紀代の土師器などが出土した。

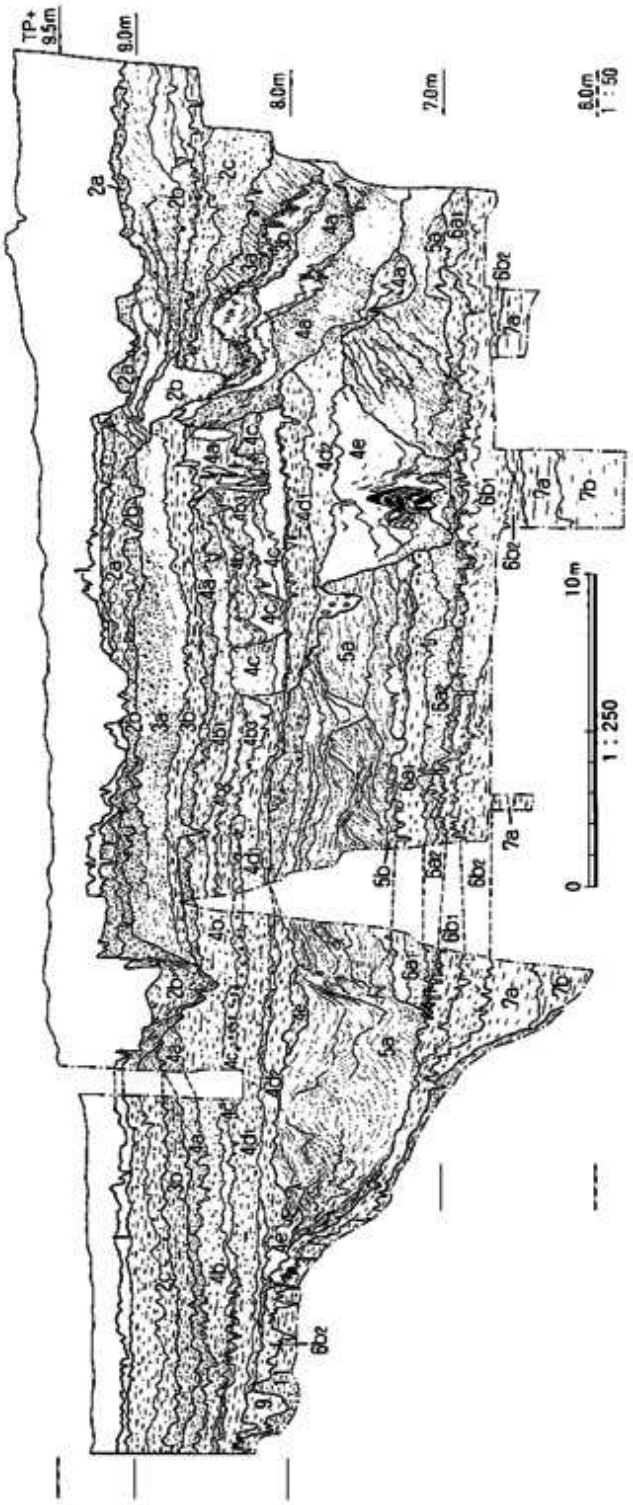


図33　93−71次調査地の地層断面

5a・5b層は長原５層に対比される。長原5A層に相当する5a層は砂粒のラミナが顕著な水成層で、層厚は0.5～0.7mあり、弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器や、８世紀代に属する土師器・須恵器・瓦の細片が出土した。長原5B層に相当する5b層は極細粒砂からなる水成層で、層厚は0.15m前後である。西区東部では石英製の叩き石、サヌカイトの剥片、７～８世紀代に属する土師器や須恵器の細片が出土した。

6a1～6b2層は長原６層に対比される。最上位の6a1層は長原6Ai層の作土に相当すると思われる。層厚は0.1～0.2mで、上面および下面ではヒトや偶蹄類の足跡群が確認されたほか、東区西部の上面では畦畔が検出された。８世紀代の土師器・須恵器が少量出土しており、奈良時代に属すると考えられる。6a2～6b2層は水成層である。6a2層は層厚が0.05～0.20mで、部分的に２分できる。長原6Aii層に相当すると思われる。6b1層は長原6Bi層に相当すると思われ、層厚は0.05～0.10mで、上面ではヒ

トや偶蹄類の足跡が確認された。東区では2分できる。6b2層は長原6Bii層に相当すると思われ、層厚は0.3m前後で、下部には細粒砂が多く含まれる。6世紀後半～7世紀初頭の土師器・須恵器・製塩土器の細片、動物遺体などが出土した。

7a・7b層は長原7層に対比される。7a層は長原7A層に相当し、層厚は0.35m前後で、西区東部の地山上位の本層基底面から縄文・弥生土器の細片をはじめ、6世紀後半～7世紀初頭の土師器・須恵器・鉄製品(刀子・鎌)・木製品・動物遺体などが出土した。7b層は長原7B層に相当すると思われ、層厚が0.2m以上ある。本層は「馬池谷」の底近くに堆積した地層で、全体によく締まっている。

8～11層は無遺物層で、すべて西区の「馬池谷」斜面で確認された。上から順に長原12A層、長原13A・B層、長原14層、長原15層に相当すると思われる。8層は土壙状の木根痕内で確認され、平安神宮火山灰を起源とする火山ガラスを含む。

ii)各層の出土遺物(図34～38・41、図版31・32)

a．1層出土遺物(図34、図版31)

93は高台径7.2cmで、暗オリーブ灰色の釉が施された緑釉陶器椀である。底部の裏面には回転糸切り痕があり、高台は端部が内傾している。94は口径12.6cmの肥前陶器碗で、口縁端部は内傾しており、体部の下半の調整はヘラケズリである。93は11世紀前半代に、94は18世紀の後半代に属するものであろう。

b．2c層出土遺物(図34)

95は底径15.8cmの備前焼擂鉢で、16～17世紀代に属するものである。

c．3層出土遺物(図34)

97・99が3b層から出土したほかは、3a層から出土した。

97・98は口径24.0～28.3cmの東播系須恵器鉢で、口縁部をやや肥厚させている。色調は灰色で、焼成はよい。103は口径約25cmの口縁部が頸部から短く開いた東播系須恵器甕である。体部外面の成形は粗い平行タタキで、内面はユビオサエの後、横方向にナデている。

99は口径8.0cm、器高2.0cmの土師器皿で、口縁部の外面から体部の内面をヨコナデ調整している。100は口径12.2cm、器高3.8cmの瓦器椀で、口縁部は緩やかに外反しており、内面には粗いヘラミガキが施されている。96は口径25.6cmの瓦質土器鉢で、口縁端部をやや肥厚させている。101は口径13.6cm、器高4cm前後の須恵器杯身である。立上がりは垂直で、口縁端部は内傾している。

102は口径約24cmに復元された縄文土器深鉢で、口唇部の上端に刻み目、これからやや

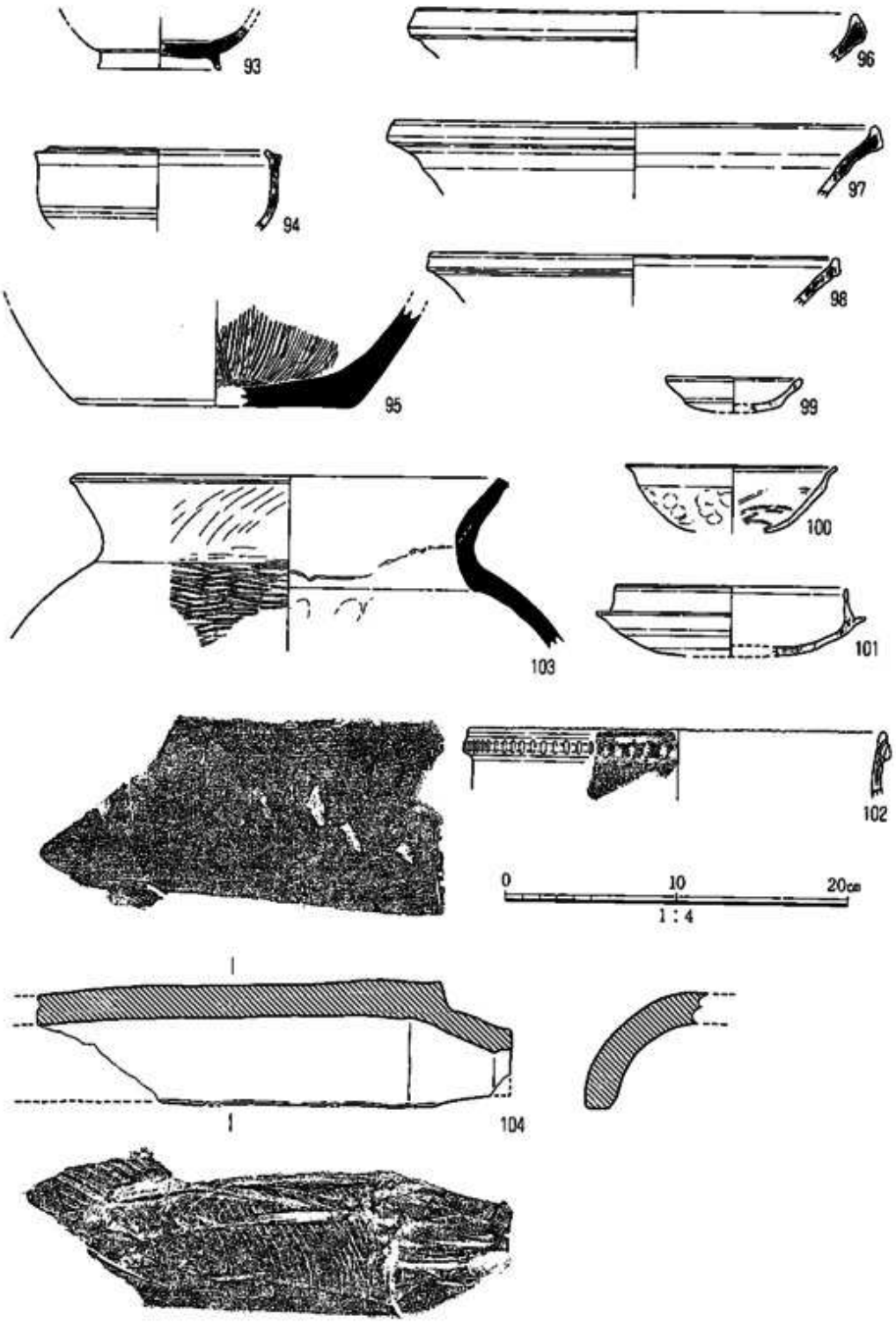


図34　1～3層出土の遺物
1層(93・94)、2c層(95)、3層(96～104)

下がった位置にも刻み目が施された突帯が巡る。色調はにぶい黄色で、胎土中に角閃石・長石・雲母粒を多く含む。

104は丸瓦で、裏面には糸切り痕がある。

以上の遺物のうち、15世紀代に属する96が水田の経営時期を示す遺物と考えられる。このほかは縄文時代晩期の滋賀里Ⅳ式土器と思われる102、MT15型式の須恵器101以外は、12世紀末～13世紀代に属するものであろう。

d．4a層出土遺物(図35、図版31)

105・108は土師器皿である。105は口径9.8cm、器高1.5cmで、口縁端部がわずかに内傾する。108は口径21.4cm、器高約2.6cmである。口縁端部の内面が浅く凹んでおり、口縁部と体部の境界にはにぶい凹線が巡る。

106・107は瓦器椀である。106は口径13.4cmで、体部の内面には見込みに平行暗文を施した後、横方向の細いヘラミガキを密に施している。107は口径15.8cmで、口縁部に強いヨコナデを加えており、体部の内面にもやや粗いヘラミガキが施されている。

以上の土器は12～13世紀代に属するものであろう。

e．4b・4c層出土遺物(図35・36、図版31)

116が4c層から出土したほかは4b層から出土した。109～112は口径7.4～9.0cm、器高1.1～1.9cmの瓦器小皿で、口縁部は体部から開く。109・112は口縁部の内面を細かいヘラミガキ、110・111はヨコナデ調整しており、体部の外面はすべてユビオサエで整えている。114は口径15.3cmの瓦器椀で、口縁部の下端に沈線が巡る。器体の内外面に横方向の粗いヘラミガキを施している。116は高台径5.2cmの瓦器椀の底部で、高台はやや高く作られている。見込に格子状暗文がある。

132は凹面に離れ砂の痕、凸面に斜格子タタキメのある平瓦片である。色調は灰色で、焼成はよい。

これらの遺物は13世紀の前半代に属するものであろう。

f．4d層出土遺物(図35・36、図版31)

115は口径14.0cmの瓦器椀で、口縁部がヨコナデによってわずかに外反する。口縁端部の内面に沈線があり、ヘラミガキは内面が細かく、外面はわずかしか施されていない。12世紀後半の大和型瓦器椀と思われる。117は口径13.7cmの瓦器椀で、外面のヘラミガキは粗く施されている。12世紀末のものと思われる。

134は土製の磚の破片である。厚さが5cm前後で、表面をナデで整えており、色調は灰黄

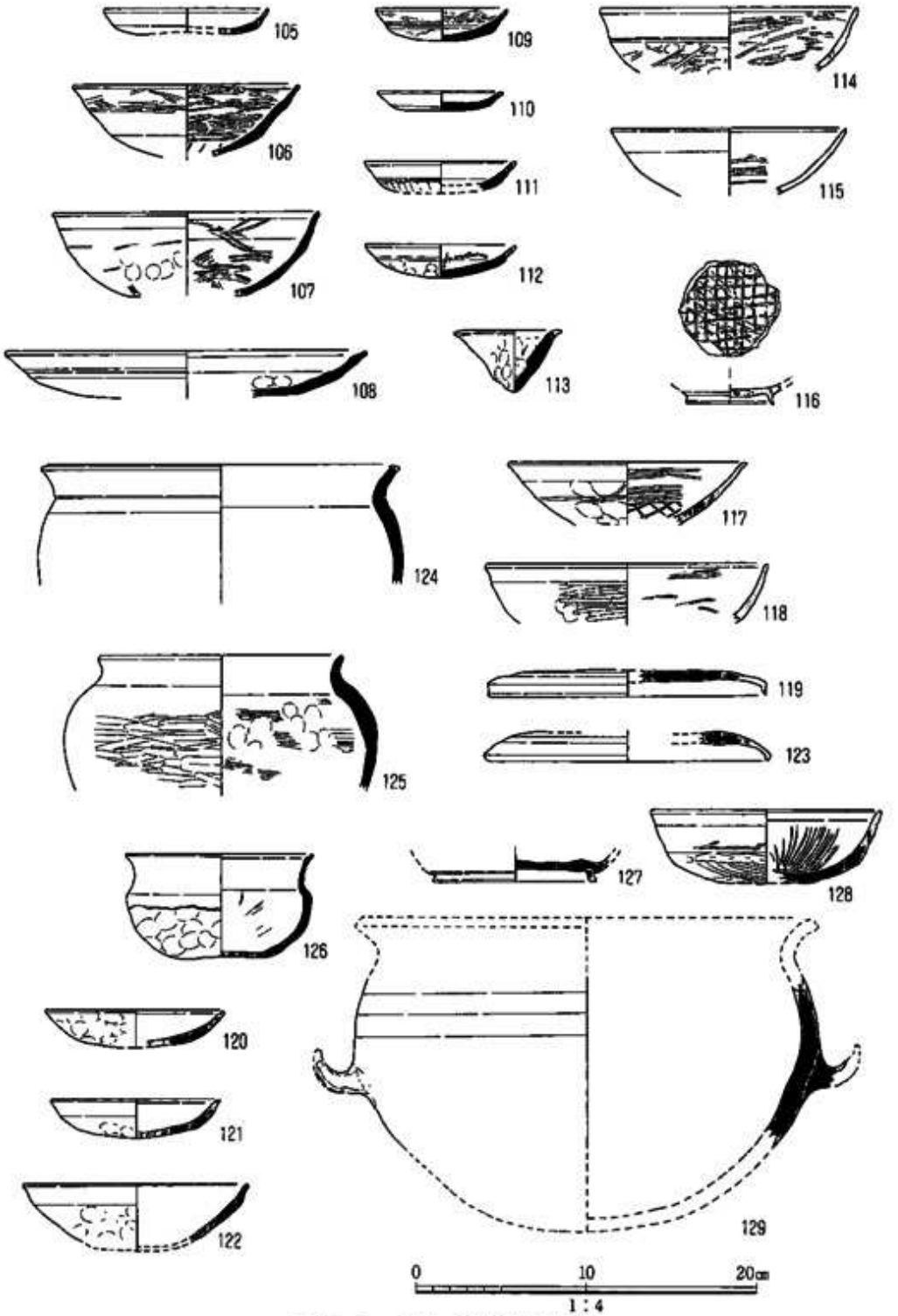


図35　4～7層・SD401出土土器

4a層(105～108)、4b層(109～112・114)、4c層(116)、4d層(115・117)、
4e層(118～122)、5a層(123～126)、6a層(127)、7a層(128・129)、SD401(113)

褐色で、焼成はややあまい。

g．4e層出土遺物(図35・36、図版31)

118は口径16.5cmの瓦器椀で、内外面には横方向のヘラミガキが密に施されている。口縁部はヨコナデが施され、端部を丸くおさめている。11世紀後半に属するものであろう。

119は口径16.4cmの須恵器杯蓋である。天井部をヘラケズリで、口縁部の内外面をヨコナデ調整する。8世紀の後半に属するものである。

120・121は口径10.0～10.6cm、器高2.1～2.3cmの土師器小皿である。ともに口縁部はヨコナデ調整しており、体部の外面はユビオサエで整えている。122は口径13.4cm、器高3.4

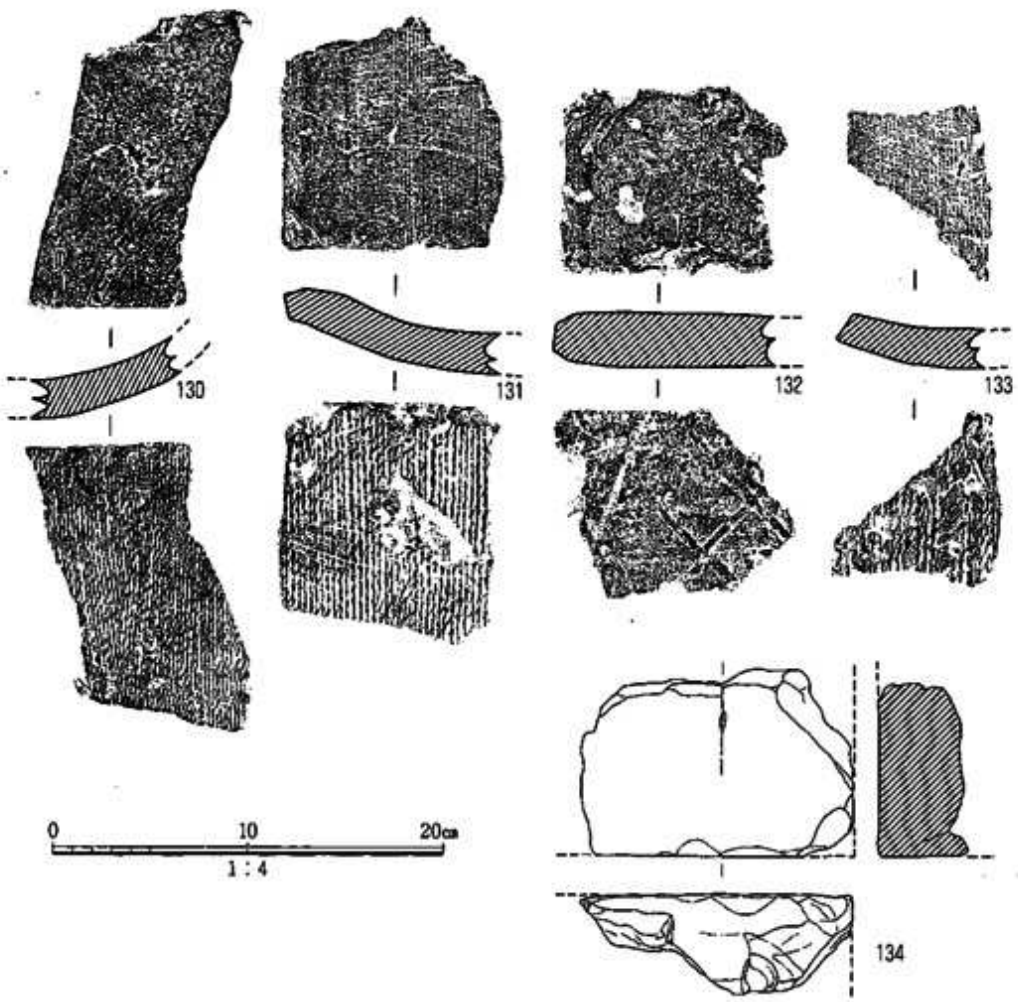


図36　4・5層出土の瓦磚
4b層(132)、4d層(134)、4e層(130)、5a層(131・133)

cmで、口縁部が体部からわずかに開いた土師器椀である。口縁部から体部の内面はヨコナデ調整、体部の外面はユビオサエで整えている。以上の土師器の色調は灰黄色あるいはにぶい黄橙色であり、焼成はよく、胎土中に長石・雲母粒を含む。11世紀の前半代に属するものである。

130は凸面に縄タタキメ、凹面に布目のある平瓦片である。色調はにぶい黄橙色で、焼成はややあまい。煤が付着しており、竈の部材に転用されたものと思われる。8～9世紀代に属するものであろう。

h．5a層出土遺物(図35・36・37、図版31・32)

124は口径20.4cmで、口縁部が外反する土師器甕である。口縁端部がわずかに肥厚している。125は口径14.3cmの土師器短頸壺である。体部は球形で、口縁部は短く直立する。体部の器面調整は、外面が横方向のヘラミガキで、内面はヨコハケの後、ユビオサエで整えている。126は口径11.1cm、器高6.2cmで、体部がやや扁平な土師器小型壺である。口縁部はわずかに外反しながら立ち、端部は内傾している。体部の外面はユビオサエで、内面はナデで整えている。

123は口径16.7cmの須恵器杯蓋で、天井部をヘラケズリで、口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、口縁部はわずかに内傾している。色調は灰～灰白色で、焼成はよい。8世紀後半に属するものである。

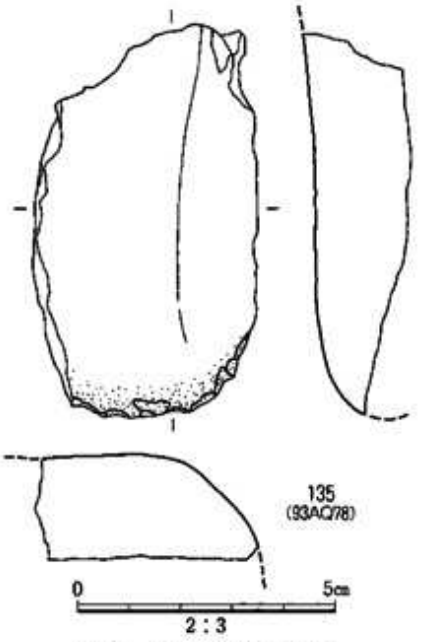


図37　5a層出土石器遺物

131・133は凹面に布目、凸面に縄タタキメのある平瓦片で、側面をヘラで切っている。色調は黄灰～褐灰色で、焼成はよい。8～9世紀代に属するものであろう。

135は叩き石で、先端付近と側面の一部が残る。表面は研磨されて滑らかで、図の下端には使用による敲打痕とみられる細かな潰れがある。半透明で乳黄色の石英製で、重さは100.37gである。

i．6a層出土遺物(図35、図版31)

127は高台径9.7cmの須恵器杯身で、色調は灰色で焼成はよい。8世紀の前半に属するものであろう。

j．7a層出土遺物(図35・38・39・41、図版32)

128は口径13.6cm、器高4.3cmの土師器杯で、口縁

端部を丸くおさめており、底部の外面はヘラケズリ調整している。体部の内面には正放射状暗文、見込みにも螺旋状暗文が施されている。色調はにぶい黄橙色で、焼成はよく、胎土中に長石・雲母・シャモット・石英粒を含む。129は口縁部および底部を欠損しているが、体部および把手の形状から土師器鍋に復元された。把手は体部に貼付けられており、体部の上半に強いヨコナデを加えている。色調はにぶい黄橙色で、焼成はよい。胎土は長石・角閃石・雲母粒を含む生駒西麓産のものである。なお、体部の内面には炭化物が付着している。128は飛鳥Ⅱに、129は飛鳥Ⅰ～Ⅱに属するものであろう。

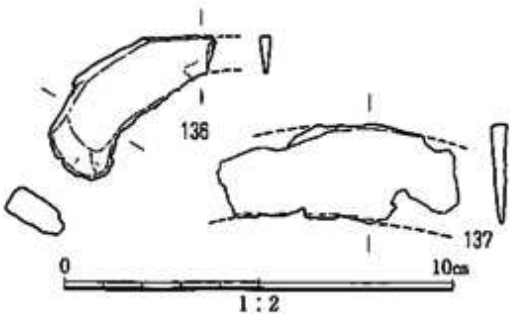


図38　7a層出土鉄製品

136・137は「馬池谷」の西斜面から出土した鉄製品の破片である。136は刀子の基部に近い部分であり、刃部の最大幅は約1㎝である。137は鏃の身部で、最大幅は2.5㎝あり、残存部の形状からみて先端に近い部分と思われる。ともに共伴遺物から考えると、6世紀末～7世紀前半に属するものである。

140・141(図41)は「馬池谷」の西斜面から出土した木製品である。140は長さ約76.0㎝、最大幅約6㎝で、縦に長い材である。丸太をミカン割りしており、材の両小口には鉄器による加工痕があるほか、材の中央部の一側面が約25㎝にわたって抉られている。用途や樹種は不明である。141は残存長約20㎝の棒状の木製品で、一端を削込みによって円頭状に加工しているほか、他の部分についても材の長軸方向に削って表面を整えている。用途および樹種については明らかでない。

2)遺構とその遺物

i)江戸時代(図39)

SD201　西区東端の2c層上面で検出した北西から南東方向に流れる幅約3.2m、深さ0.55mの溝で、両岸には護岸用に打ち込まれた杭列があった。この溝は位置や層準から判断して、宝永元年(1704)の大和川付替え以降に、大和川五十間樋から北方の喜連地域の水田の水路として引かれた「畑川」と思われる。

ii)室町時代(図39、図版10)

a．水田

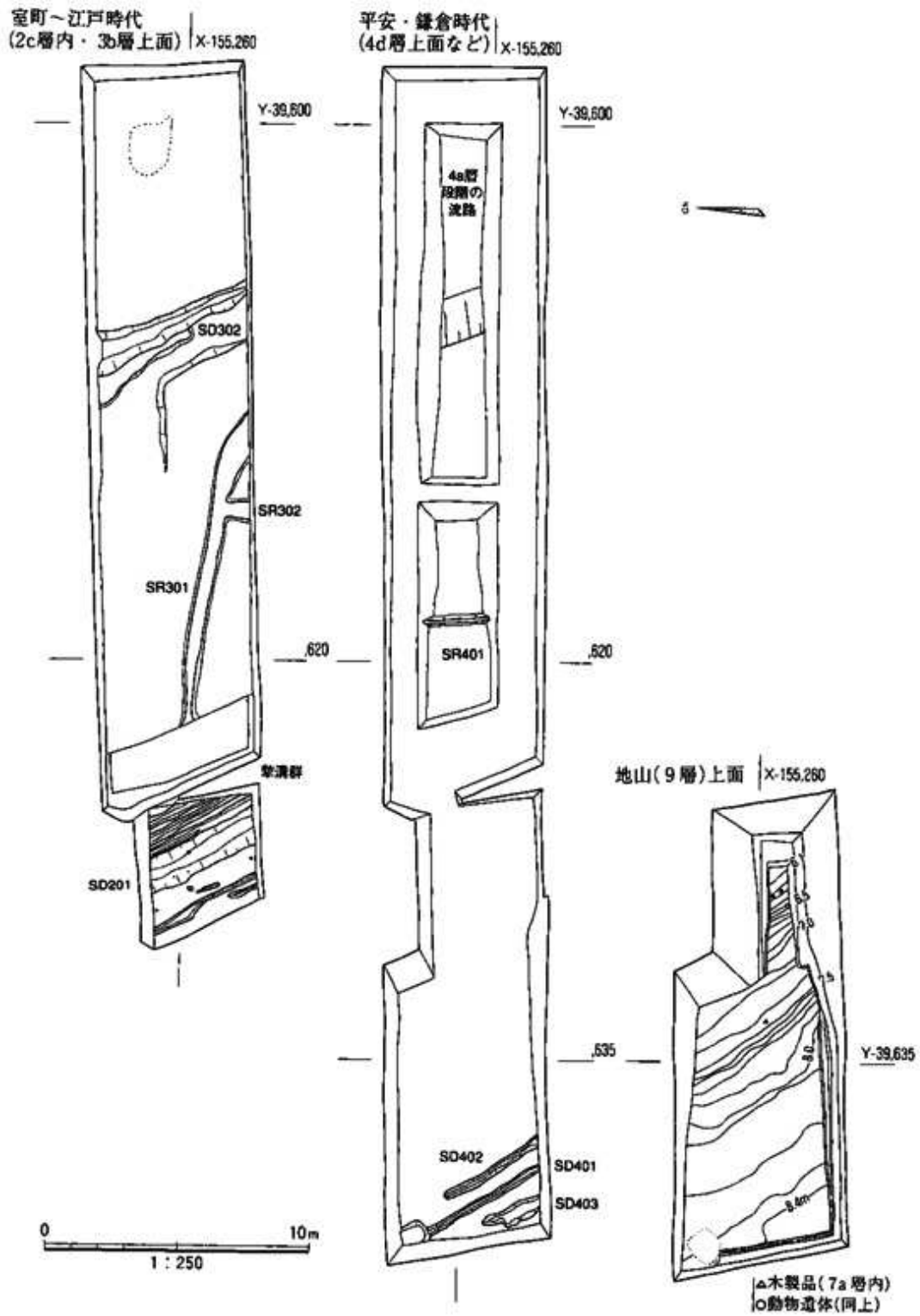

室町～江戸時代
(2c層内・3b層上面)
X-155,260
Y-39,600
SD302
SR302
SR301
,620
整溝群
SD201
平安・鎌倉時代
(4d層上面など)
X-155,260
Y-39,600
4a層段階の流路
SR401
,620
,535
SD402
SD401
SD403
地山(9層)上面
X-155,260
Y-39,635
△木製品(7a層内)
○動物遺体(同上)
0
10m
1:250

図39　遺構平面図

東区から西区東半で認められた3b(長原3)層上面の水田で、上面の標高は1・2区が8.6m、3～5区は8.9m前後あり、調査個所の西方から東方に向って緩やかに傾斜している。水田面では東区で畦畔SR301・302およびヒトや偶蹄類の足跡が、西区では攪溝群が確認された。

SR301・302は、東区西半に位置する幅0.2～0.5m、高さ0.1～0.2m前後で、断面が台形の畦畔である。畦畔で区画された水田一筆についての形状や面積などは明らかでないが、SR301は北側に畦畔が存在しないことから、水田面を南北方向に区画するための基幹になる畦畔と思われる。

水田が営まれた時期は、15世紀代の瓦質土器や瓦の細片などからみて、室町時代以後と思われる。

b．溝

SD301・302　東区東半に位置する幅0.8～1.8m、深さ0.25mの溝で、SD302は調査個所の中程で西方に流れを変えている。溝の西側に同層準の畦畔SR301・302が位置することから、前述した室町時代の水田に伴う水路と考えられる。

iii)平安・鎌倉時代(図39)

a．水田

調査個所のほぼ全域にわたって、水成層である4a層および4c層に覆われた2面の水田面が検出された。前者は4b1層準、後者は4d1層準の水田である。ともに調査範囲が狭小なため、ヒトや偶蹄類の足跡および一部で畦畔が確認された以外にさしたる遺構、遺物は検出されなかった。ここでは4d1層準の水田について記述する。

水田の作土は、含極細粒砂灰色粘土質シルトを基調としている。上面の標高は東区が8.0m前後、西区は8.4m前後あり、水田面は東区西部に位置する畦畔SR401を境に段をなして東へ低くなる。

SR401は幅0.3～0.4m、高さ0.15m前後である。正南北に近い方向であること、畦畔を境に東西の水田面に0.4m前後の段差が生じることなどから、当地区の基幹となる畦畔と考えられる。

b．溝

SD401～403(図35、図版31)　西区西端に位置する幅0.3～0.7m、深さ0.25～0.3mの、南東から北西方向の溝である。SD402・403は北端が途切れる。埋土は4d2層で、既述したような水田に伴う水路と思われる。

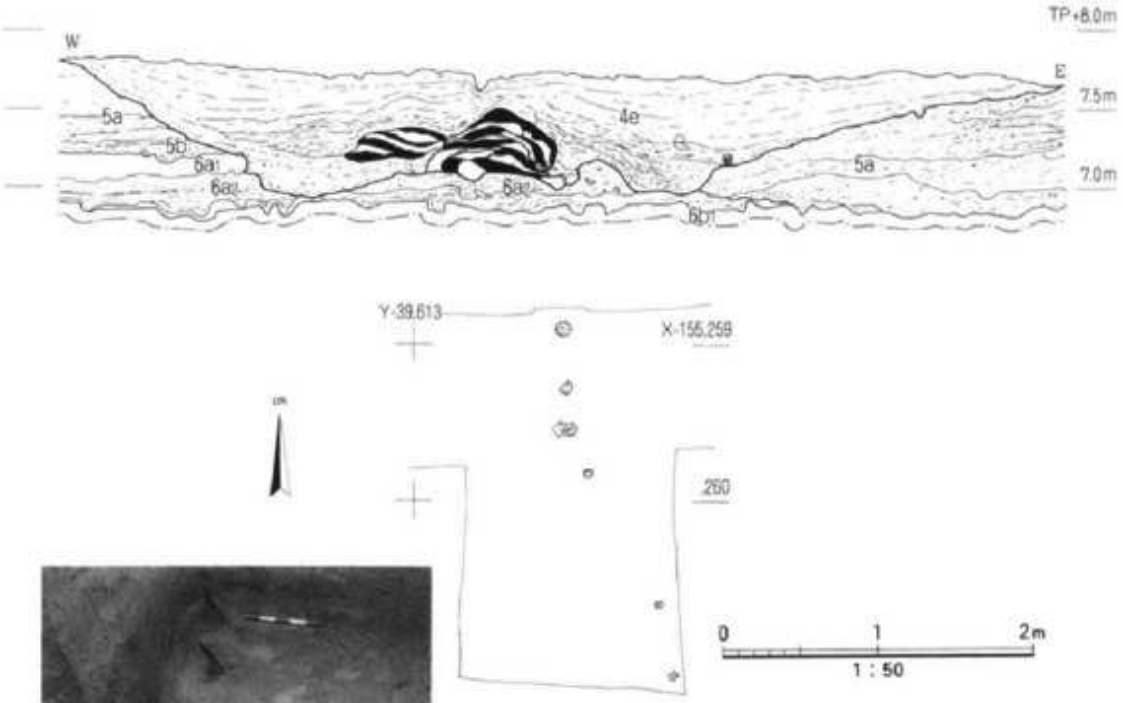


図40　SD404実測図

写真9　93－71次調査SD404
杭列検出状況(北から)

SD401から土師器**113**(図35)が出土した。口径6.0㎝、器高3.6㎝のミニチュア鍋で、口縁部は尖底の体部から短く開いており、器体の内外面をユビオサエで整えている。色調は浅黄色で、胎土中に長石粒を含む。11世紀代に属する祭祀用の土器である。

SD404(図40・41、図版10・32、写真9)　東区中央部の4d2層基底面で確認された幅約6.4m、深さ0.9m前後の南北方向の溝で、中央には幅0.8m、高さ0.4m前後の土手を築いて、2条の溝に分けている。土手は構築面上に旧表土を鱗状に盛り上げた後で、杭を0.3～0.4m間隔に打設して補強している。溝内には長原4e層準の含砂礫灰色シルト、灰色砂礫が堆積しており、層厚は最大0.9mあった。9世紀代に属する土師器や須恵器をはじめ、11世紀代の土師器・黒色土器などが出土している。本遺構は、規模は異なるものの、畝畝と呼ばれる畦畔の両側を水路とした施設の弥生時代後期に属する事例に類似しているほか、旧表土の草の生えた面を下にして積み上げる工法についても、弥生時代後期から古墳時代中期に堤防の構築に際して用いられた敷葉工法と同様なものといえる。

138・139は**SD404**の土手に伴う杭である。**138**は直径6㎝前後、残存長87.5㎝で、鉄器

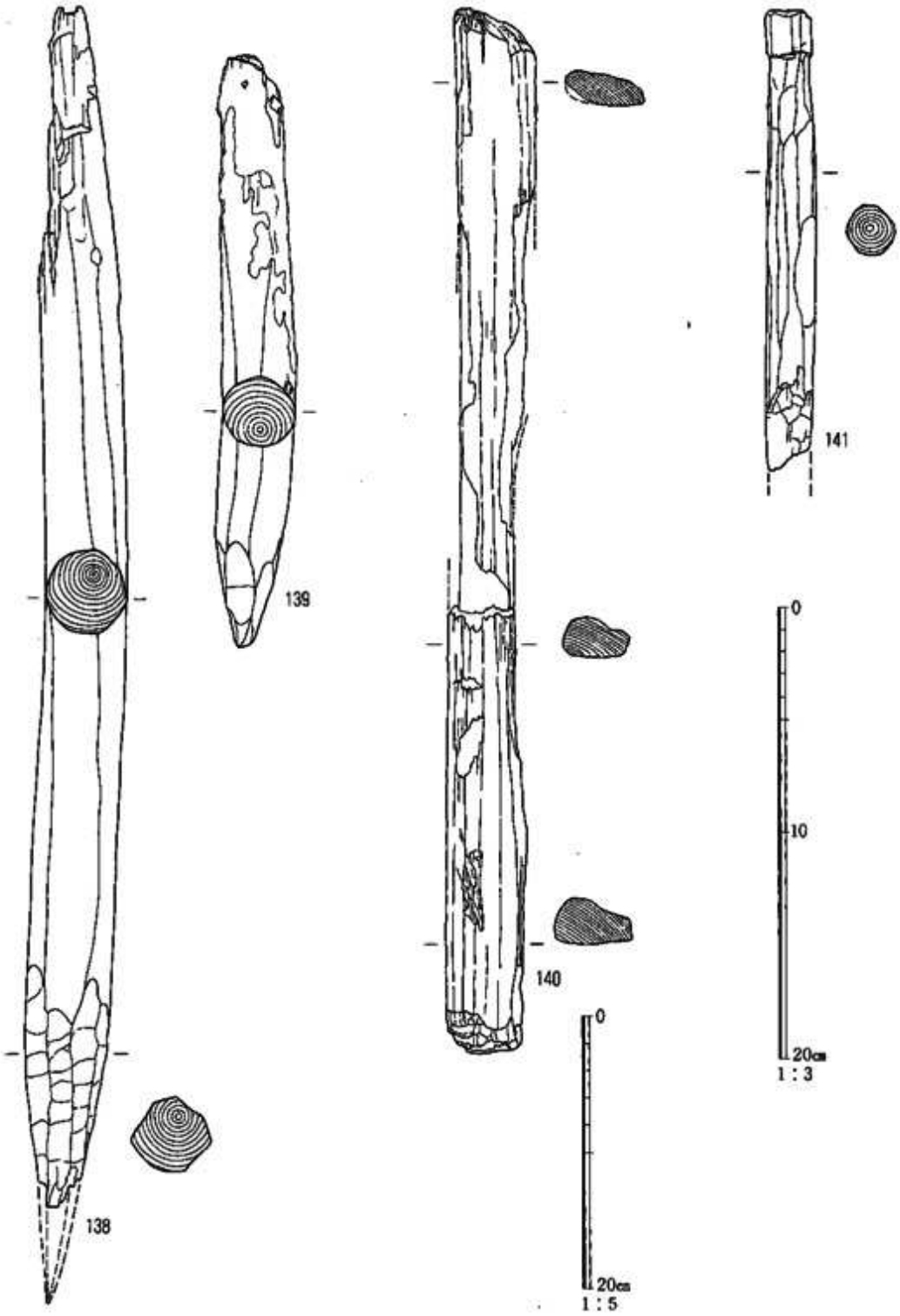


図41　木製品
SD404(138・139)、7a層(140・141)

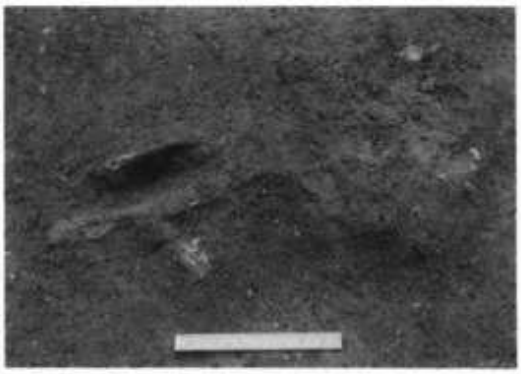


写真10 「馬池谷」動物遺体出土状況
(6b2層上面)

で材の外周の約1／3から2／3を削った後、尖端を断続的に加工する。139は直径5.5cm、残存長43.0cmで、樹皮付きの丸太材の尖端のみを鉄器で加工する。肉眼観察によれば、ともに樹種はマツ類と思われる。

iv)飛鳥時代以前(図39)

馬池谷(図版9、写真10) 西区は「馬池谷」と呼称する浅い谷地形の西斜面に当っていた。斜面は緩い傾斜をもち、上部の平坦面の標高は8.0～8.5mで、確認しえた斜面裾では約6.4mであった。谷内には下から長原7B層・同7A層・同6Bii層に相当する層準が堆積しており、低湿な環境であったと思われる。長原7A層に相当する7a層から、先述したような飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する土師器や須恵器・鉄製品・用途不明木製品が出土した。また、本層や6b2層から動物遺体としてウマあるいはウシの骨が(写真10)、植物遺体としてモモ核やウリ類・サンショウ属などの種子が多数出土している。

3)小結

今回の調査では、「馬池谷」の西斜面付近の具体的な状況を明らかにすることができた。また、「馬池谷」内に堆積した各地層を細部にわたって観察できたほか、古代～近世の水田や灌漑水路についても層位的に調査することができた。中でも、調査個所のほぼ全域で検出された長原3層層準の水田は、当地域のみならず、これまで不明瞭であった長原遺跡西部の室町時代後半期の水田の実態や景観を復元する上での基礎的な資料となる。また、長原6～7層段階まで明瞭であった「馬池谷」は、奈良時代末の洪水層である長原5層によって大半が埋没し、長原4A層準の流路筋に当る調査区東端部を除いてほぼ平坦な面をなしており、ここでは時期を追って水田が営まれていたようである。

一方、「馬池谷」西斜面に堆積した長原7A層からは、6世紀末から7世紀初頭にかけての土器類をはじめ、鉄製品や木製品など当時の生活用具が出土したほか、上位層でも奈良～平安時代の瓦類が出土したことは注目される。これらは周辺で実施されたこれまでの調査成果とも一致し、「馬池谷」の西方に飛鳥～平安時代の集落や寺院跡が存在することを示しており、今後の調査が期待される。

第５節　NG93－82次調査

１)層序とその遺物

ｉ)層序(図42、図版11、表６)

本調査地の層序は約30層に細別され、大半が沖積層上部層Ⅰからなる。これらはほぼ全域に見られるグループと、「馬池谷」の支谷である「小谷」に主として見られるグループに大別される。

第１のグループには１～4i層があり、長原１～４層に相当する作土と水成層である。これらの多くは東側、すなわち「馬池谷」中心部に近づくにつれて層厚を増し、また層の数も増加する傾向にある。東接する93－71次調査地と連続して見ると、この傾向をさらに顕著にうかがうことができる。ただし、3b層と4b層は西端にのみ分布し、これらは「馬池谷」の肩の方向に平行する段の西側の高まりをなしている。また、北側で層厚を増す4d・4e層は、「馬池谷」の方向に直交するような方向をもつ溝状の水田の作土に当る。

第２のグループには５～7f層があり、長原５～7B層に相当する。作土は6a層と6c層があり、これ以下はすべて自然堆積層である。7f層は谷地形の底にわずかに分布しただけで、調査範囲の制約で十分認識できたとはいいがたいが、遺物の年代が５世紀代に限定できることから、7e層と区別した。これらは東隣の93－71次調査地では「馬池谷」内に分布する。

地山に当る８層は２層に細分され、上部は含砂黄灰色粘土、下部は黄褐色シルト質砂礫で風化礫を多く含む。前者は調査区の東端付近以東にのみ分布し、長原14～16Bii層に相当する。後者は長原16Biii層以下に相当する。

ii)各層の出土遺物(図43・47、図版33・34)

次に、各層から出土した遺物を記載する。ただし、「小谷」内に堆積した7c～7f層の出土遺物は次項で述べる。

石器遺物は遊離資料が２点出土した(図42)。143は3c層から出土した平面形が縦に長い三角形となる石匙である。素材の剥片は原面上打面で、柄部の先端に原面が残っている。体部の３辺はそれぞれ直線的に仕上げられているが、刃部は下辺と長い方の側縁であると考えられる。柄部の抉りは浅い。重さは7.05ｇである。縄文時代のものである。142は4c層から出土した凹基無茎式石鏃である。Ｂ－２類に相当するが、左右の逆刺の形は対称的でない。調整は全面に及んでおり、素材の剥片の面は残っていない。切先角は43°で、重さ

表6　93－82次調査地の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴
NG1	1層	含細礫オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂	15			作土
NG2	2a層	含細礫にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質細粒砂	12	▼SD201,整溝	近世陶磁器	作土
	2b層	含細礫黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂	6	▼小溝群	近世陶磁器	作土
	2c層	にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルト	6			作土
	2d層	灰白色(10YR7/1)極細粒砂	2			水成
	2e層	含細礫黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト	10	▼SD202・203,SX201,整溝群　整溝	近世陶磁器	作土
NG3	3a層	含細礫にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粗粒砂	10	▼SD301・302,SX301	瓦器・瓦質土器・瓦	作土
	3b層	含粗粒砂黄褐色(2.5Y5/4)粘土質シルト	8		瓦質土器	作土
	3c層	含粗粒砂浅黄色(2.5Y7/3)粘土質シルト	8	▼SX302	瓦質土器	作土
NG4A	4a層	灰色(7.5Y6/1)含シルト砂礫	8			水成
NG4Bi	4b層	含粗粒砂褐色(10YR4/4)粘土質シルト	18		瓦器	作土
	4c層	含細礫灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト	15	▼小溝群,SD401・402	瓦器・土錘	作土
	4d層	含粗粒砂灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト	18	▲SX401	瓦器	作土
	4e層	含砂礫灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルト	16	▼SX402	瓦器	作土
NG4Bii	4f層	黄褐色シルト質砂	15			水成
	4g層	灰色細粗粒砂質シルト	7			水成
NG4Biii	4h層	含細礫にぶい黄灰色(10YR6/3)砂質シルト	25		土師器・黒色土器	作土
	4i層	含砂黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土	12	▼SX403		作土
NG5	5層	黄灰色含シルト粗粒砂	≦15			水成
NG6	6a層	含細礫黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト	15	▼SX604　SD604　SX605　SD601～603	土師器・須恵器・埴輪・土錘	作土
	6b層	黄褐色(10YR5/6)粗粒砂	6			水成
	6c層	含砂褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト～シルト質中粒砂	25	▼SX604　SX601～603	土師器	作土
	6d層	灰白色(10YR2/1)粗粒砂～細礫	≦20	SX701		水成
NG7A	7a層	含細礫にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト	10			暗色帯
	7b層	含細礫暗褐色(10YR3/4)砂質シルト～粘土質シルト	16	▼SD701		暗色帯
	7c層	含細礫灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト	18		土師器・須恵器	暗色帯
	7d層	含粗粒砂褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土	22		土師器・須恵器	水成
	7e層	含シルト質粘土灰黄褐(10YR5/2)～オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂	≦35		土師器・須恵器・木製品	水成
NG7B	7f層	含砂暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト	10	小谷	土師器(古墳中期)	水成?
NG14-15	8層	黄灰色含砂粘土～黄褐色(2.5Y5/6)シルト質砂礫	≧100			

▲：上面検出遺構　▽：下面検出遺構　↓：基底面検出遺構

は1.22ｇである。縄文時代のものである。

156(図47)は6a層から出土した須恵質の管状土錘である。長さ5.3cm、直径1.8cm、孔径0.5cm、重さ17.0ｇである。長原遺跡では須恵質のものは稀である。

2)遺構とその遺物

i)江戸時代(図44)

a．2a層下面検出遺構

SD201　幅0.3m、深さ0.15mの溝で、用水路と考えられる。その位置は現代の用水路と重複している。

撹溝　全域で検出した南東から北西方向の小溝群である。

b．2b層下面検出遺構

小溝群　全域で南東から北西方向の小溝群を検出した。各溝の幅は0.25m、深さ0.15mで一定し、幅のわりに深い。また、埋土には8層の偽礫が多く含まれ、撹溝と

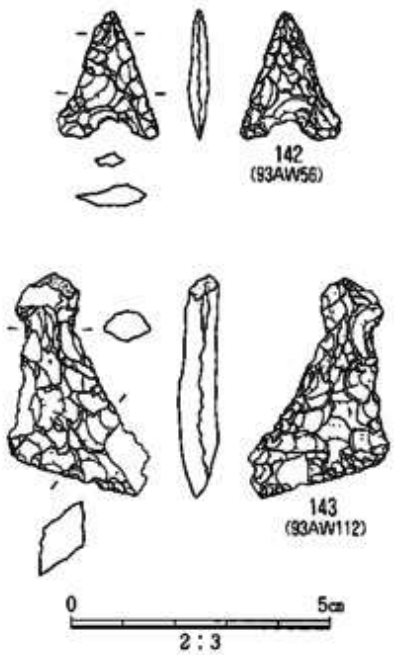


図43　各層出土の石器遺物
3c層(143)、4c層(142)

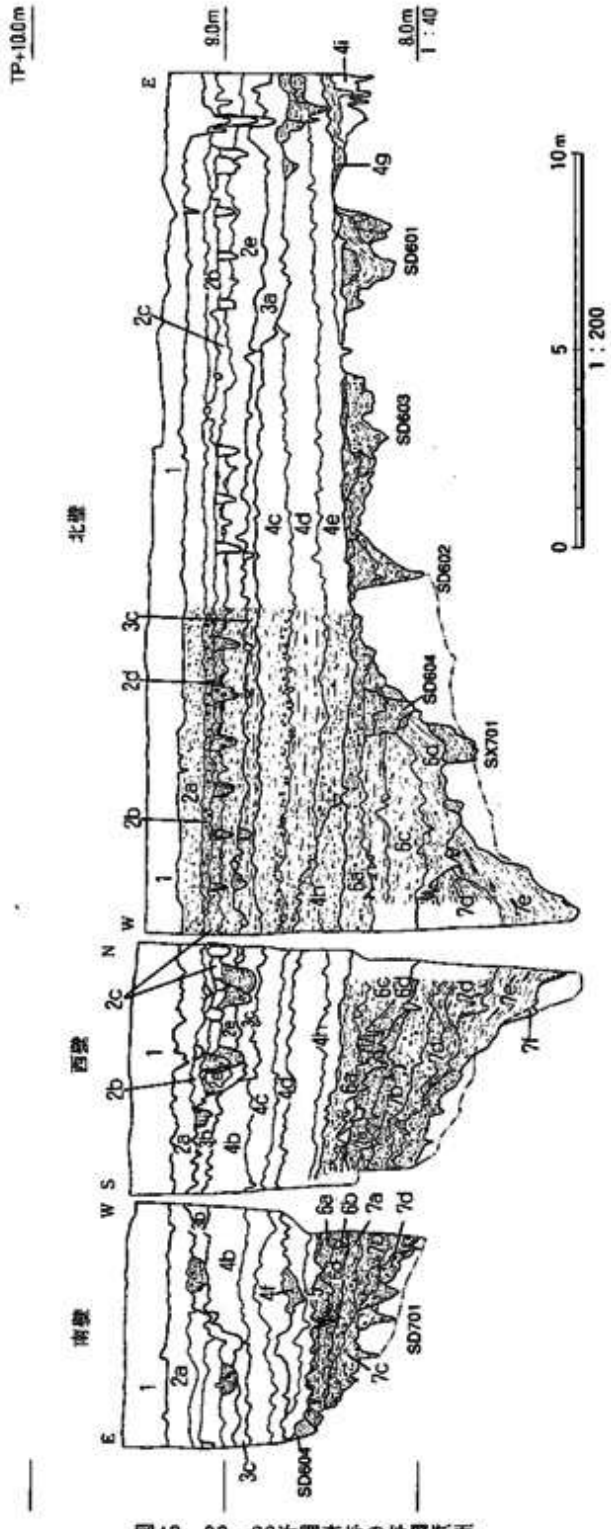


図42　93－82次調査地の地層断面

したものとは異なる。各溝の間隔は約1.2mで一定である。畠などでの植物栽培に伴うものかもしれない。

c．2e層下面・基底面検出遺構

SD202・203　段SX201に平行する2条の溝で、区画や用水に係わるものと考えられる。

犂溝群　SD202・203に切られ、南南東から北北西方向のものと東西方向のものに大別される。前者は後者よりも新しい。さらに、2e層基底面ではこれらとは別方位の南北方向の犂溝群も検出された。

SX201　調査区西南端に南西から北東に下がる段で、段差は0.3mある。3c層段階の段SX302の位置を踏襲しており、2b層段階まで残る。

ii)室町時代(図44、図版13)

SD301・302　3a層下面で検出した現代用水路の位置と重複する溝で、幅約0.5m、深さ0.1mである。切合い関係からみて、SD301の方が新しい。また、SD302が埋った後、竹製の杭が溝に平行して南北方向に3本打込まれていた。

SX301　東部の3a層下面で検出した南南東から北北西方向の段である。東側が西側よりも低く、段差は0.2mある。

SX302　西南端の3c層下面で検出した南西から北東方向の段で、段差は0.2mある。

iii)鎌倉時代(図44)

SD401・402(図47、図版34)　西部の4c層下面で検出した南東から北西方向の溝である。両者とも幅約0.5m、深さ0.05mである。SX302に近い位置で、しかも同方向であるので、区画に係わるものかもしれない。SD402からは土師質の管状土錘155(図47)が出土した。

155は残存長3.4cm、直径1.2cm、孔径0.4cm、重さ5.2gである。

このほかにも4c層下面では東西方向の小溝群が検出された。これらはSD401・402よりも小規模で、犂溝の可能性がある。

SX401　東端の4d層上面において断面観察時に確認した段である。東側が西側よりも低く、段差は0.1mある。この西側では、段に平行する小溝を3条検出した。

SX402　調査区北半の4d・4e層下面で検出した西南西から東南東方向に延びる落込みである。調査区にはその南肩と西肩がかかっていた。下端付近には落込みと同方向の溝が断続的に認められた。埋土が4d・4e層からなる作土で、最下部には地山のシルト質砂礫層を巻上げたような状態も観察された。本遺構は周囲よりも一段低くなった水田と考えられ、その方向は「馬池谷」の方向と直交するものである。

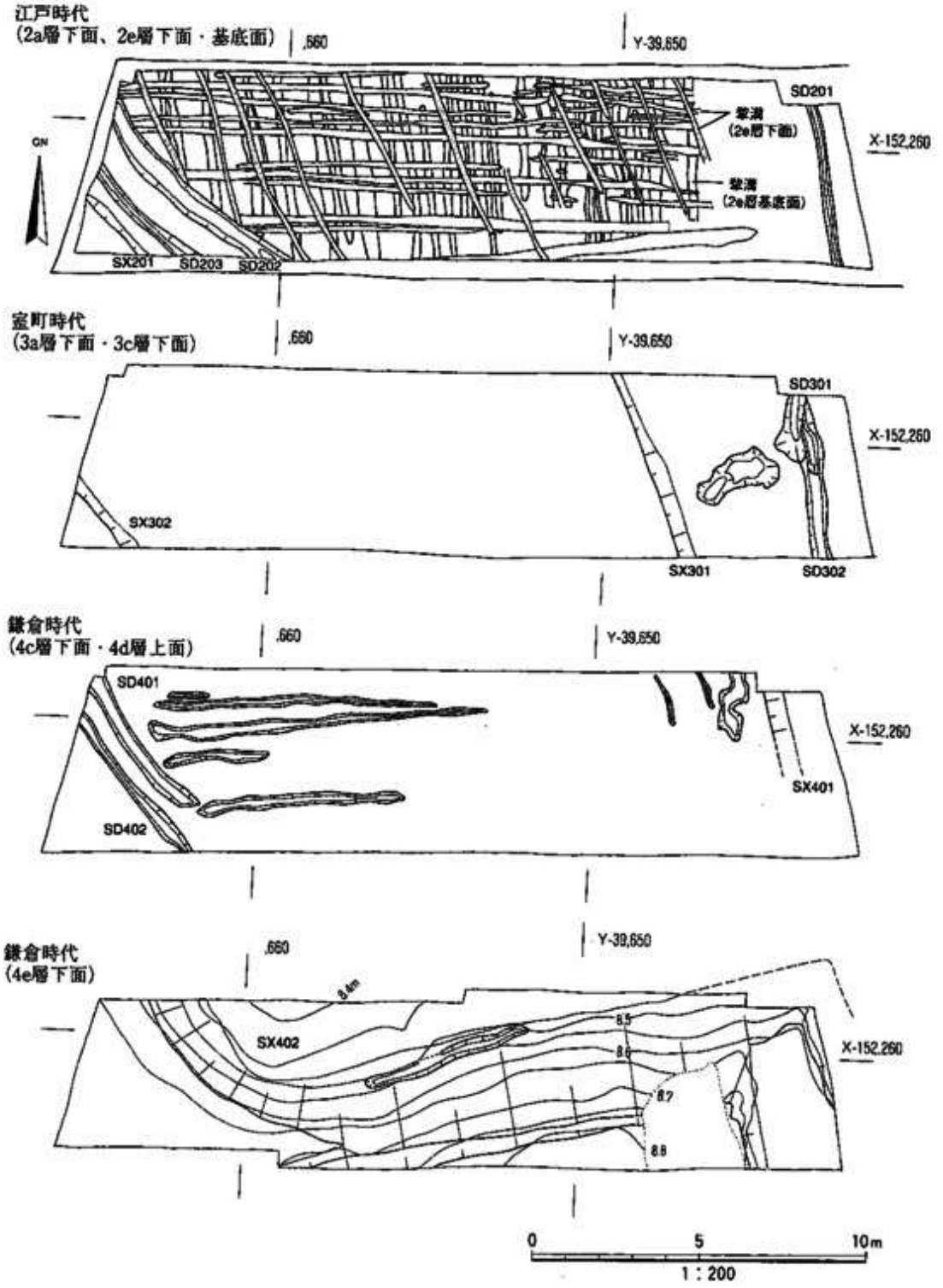


図44　中世・近世の遺構平面図

iv)平安時代後期(図45)

SX403　東端の4i層下面で検出した段である。東側が西側よりも低く、段差は0.1mある。

v)飛鳥・奈良時代(図45、図版12・13)

SD601(図46)　8層上位の4e層基底面で検出した南北方向の溝である。幅約2m、深さ0.25mで、西側は2段に掘られている。土師器・須恵器の細片が出土した。

SD602・603(図46)　これらもSD601と同一面で検出した溝である。平面的に十分に認識することができなかったが、断面での切合い関係から判断して前者が古いと思われる。SD602は南北方向で、幅約2m、深さ約0.4mである。SD603はやや不定形であるが、その方向は後述する「小谷」の肩に平行している。双方から飛鳥・奈良時代に属する土師器・須恵器の細片が出土した。

SD604(図46、図版13)　第6a層の基底面で検出した南北方向の溝である。幅約1.5m、深さ約0.5mで、部分的に深い所が見られた。奈良時代に属する土師器の細片が出土した。

SX601～603(図46、図版13)　西部の6c層基底面で検出した落込みで、「小谷」の肩に沿って近接して並ぶ。直径0.6～0.9m、深さ約0.5mで、平面形は円形である。埋土の特徴は下半部に粗い砂礫からなる水成層が堆積していることである。機能は不明である。SX602から飛鳥時代に属する土師器の細片が出土した。

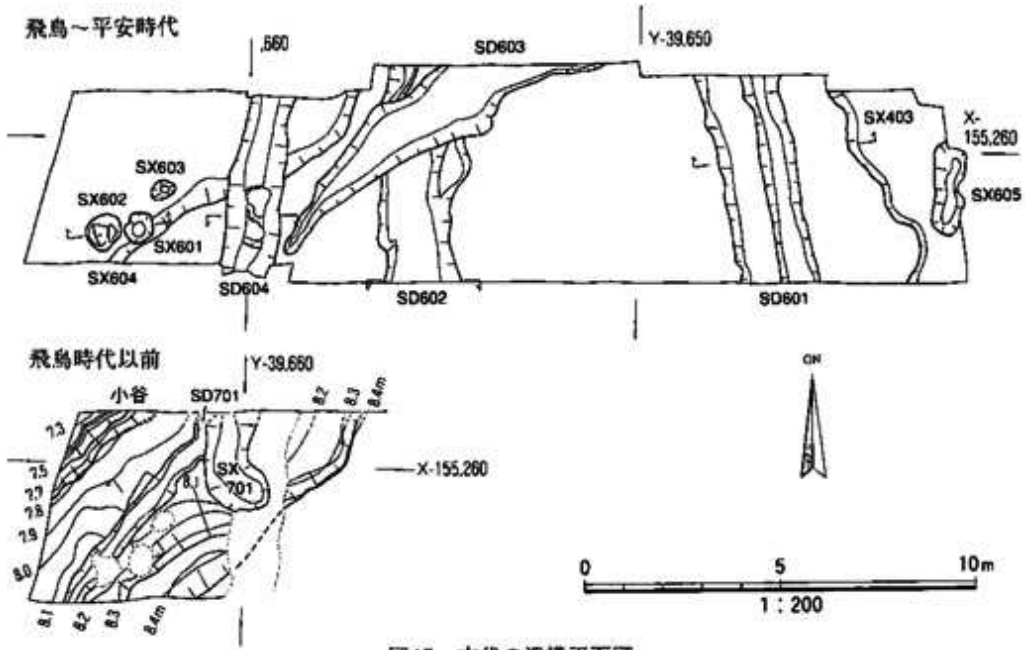


図45　古代の遺構平面図

SX604　西部の6a層下面および6c層下面で検出した段である。後述する「小谷」の肩とほぼ同位置にあり、谷の大半が埋った頃に耕地化した際の痕跡と考えられる。

SX605　東端の8層上位の4i層基底面で検出した落込みである。平面形は長楕円形を呈し、長径約2.5m、短径約0.8mで、深さは0.3mである。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、層相からみて当該期の遺構と判断した。

vi)飛鳥時代以前(図45、図版11・12)

SD701(図46)　「小谷」内に堆積した7b層の下面で検出した南西から北東方向の溝である。谷斜面のコンターラインに沿うように掘削されている。幅0.5m、深さ0.1mで、埋土には炭化材が多く含まれる。

SX701　SD701を切る不定形な落込みで、7a層か7b層の段階に形成されたものと推測される。シルト質粘土からなるラミナを介在する粗粒砂で埋積している。

小谷(図47〜49、図版11・12・33・34)　西部で検出した谷地形である。調査前までその存在が知られていなかったものである。明治21年の土地台帳をもとにして作製された地籍図[長原遺跡調査会1978]の当調査地に当る場所に字「小谷」が見られることから(図3、4頁)、「小谷」と命名する。本調査ではその南東斜面の一部を検出したにすぎず、大部分が調査区外である。深さは1.5m以上であった。傾斜は比較的緩やかであるが、TP+7.8m付近から階段状をなして落込んでいる。

谷の埋土を表6に基づいて見ると、最下層に堆積していたのは7f層で、調査区西壁際に

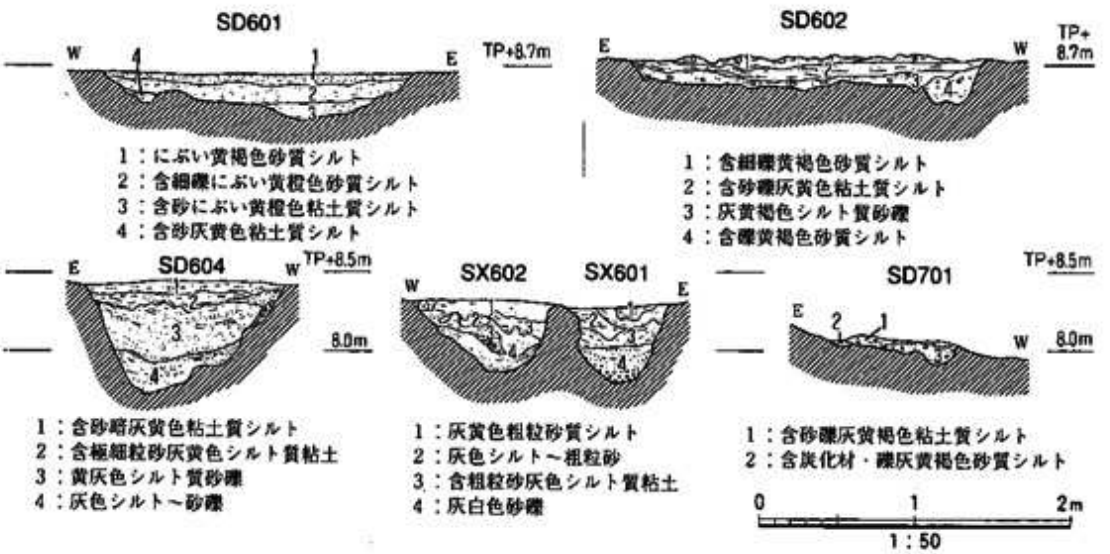


図46　古墳〜奈良時代の遺構断面図

おいて小範囲で残存していたに過ぎない。本層から５世紀代に属する土師器の甕が出土した。北接する95－14次調査地では、谷の底部で古墳時代中期の溝が確認されており、本層もそのような遺構の埋土かもしれない。7e層はシルト質粘土から粗粒砂を主とする水成層で、下位層を大きく削り込んでいた。本層中からは飛鳥Ⅰに属する多くの遺物が出土した。これらはさほど磨滅しておらず、近くから投棄されたようなものと思われる。また、本層上面ではほぼ完形に復元できる須恵器甕165(図49)が出土した(図版12)。7d層はシルト質粘土からなる水成層で、本層からも飛鳥Ⅰに属する遺物が比較的まとまって出土した。7a

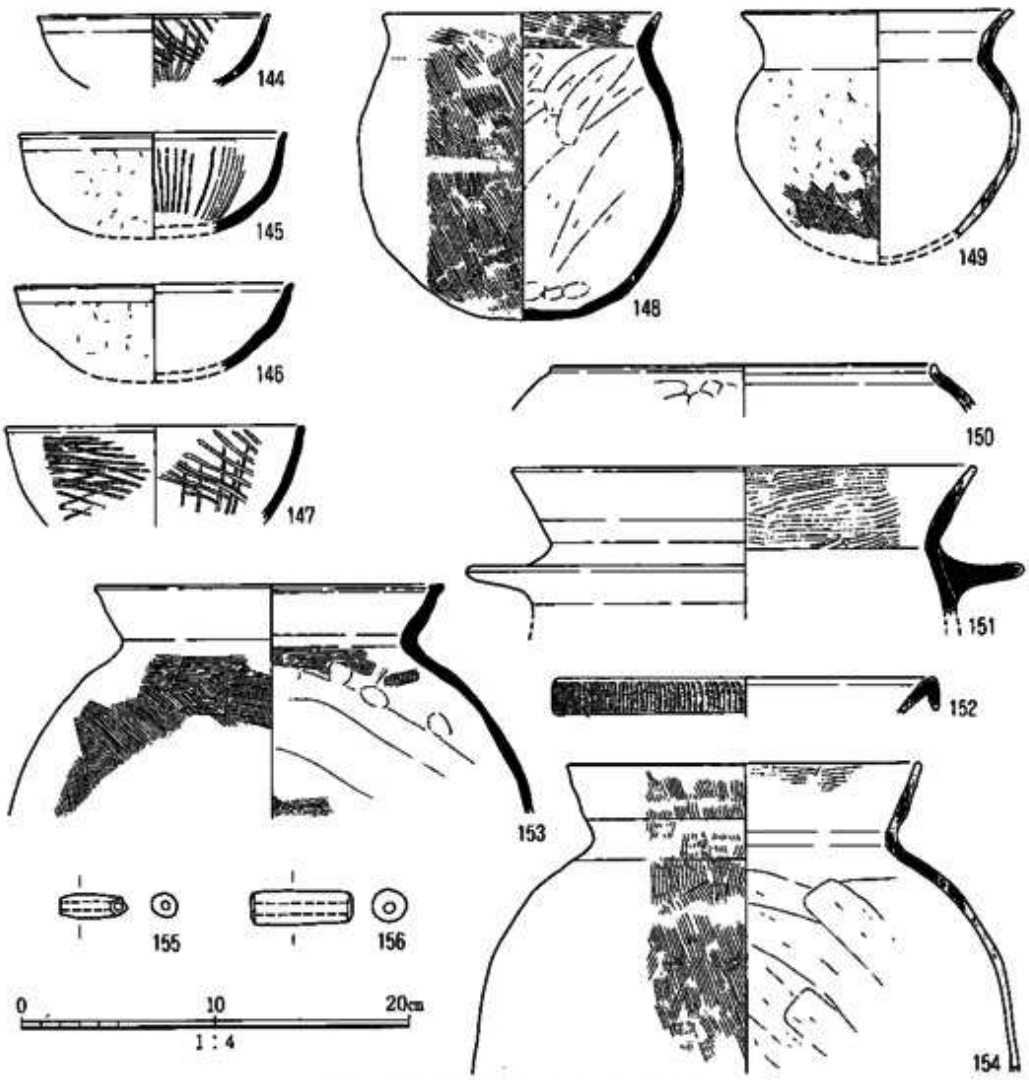


図47　「小谷」など出土の土器・土製品
SD402(155)、6a層(156)、7e層(144～152)、7f層(153・154)

〜7c層は水成層の特徴を部分的に有するが、土壌化しているので作土層の可能性もある。6c層より上位には明瞭な作土が堆積し、水田として利用されたことが明らかである。

遺物は7c〜7f層から出土したものを図示した(図47〜49)。

159は7c層出土遺物である。口径が11.0cmに復元される須恵器杯で、立上がりは短い。TK217型式の古い段階に相当する。

164は7d層出土遺物である。口径が21.0cmの須恵器甕で、体部内面には同心円状の当て具痕が残り、外面にはカキメが施されている。

144〜152・157・158・160〜163・165は7e層出土遺物である。

土師器には杯144〜147、甕148・149、鉢150、羽釜151がある。杯の口径は11.8〜15.2cmで、比較的深いものが多い。144・145・147の内面には放射状暗文が施されており、144・147では2段に施文されている。146は口縁部の内外面がヨコナデ調整で、体部外面にはユビオサエが残る。甕148は口縁部がヨコナデ、体部外面は斜めハケ、内面は斜め方向のナデで調整される。口縁部内面にはヨコハケが残る。体部の外面に煤が付着している。胎土中に角閃石粒を含む。149は底部付近に斜めハケを残すほかはユビオサエとヨコナデで調整されており、内面には炭化物が付着している。150は口径が19.6cmに復元された鉢である。151は長胴形の体部に外反する口縁部が付く羽釜で、頸部の直下に鍔が付く。口縁部

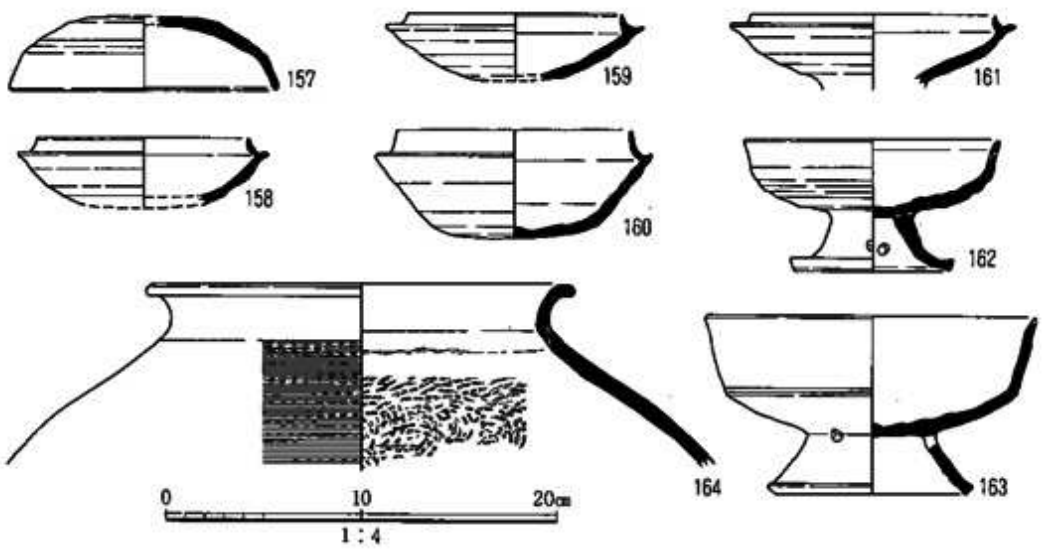


図48　「小谷」出土の須恵器(1)
7c層(159)、7d層(164)、7e層(157・158・160〜163)

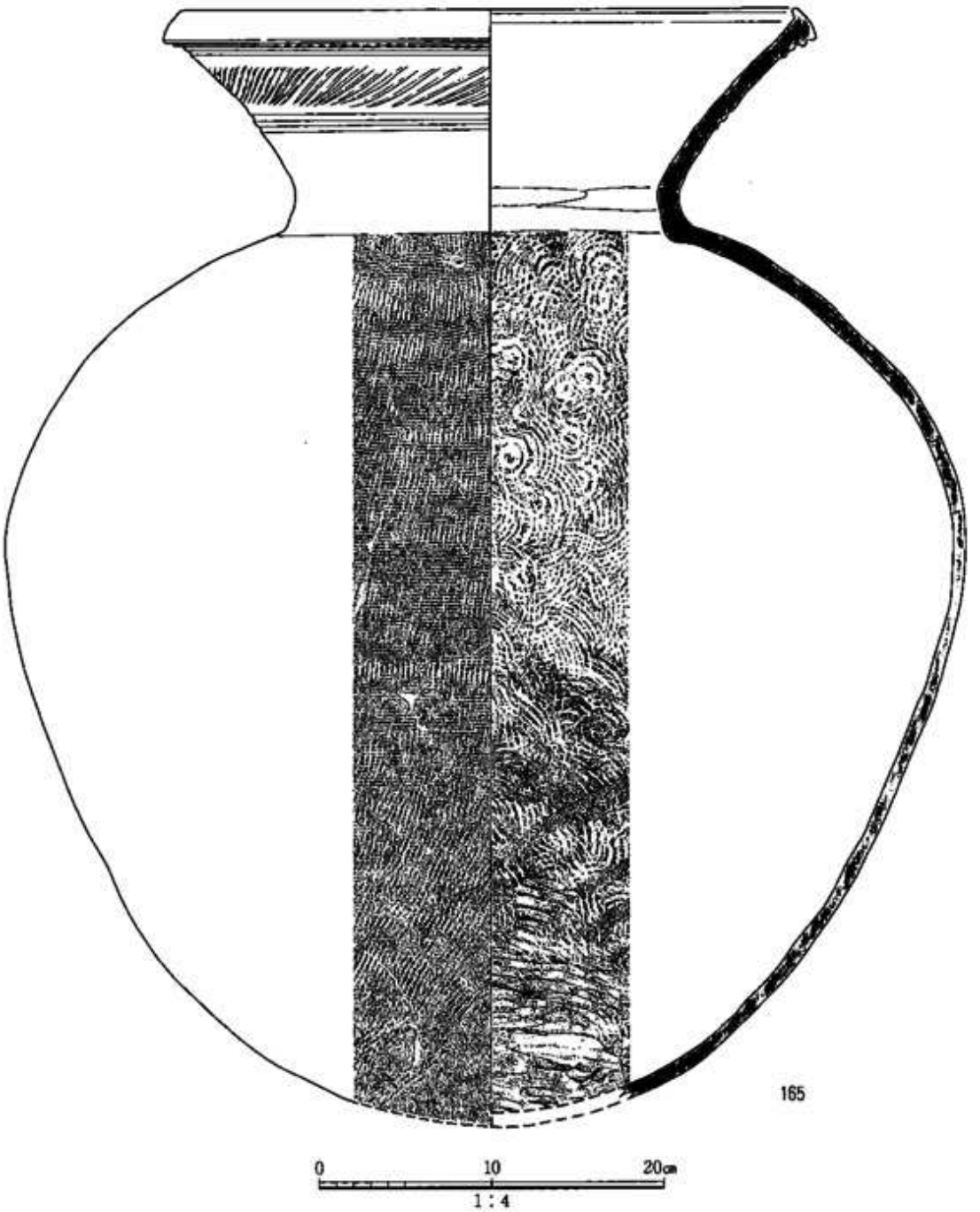


図49 「小谷」出土の須恵器(2)
7e層(165)

内面をヨコハケで整形した後、全体をヨコナデで調整する。胎土中に角閃石や雲母粒を多く含む。

以上の土師器は飛鳥Ⅰに属するものと思われる。

須恵器には杯蓋157、杯身158・160、高杯161・162、台付椀163、甕165がある。157は口径13.6cmで、天井部の広範囲がヘラケズリで調整されている。158は口径10.8cmに復元され、立上がりは短く内傾する。外面の約2／3をヘラケズリで調整する。160は口径12.0cm、器高5.4cmで、立上がりは約1.5cmである。外面の2／3以上がヘラケズリで調整されている。161は口径12.5cmの長脚の有蓋高杯で、立上がりは短く内傾し、外面の2／3以上がヘラケズリで調整されている。162は口径13.0cmの短脚の高杯で、脚部には2方向に円形のスカシ孔がある。163は口径16.8cmで、3方に円形スカシ孔を穿った台付椀である。口縁部と体部の境に凹線が1条巡る。165は口径35.6cm、残存高62.9cmの甕で、外反する口縁部をもつ。口縁部には口唇部直下に3条、中位に2条の凹線が巡る。その間には斜め方向のヘラ描きの刺突文が施されている。体部外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具の痕があり、外面の上半はカキメ、下半は軽いナデで仕上げている。

以上の須恵器は、160がTK10型式～MT85型式、ほかはTK209型式に属すると思われる。

これらのほか、畿内第Ⅳ様式に属する広口壺の破片152も出土した。胎土中に角閃石や雲母粒を多く含む。

153・154は7f層から出土した土師器甕である。153は口径17.9cmで、体部が球形に近く、口縁端部に内傾する面を作る。口縁部はヨコナデで調整されている。体部は外面がハケ整形、内面はヨコハケの後、ユビオサエやナデで調整されている。布留式の甕の系譜を引くものと思われる。154は口径18.0cmで、直口ぎみに外傾する口縁部をもち、体部はやや長胴である。口縁部はヨコナデで調整されており、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが残る。体部は外面がタテハケ、内面が斜め方向のヘラケズリ調整である。体部外面に煤が付着している。これらは5世紀後半に属するものと思われる。

また、動物遺体としてマダイ前頭骨の破片が1点、植物遺体としてモモの核が多数7e層から見つかっている。前者は強く被熱して灰白色を呈するもので、体長が30～40cmほどの個体のものと思われる。わずか1点ではあるが、飛鳥時代の水産物流通や消費を考える上での貴重な資料となろう。

3)小結

本調査では「馬池谷」西側において旧地形や集落の存在に関して、新たな知見を得ることができた。

まず、「小谷」は「馬池谷」に取付く支谷と考えられた。「馬池谷」の東側ではこのような支谷は数個所発見されているが、西側ではこれが初めてである。今回は東側の肩を検出し、北接する95－14次調査では西肩が見つかっている。これらを総合すると、開口部での幅は12m前後と考えられる。

次に、谷地形を埋積した地層中から出土した多量の土器は、同時期の集落が付近に存在した可能性を示唆するものといえる。土器の時期は古墳時代中期と飛鳥Ⅰに分かれ、後者が多かった。これまで、飛鳥Ⅰの段階に属する集落は南約200mの位置で行われた89－67次調査で知られていたが[大阪市文化財協会1997a]、95～96年度に行われた区画整理事業に伴う調査(95－13・41・76、96－76次)では、本調査地南側のさらに近い場所にも、当該期の集落に関連する遺構が広く分布していることが判明している。一方、古墳時代中期の遺構は南側では稀薄で、北側に拡がることが95－14次調査において確認されている。

このように、「小谷」を挟んで集落の展開が異なっていたことがうかがわれ、単なる自然地形の検出にとどまらない成果をもたらしたといえる。

第Ⅲ章　長原遺跡西南地区・南地区の調査結果

第1節　NG93－6・7次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図50・56、図版17、表7)

現代作土以下の層序は下表のとおりであった。1a・1b両層が調査区全域に分布するほかは、一ケ塚古墳の周濠から外側の範囲に分布していた。1～3層は調査区西端から西に向って層厚を増しており、この付近が「馬池谷」の東肩に相当し、谷に向って下っていくためと

表7　93－6・7次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG1	1a層	現代作土	ave.10			作土
	1b層	オリーブ黄色(5Y6/3)極粗粒砂質シルト	ave.10			床土?
NG2	2層	にぶい黄色(2.5Y6/4)極粗粒砂質シルト	ave.12	SD201,SK201	近世陶磁器	作土
NG2・3	3層	明黄褐色(10YR6/6)極粗粒砂質シルト	ave.15	▼SK304 SE301,SK301～303		作土
NG4B	4層	明黄褐色(2.5Y6/8)細粒砂質シルト	ave.8		瓦器	作土
	5層	黄褐色(2.5Y5/3)含極粗粒砂細粒砂質シルト	ave.20		土師器・瓦器・ウマorウシ骨	作土
	6層	含細礫褐色(10YR4/4)細粒砂質～粘土質シルト	ave.18		土師器・黒色土器・瓦器	作土
NG4Biii	7a層	含極粗粒砂黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト	ave.15		土師器・黒色土器・瓦器	作土
	7b層	含極粗粒砂褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト	ave.20	SD401	土師器・須恵器	作土,下位に極細粒砂偽礫
NG6Ai	8a層	含極粗粒砂明黄褐色(10YR6/8)シルト質粘土	ave.8			作土
	8b層	含細礫暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質粘土	ave.15			作土
NG6Aii	8c層	浅黄色(2.5Y7/4)極粗粒砂	ave.5			水成
NG6B	9a層	含極粗粒砂灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土	ave.5		土師器	作土
	9b層	褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト	ave.5	SD601		作土
NG7B?	10a層	含炭化物黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	ave.6		須恵器・埴輪	水成
	10b層	含炭化物黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	ave.5			水成
NG7B	11層	灰白色(2.5Y7/1)シルト質粘土～シルト質極粗粒砂	ave.15	一ケ塚古墳	埴輪・木製品	水成
NG14	12層	にぶい黄橙色(10YR7/2)含砂シルト質粘土	ave.15	▲乾痕		
NG15	13層	黄褐色(10YR5/8)砂礫～緑灰色(10GY6/1)シルト質粘土	≧180			水成

▲：上面検出遺構　▼：下面検出遺構　↓：基底面検出遺構

思われる。4層以下の層準は基本的には、周濠内に堆積していた。

周濠内では、長原6B層に対比される9b層より上位には作土層が認められ、これらは層厚の大半を占めていた。各作土の下面では、本来の墳丘斜面を段状に加工した痕跡が認められ、すべてを取り除くと階段状を呈していた。このことから各時代の耕作時に墳丘を削って耕地を拡大していったようすがうかがわれる。特に、8b・7a・5層の段階で顕著であったと思われる。なお、7b層の下部に多く含まれていた極細粒砂の偽礫は、水成層の長原5A層に由来するものと推測される。10a・10b層は水成層で、微細な炭化物が多く包含され、上面は上位層の影響で凹凸が著しい。TK208型式の須恵器や窯窯焼成の埴輪など一ケ塚古墳よりも新しい遺物が含まれる。一ケ塚古墳に由来する遺物を単純に含むのは11層のみである。本層は一ケ塚古墳の周濠両端付近によく残っており、周濠中央で卓越するシルト質粘土が、両裾に向うにつれて漸移的に砂礫を多く含みながら側方変化していた。

いわゆる地山は12層(長原14層)と13層(長原15層)からなり、いずれも東から西側へ傾斜している。13層中にはラミナが発達した砂礫層からなる部分が見られ、下方のシルト質粘土層を侵食したようすがうかがわれた。

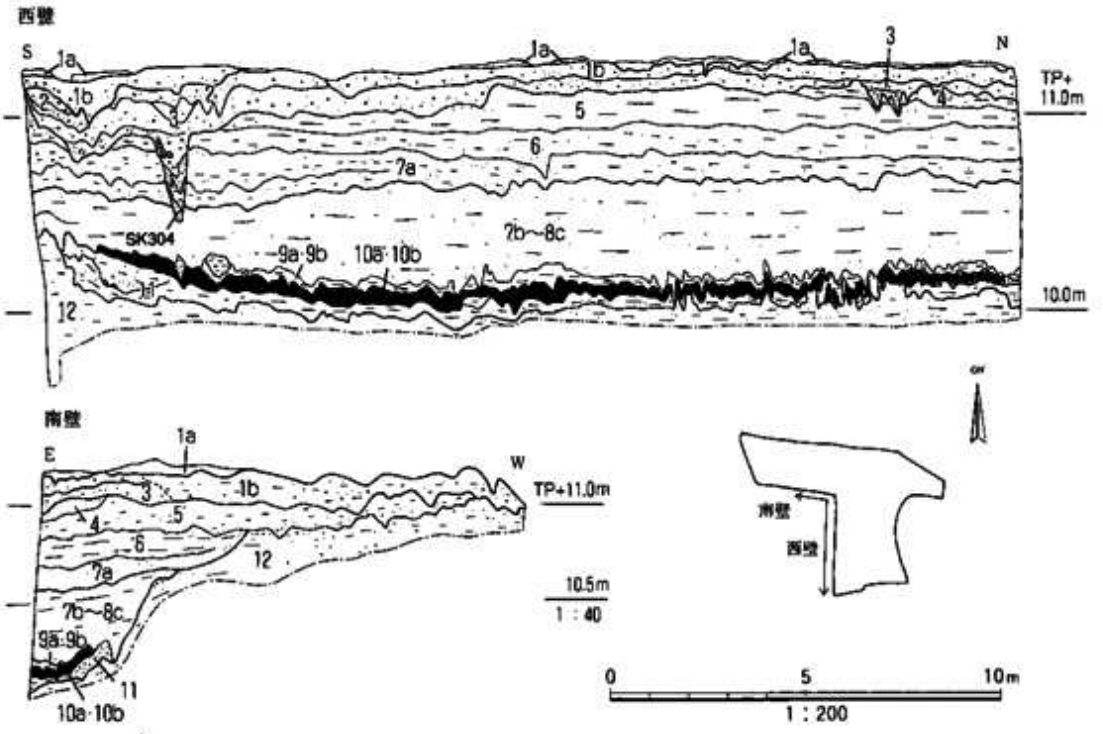


図50　93－6・7次調査地の地層断面

ii)各層の出土遺物(図51～53、図版35・36)

各層からは埴輪をはじめとする多くの遺物が出土したが、型式学的にみて一ケ塚古墳に伴うと思われる遺物も継続的な耕作が原因して様々な層準から見つかっている。しかしながら、これらを層準ごとに分けて記載してしまうと、古墳の出土遺物としてのまとまりが欠けてしまうので、本項ではこれ以外について述べ、一ケ塚古墳に伴うと思われる遺物は次項でまとめて記載する。

a．土器(図51、図版35)

166・167・173・180は5層から出土した。166・167は土師器小皿で、口径は7.9cm、8.6cmである。ユビオサエの後、ヨコナデで調整している。173は瓦器小皿で、平行暗文を底部の内面に施した後、粗いヘラミガキで調整されている。180は高台が退化した瓦器椀である。外面は粗いユビオサエで調整される。これらは13世紀前半頃のものであろう。

170・174・177・181・182は5・6層から出土した。170は口径14.6cmの土師器皿である。口縁部は2段にヨコナデで調整している。174は口径7.7cmの瓦器小皿である。177・181・182は瓦器椀である。177は口径15.8cmの口縁部の破片で、外面には粗い横方向のヘラミガキが施されている。ほかは底部の破片で、高台は断面三角形を呈する。181の底部内面には格子状暗文が施されている。これらは12世紀後半頃のものであろう。

168・172・175・176・178・179・183～185・187は6層から出土した。168は口径10.0cmの土師器小皿で、口縁部はヨコナデで調整される。175・176は瓦器小皿である。175は口径8.4cmで、体部は浅く、ナデで調整されている。176は口径9.6cm、器高2.5cmで、体部は比較的深い。口縁部は内外面ともヘラミガキが施されている。178・179・183～185は瓦器椀である。口径は178が15.8cm、179が14.9cmで、外面にはユビオサエ痕が顕著に認められ、179は粗いヘラミガキが施されている。183・184の高台は断面三角形を呈する。185の高台は若干高く、底部内面には格子状暗文が施されている。187は黒色土器A類椀で、高台は断面三角形を呈する。底部内面にはヘラミガキが施されている。172は玉縁状の口縁部をもつ白磁碗である。体部下半の外面は施釉されていない。見込みには凹線が1条巡る。これらは11世紀前半に属する187を除けば、12世紀前半～中頃に属すると思われる。

169・171・186・188～190・198は7a層から出土した。169は口径9.8cm、器高1.4cmの土師器皿で、口縁部に強いヨコナデを加えているため、体部との境に稜がある。171は土師器椀で、高台および器壁は厚い。188～190は黒色土器A類椀で、190は口径15.5cm、器高5.4cmである。高台は直立している。186は瓦器椀で、体部は深く、高台もさほど低くない。

調整は磨滅のため不明である。198は口径15.7cmの須恵器杯蓋である。天井部の2／3以上がヘラケズリで調整されており、口縁部との境には鈍い稜がある。以上の土器は198がMT15型式、186が11世紀後半、ほかは11世紀前半に属すると思われる。

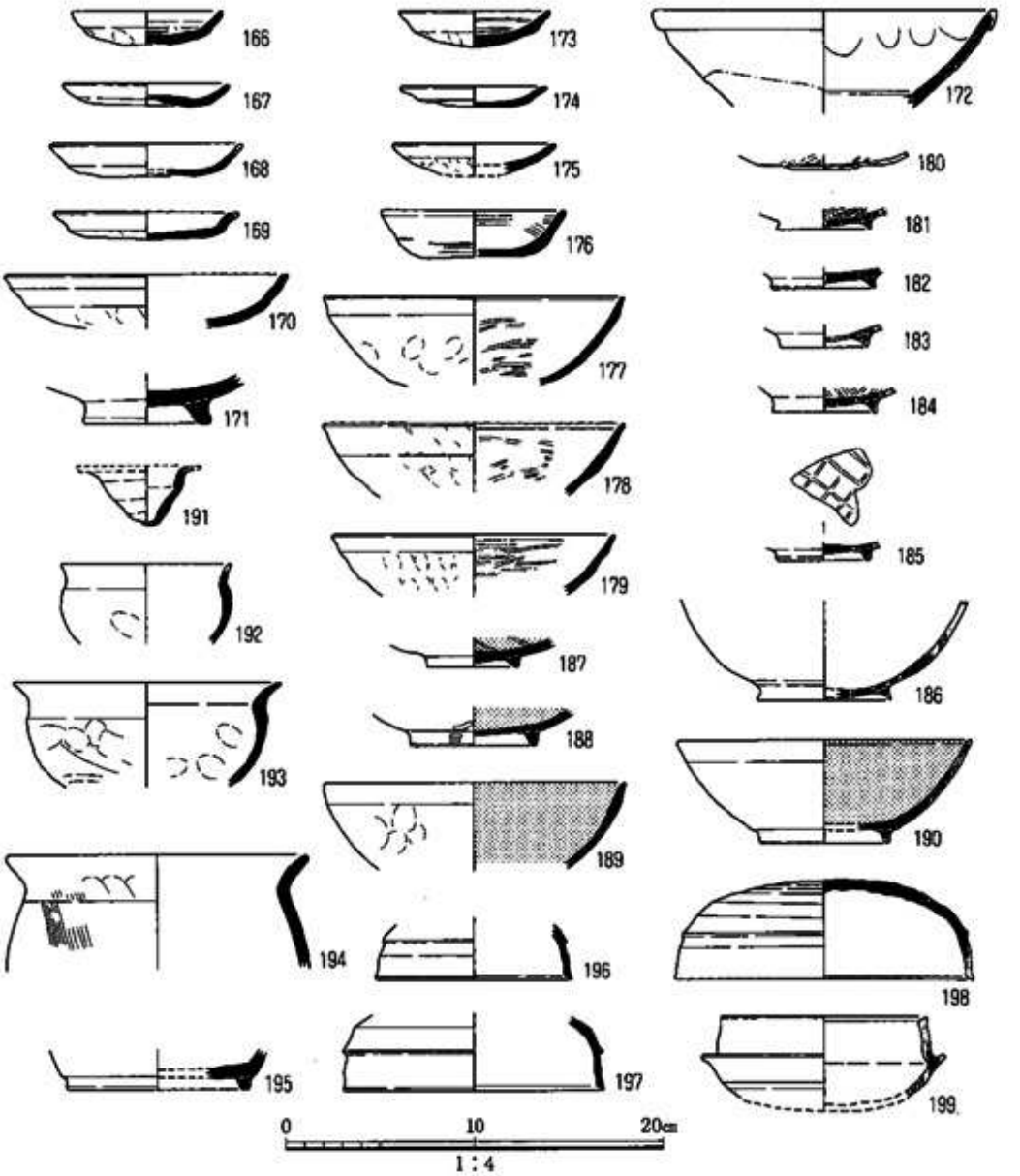


図51　各層出土の土器

5層(166・167・173・180)、5・6層(170・174・177・181・182)、
6層(168・172・175・176・178・179・183～185・187)、7a層(169・171・186・188～190・198)、
8a層(191・195)、8層(192)、4～8層(196)、9層(193)、10層(194・197・199)

191・195は8a層から出土した。191は土師器のミニチュア甑と思われる。復元口径6.6cm、器高3.1cmで、手づくねで成形されている。底部には穿孔がある。195は低い高台が付く須恵器杯である。これらは奈良時代に属するものと思われる。

192は8層から出土した土師器の小型甕である。口径9.0cmで、浅い体部から短い口縁部が緩く外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエで調整されている。

196は4～8層から出土した口径10.4cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境に稜がある。TK47型式に属するものである。

193は9層から出土した口径14.1cmの土師器の甕である。浅い体部から短い口縁部が外反する。口縁部はヨコナデ、体部はユビオサエで調整されている。飛鳥時代に属するものと思われる。

194・197・199は10層から出土した。194は土師器甕で、口縁部は体部から外反する。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はタテハケで整形されている。197は口径13.8cmの須恵器杯蓋である。天井部の3／4以上がヘラケズリで調整されており、口縁部との境に鋭い稜が巡る。199は口径10.9cmの須恵器杯身である。底部の3／4以上がヘラケズリで調整されている。須恵器はTK208型式～TK23型式に属する。

b．埴輪(図52・53、図版35・36)

先述したように、ここでは明らかに一ケ塚古墳には伴わないと考えられる埴輪について記述する。その判断は窖窯焼成であることと型式学的な特徴に拠った。図52に円筒埴輪、図53に朝顔形埴輪と形象埴輪を示した。

204～214は円筒埴輪である。5層出土の214、9層出土の206のほかは、10層から出土した。ただし、上位層出土の破片と接合するものもある。口径が20cm前後で、口縁部が緩く外傾したものが多い。タガは断面三角形で、突出度は弱い。体部に円形のスカシ孔を2方向に穿ち、各段ごとに交互に方向を変える。調整は外面が左上がりのタテハケによる一次調整のみで、内面は縦方向のナデ、口縁端部は内外面ともにヨコナデである。ハケメは4～10条／cmで精粗があり、細かなものの方がめだつ。204にはヘラ記号と思われる円弧状の線刻が最上段に見られる。いずれも須恵質に焼成され、埴輪編年のⅣ期に属する。

216は朝顔形埴輪の口縁部片で、10層から出土した。内外面とも左上がりの13条／cmのハケで調整した後、口縁端部をヨコナデ調整する。須恵質に焼成されている。

217は10層から出土した家形埴輪である。切妻屋根と側廻りの一部を残す。軒から破風板上端までの高さは19.0cm、軒間は18.5cm、妻側での破風板両端間は24cm前後と推定され

る。屋根の勾配は約65°、妻の転びの角度は約20°で、いずれも急な勾配である。一方の平側の壁には水平に対してやや傾く切込みがあり、少なくとも平側に1個所以上の開口部があったと考えられる。妻側の壁の屋根で囲まれた部分には、直径5.2cmの円形のスカシ孔を穿つ。棟上の破風板に接する付近には粘土を貼付けた棟方向の隆起が見られる。調整は側廻りがタテハケ、屋根がヨコハケであり、このうち破風板とその付近、軒はナデである。ハケメの密度は10条／cmである。粘土紐の接合状況から製作工程を復元すると、まず、側

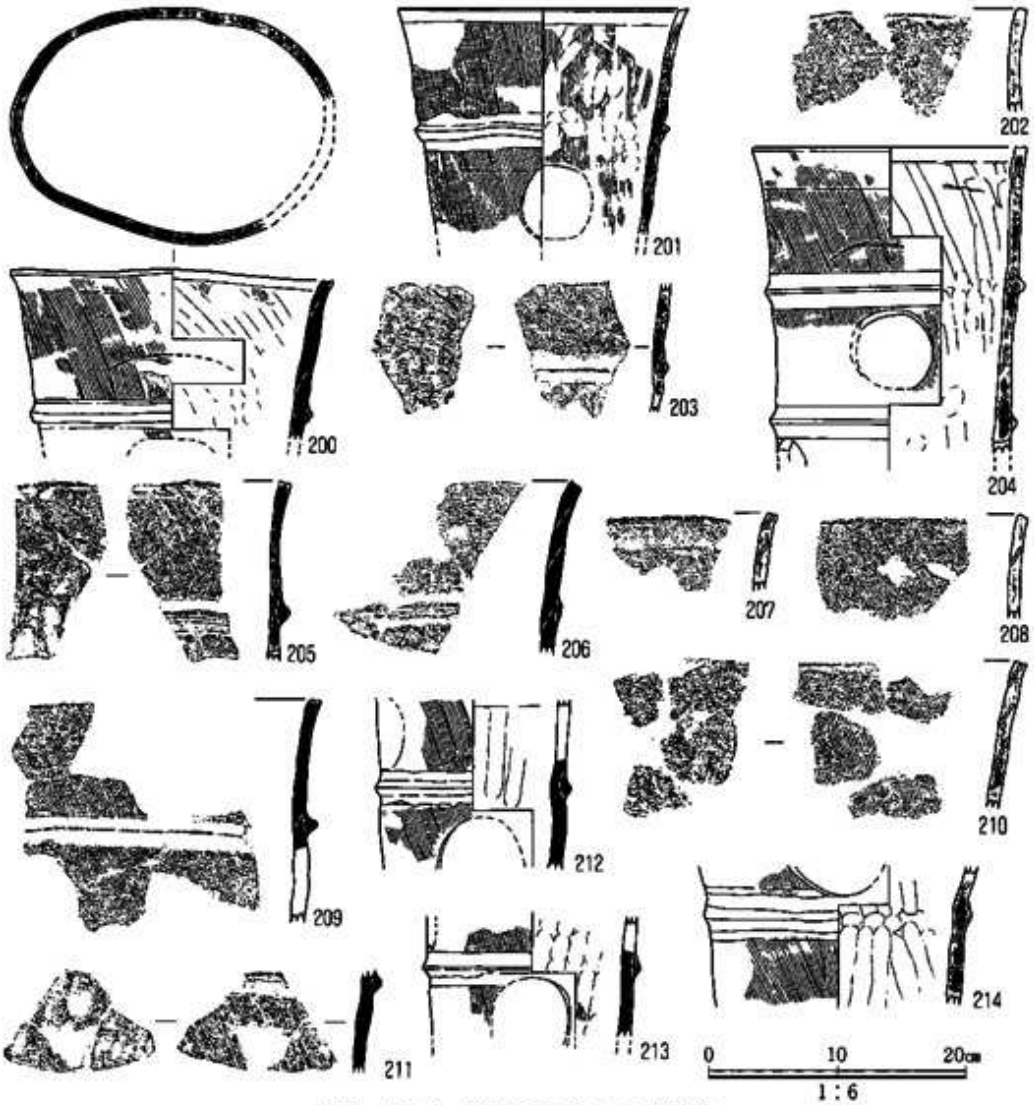


図52　各層およびSD601出土の円筒埴輪
SD601(200～203)、5層(214)、9層(206)、10層(204・205・207～213)

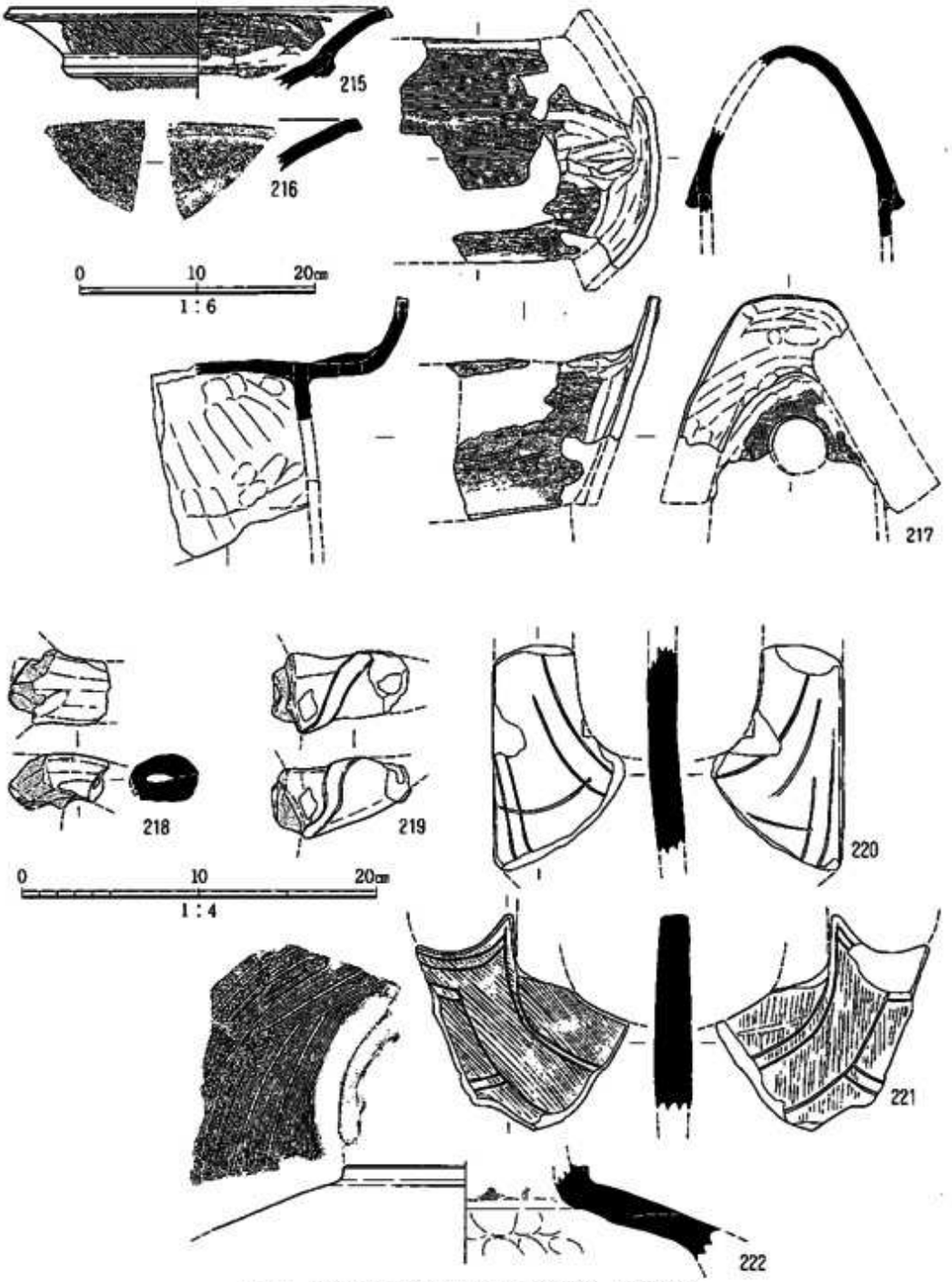


図53　各層およびSD601出土の朝顔形・形象埴輪
SD601(215)、4～8層(218)、5・6層(220)、7a層(219)、10層(216・217・221・222)

廻りと側廻りとの接点から内側の屋根はさほど時間をおかずに製作されたものと思われる。軒は後で付加されており、次に、妻側の壁の上部に当る屋根と接する三角形の部分が取付けられる。その後、妻側に屋根を付け足して、最後に破風板を取付けたものと考えられる。須恵質に焼成されている。

218は人物埴輪の上腕部で、4～8層から出土した。中央での太さは3.7cmある。粘土板を巻いて中空に作られており、表面はナデで調整されている。胴部との接合部分はソケット状に加工されており、ここを胴部に差込んでいたようである。須恵質に焼成されている。

219は粘土板を巻いて中空に作られた馬形埴輪の尾部で、7a層から出土した。基部での太さは3.7cmで、幅1.0cmの粘土紐が螺旋状に巻付けられている。尻との接合部分は218と同様な技法が用いられている。土師質に焼成されている。

220～222は衣蓋形埴輪で、220は5・6層、ほかは10層から出土した。220・221は立飾り部の飾り板の破片である。220は上外方に当る部分と思われ、器厚は1.6cmある。輪郭に沿って2条一組の線刻があり、それらをつなぐ線刻も見られる。221は上内方に当る部分で、器厚は2.0cmある。輪郭に沿う2条一組の線刻の内側にも、それと相似形の1条の線刻があり、それらをつなぐ2条一組の線刻が見られる。粗いハケで調整されている。以上の鰭飾りは土師質の焼成である。222は笠部の破片で、頸部に低い断面台形の軸受部下端突帯がある。外面は8条／cmのハケがあり、時計回りに調整する。須恵質に焼成されている。

2）遺構とその遺物

i）中世・近世（図54）

大半の遺構は地山上位の1層基底面で検出された。溝・井戸・土壙などがある。

SD201　墳丘上で検出した溝で、墳丘の輪郭に沿って弧状を呈する。幅約0.8m、深さ0.1mで、にぶい黄橙色粗粒砂質シルトで埋没している。底面には掘削痕が顕著に認められた。近世に属する陶磁器や土師器・瓦器などが出土している。江戸時代のある時期における一ケ塚古墳の墳丘の残存範囲を示している可能性があろう。

SK201　北東端の墳丘上で検出した不定形の土壙である。南北の長さ2.5m以上、深さ0.15mである。埋土は底から0.1mまでがにぶい黄褐色細粒砂質粘土からなる水成層で、この上位は埋戻し土である。遺物は出土しなかった。遺構の性格は不明である。本遺構は周囲にある墓溝と思われる小溝群よりも新しい。

SE301（写真11）　墳丘上で検出した平面形が円形の井戸である。直径0.75m、深さ2m

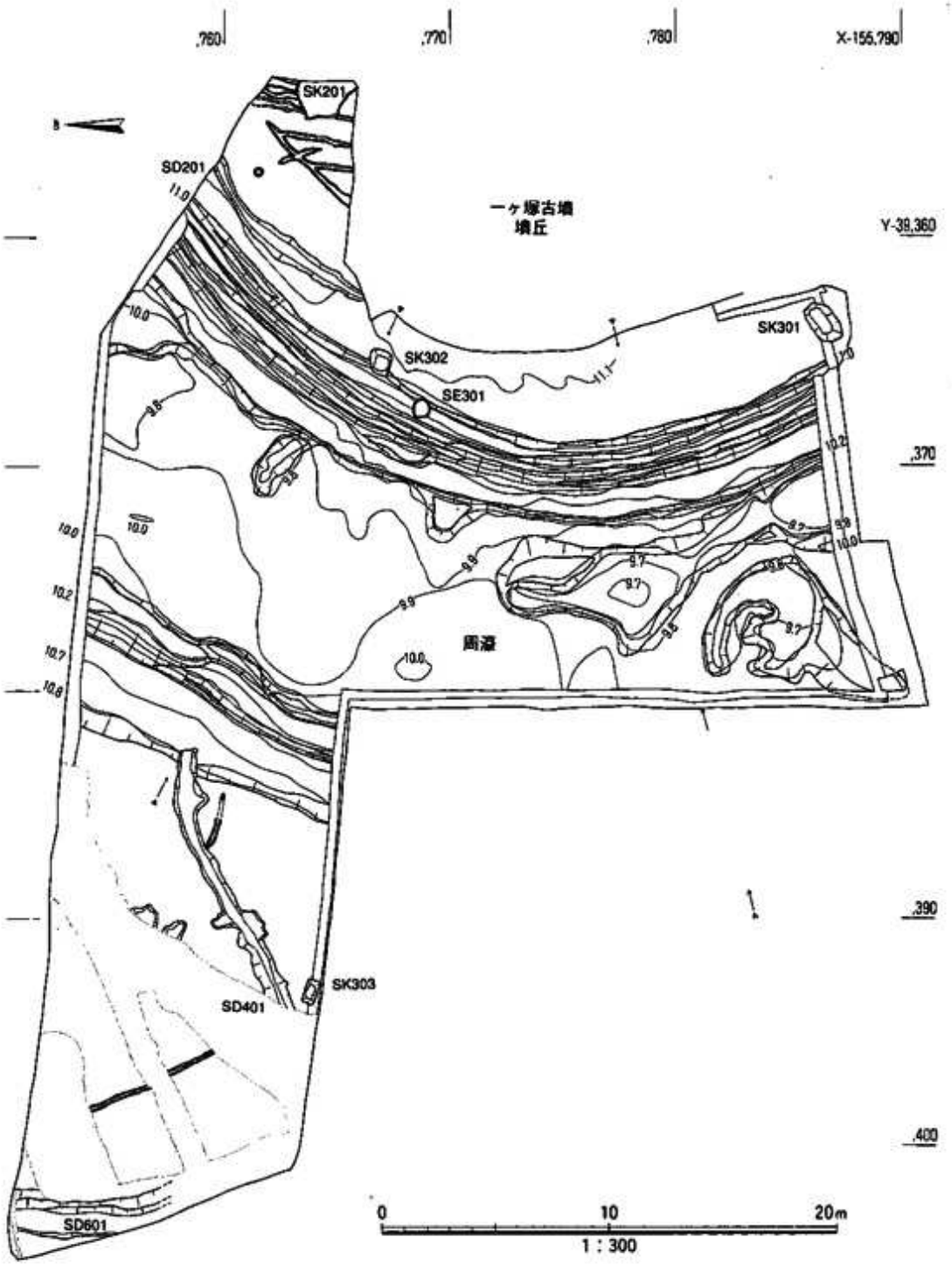

,760
,770
,780
X-155,790
Y-39,360
,370
,390
,400
SK201
SD201
一ヶ塚古墳
墳丘
SK301
SK302
SE301
周溝
SK303
SD401
SD601
0
10
20m
1：300

図54　遺構平面図

以上あり、井戸側の痕跡が認められなかったので素掘りと考えられる。上部0.3mが地山などの偽礫による埋戻し土、それ以下は灰白色粗粒砂からなる水成層が堆積していた。遺物は埴輪の細片が出土したのみであり、時期は不明である。

SK301　東南端の墳丘上で検出した隅丸長方形の土壙で、長軸の長さ1.95m、短軸の長さ1.15m、深さ0.35mである。埋土は底から0.05mまでが明黄褐色シルト質粗粒砂、この上位は埋戻し土で、遺物としては埴輪の細片が出土したのみである。

SK302(写真12)　中央東端の墳丘上で検出した隅丸正方形の土壙である。一辺の長さは1.0m前後、深さ0.3mである。埋土は底から0.05mまでが黄褐色シルト質粗粒砂で、この上位は埋戻し土である。遺物は埴輪の細片が出土したのみである。

SK303　調査区西部で検出した隅丸長方形の土壙である。長軸の長さ1.2m、短軸の長さ0.55m、深さ0.3mである。埋土は底から0.05mまでが含細礫明黄褐色粘土で、この上位は埋戻し土であり、遺物は出土していない。

以上の3基の土壙は規模に若干の相違があるものの、埋土のようすは近似しており、相互に関連性のあるものと思われる。時期は不明であるが、埋土の特徴から中世・近世に属するものであろう。また、主軸方向がすべて一ケ塚古墳の中心を向くことも注目される。副葬品らしきものはなかったが、土壙墓である可能性もある。

SK304　南西隅の西壁際の3層下面で検出した不定形の土壙で、その大半は調査範囲外にある。長さは1.5m以上、深さ0.45mで、下位層の偽礫で埋戻されている(図50)。遺構の性格は不明である。

SD401　西部に位置する溝で、わずかに蛇行して周濠に取付いている。幅約0.7m、深さ0.25mで、含粗粒砂黄褐色粘土質シルトからなる水成層で埋没している。土師器・須恵器・

写真11　93－6・7次調査SE301(西から)

写真12　SK302(南から)

瓦器が出土しており、周濠を利用した中世の水田と関連する溝と考えられる。

ii)古墳時代後期～奈良時代(図54)

SD601(図52・53・55、図版17・35・36)　調査地北西端部の4層基底面で検出した幅約2m、深さ1.8mで、南北方向の溝である。南半は攪乱によって破壊されていた。埋土は1～4層が偽礫を含む砂質シルト、5層が偽礫の混る水成のシルト質粘土、6層が偽礫を

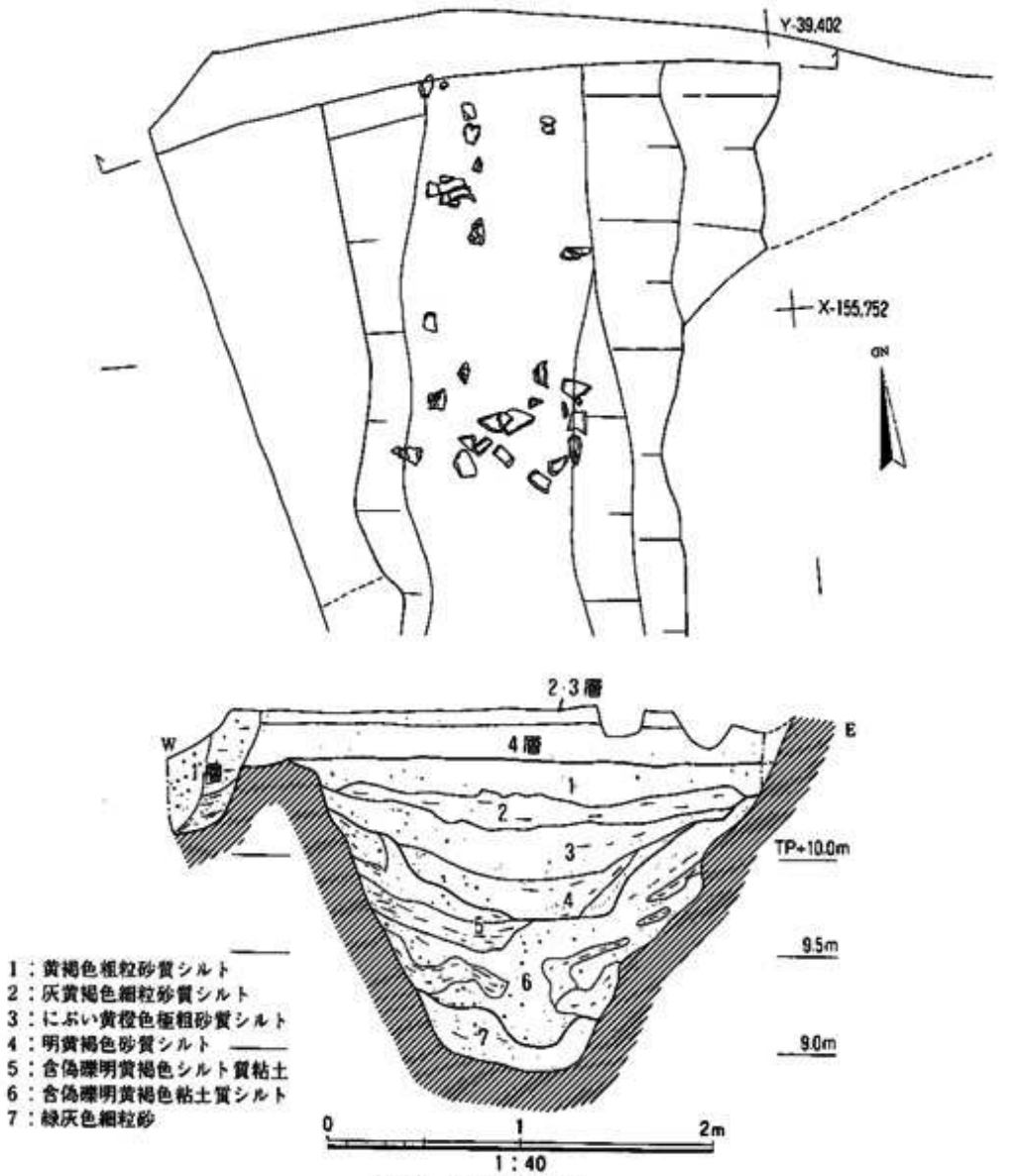


図55　SD601実測図

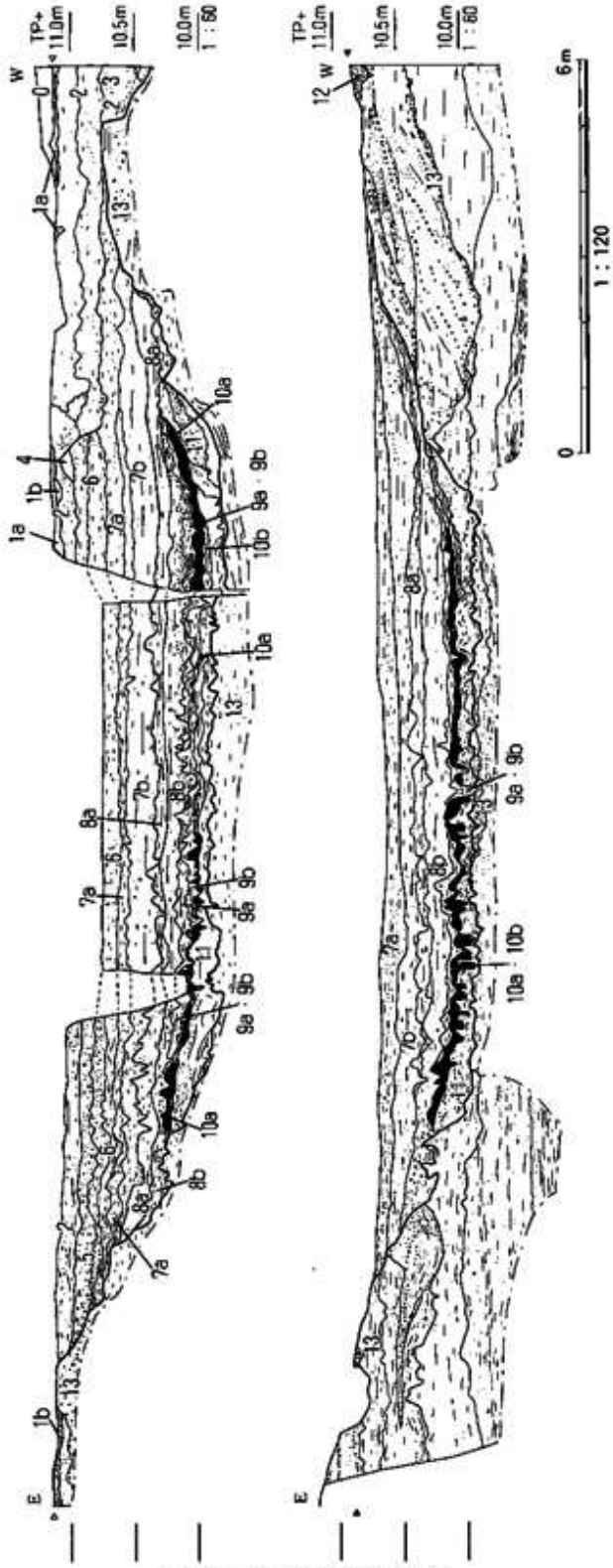


図56　一ケ塚古墳周濠断面図

多く含む含砂粘土～粘土質シルトからなる埋戻し土、7層が水成の細粒砂であった。偽礫の中には古墳の墳丘盛土に類似したものが認められた。3・4層から窖窯焼成の円筒埴輪の破片がまとまって出土した。埋土下半部からは遺物がまったく出土しなかったので、溝の掘削年代は不明であるが、偽礫や埴輪の特徴からみて、当地区に古墳が多く造られる5世紀末以降のものと推測される。

200～203は円筒埴輪である。口径20cm前後で、口縁部が緩く外反したものが多い。200の上面観は楕円形を呈している。200・201とも内外面をタテハケで調整した後、内面をナデ調整するが、200の方がていねいである。202・203も外面調整は同様であるが、内面はナデ調整のみである。ハケメの密度は包含層出土のものと差異がない。200・203にはヘラ記号が見られ、200は204と同様な円弧状、203は三日月状を呈する。

215は口径32.6cmの朝顔形埴

輪の口縁部である。器面調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケであり、口縁端部やタガの内外面もヨコナデ調整している。タガ外面の下端には粘土紐をユビオサエによって貼付けた痕跡がそのまま残っている。頸部上端を外反させ、擬口縁としている。

これらは埴輪編年Ⅳ期に属するものである。

iii)一ケ塚古墳(長原85号墳)

a．遺構(図54・56～59、原色図版1・2、図版14～17)

古墳の西側に当る部分で、墳丘と周濠の約1／4弱を調査した。墳丘の盛土は遺存せず、古墳築成時とその後の耕作によって削り出された地山だけが残る。周濠は深さ約1.2mで、底面での幅は約10mであった。耕作によって加工された上面での幅は約19mあるが、もともとは幅14m、深さ1.5m前後であったと思われる。周濠の堆積状況は図56のとおりである。墳丘の斜面のうち本来の傾斜に近いのは11層の基底面のみで、その角度は約30°である。

周濠底面は北部ではほぼ平坦であるが、南部では深さ約0.3mの窪みが2個所見られた。後述する木製品などが出土した長さ15m以上、幅約4mの窪みは墳丘裾に沿っている。他方は調査区南西隅に位置しており、周濠中央部から外側の裾へ延びている。11層の水成層で埋没しており、古墳の築造当初からあったと思われる。

墳丘上に樹立されていた埴輪や、木製品などが周濠内から多く出土した。このうち、円筒埴輪基底部の多くは調査区北部の墳丘裾の11層中から、墳丘から崩落したような状態で出土し(図57)、これ以外の場所では少ない。これらのほかにも本墳に伴うと思われる埴輪は多数あり、

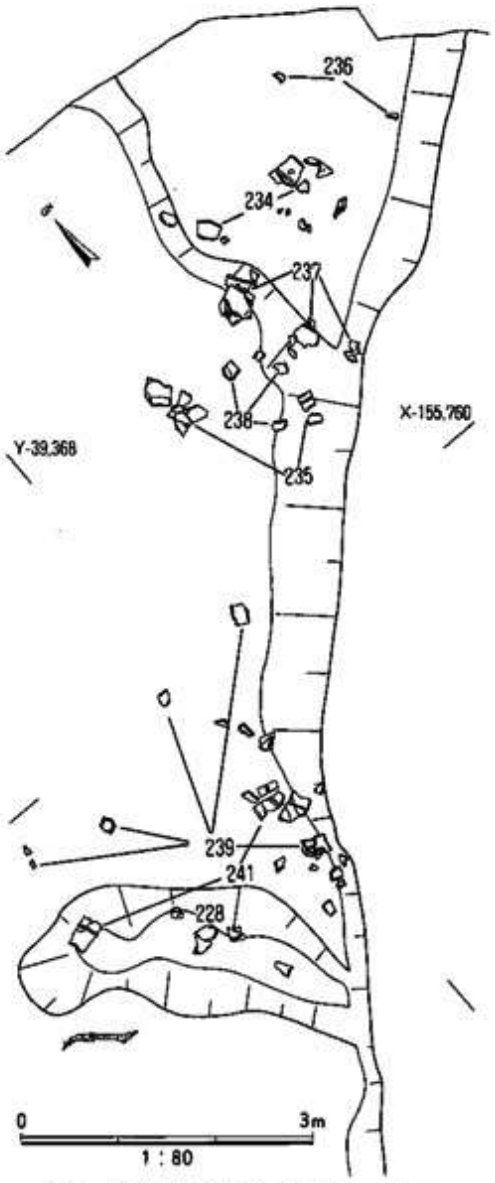


図57　周濠内円筒埴輪出土状況平面図

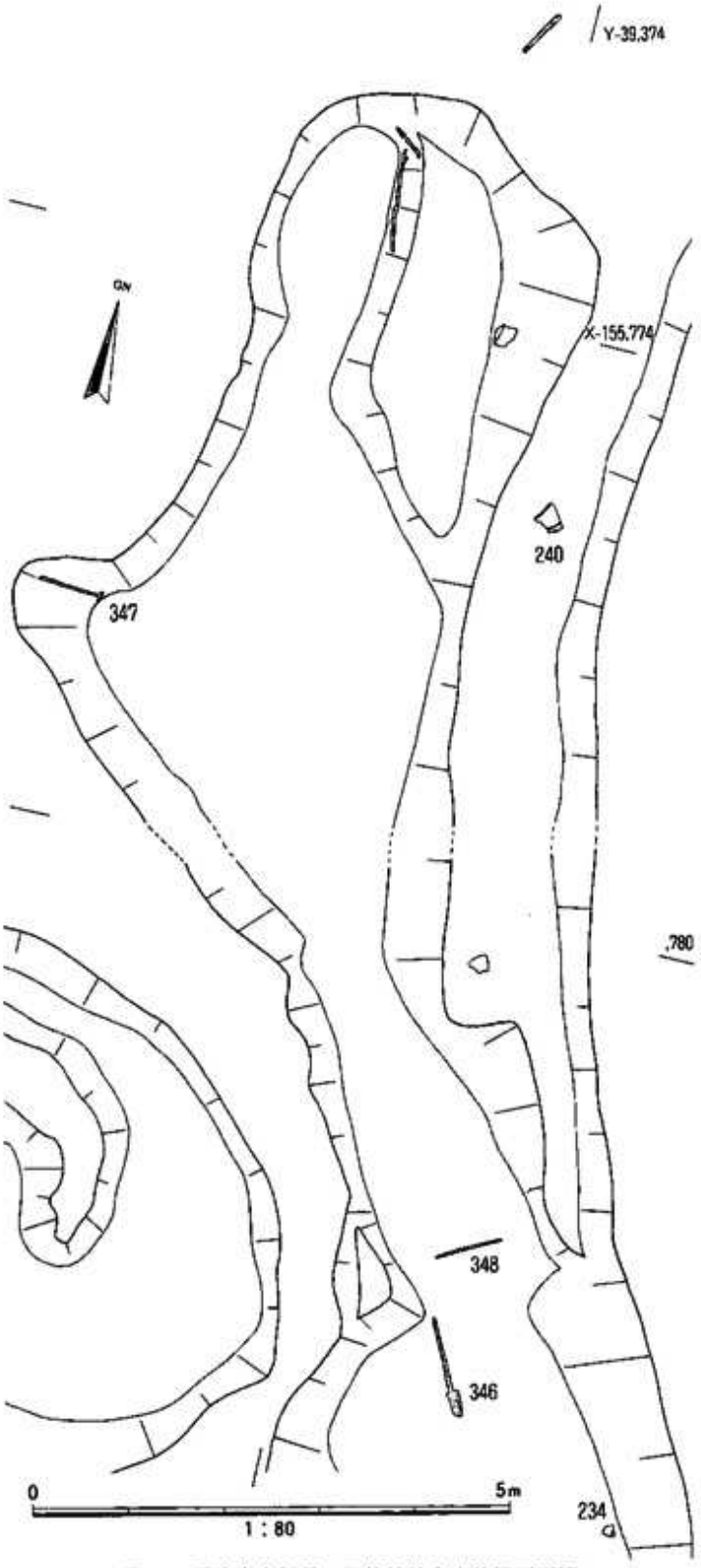


図58　周濠内木製品・円筒埴輪出土状況平面図

後世の作土からも多く出土している。これには11層を耕起していく過程で上方移動したものも含まれようが、上位の作土から出土するものについては、墳丘から崩落した時期が新しかったものと推測される。特に形象埴輪は11層から出土したものがわずかしかなく、後者の成因によるものが多いと推測される。

南部では東側の窪み内から、木製鋤２点と柄と思われる加工木１点が出土した(図58)。木製品は底面から４～６cmほど浮いた位置の11層中から出土した(図59)。これら以外にも窪み内からは加工痕の見られない木片も多く出土したが、埴輪は少なかった。

b．遺物

土師器(図60、図版37)

223は口径20.4cm、口縁部の高さ7.4cmの二重口縁の壺形土器である。鋭く屈曲する頸部からラッパ状に開く口縁部の中ほどには明瞭な突帯がある。口縁部の

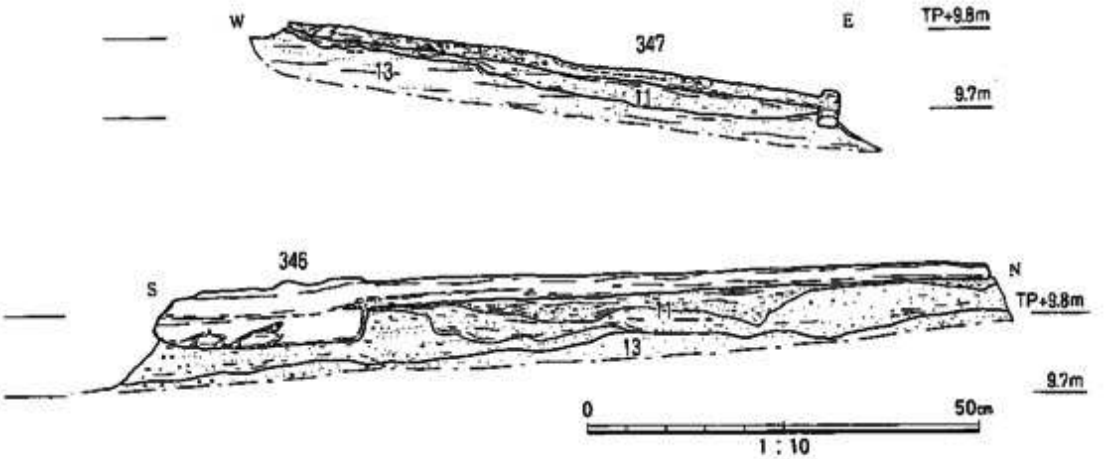


図59　木製品出土状況断面図

内外面はヨコナデで調整している。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。胎土中に石英・長石・チャート粒を多く含んでおり、埴輪に類似した特徴をもつ。

円筒埴輪(224～241、図61・62、図版37・38)

各破片の出土位置は図57・58に示した。

224～227は口縁部の破片で、口径は225が31.0cm、226が29.0cm、227が32.7cmである。口縁端部は外方へ屈曲して端部に垂直な面のある224～226と、緩く外反して端部に内傾する面のある227がある。224は外面をタテハケの後に軽いヨコハケ、内面を左上がりのていねいなナデで調整している。225は外面をタテハケの後、断続的なヨコハケ、内面を左上がりのタテハケおよびヨコハケの後ヨコナデで調整している。226は外面をタテハケ、内面を左上がりのタテハケの後ヨコナデで、227は外面を左上がりのタテハケ、内面を左上がりのナデで調整している。ともに口縁部やタガの周辺はヨコナデ調整である。胎土中に長石・石英粒などを含んでおり、224には角閃石と雲母粒が顕著に見られる。227には黒斑が確認された。

228～233は体部の破片である。スカシ孔は228が長方形と三角形あるいは半円形、229・233が円形である。228は2方向に穿たれ、各段ごとにその向きを90°ずらしている。228は外面をタテハケの後、動作のピッチが比較的長いヨコハケで、内面をタテハケの後にユビオサエで調整している。229は外面を細かいヨコハケ、内面をヨコナデで、230は外面を

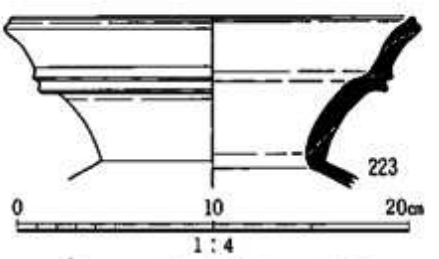


図60　一ケ塚古墳出土の土師器

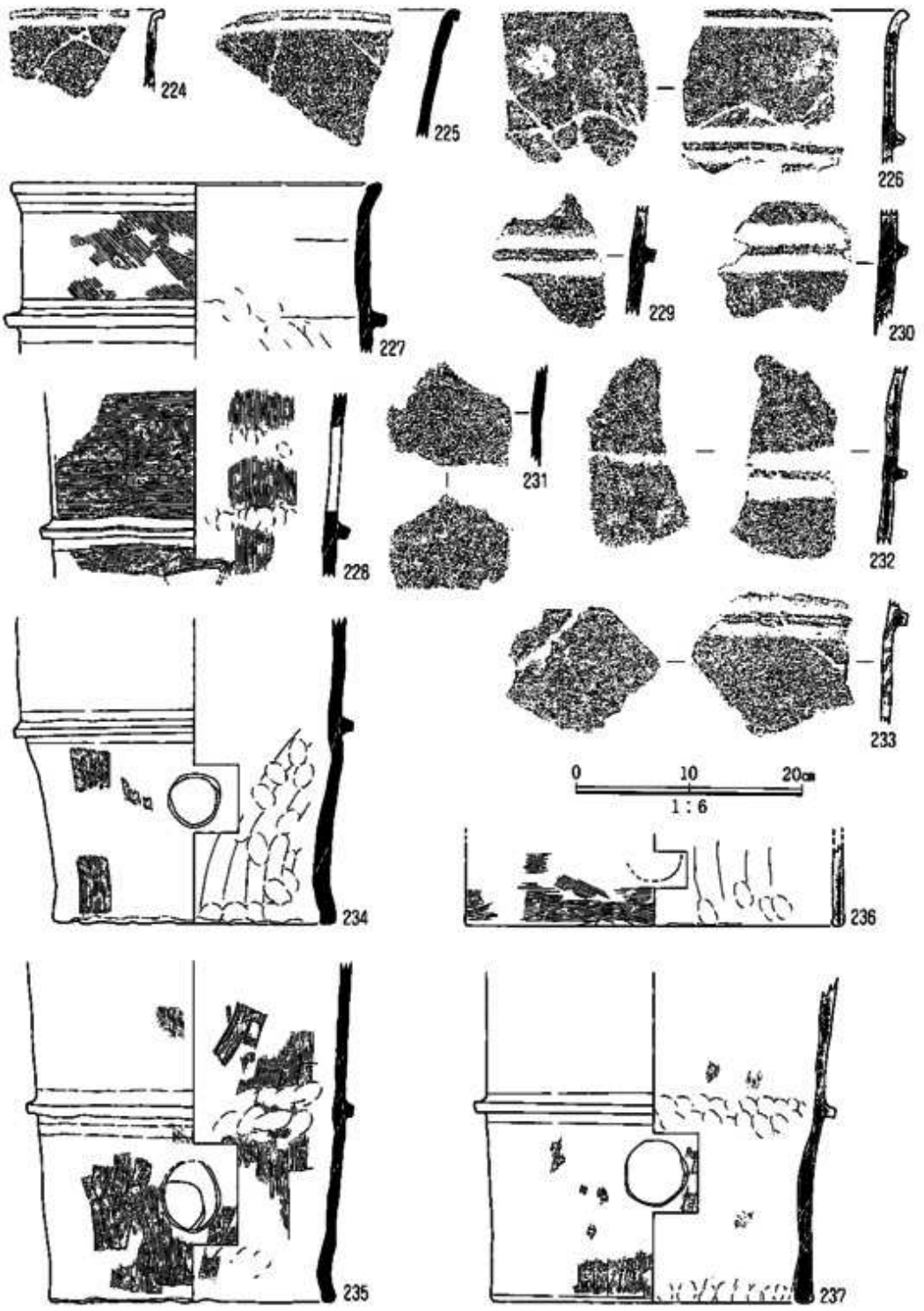

224
225
226
227
229
230
228
231
232
233
0
10
20cm
1:6
234
236
235
237

図61　円筒埴輪(1)

左上がりのタテハケ、内面をハケの後にナデで調整している。231は外面をタテハケの後、動作のピッチが比較的長いヨコハケ、内面を左上がりのタテハケで、232は外面をタテハケの後ヨコナデ、内面をタテハケの後にナデで調整している。233は外面を動作のピッチが比較的長いヨコハケ、内面を左上がりのタテハケの後ヨコナデで調整している。いずれもタガの周辺はヨコナデ調整である。231の外面には弧状を呈する2条一組のヘラ記号が施されている。229は胎土中に角閃石と雲母粒を含む。

234～241は基底部の破片である。底径は234・235・238・239が25cm前後、237・241が28cm前後、236・240が33cm前後である。スカシ孔は円形のみの234・235・237、半円形と長方形を組合せた239、円形と三角形を組合せた241に見られる。234は外面がタテハケ、内面がナデやユビオサエで調整されている。底面の付近にはユビオサエが残る。235は外面がタテハケ、内面がタテハケの後、タガの裏面に当る部分にユビオサエが施されている。これも底面付近をユビオサエで整えている。236は外面が断続的なヨコハケ、内面が縦方向のナデで、237は外面がタテハケ、内面がタテハケの後、ナデで調整されている。底面付近の内面にはユビオサエが残る。238は外面がヨコハケの後、タテハケ、内面がヨコハケの後、

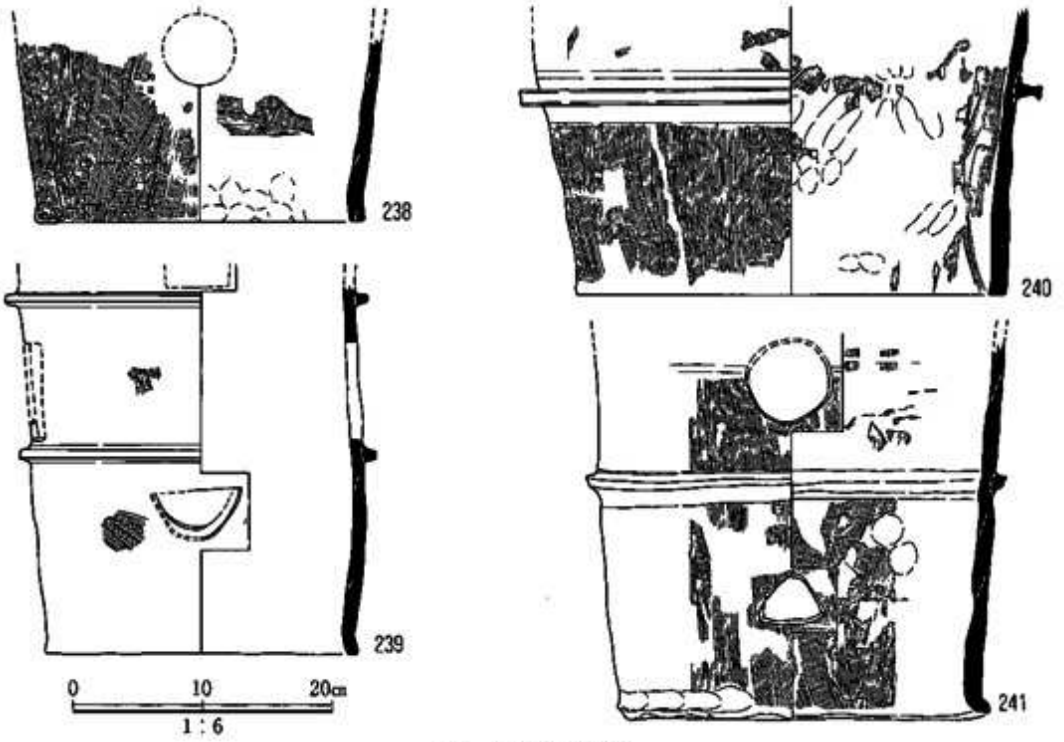


図62　円筒埴輪(2)

ナデで調整されており、底面付近の内面はユビオサエで整えられている。239の外面調整はタテハケおよび斜め方向のハケであるが、内面については不明である。240の調整は外面がタテハケ、内面がタテハケの後ナデであり、241は外面をタテハケ調整した後、底部付近をヨコナデで調整している。内面の調整はタテハケの後、最下段を除く部分をヨコナデしている。底面は過重による変形が著しい。

これらはいずれもタガの突出度が強く、埴輪編年のⅡ期に属するものである。

朝顔形埴輪(242～250、図63、図版38)

242～247は形態のみからでは壺形埴輪と区別できないが、本調査地では明らかに壺形埴輪といえるものは出土していないことから、朝顔形埴輪として記述する。242は口縁部の破片で、外面はヨコハケないしはナナメハケの後、左上がりのナデ、内面はヨコナデで調整している。243～245は頸部の破片で、口縁部との接合部分は擬口縁であり、ヨコナデが施されている。243の調整は外面が断続的なナナメハケ、内面はヨコナデで、244の外面はタテハケ、内面は左上がりの断続的なハケである。244は口縁部との接合面にヘラで刻み目を付けている。245は口縁部との境にタガが残る破片で、外面を左上がりのハケ、内面をナナメハケないしはヨコハケの後、ヨコナデで調整している。246・247は頸部から肩部にかけ

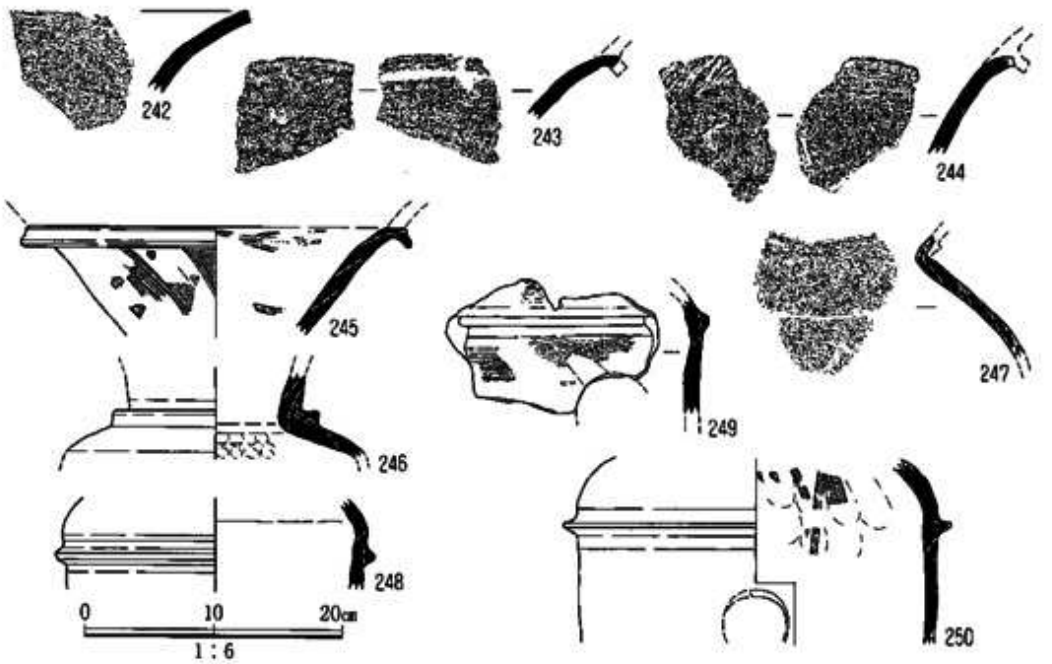


図63　朝顔形埴輪

ての破片である。246にはその境にタガが残っており、頸部の最小径は13.4cmである。内面の調整はタテハケの後ユビオサエである。247の外面は動作のピッチが比較的長いヨコハケで調整しているが、タガの剥離部分にはタテハケが残る。内面の調整はナナメハケで、頸部はヨコナデである。248～250は肩部から体部にかけての破片で、248の体部上端の直径は24.0cmある。肩部との接合部の内面にはユビオサエの痕が明瞭に見られる。249の外面はヨコハケの後、粗いヨコナデで調整されており、肩部にはヨコハケに切られる細かなタテハケがわずかに残る。内面の調整はヨコナデである。体部最上段には円形のスカシ孔がある。250は体部上端の直径が28.1cmあり、調整は外面がナデ、内面はタテハケの後ナデである。体部最上段に円形のスカシ孔がある。これらの色調は灰白～淡黄色を呈しており、242・246・249・250は胎土中に雲母・角閃石粒を含む。

家形埴輪(251～303、図64～69、原色図版3、図版39～43)

家形埴輪は数多くの破片が出土したが、個々の破片の遺存状態は多様であり、接合作業は難行した。これまでにも当古墳では家形埴輪が多く出土しており、その構成を究明することは重要と考えたので、復元作業を継続した結果、ある程度全形がわかる3個体を含む12個体が識別できた。その内訳は切妻造家4、入母屋造家2、寄棟造家の可能性があるもの2、不明4となった。ここでは、まずある程度の形が復元しうるものに通し番号を付けて記載して、最後にごくわずかな破片しかないものをまとめて述べる。

家形埴輪1(251、図64)　251は屋根と側廻りの多くを欠失するが、ほぼ全形をうかがうことのできる切妻造家である。破片は5層から11層にわたって出土しており、中でも8～10層が多かった。

破風板両端間の長さは平側で63cm、妻側で35cm、基部下端から破風板上端までの高さは44cmである。屋根や破風板には不定方向のハケ調整が部分的に残っており、もとは全面にあったと思われる。網代や押縁の表現は認められない。側廻りの長さは桁行24.6cm、梁行23.4cmで、屋根の平面形のわりに、桁行と梁行の差がない。一方の妻側の壁には縦長の長方形の切取りがあり、入口と考えられる。このほかには開口部がなかった可能性が高い。平側の壁はタテハケで調整されており、屋根との接合部分は強いヨコナデが施されている。妻側の壁は平側の壁よりも若干高いところで水平に剥離しており、この面は製作工程の休止面と思われる。これ以下の調整は、剥離面に近いところはヨコハケないしはナナメハケ、この下位ではタテハケである。剥離面の上位は外面がナデ調整、内面は粗いユビオサエで調整されている。なお、妻側の壁はすべて閉塞されたのではなく、棟に接する個所に幅11

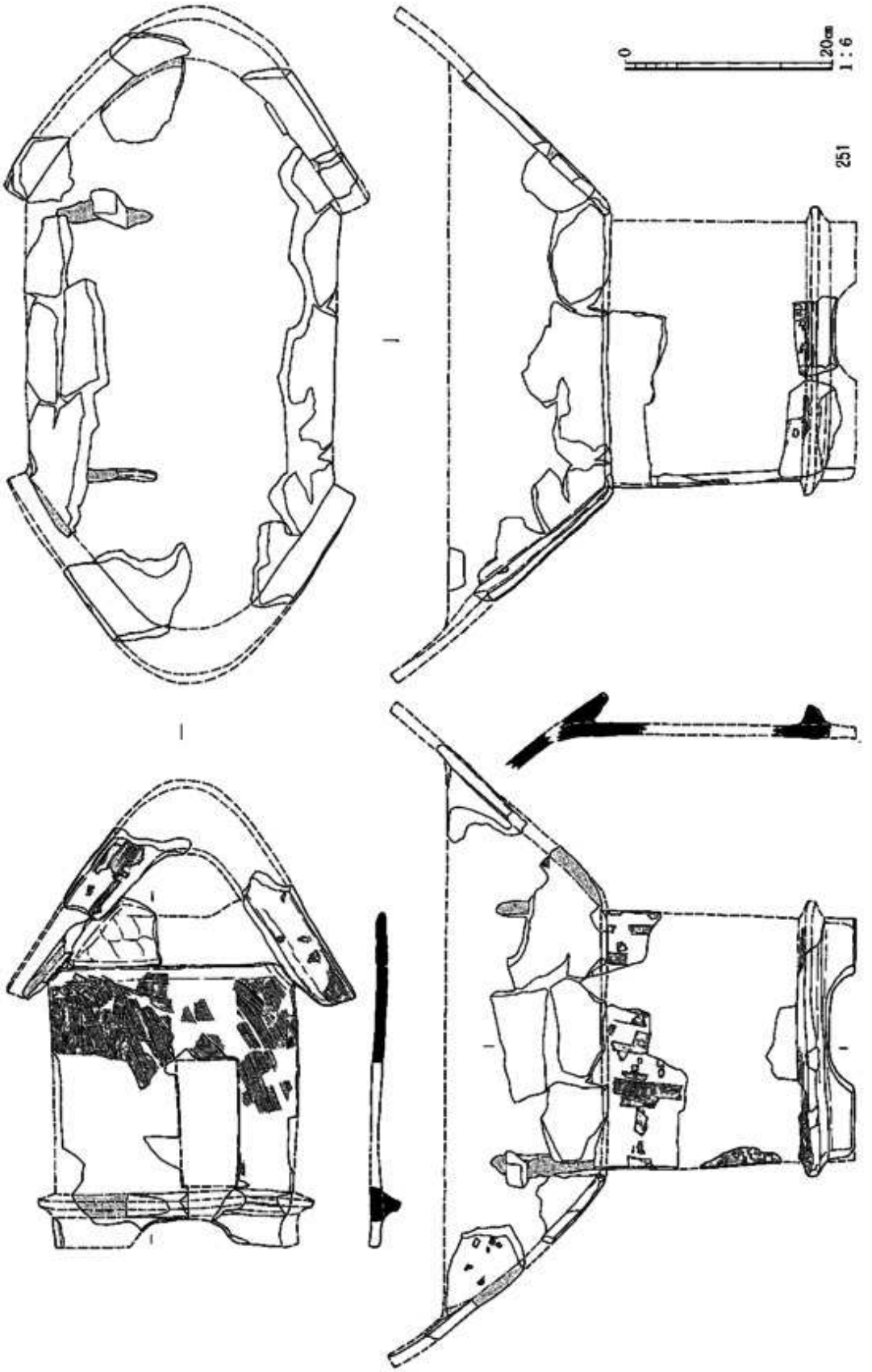


図64　家形埴輪1

cm、高さ6cmくらいに復元される開口部がある。これらの壁には線刻はない。基部は高さ5.4cmで、上端に張出し幅1.8cm、厚さ2.6cmの突帯を巡らしている。突帯の断面形は台形に近く、先端をヘラ状工具で削り、やや下向きの面を作っており、上面はヨコハケで調整している。妻・平両側の中央の接地部分には、半円形のスカシ孔が開いている。色調は淡黄色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

家形埴輪2（252～260、図65・66）　252は屋根とこれに接合する側廻りの一部を復元できた切妻造家である。側廻りの下部には後述する253～260が相当する可能性がある。

252の破片は5層から10層にわたって出土しており、中でも9・10層が多かった。

破風板両端間の長さは平側で66cm、妻側で36cm、屋根の下端から破風板上端までの高さは21.5cmである。屋根や破風板は不定方向のハケで調整されており、網代や押縁の表現は認められない。側廻りの長さは桁行が平均24.6cm、梁行が25.1cmで、平面観が正方形に近い。平側の壁の一面には方形の切取りが2個所あり、入口ないしは窓を表現したものと考えられる。このほかの壁では開口部の有無は明らかではない。平側の壁面には屋根との接合部近くまで、一部は切取り面となりながら垂直方向に施される線刻がある。この中には2条一組のものも2個所に見られる。平側の壁はタテハケで調整されており、屋根との接合部分には強いヨコナデが施されている。妻側の壁は251と同様に平側の壁よりも若干高いところで水平に剥離している。この下位に接合する破片はほとんどないが、わずかに残る両隅の破片によって水平方向の線刻があることがわかる。剥離面の上位は二等辺三角形を呈する粘土板からなり、棟に接する個所に幅8cm、高さ5cmの輪郭が杏仁形を呈する開口部がある。外面をナデ調整、内面を粗いユビオサエで調整している。色調は淡黄色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。

253～260は家形埴輪2の側廻りと思われる。252との接点がなく、また遺存状態もやや異なっていたので別に図示した。破片は1層から10層にわたって出土しており、中でも6・7層が多かった。

基部より上の壁には、一部は切取り面となりながら垂直方向に施される線刻がある。253は隅に当り、線刻は2条一組で、隅柱の表現と思われる。254は中央に当り、中央に5.0cm間隔で垂直方向の線刻が見られる。この線刻が、基部上端から2.2cmの高さに下辺がある切取り部の両側辺に相当するものと思われる。255には6.3cm間隔で垂直方向の2本の線刻があり、それぞれ中柱と隅柱の表現と思われる。256は隅に当り、隅柱の表現と思われる垂直方向の線刻が見られる。基部の上端から7.5cmの高さに切取り部がある。257は中央に当り、

中柱の表現と思われる線刻と、切取り部がある。258は隅柱と思われ、両側辺とも切取り部の一辺をなす。各破片からみた基部は高さ5.1cmで、上端に張出し幅2.0cm、厚さ2.7cmの突帯を巡らす。突帯の断面形は台形に近く、先端をヘラ状工具で削り、やや下向きの面を作っている。4方の壁の接地部分の中央には、半円形のスカシ孔が開いている。色調は橙色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

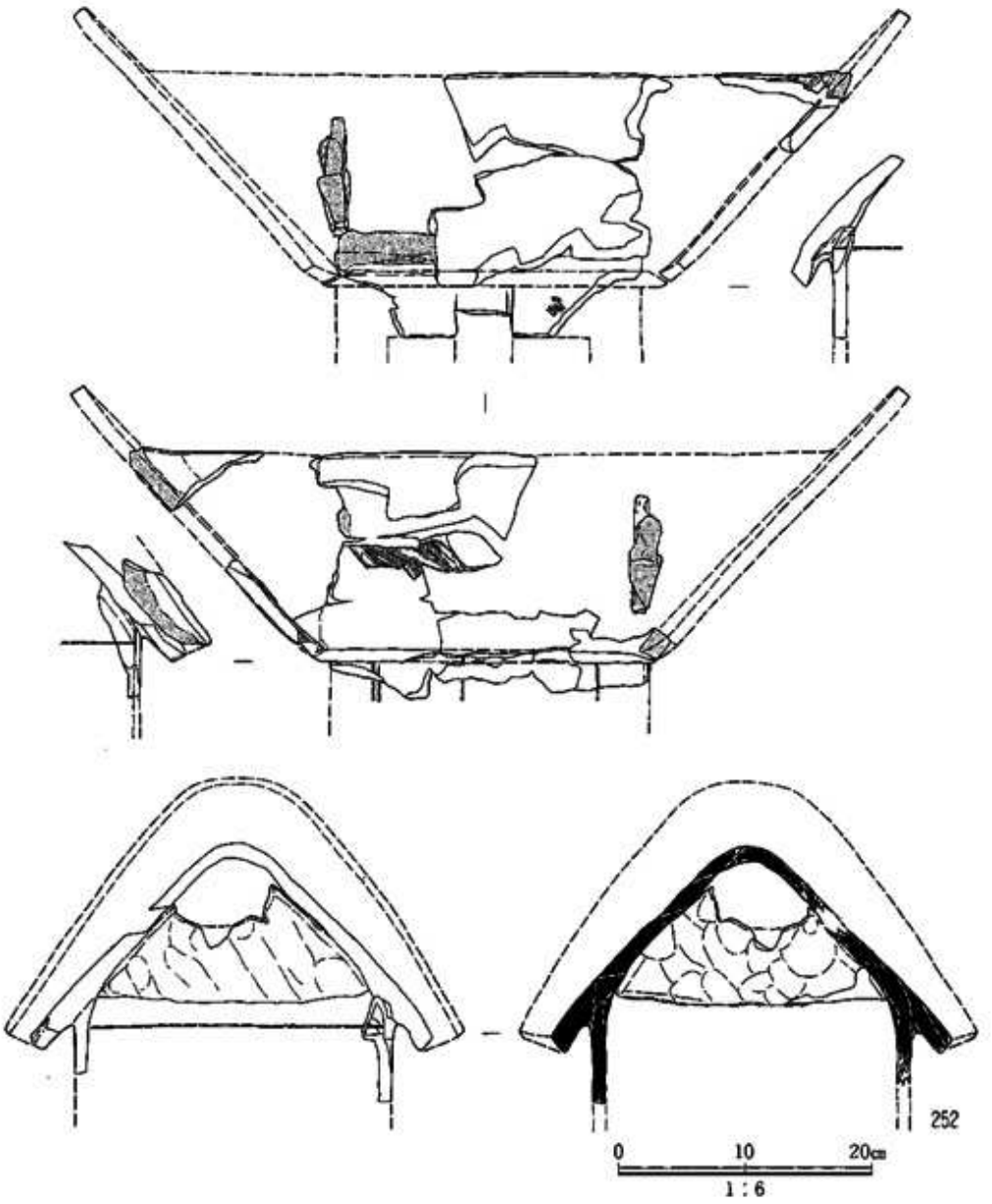


図65　家形埴輪2

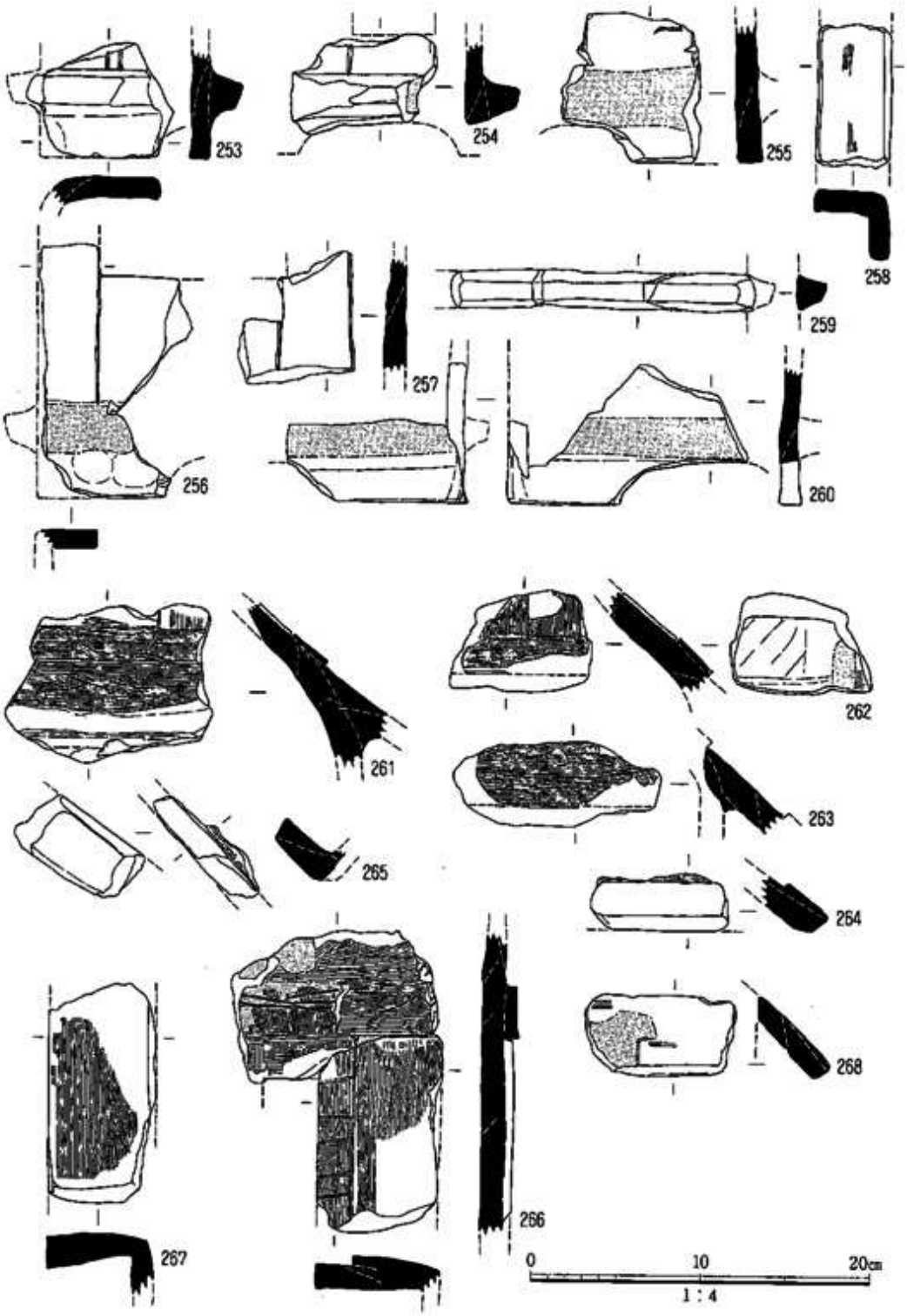


図66　家形埴輪２～４

家形埴輪２(253～260)、家形埴輪３(261～265)、家形埴輪４(266～268)

以上から側廻りのようすを推測すると、平側の壁には窓が2個所あり、別の壁の中央に入り口があったと思われる。家形埴輪1と対照的な開放的な構造である。

家形埴輪3（261～265、図66）　大型の切妻造家である。屋根の破片のみしか識別できなかった。6層から8層にかけて出土した。

261・263は側廻りとの接合部付近の破片である。縦方向と横方向に突帯が貼付けられており、押縁の表現と思われる。突帯の幅は縦方向が3.0㎝、横方向が2.7㎝である。262の内面には妻側の壁の剥離痕がある。263は262と264の間に当る破片である。全体をヨコハケで調整した後、縦方向の突帯とその周辺をタテハケで調整している。264は軒端である。幅3.2㎝の突帯で押縁が表現されている。265は破風板の破片で、ハケ調整の後、端部をナデで調整している。接合状況からみて破風板に沿う押縁があったと推測される。また、屋根に接合する際に屋根に刻み目を施して接合を強化したようである。色調は黄橙色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を比較的多く含む。

家形埴輪4（266～268、図66）　側廻りと屋根の一部を確認した。大型の切妻造家と思われ、家形埴輪3とは胎土・色調が異なるので区別した。9層から11層にわたって出土した。

266は上端の剥離痕からみて妻側の壁と思われる。上方には梁材を表現したと思われる幅3.0㎝の水平方向の突帯が貼付けている。接合は壁に刻み目を施すことによって強化している。これとは別の刻み目が上方の隅にあり、ここに桁材を表現する粘土塊がついていたのかもしれない。隅柱は壁よりも0.6㎝厚く作られており、壁には幅3.2㎝、高さ7.5㎝以上の切取り部があり、入り口の表現かもしれない。この側方には梯子状の線刻がある。全体をタテハケで調整した後、梁材を貼付け、それと周辺をヨコハケで調整しており、さらに隅柱や切取り部周辺をタテハケで調整する。梁材より上位に赤色顔料の付着が認められる。267は隅柱に当り、側辺に高さ10.8㎝以上の切取り部が見られる。タテハケで調整されている。268は軒端に当るが、押縁の表現はなく、別個体かもしれない。外面はヨコハケ、内面は側廻りとの接合部付近をヨコナデで調整している。色調は灰白色、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。

家形埴輪5（269～291、図67・68）　大型の高床式入母屋造家で、比較的多くの破片が識別できたが、接合復元するにはいたっていない。4層から10層にわたって出土しており、中でも7・8層が多い。模式復元図は図76（111頁）に示した。

269～276は屋根上半部に当る。269は棟頂部の端部に当る破片である。破風板の剥離面には接合を強化するための刻み目が見られる。破風板に沿って幅約3㎝、厚さ0.3㎝の突帯

があり、押縁の表現と思われる。突帯の剥離面にはハケ調整が見られる。突帯の脇には浅い線刻がある。突帯の剥離のようすが棟頂部と屋根の斜面では異なること、棟頂部だけが黒ずんでいることから、棟頂部にも棟方向の突帯があった可能性がある。棟端部から17.0㎝の位置には縦方向の浅い線刻があり、この脇に縦方向の押縁が位置するものと推測される。内面の大半は剥離面によって占められており、棟木があったと推測される。剥離面には接合強化のための刻み目が多数認められる。妻側にもこれに係わる剥離面があり、これらの範囲の大きさは、幅10㎝、高さ4㎝ほどである。270は棟木先端の破片と思われる。下側と屋根側に剥離面がある。271・272は破風板下端の破片である。破風板は下端にいくほど幅が広い。272の屋根から剥離した面には隆起した線が2条認められ、接合時に屋根に刻み目が施されたものと推測できる。275と破風板271・272の剥離状態からみて、まず破風板を接合してから、これに平行する突帯を貼付けたと思われる。273・274は棟頂部付近の破片である。縦方向の突帯が見られ、それと平行する浅い線刻が脇に見られる。突帯の幅は273が3.8㎝、274が3.2㎝である。273の内面は剥離面である。275は妻寄りの端部に当り、276もこれに近い部位の破片である。破風板に平行する突帯と、これにつながる縦方向の突帯があり、大半は剥離している。突帯幅は4.0㎝で、剥離面には3～4条の刻み目があるほか、各突帯に平行する浅い線刻も脇に見られる。内面には、屋根上半部における妻側の壁と屋根下半部が剥離した痕が連続して認められる。上方で剥離痕が途切れることから、妻側の壁は完全に閉じていなかったことがわかる。

277と278は屋根上半部と下半部の境であり、277が平側、278が妻側に当る。277には押縁の表現である縦方向と横方向の突帯が認められる。後者は屋根上半部と下半部の境をなし、幅は3.5㎝で、剥離面には刻み目がある。裏面では屋根の勾配の変化が明瞭である。278の上端の剥離痕は、上半部に相当する妻側の壁との境をなす突帯のものであり、剥離面には刻み目が3条ある。図の右端は平側の屋根へのコーナーに当る。裏面は277に比して平らであることから、屋根下半部と妻側の壁は屈曲せずに緩やかな曲面をなしてつながっていたものと思われる。

279～282は屋根下半部の破片である。279は側廻りとの接合部に当り、上端に浅い線刻がわずかにあることから、上方に横方向の突帯が位置するものと思われる。280・281は軒端の破片である。端部に押縁を表現した突帯がある。外面はヨコナデ、内面はユビオサエで調整している。282は屋根下半部と側廻りとが接合した唯一の破片であり、コーナーに当る。屋根の下端にはヨコナデ調整の痕が見られるので、軒端の突帯がすぐ下方に位置する

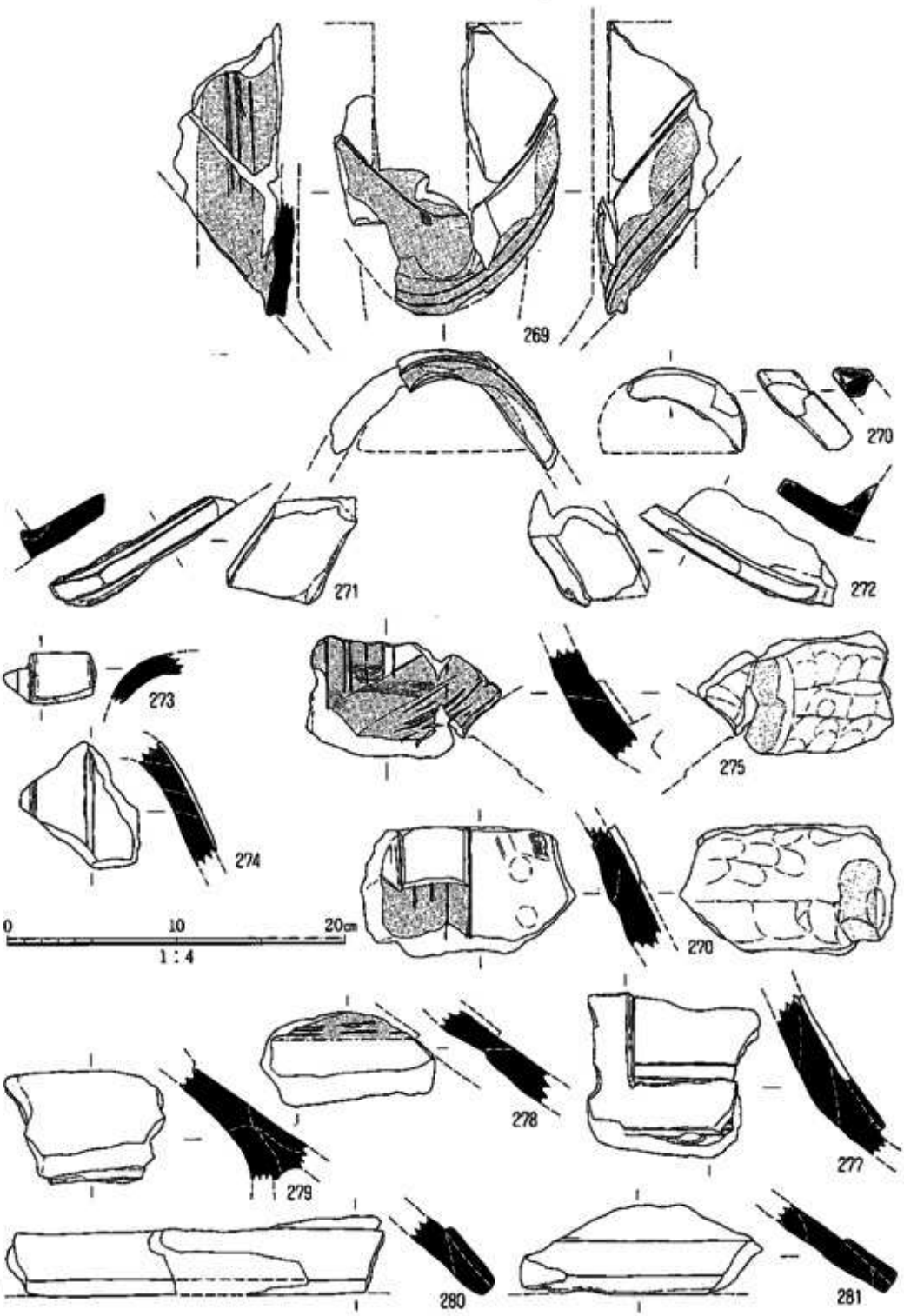


図67　家形埴輪5(1)

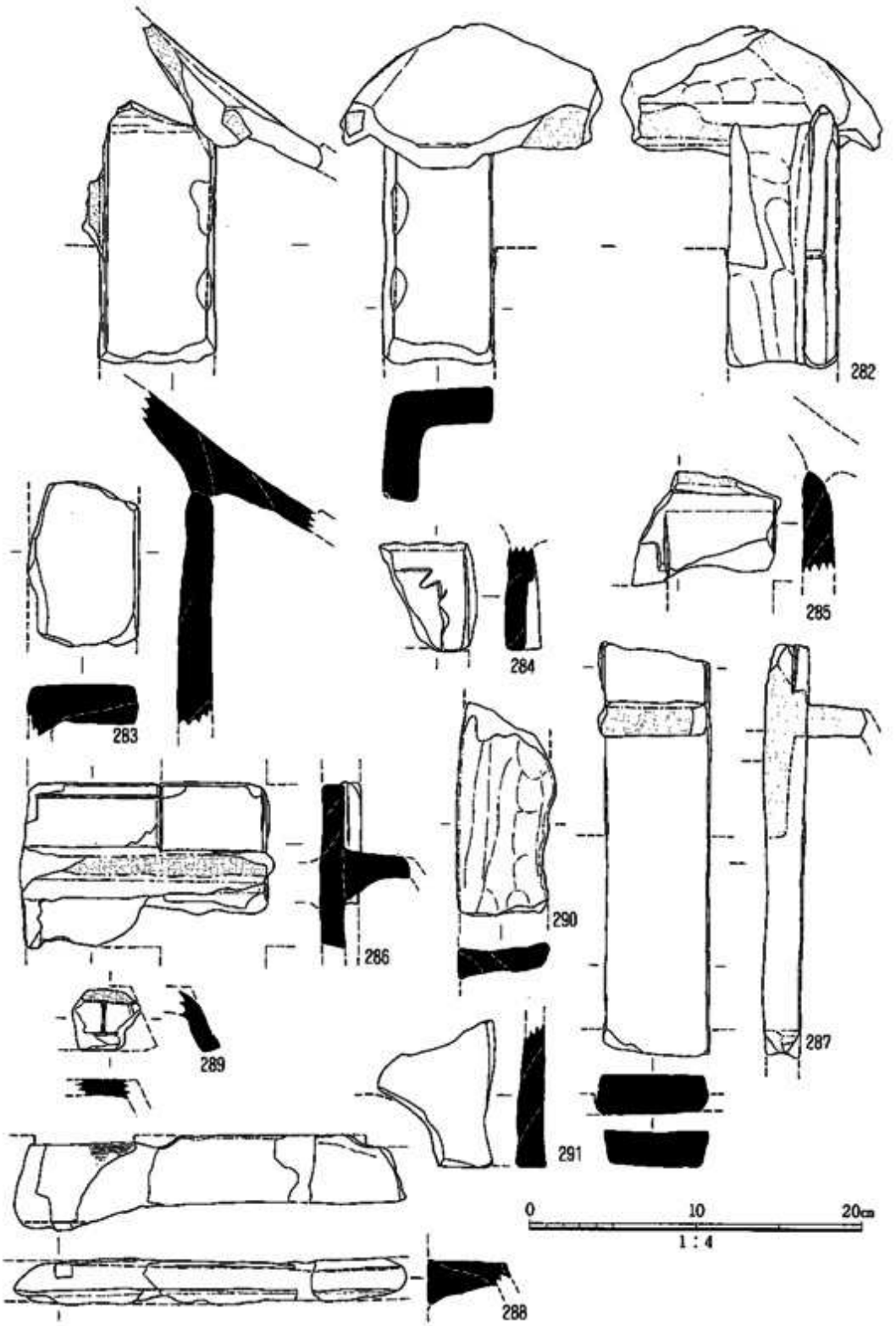


図68　家形埴輪5(2)

ものと推測できる。側廻りの大半は隅柱で、壁よりも1㎝ほど厚くして柱を表現している。屋根との接合部から6.5㎝下方に、窓と思われる開口が両側辺にある。

283～291は側廻りの破片である。283は隅柱、284・285は屋根との接合部直下の破片である。284は切取り部上辺の壁で、柱の脇に幅1.7㎝の低い突帯がある。285は中柱に相当する。286は階上と階下の境に当り、破片の右半分が中柱、左半分が壁である。壁の幅は約8㎝で、妻側に当ると思われる。階上下とも切取り部があり、階上の切取り部に沿って水平方向の線刻が見られる。階下の切取り部の上方には、284に近似する低い突帯が柱の脇に貼付けられる。境の外面には厚さ3.1㎝の突帯が水平方向に貼付けられており、張出し幅は壁から4.0㎝以上ある。内面にも突帯が剥離した痕があり、外面の突帯よりやや低い位置に付く。287は中柱に当り、階上下の境から基部上端付近までが残る。階上には両側辺に切込みがあり、両側に切取り部があったことがわかる。階下には側廻り突帯の基部下端から6.0㎝下方に高さ11.5㎝の切取り部がある。階上下の境の内外面に286と同様な突帯およびその剥離面が見られる。288は外面に付く側廻りの突帯である。ほぼ水平に外方へ張出しており、斜め下方に屈曲している。剥離面は段をなし、柱に当る部分がへこみ、壁の部分が突出している。壁に当る部分の幅は約15㎝で、平側の階上下の境に付いていたものと思われる。上面にハケメが残る。289は外面に付く突帯の下端と思われる。横方向の梯子状の線刻が見られるが、階上、階下いずれのものか明らかでない。290は内面に付く突帯と思われる。張出し幅5.9㎝、厚さ1.8㎝で、ユビオサエとナデで粗く調整されている。291は基底部に当り、高さ8.6㎝の範囲内に剥離痕はないので、裾廻りの突帯はこれよりも高い位置についていたと考えられる。接地部分には半円形のスカシ孔が開いている。

色調は橙色を呈するが、灰黄色のものもある。胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。

なお、82－27次調査([大阪市文化財協会1990]の324)と91－54次調査([大阪市文化財協会1997]の129)でも、本個体に属すると思われる破片が出土している。

家形埴輪6(292～294、図69)　側廻りのみが識別された個体である。3層から6層にわたって出土した。

292はコーナーの破片である。外面には突帯の剥離痕がある。この上下にわたって、一部は切取り面となりながら垂直方向に施される線刻があり、コーナーとの間は隅柱を表現するものと思われる。内面にも剥離痕らしき暗色部が水平方向にあり、これを突帯の剥離痕と考えれば、この家形埴輪は高床構造であった可能性もある。コーナーの突帯の下方には垂直方向に延びる剥離痕もある。293は基底部に当る。基部は高さ5.9㎝で、上端に張出し

幅2.4cm、厚さ2.6cmの突帯を巡らす。突帯の断面形は台形に近い。この上下にわたって、292に近似する線刻が1ないし2条ある。切取り部の幅は6.0cmで、その下辺は突帯の上端にほぼ一致する。コーナーの突帯の下方には、垂直方向に低い突帯が貼付けられている。294は中柱に当り、両側辺には高さ11.5cm以上の切取り部がある。色調は浅黄橙色で、胎

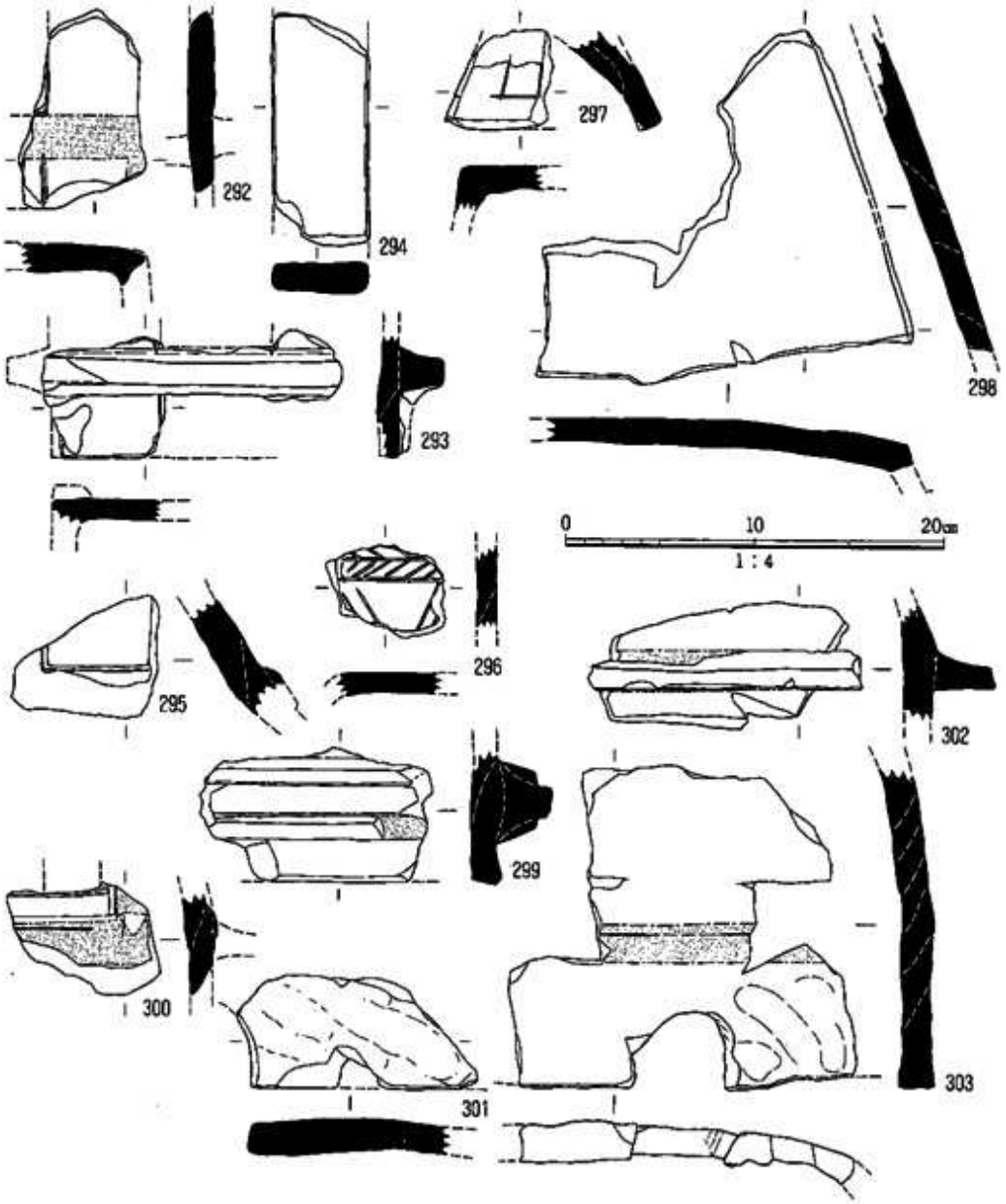


図69　家形埴輪6・7ほか
家形埴輪6（292～294）、家形埴輪7（300～303）、他の家形埴輪（295～299）

土中に石英・長石・雲母粒を含む。

家形埴輪7（300～303、図69）　これも側廻りのみが識別された個体で、家形以外の形象埴輪である可能性もある。2層から8層にわたって出土した。

すべて基底部を含む破片である。基部の高さは8.7cmで、上端に張出し幅3.3cm、厚さ2.0cmの突帯を巡らす。突帯の突出度は他の個体より大きく、端面もやや上方を向く点が異なっている。突帯を付ける際に刻み目を1条施すことや、壁が突帯を境に内傾することも特徴である。接地部分には、半円形のスカシ孔が開いている。その形は303ではいびつである。また、303の底面はコーナーに向って緩く弧を描いている。300には突帯上方に切取り部が見られ、その幅は3.1cmである。その一方の側辺に平行して、垂直方向に貼付けられる粘土帯は柱の表現かもしれない。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に石英・長石・雲母細粒を多数含む。

他の家形埴輪（295～299、図69）　ここでは破片数がいずれも1片であったものを記載する。295は入母屋造家の屋根である。上半部と下半部の境に当り、押縁を表現したと思われる突帯が縦方向と横方向に見られる。胎土中に5mm以下の長石粒を多く含むことから区別した。色調は橙色である。296は壁の破片で、コーナー付近に当る。外面に水平方向の直線に画された綾杉文が施文されている。その下方には、2条一組の直線文が交差するように斜め方向に施されている。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。297は傾斜の強い四注屋根の隅である可能性がある。外面に格子状の線刻が施されている。色調は浅黄色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母・角閃石粒を含む。298も四注屋根の可能性があり、やや鈍角をなして屈曲する部分が屋根のコーナーかもしれない。比較的大きな破片であるにもかかわらず、外面には突帯や線刻が見られない。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含み、家形埴輪7に近似する。299は基底部の破片である。基部は高さは6.6cmで、上端に張出し幅2.9cm、厚さ4.4cmの突帯を巡らしている。突帯は上下に粘土帯を付加して2段に作られており、他の個体よりもしっかりしており、囲形埴輪の可能性もある。色調は明褐色で、胎土中に石英・長石粒を含む。

衣蓋形埴輪（304～316、図70、図版44）

衣蓋形埴輪の破片は6層から9層にわたって出土した。

304～308は立飾り部の飾り板である。線刻が両面に見られる。304は先端部の内側の破片で、輪郭に平行して1ないし2条の線刻が、中央に縦方向に3条の線刻が施されている。305には外側に付く鰭の下端が残る。下端は波状に切り出されている。鰭の輪郭に平行する

線刻は1条で、これを結ぶ横方向の線刻は2条である。306・307は飾り板本体と外側の鰭からなる破片である。鰭の文様は305と同様で、本体の輪郭に平行する線刻が2条、本体を

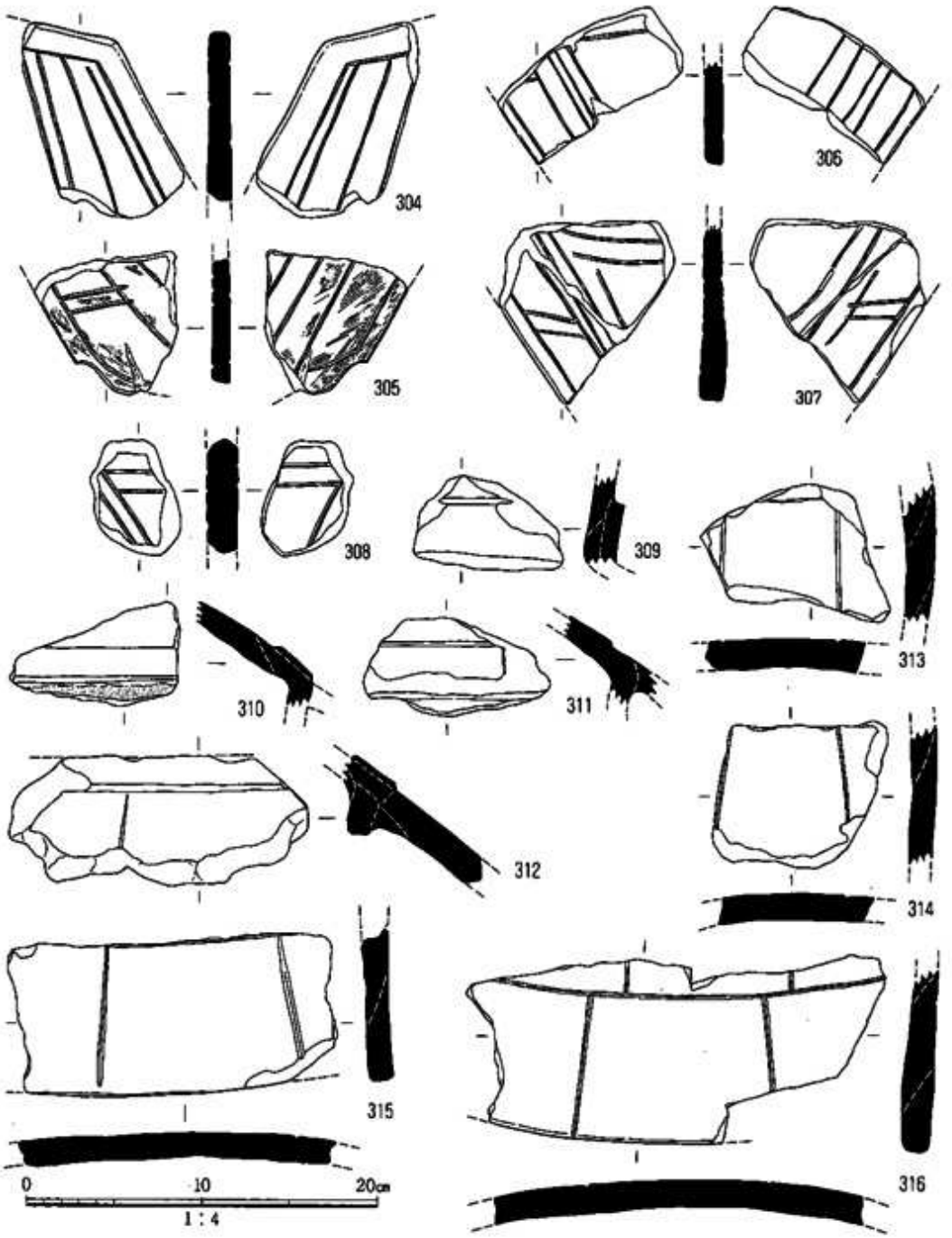


図70　衣蓋形埴輪

横断する横方向の線刻が2条以上ある。308は器厚からみて基部付近の破片と思われる。

309～316は笠部の破片である。309は軸受部に当ると思われ、高さ3.2㎝、張出し幅0.7㎝の突帯が付加されている。310～312は笠部と台部の接合部分である。断面の観察から、台部から笠上半部までを成形した後、笠下半部を付けたことがわかる。312には放射状の線刻がある。313～316は笠下半部で、315・316は先端に当る。圏線で上下2段に分けた後、放射状の線刻を各2段に施している。316から上下の放射状の線刻はわずかにずらして配されたことがわかる。また、線刻の間隔が6㎝前後の313・314と、10㎝前後の312・315・316の2種類がある。外面はていねいなナデ調整で、315には赤色顔料が付着している。309～311・313・314は色調が黒褐～にぶい橙色、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。312・315・316は色調が浅黄橙色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。双方の差異は放射状の線刻の間隔に見られた違いとも一致しており、別個体と考えられる。

盾形埴輪(317～326、図71、図版43)

盾形埴輪の破片は6層から10層にわたって出土した。盾面の文様から2つに分けることができ、一方は山形文を施すもの、他方は「忍岡系対称文」を施すものである。

前者には317がある。盾面の下端に当り、円筒部に厚さ0.6㎝の粘土帯を貼付けて段を作っている。盾面の輪郭に沿って沈線を1条施しており、その内側に下向きの山形文が施文されている。山形文の内部は垂直方向の平行線で充填されている。盾面は斜め方向のナデの後、ヨコナデで調整されている。色調は明黄褐色で、胎土中に石英・長石粒を多く含む。

後者には318～325がある。盾面の形状は、318・320・321からみて上方に向って幅を減じるものと思われる。また、321からみて盾面上部が手前に向って若干せり出していたと思われ、佐紀陵山古墳例[石田茂輔1967]に近い形態といえる。盾面の製作方法をみると、円筒の手前寄りの左右に粘土板を貼り足して、それを支持するために裏側の隙間に粘土を詰め、さらに平面形が三角形の粘土をはめ込んでいる。盾面の調整はタテハケによる。文様は内区・外区ともカーブを描きながら交差する平行線文様、万年筆のペン先のような文様からなる「忍岡系対称文」を基本とし、内区には横方向の平行線帯が加わる。内区と外区は2条の沈線で分割されている。

318～322は円筒と粘土板の接合部に当る破片である。318～321が盾面に向って右側、322が左側に当る。318では付加した粘土板が剥離している。図の左方にある縦方向の2条の線刻が内区と外区の境に当る。319は破片中央にある縦方向の2条の線刻が内区と外区の境に当る。320・321は盾面の側端部に当り、321は文様配置からみて上端に近いと思われ

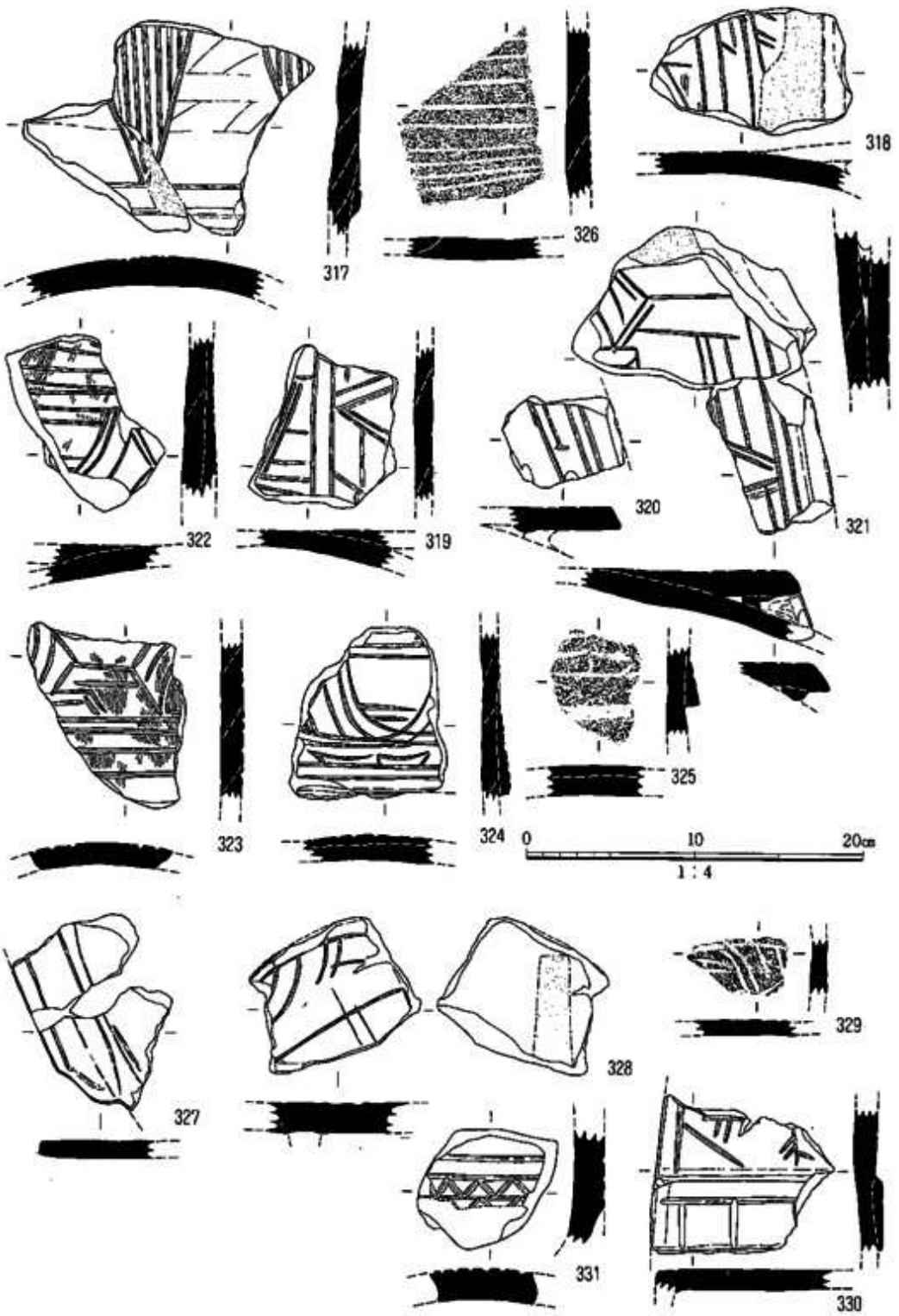


図71　盾形・朝形・草摺形埴輪

盾形埴輪(317～326)、朝形埴輪(327～330)、草摺形埴輪(331)

る。盾面の輪郭に平行する線刻が2条ある。322は盾面の下端に近い部分で、下方に向って器厚を増す。上方の平行線帯が内区、下方が外区である。323は盾面内区の破片で、下半に平行線帯、上半に「忍岡系対称文」の文様帯がある。324・325は盾面の下端に当り、円筒部に厚さ0.7cmの粘土を貼付けて端部に段を設けている。324の上端にある2条の線刻が内区と外区の境に当る。盾面の輪郭に沿っても2条の線刻が施されており、その上方にペン先状の文様が上向きに配されている。325では盾面の輪郭に沿う線刻が1条で、その上方にペン先状の文様が上向きに配されている。色調はにぶい黄橙～灰白色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

326の沈線は内区の平行線帯と思われるが、どちらのグループに属する破片か不明である。色調は淡黄色で、胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。

靭形埴輪(327～330、図71、図版45)

破片は3層から7層にわたって出土した。破片はいずれも小さく、中には靭形埴輪でないものも含まれるかもしれない。327は側端部が波状に切り出された板状の破片で、片面にのみ線刻が施されることから飾り板部と判断した。線刻は輪郭に平行するものや、大きな弧を描くものなどがある。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石粒を含む。328も飾り板部の破片と思われるもので、深く刻まれる径の大きな弧線の中に径の小さい弧線が2条一組で配されている。裏面には、円筒部が付いていたと思われる縦方向の剥離面がある。色調は浅黄色で、胎土中に長石や雲母粒を含む。329・330は筒部の破片である。330は下端に幅4.4cmの突帯が横方向に付けられる。突帯表面には梯子状の線刻が施されている。突帯上位の面には直弧文らしき文様が施されている。329は小破片であるが、直弧文とみられる文様がある。両者とも色調は浅橙色で、胎土中に長石粒を含む。

草摺形埴輪(331、図71、図版45)

8層から一片が出土した。円筒部との接合部付近に当り、表面には圏線と鋸歯文が施されている。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・チャート・雲母粒を含む。

不明形象埴輪(332～345、図72・73、図版41・45)

現段階で器種が不明な形象埴輪も多く見られる。記載に際して、便宜的に図の上下に従って遺物の上下を呼称する。

332～334の3点は同一の器種で、6層から8層にかけて出土した。展開図の左端の面をA面と呼ぶ。破片の上面観は十字形である。332・334のA面では、直立する粘土板の片面とこれに直交する面(332では左側、334では右側)に剥離面がある。剥離面は上端部まで達

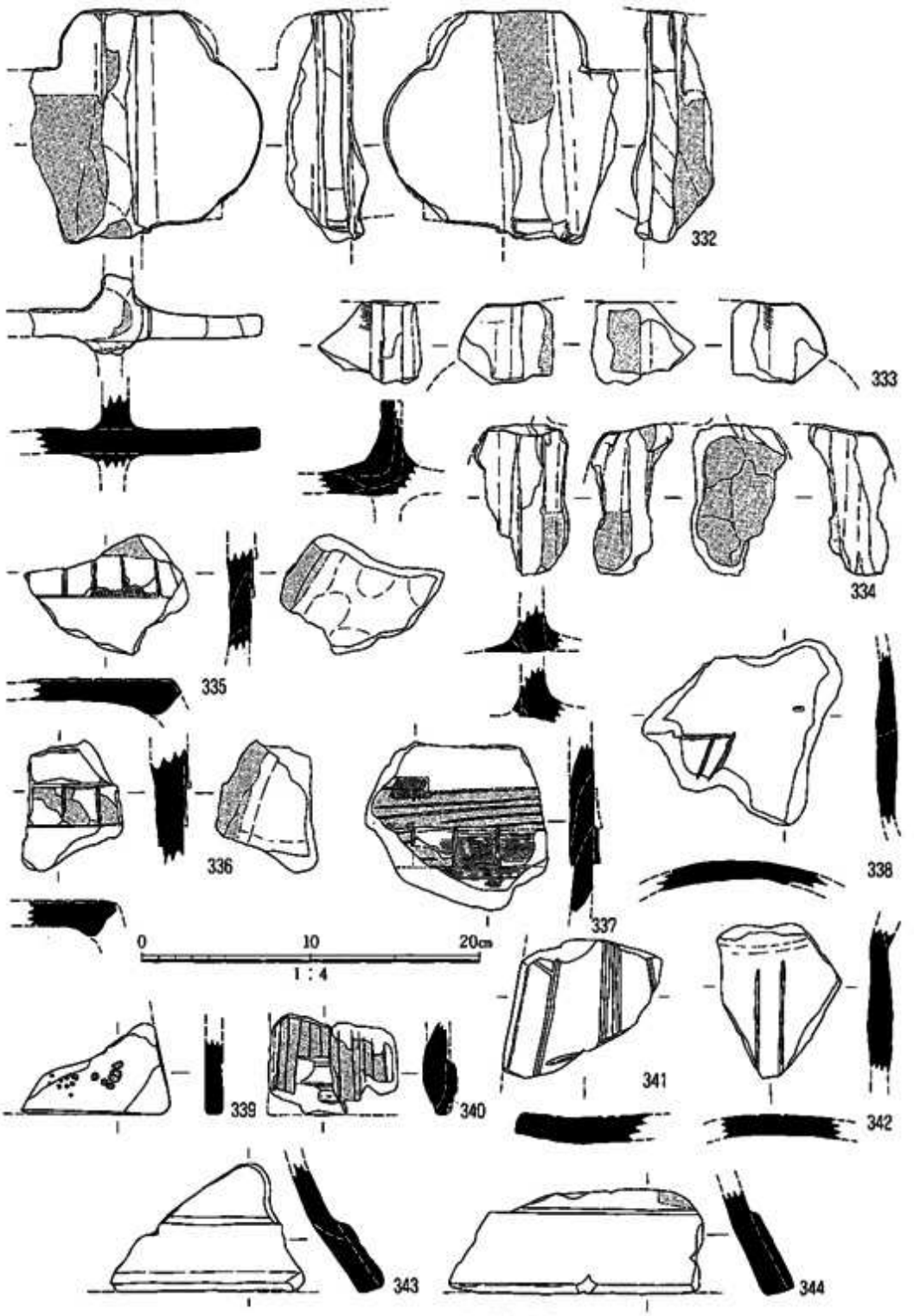


図72　不明形象埴輪(1)

していない。この剥離面がある粘土板は下方に延びており、また、横方向にも延びると推測される。以上から、これらが平面形が方形の構造物に付加されたものと推測される。この剥離面のある粘土板と反対側に当る粘土板は下方へ延びず、高さは12.4cmである。この粘土板は332A面の右半のような形で、外方へ7.5cm張出している。上端面は剥離面のある方へわずかに傾斜している。332や334の断面観察によると、中央では一枚の粘土板の表裏に別の粘土板を貼付けるのに対して、下方では直角に曲る剥離面をもつ粘土板がなすコーナーに2枚の粘土板を貼付けている。このことからも、コーナーをもつ構造物が下方にあったと推測される。3点の破片は剥離面の方向や、粘土の接合方向からみて、332・333と334に分けることができ、前者を方形の対角線上に対向するものと考えれば、4つのコーナーの内の3つに対応するものと考えることも可能である。囲形埴輪のコーナーにつけられた飾りのようなものかもしれない。色調は明黄褐色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含んでおり、家形埴輪5に特徴が近似した印象を受ける。

335～337も製作技法からみて同一器種と考えられる。7層から10層にかけて出土した。表面に突帯が貼付けられており、突帯は幅4.5cmで、上下2段からなり、檜皮葺き状に重なるように見える。上部の突帯には文様はなく、下部には2cmおきに縦方向の線刻が施されている。下部の突帯以下の表面はハケで調整されており、突帯を貼付ける際には、刻み目を施して接合を強化している。335・336は片方の側辺でやや鈍角をなして屈曲する。その上下方向に対する向きはいずれも上方で内傾する。入母屋造家の屋根下半部あるいは寄棟

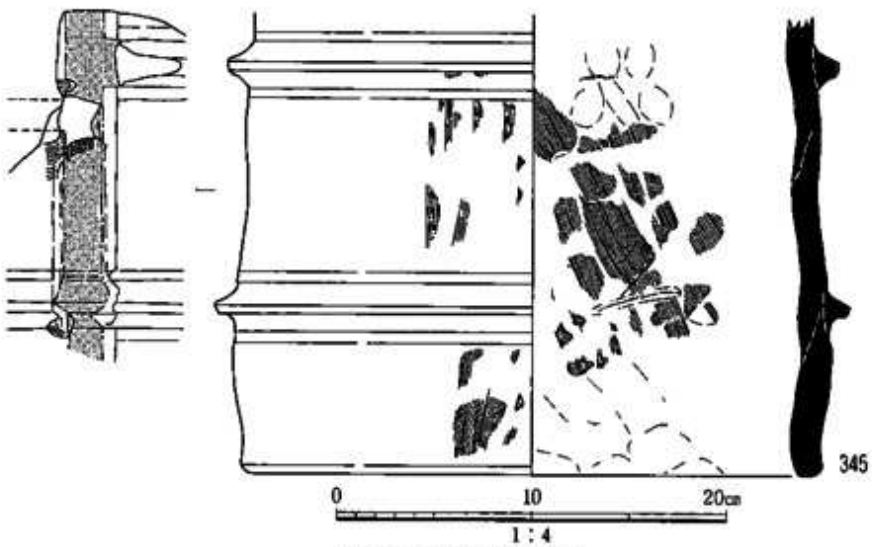


図73　不明形象埴輪(2)

造家の屋根かもしれない。色調は黄褐色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。

最後に、上記のほかの破片をまとめて記載する。これらは4層から10層にわたって出土した。338は緩やかな凸面をなす表面に線刻が施されている。表面に赤色顔料の付着が認められる。色調は黄色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。339は角がやや鋭角をなす平坦な粘土板の表面に刺突文が施されている。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。340には剥離面が多く、突帯などが貼付けられていたようである。部分的に残存する表面は段状をなしており、横方向の線刻が施されている。貼付けに際して刻み目を多用している。色調はにぶい褐色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。341は緩やかな凹面に線刻が施されている。盾形埴輪の盾面端部の可能性がある。色調は灰白色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。342は上下方向の断面が緩やかなS字状のカーブを描く破片で、表面に縦方向の線刻が見られる。色調は浅黄橙色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。343と344は同一器種と思われる破片である。横断面が弧を描き、下端での直径が約60cmに復元できる。下端部に幅5cm前後の突帯がある。343と344では突帯の断面形が若干異なっており、別個体と思われる。色調はにぶい黄褐色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。345は円筒埴輪に似るもので、垂直方向の剥離痕が見られる。当初、鰭付円筒埴輪かと思われたが、剥離痕が最下段のタガよりも下方に延びること、上段のタガが剥離痕を境に途切れ、やや下方に水平方向に延びる別の粘土帯が付着すること、最下段のタガが円筒埴輪よりもかなり低い位置にあることなどから、なんらかの形象埴輪の基底部と判断した。外面はタテハケ、内面はタテハケの後、粗いナデで調整されている。色調は淡黄色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

c．木製品(346～348、図74、図版46)

346はほぼ完形の鋤である。全長107.0cm、鋤先の長さ28.1cm、幅12.1cm、柄の長さ78.9cm、幅3.6cm、厚さ2.5cmである。鋤先の片面は平らで、他面は横断面が若干カーブをもち、前者の面が表と考えられる。現存する鋤先と柄の中軸はずれており、鋤先の輪郭も左右で異なる。使用痕と思われる磨滅はすべての側辺に及んでいる。したがって、片方の側辺を再加工した後、使用されていた可能性が高い。鉄製の刃先が付いていたような痕跡は認められない。柄は棒状で、端部に近づくほどやや細くなる。その断面形は端部付近で楕円形、鋤先に近い部分では隅丸方形である。板目材から削り出されており、樹種は顕微鏡による観察を行っていないが、肉眼観察によればカシ類の一種と思われる。

347は柄の端部がT字状で、握り部のある形態である。鋤先を欠き、残存長69.0cm、握り

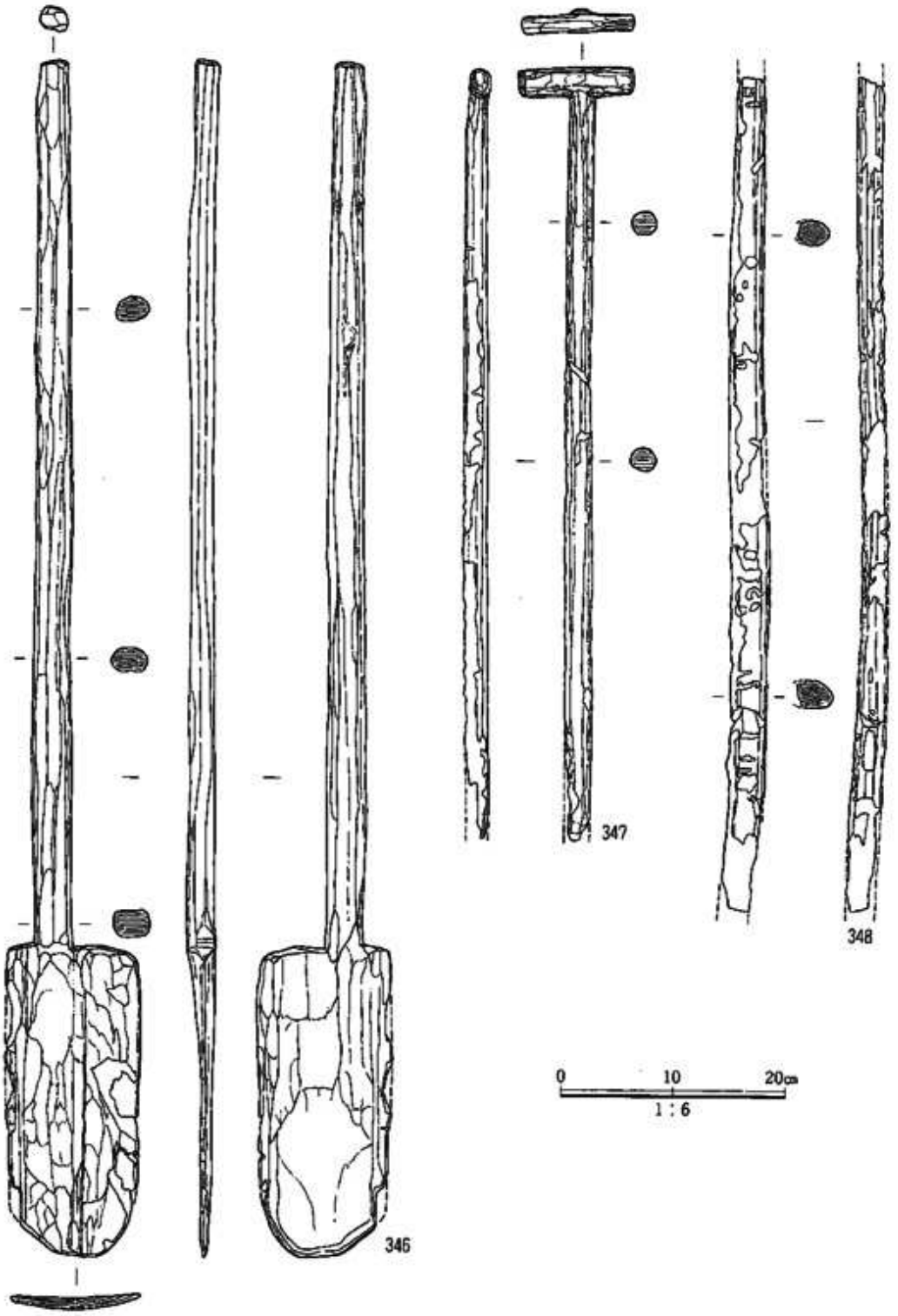


図74　木製品

部の幅10.4cm、厚さ1.7cm、柄の幅2.5cm、厚さ2.1cmである。柄は断面形が円形に近く、ほぼ同じ太さである。握り部は柄より薄く仕上げられており、断面形が隅丸長方形に近い。これも板目材から削り出されており、樹種は肉眼観察によればカシ類の一種と思われる。

348は棒状の製品で、両端を欠損する。残存長74.2cm、幅3.6cm、厚さ2.8cmで、中央から片方の端にかけて若干曲っている。断面は楕円形で、ほぼ同じ太さである。樹種は不明である。鍬あるいは鋤の柄である可能性がある。

3)小結

今回の発掘調査では、一ケ塚古墳の墳丘規模や形状および出土遺物の内容などに関して、新知見を得ることができた。

これまでの知見を総合すると、一ケ塚古墳は造出し付きの円墳と考えられる(図75)。その規模は円墳の墳丘裾の直径が47.4mに復元される。82－27次調査で検出された方形の造出しの規模は南北幅12.3m、東西の長さが7.0mと考えられ、造出しを含めた墳丘の最大長は53.6mである。周濠は幅約14m、深さ1.3～1.5m、周濠外縁での直径は71.2mに復元される。墳丘の形状は盛土の大半が削平されてしまっていることから築成段数は明らかでないが、2段あるいは3段築成であった可能性が考えられる。このうち1段目は地山を削り出して成形されたと推定される。周濠の推定掘削土量は約3,000m^3と算出され、これをすべて2段目として盛土したと仮定し、テラスの幅を2.5m、2段目基底の直径を38m、盛土の傾斜を30°としたばあい、盛土の高さは3.8m、墳頂の直径は24.8mと試算される。これらのことからみて、一ケ塚古墳は長原古墳群では塚ノ本古墳(第Ⅴ章第3節参照)に次ぐ規模の古墳であることが明確になった。また、古市古墳群中の円墳と比較しても、大型に属するものといえる。

遺物に関して、円筒埴輪はこれまでの調査で得られたものと同一型式の中で捉えることができ、一ケ塚古墳の築造時期を5世紀初頭頃と再確認した。また、本調査においても形象埴輪が多く見つかり、特に家形埴輪は内容が豊富で、破片がある程度得られたもので7個体、細片まで加えると10個体以上が確認できた。特に高床式入母屋造りの家形埴輪5は図76のように復元することができ、破風板両端間の平側の長さが約69cm、屋根下半部の平側の長さが約72cm、妻側幅が約56cm、基部下端から破風板上端までの高さが約80cmと推定される。好例は美園古墳で出土した高床式建物[渡辺昌宏1982]が知られており、[辰巳和弘1990]が「美園型」と称する形態である。「美園型」は長原古墳群中では塚ノ本古墳[長原遺

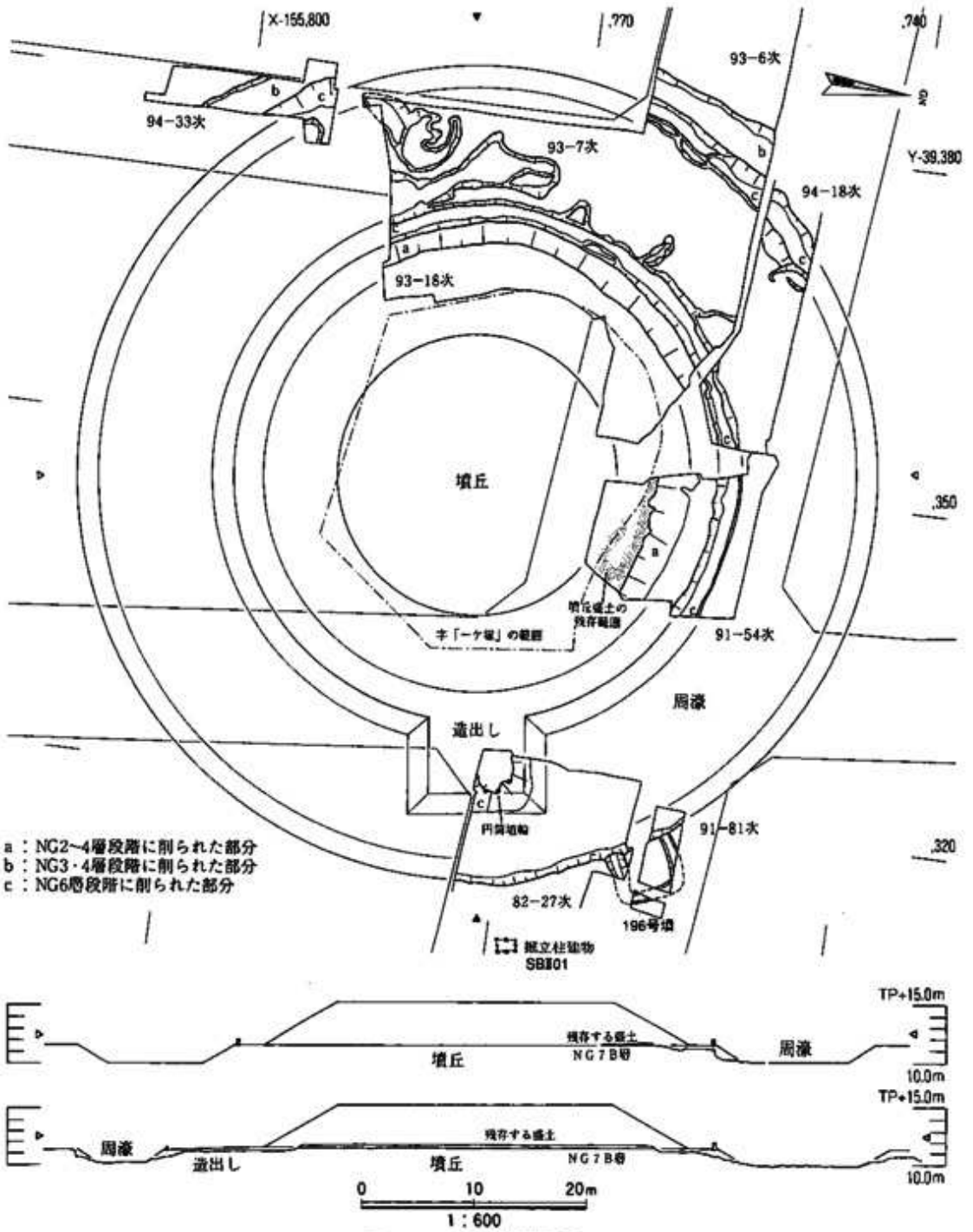


図75　一ケ塚古墳復元図

跡調査会1978]や高廻り2号墳[大阪市文化財協会1991a]、後述する一ケ塚古墳造出し部の調査でも確認されており([大阪市文化財協会1990a]の301〜307)、家形埴輪5は塚ノ本

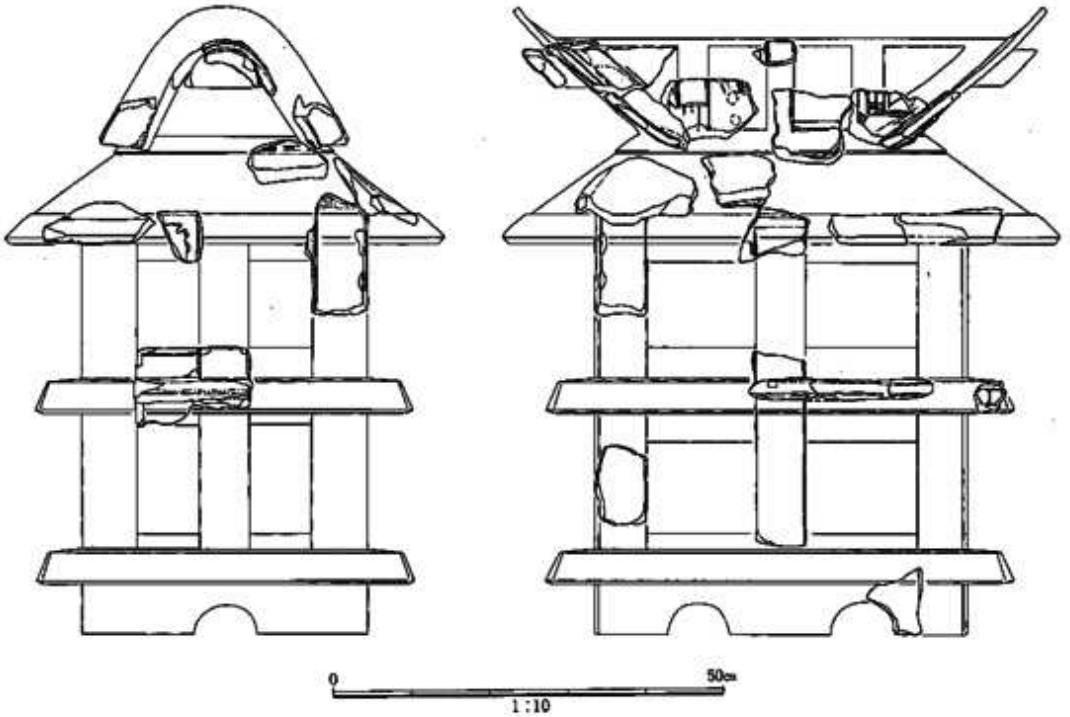


図76　家形埴輪５模式復元図

古墳のものに次いで大きい。[辰巳1990]は美園古墳例は「新嘗や首長権継承などの儀礼を行うための建物を表現したもの」とし、[岡村勝行1991]も高廻り２号墳例に「特別の意味が与えられていたこと」を確認した上で、「ある家形埴輪群の構成では、美園型は必要不可欠の家形埴輪であった」と想定している。本墳のばあい、家形埴輪５は家形埴輪群の中で最大の規模をもつと推測され、やはり中心的な役割を果たす建物を表現したものと考えられる。

また、埴輪の出土状況に関して、円筒埴輪と形象埴輪で出土層準を検討すると、下位層準に集中して見られた円筒埴輪の良好な破片は、古墳完成後の比較的早い時期に崩落した可能性が高い。これに対して、形象埴輪は最下層からはほとんど出土せず、かなり後まで墳丘上に残っていた可能性がうかがわれる。このような点から、墳丘を巡る円筒埴輪列の内側に今回出土した形象埴輪群があったことが確認できよう。

一方、1982年度の造出し周辺の調査でも７個体の家形埴輪を含む多数の埴輪が出土したが、これらの大半は本調査でいう10層以下の層準から出土している。したがって、これらは古墳が完成した後、比較的早い段階に崩落したものと思われる。また、これらと今回の資料の間には接合関係がほとんどなく、家形埴輪はすべて別個体と考えられる。さらに、両者における器種構成には違いがあり、造出し周辺には今回見られなかった靱形や壺形埴

輪が見られた。したがって、1982年度に出土した埴輪の多くは造出し上に樹立されていたもので、今回出土したものとは別の区画に配置されていたと考えられる。しかし、両者には関連性もうかがわれ、今回の家形埴輪１・２などでは法量や製作技法において、1982年度出土資料との類似性が指摘できる。このような状況と、本墳で最大規模の「美園型」家形埴輪５が含まれることからみて、今回の形象埴輪の多くは、中心的な区画に配置されていたと考えられるのではなかろうか。

以上のことから、今回出土した埴輪群の検討は、一ケ塚古墳における中心的な埴輪様式を復元する上で重要といえる。1994年度の区画整理事業でも周濠の調査が行われているので、その出土遺物も加えた総合的な検討が、引き続いて刊行予定である『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズ上で行われる予定である。

また、周濠の底付近から見つかった木製農具も重要な資料となろう。二次的な加工痕からみて実用品と考えられ、出土位置や層準からみて、一ケ塚古墳に伴う資料である可能性が高いものである。古墳の築造の際、あるいは葬送儀礼に用いられたものと推測されるが、判断は困難である。将来的に類例や解釈に関して検討することとし、本書では事実報告にとどめたい。

さらに、SD601や周濠内からは、一ケ塚古墳より新しい５世紀末から６世紀初頭に属する多くの埴輪片が出土した。同時期の須恵器も出土しており、当該期に属する古墳が近在する可能性が高い。

以上のように、本調査は一ケ塚古墳および長原古墳群の調査研究に当って、数々の貴重な資料を提供したといえる。

第２節　NG93－22次調査

１)層序とその遺物

ｉ)層序(図77、図版18、表８)

調査地は標高約13mの平坦面であり、厚さ約0.6mの現代客土(長原０層)の下位に1a層(長原１層)～７層(低位段丘構成層)が分布した。層序は下表のとおりである。なお、３層と４層の細部については、長原遺跡標準層序との詳細な対比ができなかった。

１層は現代作土層で、下位の1b層は機械化以前の人力によって耕起された作土の部分である。3a・3b層はSD301を構成した。3b層段階には調査地南部で、本層堆積後の人為擾乱が認められ、堆積構造が変形していた。4a2層は暗色を呈しており、その下面は不規則な凹凸が観察されたが、水成層の層相を保つため、作土とは判定されなかった。4b層は調査地南部では4a層の直下にあり、北部では下位層を削剥して１m以上の層厚があり、低位段丘構成層以上の下位層に由来する長径１mを最大とする多数の粘土偽礫を含有した。4c層は暗色帯を構成し、調査地中央に分布する下位層上に分布しており、遺構SK401、SD401・

表８　93－22次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代客土	60			
NG1	1a層	現代作土	15			作土
NG1.5	1b層	黄褐色(2.5Y5/3)極粒砂質シルト	2-12			作土
NG2	2層	含細礫黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂～極粗粒砂	10-20	▽SD201～203	土師器・須恵器・瓦器・磁器・陶器・瓦	作土
NG3	3a層	黄褐色(2.5Y5/3)中粒～粗粒砂質シルト	10		土師器・須恵器・瓦器・磁器・陶器・サヌカイト剥片	
	3b層	含炭褐色粘土偽礫にぶい黄色(2.5Y6/5)シルト質砂～砂礫	10-30	←SD301	土師器・須恵器・瓦器・陶器	人為擾乱
NG4	4a1層	褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト～粘土	20			水成
	4a2層	にぶい黄褐色(10YR4/5)細粒砂質シルト	15-35	▽凹凸		水成
	4b1層	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質砂	40		ウマ歯	水成
	4b2層	黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト	≧100		土師器・瓦器	水成
	4c層	暗褐色(10YR3/4)砂質シルト～粘土	5	←SK401,SD401・402	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	暗色帯
NG5・6	5a層	灰～にぶい黄褐色(10YR5/6)砂礫	≧100		土師器・須恵器・埴輪	水成
	5b層	緑灰色(7.5GY5/1)極細粒砂質シルト	12			水成
NG7～12	6層	暗褐色(10YR3/3)シルト	5	△SD701　▽乾痕	埴輪(上面)	古土壌
低位段丘構成層	7層	黄灰色(2.5Y6/1)シルト	≧15			

△：上面検出遺構　←：地層内検出遺構　▽：下面検出遺構

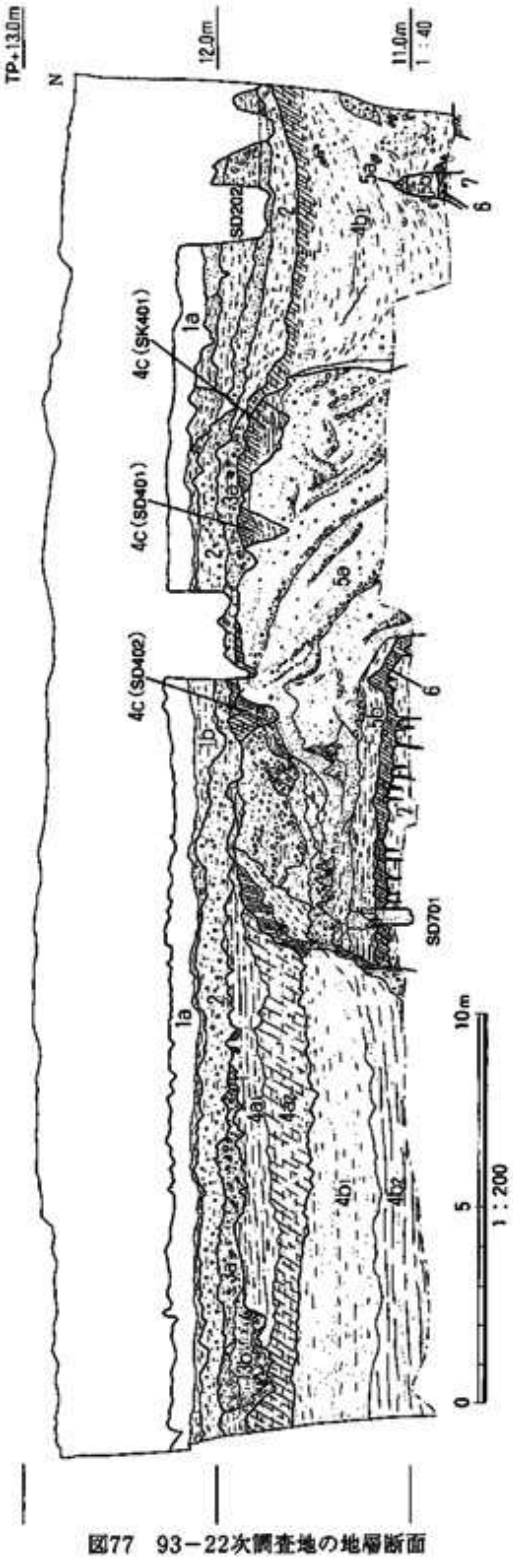


図77　93－22次調査地の地層断面

402を構成した。

5層は調査地中央に層厚1m以上で残丘状に残された水成層である。5a層は斜交葉理が顕著に発達する砂礫層で、下部の5b層は極細粒砂質シルト層であった。5層は周辺調査地の層序や後述する6層の年代観からみて、長原5・6層の水成層に相当し、5a層は長原5層である可能性が高い。

6層は平均層厚0.05mで、調査地北部の一部と中央部に残存し、下半部は色がやや薄かった。上面から埴輪片が出土したことから長原7層以下の層準に相当すると思われる。また、下面に顕著な乾痕が観察されたことから本層は埋没古土壌と考えることができる。このようなことから6層の堆積年代は、長原12～7層の堆積期間を含むと思われる。

7層は低位段丘構成層であり、層厚0.15m以上で下限は不明であった。

ii)各層の出土遺物(図78)

コンテナパットに1箱分出土した。

351は4a・4b層から出土した瓦器椀で、内面に粗いヘラミガキが見られる。12世紀末～13世紀前半のものである。

352は4c・5層から出土した須恵器壺底部である。断面三角形の低い高台が付き、その上位に突帯が貼付けられる。平安時代に属するものかもしれない。

353は6層上面から出土した(写真13)

朝顔形埴輪の口縁部から頸部にかけての破片である。内外面とも斜め方向のハケで調整され、さらに粘土紐接合部付近の内面はナデで調整されている。外面にはハケで調整する前のユビオサエ痕が残る。色調は浅黄橙色で、須恵質に焼成されている。5世紀末～6世紀前半頃のもので、6層が長原古墳群形成期の長原7B層の堆積期間を含むと考えられることから、近隣の古墳に伴っていた遺物の可能性がある。

写真13　93－22次調査6層上面朝顔形埴輪出土状況

なお、北端の4b層中に含まれる偽礫の付近からウマの下顎臼歯と骨片も出土した。

2）遺構とその遺物

いくつかの遺構を検出したが、調査面積が狭かったために、遺構の性格を正確に把握するにはいたらなかったものもある。

i）江戸時代（図79、図版19）

4層上位の2層下面で溝を3条検出した。農耕に関連するものと思われる。

SD201（図78）　調査区中央部で検出したほぼ南北方向の溝である。幅は0.7m以上、深さは0.08m以下で浅く、底は平らであった。埋土は不淘汰の礫混りシルト質砂であった。後述の**SD202・203**より新しい。青花碗**349**が出土した。

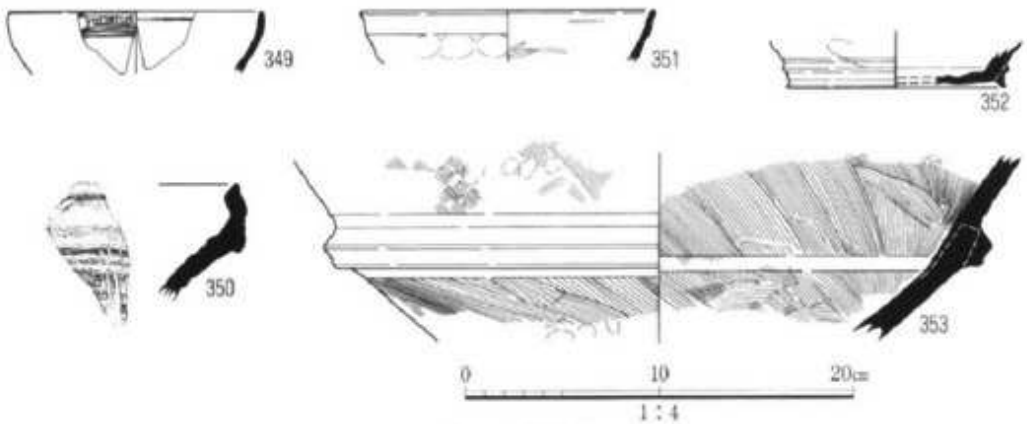


図78　出土遺物

SD201（349）、SD301（350）、4a・4b層（351）、4c・5層（352）、6層（353）

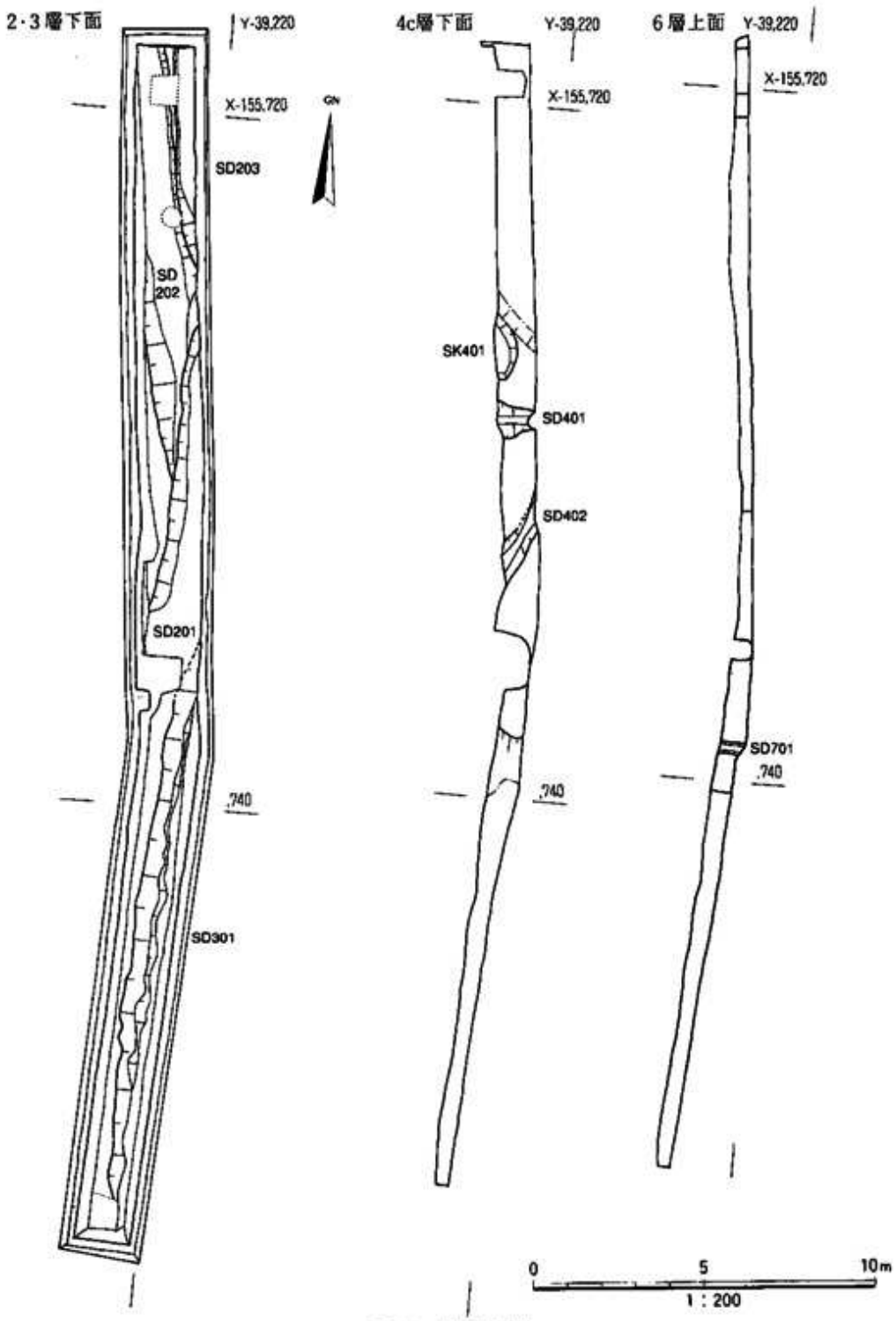

2・3層下面
Y-39,220
X-155,720
GN
SD203
SD
202
SD201
,740
SD301
4c層下面
Y-39,220
X-155,720
SK401
SD401
SD402
,740
6層上面
Y-39,220
X-155,720
SD701
,740
0
5
10m
1 : 200

図79　遺構平面図

349は口縁部の内外面に呉須で文様が描かれている。体部下半はケズリ調整である。16世紀後半頃のものと思われる。

SD202　調査区北部で検出した北北西方向の溝である。幅は約1m、深さは0.45mで、斜面中央には緩く段があった。埋土は上位より極細粒砂、粗粒砂質シルト、砂礫、シルト質粗粒砂の薄層であった。上から3層目の砂礫層が堆積した後、浚渫されて幅広となり、斜面中央に段ができたものと考えられた。唐津焼や瓦器が出土した。

SD203　調査区北部で検出したSD202に平行する溝である。幅は0.6m以上、深さは0.08m以下で浅く、底は平らであった。埋土は淘汰不良の礫混りシルト質砂であった。

ii)室町時代(図79、図版19)

3b層内で溝SD301を検出した。

SD301(図78)　調査区南部で検出したほぼ南北方向の溝で、北端で北北東へ方向を緩く変える。幅は1m以上、深さは0.25mで、斜面中央に明瞭な段があった。埋土は淘汰不良の細礫含有中粒～細粒砂質シルトであった。農耕に関連する溝と思われる。備前焼擂鉢350や土師器・瓦器などが出土した。350は16世紀後半頃のものと思われる。

iii)平安・鎌倉時代(図79)

4c層内でSD401・402、SK401を検出した。遺物は土器の細片しか出土しなかった。

SD401　調査区中央部で検出した東西方向の溝である。最大幅1.1m、深さ0.25mで、断面形は緩いV字形であった。埋土は上半部が暗色を帯びる砂質シルト、下半部がシルトであった。

SD402　調査区中央部で検出した北北東方向の溝である。最大幅0.7m、深さ0.25mで、断面形は緩いU字形であった。埋土は上半部が暗色を帯びる砂質シルト、下半部は粘土質シルトであった。粗粒砂のラミナが観察された。

SK401　調査区中央部で検出した窪みである。長軸1.8m以上、短軸0.7m以上、深さは0.2mで、底はほぼ平らであった。埋土は上半部が暗色を帯びる砂質粘土、下半部が粘土であった。

iv)飛鳥時代(図79、図版19)

SD701　調査区中央部において6層上面で検出したほぼ東西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.2mで、断面形は深いU字形であった。埋土は5b層の同時異相である粗粒砂であった。開発に伴う用水に関係するものと思われる。

3)小結

本調査地には長原1～6層、長原7～12層の古土壌、低位段丘構成層が分布した。本調査地は旧東除川の西岸付近に当るため、旧東除川開削以降に堆積した地層は、河川の影響を強く受けたものと考えられる。以下、調査結果と従来の知見を踏まえて、本調査で考察した遺跡の形成史をまとめる。

低位段丘構成層上面に、長原7～12層が形成された時までに、本調査地には河川の影響はみられない。したがって、長く台地であったと考えられる。その後SD701が掘削されて以降に水成層の堆積が発達し始めることは、長原7A層形成期に旧東除川が形成されたとする見解と一致する。周辺ではこれまでに長原6B層上面の南北方向の溝が多く検出されており[大阪市文化財協会1997c]、これらは東除川あるいはその前身流路を水源とする灌漑用水路と考えられている[京嶋覚1990]。しかし、長原7層段階の溝は現段階ではわずかしか検出されておらず、SD701にはその可能性があるかもしれない。

SD701を埋積する5b層は長原6層中の水成層である可能性があり、これを覆う5a層は長原5層と考えられる。5a層をもたらした河川の氾濫に関連して、5a層の層厚は従来知られている長原5層の中でも最大級であることから、旧東除川はごく近接したところを流れていたと考えられる。

長原4層下部形成期には、河川環境はある程度の安定期に入り、5層上面に暗色帯が形成された。SK401、SD401・402などの遺構は、居住に関連して作られたものかもしれない。長原4層中・上部(4b・4a層)は流水が下位層を削剥した後に堆積した地層であり、この時期に再び河川環境が悪化したと考えられる。この削剥個所は旧東除川の河道内に当り、本調査区内に旧東除川の西肩が位置したものと推測される。また、4層中部の中にあった巨大な偽礫は、河川の堤防か周辺の古墳の墳丘に由来するかと想像される。

長原2～3層形成期には、溝SD201～203・301が作られ、SD202・203は旧東除川の流路方向に規制されたと考えられる。旧東除川沿いの巧みな土地利用は、当地域の地籍図からも推定されるところである。

第3節　NG93－31次調査

1)層序とその遺物

現代客土以下には1層(長原2層)～7層(長原6・7層)を確認した(図80、表9、写真15)。1・2層は作土で、3～5層は旧東除川に係わる洪水性の堆積物と思われる。3層から17世紀後半～18世紀初めに属する丹波焼擂鉢が出土した。4・5層には出土遺物がなかったため、その堆積年代は不明で、周辺調査地の事例から長原2～4層に対比しておく。5層は下位層を削剥することが調査地北部において観察された。6層は水成構造をもつ暗オリーブ灰色粘土で、長原5層に相当すると思われる。7層は黒褐色シルト質粘土で、上面に踏込みが観察された。作土の可能性が考えられるが、水田畦畔は断面、平面ともに検出できなかった。長原6・7層中のいずれかの層準に相当すると思われる。

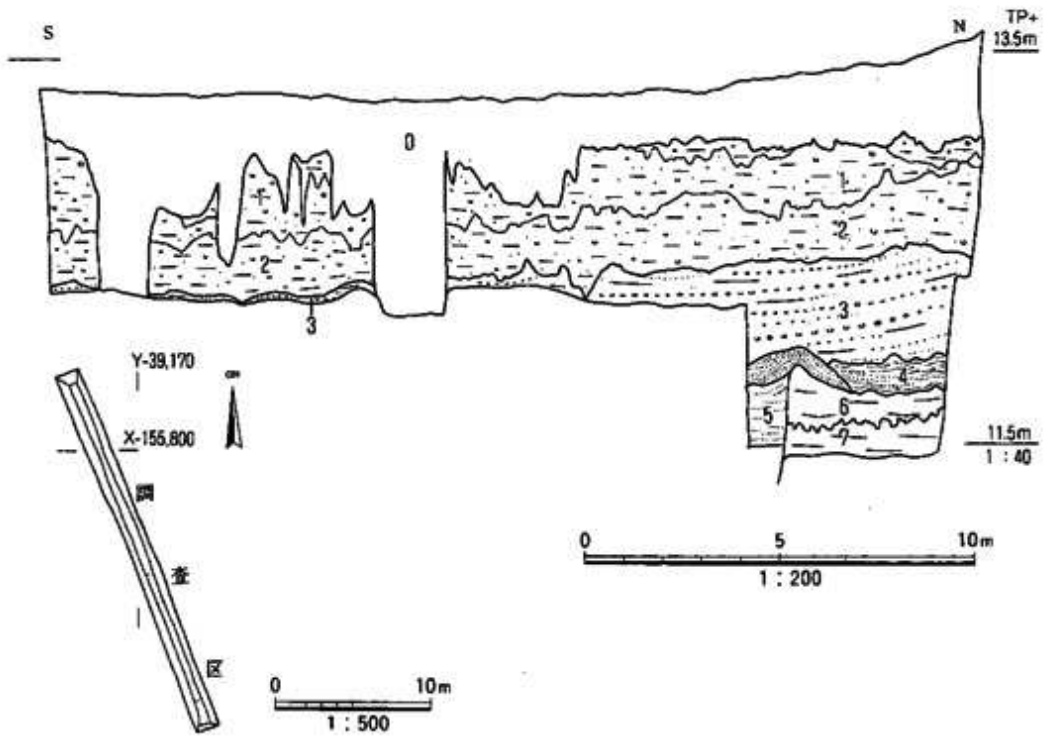


図80　93－31次調査地の地層断面

表9　93－31次調査地の層序

標準層序	層序	層　相	層厚 (cm)	遺　構	遺　物	特　徴
NG0	0層	現代客土	ave.25			
NG2	1層	黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂	30			作土
	2層	褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂	40		土師器・陶磁器・瓦	作土
	3層	明褐色(7.5YR5/6)砂礫	50-60		丹波焼	水成
NG2～4	4層	黄褐色(2.5YR5/3)シルト質細粒砂	12			
	5層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質細粒砂	≧30			
NG5	6層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土	≦30			水成
NG6･7	7層	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	≦20	▲踏込み		

▲：上面検出遺構

2）小結

本調査では、調査区の幅が狭かったため、層序を確認するにとどまった。北接する91－30次の成果[大阪市文化財協会1997c]によれば、少なくとも中世以降の旧東除川は本調査地のすぐ西側を北北西方向に流れていた。したがって、本調査地でもその影響は大きかったはずであり、それは長原２～４層に対比しうる洪水性堆積物として認められた。91－30次ではこれらの層準が長原５層以下の層準を深く削剥して河道の東西の肩を形成しているのが確認されているので、本調査地北部で見られた削剥個所も旧東除川の東肩に相当する可能性がある。

写真14　93－31次調査地全景(南から)

写真15　地層断面(南から)

第Ⅳ章　長原遺跡中央地区の調査結果

第１節　NG93－76次調査

１)層序とその遺物

本調査地では現代客土の下位に、現代作土から縄文時代の地層までが良好に残存していた(図81、図版21)。各層の特徴は下表のとおりである。

１～12層は作土層と水成層の互層で、沖積層上部層Ⅰに相当する。５～10層からは遺物がほとんど出土せず、長原遺跡標準層序との対比は、上下の遺物出土層準と層相から推測

表10　93－76次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代客土	≧100			
NG1	1層	現代作土				
NG2	2層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)含礫砂質シルト	<20	▼染付碗	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器	作土
NG4B	3層	黄褐色(2.5Y5/4)中粒～細粒砂質シルト	<10		土師器・須恵器・黒色土器・瓦器(少)	水成
NG4C	4層	暗褐色(10YR3/4)シルト質砂礫	<20	▼SB401～403,SD401～403他,SE401,SK401	土師器・須恵器・黒色土器	作土
	5層	黄褐色(10YR5/8)粗粒砂～巨礫	10-20			水成
	6層	含礫黄褐色(2.5Y5/6)粘土質中粒砂	<15	▲SD404,SR401	土師器	作土
NG5	7層	黄褐色(2.5Y5/6)粗粒砂～礫	≦10			水成
NG6Ai	8層	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質中粒～粗粒砂	<15	▲足跡(ウシ)		作土？
NG6Aii	9層	暗オリーブ色(5Y4/3)中粒～細粒砂	≦30			水成
	10層	灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂～礫	<20			水成
NG6Bi	11層	灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粘土	<20	▲SR601～602,足跡	土師器・須恵器	作土
NG6Bii or7A	12層	含礫黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土	<15	▼SD601・602	土師器・須恵器・モモ核	作土
NG7B	13層	オリーブ黒色(5Y2/2)シルト	<5	←SD701～704他,SK701,SX701～SX704他	土師器・須恵器・弥生土器(後期)	暗色帯
NG9-12	14層	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	<15	←SX901・902	縄文土器(晩期)・モモ核・石鏃(縄文～弥生前期)	
NG12/13	15層	オリーブ灰色(5GY6/1)シルト	<10		石鏃(縄文早前期)	
NG13	16層	灰色(5Y5/1)粘土	≦25			
NG13C-14	17層	明緑灰色(7.5GY7/1)粘土	≦30			
NG15	18層	暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質砂礫	≦20			

▲：上面検出遺構　←：地層内検出遺構　▼：下面検出遺構

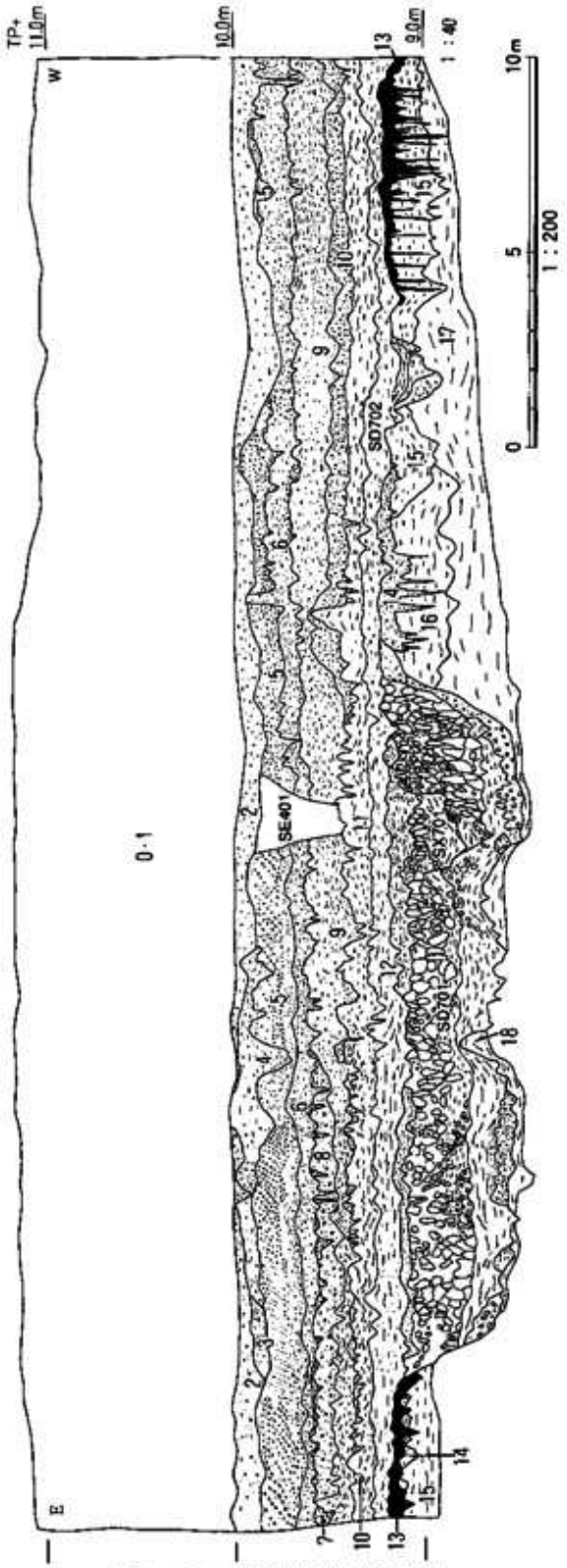


図81　93－76次調査地の地層断面

した。地形面は緩やかに東へ下降し、それを南北方向の畦畔や溝で区画する共通性がうかがわれる。作土層のうち、6層は攪拌が顕著でなく、比較的短期間の耕作によるものと思われる。8層上面にはウシの足跡が認められたが(写真16)、作土である確証は少ない。水成層は下位から順に10・9・7・5・3層があり、特に5層が厚く残る。層相も東に向って粗粒化する傾向がある。4層の段階にのみ集落遺構が認められた。

13～15層は沖積層上部層Ⅱ～同中部層に相当する。13層は土師器・須恵器が多く含まれる暗色帯で、弥生時代後期～古墳時代中期の遺構が認められた。14層には縄文時代の石鏃が含まれ、上部では縄文時代晩期の土器片がまとまって出土した。15層からは縄文時代早～中期の石鏃が出土した。前者が長原9～12層に、後者が長原12／13層漸移帯に相当すると思われる。

16～18層はいわゆる地山で、低位段丘構成層に相当する。

遺物は12層から出土したものを示した(図82、図版48)。縄文土器および石鏃は次項で述べる。

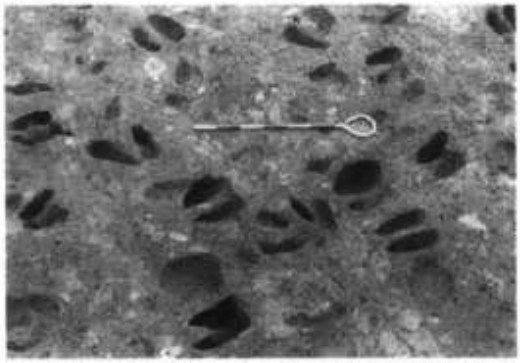


写真16　93－76次調査８層上面ウシ足跡(南から)

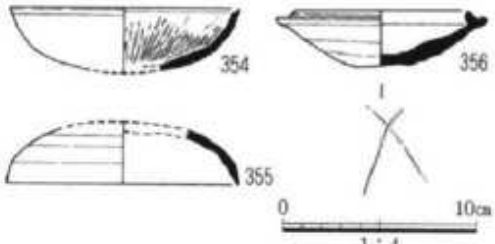


図82　12層出土土器

354は口径12.0cm、器高が3.4cmに復元される土師器杯である。内面には放射状暗文が施される。飛鳥Ⅲに属すると思われる。355は須恵器杯蓋、356は杯身である。355は口径11.9cmに復元される。356は口径9.0cm、器高2.9cmで、立上がりは低く内傾する。底部はヘラ切り後不調整で、ヘラケズリの範囲は狭く、底面に×字形のヘラ記号が見られる。両者ともTK217型式の新しい段階に相当する。

2)遺構とその遺物

i)江戸時代(図83)

黎溝群　2層下面で東西および南北方向の小溝を多数検出した。いずれも幅0.2～0.3m、深さ0.10～0.15mで、耕作に伴う黎溝と考えられる。17世紀頃の肥前磁器が出土した。

ii)平安時代中期(図83、図版20)

平安時代の遺構は2面で検出された。まず、上位面のものを記載する。遺構は西部では5層上位の2層基底面、東部では4層下面で検出されたが、出土遺物からみると近接した時期の遺構と考えられる。遺構には掘立柱建物・柵・井戸のほか、多数のピットや土壙・溝などがある。

a．掘立柱建物

調査地の西半で3棟確認した。

SB401(図84・85、図版48)　東西3間(6.9m)、南北2間(4.4m)以上の総柱建物であろう。柱間は東西が2.2～2.3m、南北が2.2mである。柱穴は平面形が直径0.2～0.4mの円形で、深さは0.1～0.2mである。土師器357や黒色土器が出土した。

357(図85)は口径8.9cm、器高2.4cmの土師器小皿である。底部にはユビオサエの痕が残り、ほかの部分はナデ調整である。色調は淡黄褐色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含

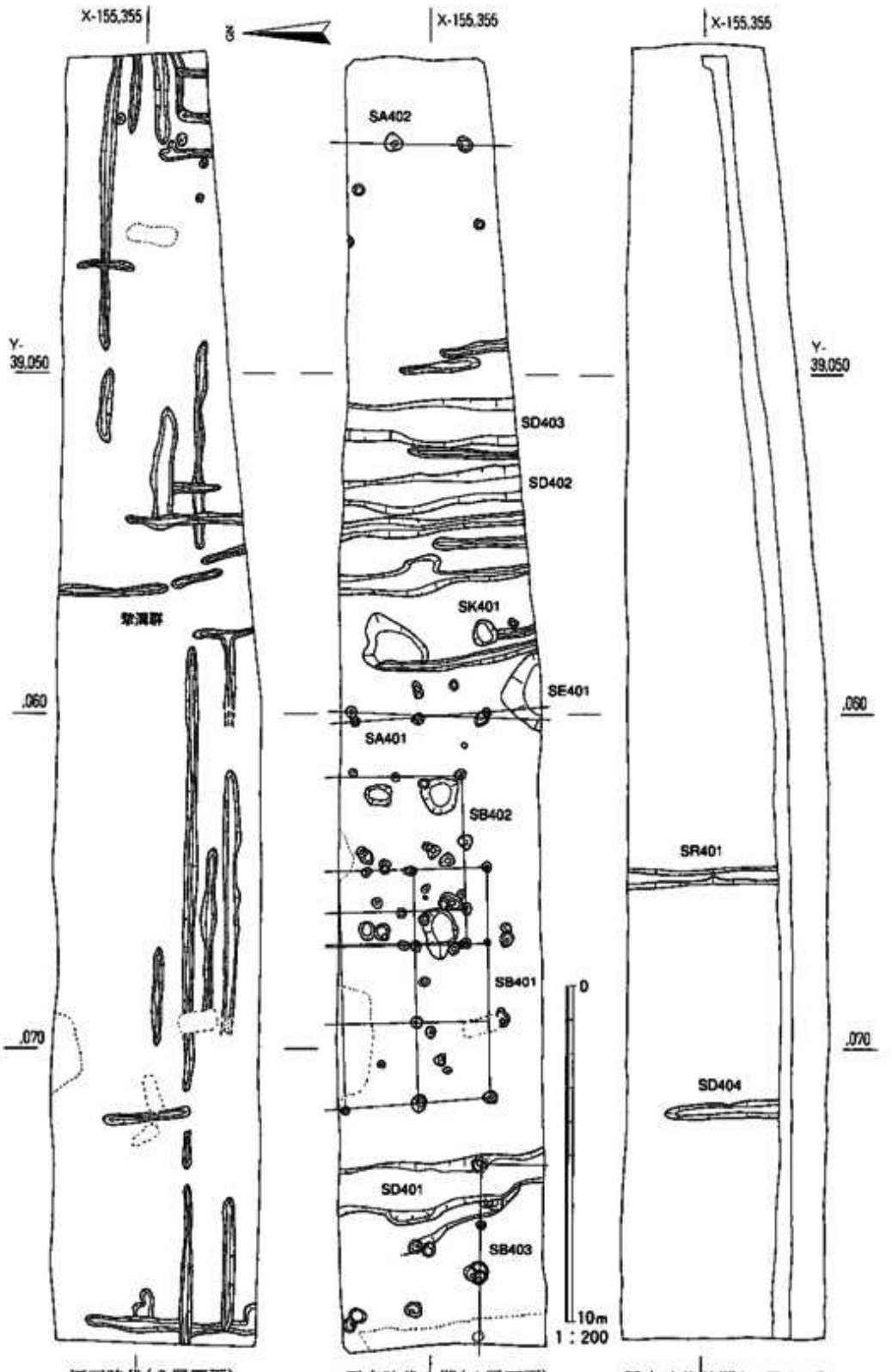


図83　平安～江戸時代の遺構平面図

む。平安時代Ⅲ期古段階に属し、10世紀末～11世紀初めのものであろう。

SB402(図84)　東西2間(3.9m)、南北1間(2.0m)以上の側柱建物で、西側に庇が付くと考えられる。柱間は東西が1.9m、南北が2.0mである。柱穴の形態や規模はSB401と近似するが、庇を支えていたと思われる柱穴は若干小さい。土師器や灰釉陶器片が出土した。

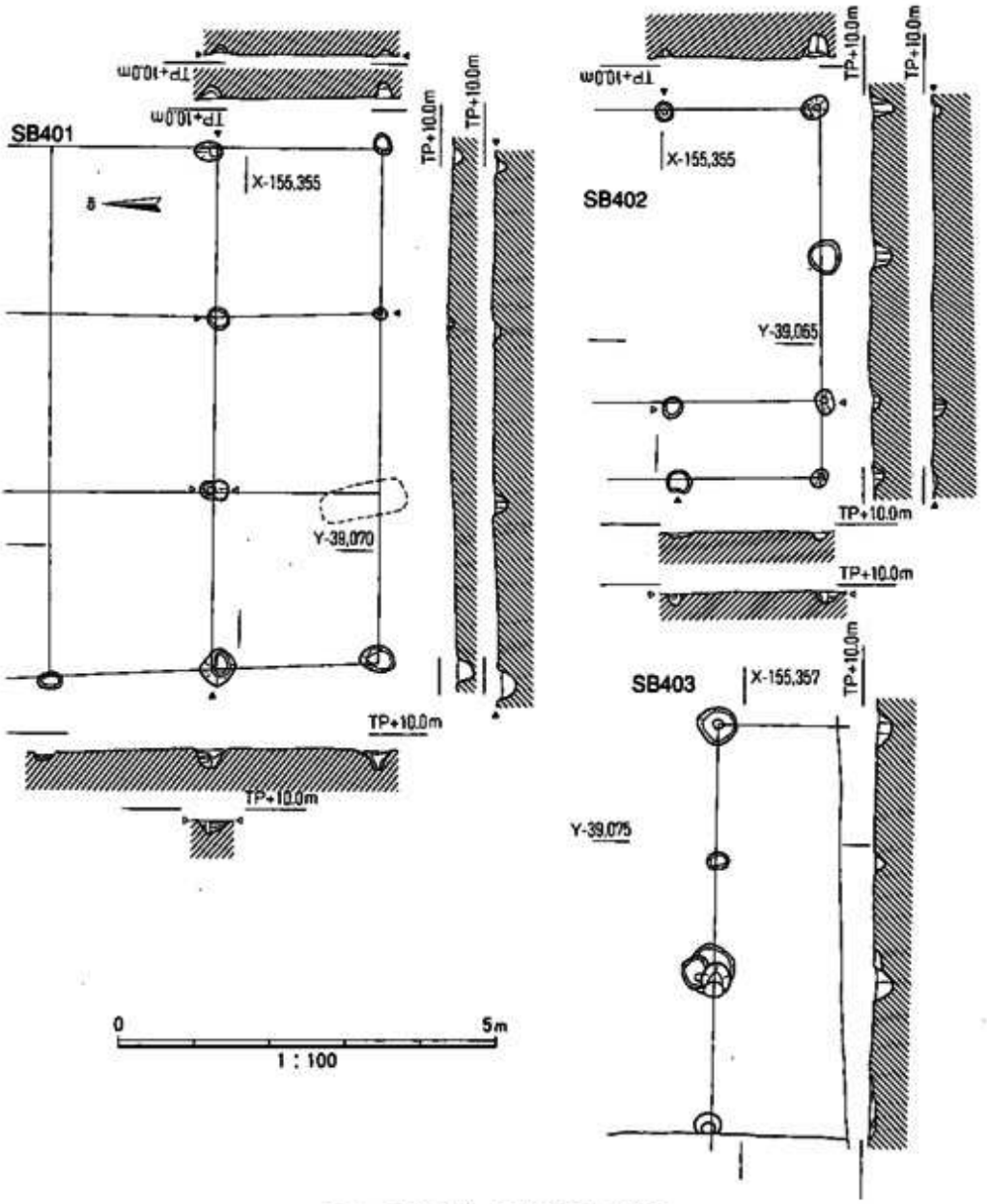


図84　平安時代の掘立柱建物実測図

SB403(図84・85)　東西３間(5.4m)以上、南北１間以上で、柱間は1.8～1.9mである。切合い関係からみてSD401よりも古い。柱穴の形態や規模はSB401と近似し、土師器361や炭化米などが出土した。

361は口径が14.0cmに復元される土師器椀で、体部から口縁部が直線的に開き、口縁部が強くナデで調整される。体部外面にはユビオサエの痕が残る。色調は淡黄褐色で、胎土中に石英・長石・チャートなどの砂粒を含む。平安時代Ⅱ期に属し、９世紀前半～中頃のものと思われる。

b．柵

調査地の東半で２条確認した。

SA401(図85、図版48)　建物群の東脇で検出した南北方向の柵で、２間分を確認した。柱穴は建物のものと同様な形態・規模で、柱間は２m前後である。柱穴の重なりから少なくとも一度は造り替えられたと思われる。土師器小皿358・椀359・360および黒色土器A類椀366などが出土した。

358は口径が9.5cmに復元されるいわゆる「て」の字状口縁の皿である。器壁は薄く、色調は淡黄灰色で、胎土は緻密である。359・360は口縁部が強くナデられ、外反する。口径は359が10.1cm、360が11.0cmである。色調は浅黄色で、胎土中に石英・長石粒を多く含む。366は口径が14cm前後と推定され、内面はていねいにヘラミガキが施されている。胎土には石英・長石がわずかに含まれる。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属し、10世紀末～11世

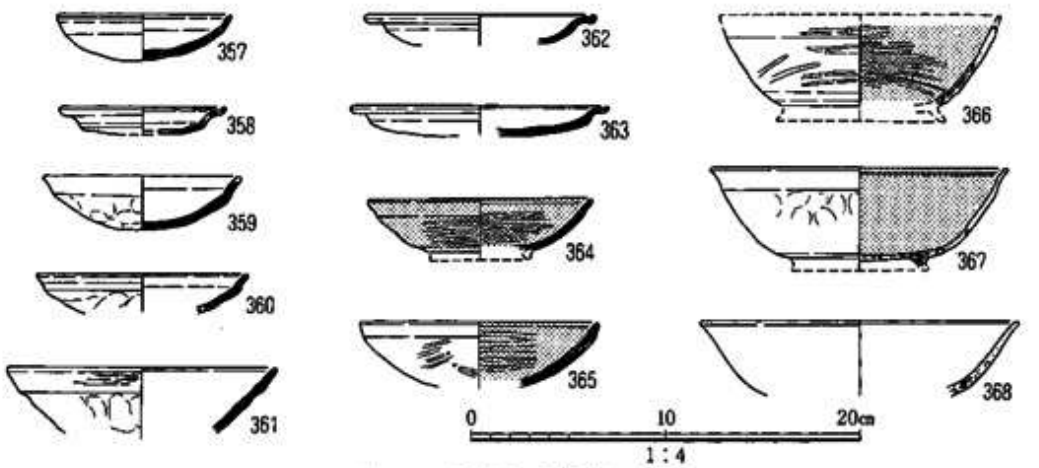


図85　平安時代の遺構出土土器
SA401(358～360・366)、SB401(357)、SB403(361)、
SD401(362・365・368)、SD402(363・364・367)

紀初頭のものと思われる。

SA402　調査区の東端に位置する南北方向の柵で、1間分のみを確認した。出土遺物はなかった。

上記の建物や柵に組み合わない柱穴も約35基検出された。これらの中には**SB401・402**に重複する位置でも認められ、建物の建替えが2回以上行われたと推測される。

c．溝

SD401は西部で、ほかの溝は東部で検出した。

SD401(図85)　幅1.5m、深さ0.1mの南北方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで、炭化材が多く含まれる。土師器皿**362**、黒色土器A類椀**365**、灰釉陶器椀**368**などが出土した。

362は口径11.8cmのいわゆる「て」の字状口縁の皿である。器壁は薄く、色調は灰白色で、胎土は緻密である。**365**は浅い椀と思われ、内面はていねいにヘラミガキされ、口縁部は強くナデ調整されている。胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。**368**は口径が16.0cmに復元され、口縁部は緩く外反する。**362・365**は平安時代Ⅲ期古段階に属し、遺構の年代を示すと思われる。これに対して、**368**は猿投窯の編年では黒笹90(K－90)号窯式に属すると思われ、やや古相を示す。

SD402(図85)　幅1.1m、深さ0.2mの南北方向の溝である。東部に位置する溝の中では深い。土師器皿**363**、黒色土器B類椀**364**、同A類椀**367**などが出土した。

363は口径13.1cmのいわゆる「て」の字状口縁の皿である。器壁は薄く、色調は灰白色で、胎土は緻密である。**364**は口径11.6cmの浅い椀で、口縁端部内面に段がある。内外面ともていねいにヘラミガキ調整される。**367**は口径15.2cmで、口縁端部内面に段がある。**364・367**は胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属し、10世紀末～11世紀初頭のものと思われる。

SD403　幅1.4m、深さ0.1mの南北方向の溝である。出土遺物はなかった。

このほかにも**SD402・403**周辺で小溝を8条検出した。いずれも埋土は4層である。方位は同様であるが、規模は幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.10mと小さく、底面に掘削痕を残すものがあることから耕作に伴うものと考えられる。土師器・黒色土器

写真17　SE401(北から)

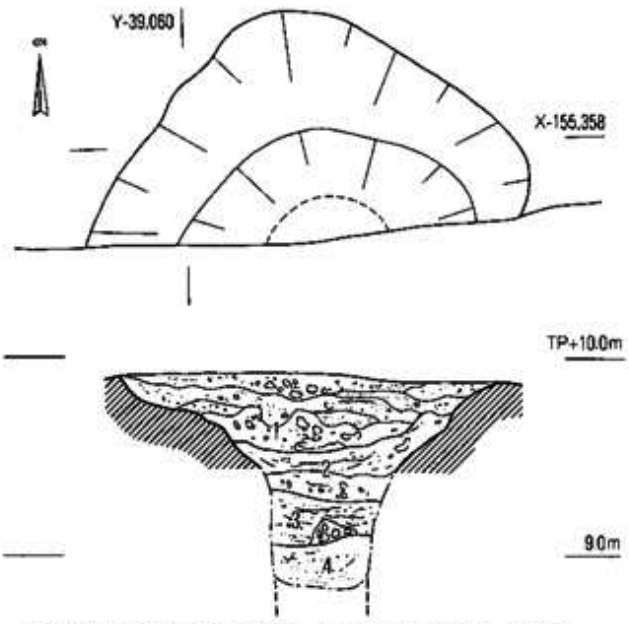


図86　SE401実測図

の細片が出土した。これらの溝の時期はSD402とほぼ同じ、10世紀末～11世紀初頭と思われる。

d．井戸

SE401(図86、写真17)　調査区中央の南壁にかかって検出された井戸である。道路に影響が及ぶ危険があったため完掘できなかった。直径は2.4m、深さは1.4m以上と推定される。埋土の下部は偽礫を含む水成層、最上部は偽礫を含む埋戻し土であった。掘削深度内では井戸側は確認できず、出土遺物もなかった。

e．土壙

SK401　SE401の北東で検出した土壙である。平面形は不整円形で、長径0.8m、深さ0.3mである。埋土は灰オリーブ色粘土質粗粒砂である。平安時代Ⅲ期古段階に属する土師器・黒色土器の破片が出土した。

iii)平安時代前期(図83)

平安時代の遺構面の下位面は6層上面である。遺構には水田およびこれに係わる溝と畦畔がある。6層の攪拌の程度が顕著でないことから、当水田は短期間しか営まれなかった可能性が高い。

SD404　ほぼ正南北方向の溝で、調査区半ばで途切れていた。幅0.5m、深さ0.15mで埋土は5層の水成層である。出土遺物はなかった。

SR401　ほぼ正南北方向の畦畔で、幅0.5m、高さ0.15mである。

iv)飛鳥時代(図87、図版20)

11層上面で水田とこれに係わる畦畔SR601・602を検出した。水田面にはヒトの足跡が顕著に見られた。12層下面では溝SD601・602を検出した。

SR601　幅0.9m、高さ0.2mで、SR602よりも規模が大きい。SR601はSR401の東約0.2mの位置で検出し、SR401がほぼ正南北を指向しているのに対して、SR601は北でやや東

に振る。

SR602　幅0.4～0.8m、高さ0.05mである。方位はSR601と同様である。

SD601　幅0.7m、深さ0.05mの南北方向の溝で、遺物は出土しなかった。

SD602　幅0.3m、深さ0.05mの南北方向の溝で、遺物は出土しなかった。

v)古墳時代(図87、図版20)

多数の溝やピット、性格不明の落込みを検出した。これらの多くは13層上位の12層基底面で検出されたが、13層を除去しないと遺構の輪郭がはっきりしないものもあった。ここでは、12層が作土であることを考慮して、13層内検出遺構と捉えておくことにする。

a．溝

SD701(図88～92、図版21・22・47・48)　幅1.3～1.5m、深さ0.5～0.7mの溝で、調査区を北西から南東へやや蛇行ぎみに横断する。底面は北西端が南東端よりも0.15m高い。底には

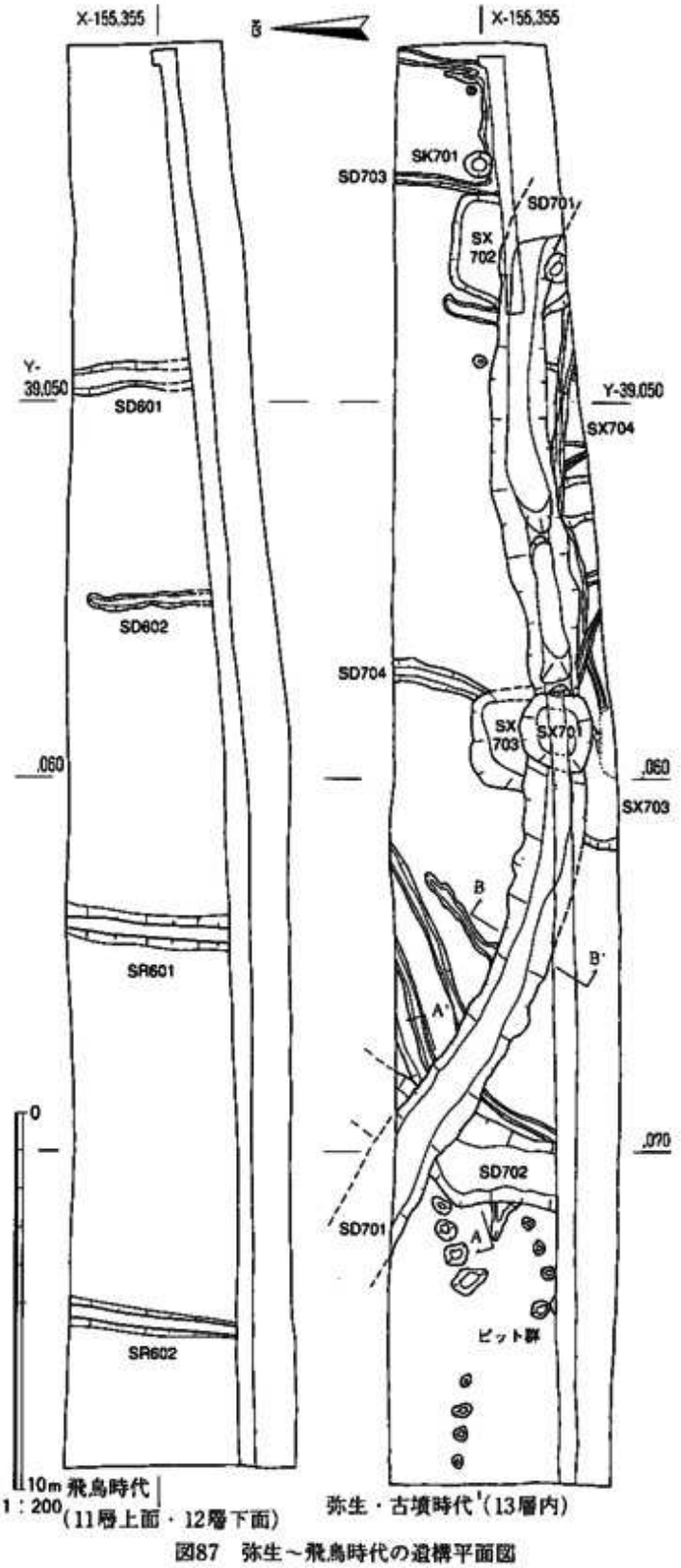


図87　弥生～飛鳥時代の遺構平面図

地山を削り残して浅くした部分が2個所で認められる。断面形は逆台形であるが(図88)、一部では壁が垂直になり、肩が溝内に崩落している個所も認められた。

埋土は4層に大別される。上層は黒褐色粘土層で、12層段階の踏込みによる凹凸が顕著に認められる。中層はおもに14層以下の偽礫からなる人為的な埋戻し土で、土器のほかにウマの上顎臼歯が2点出土した。下層はウリ類・ヒョウタン類などの種子や昆虫遺体を多く含む滞水成層で、先述した底が一段高くなった個所付近において、土師器甕383と木製品387～389が見つかった(図89、図版22)。最下層は16層以下の偽礫が主体で、加工時形成層と思われる。このことからSD701の機能時堆積層は下層と考えられる。

遺物は図90に土器、図91・92に木製品を示した。

371・373・376の須恵器は上層から出土した。371・373は須恵器杯身で、371の立上がりは低く若干内傾する。373の立上がりは高く、端部が面をなす。底部外面のヘラケズリは上方まで及んでいる。376は小型の把手付椀で、一方に把手の剥離痕がある。口縁端部は外方へつまみ出されて、上端が面をなし、体部に2条の稜がある。底部はヘラケズリで調整される。以上のうち371はTK209型式に、373はTK23型式に属すると思われる。また、上層からは製塩土器も数片出土した。器形のわかるものはないが、調整・色調・胎土には3種類見られる。第1に器壁が薄く、内外面ともナデ調整され、淡黄色を呈し、精良な胎土のもの、第2に内外面ともナデ調整で、暗赤褐色を呈し、胎土中に石英・長石粒を多く含むもの、第3に外面がタタキ調整で、赤褐色を呈し、精良な胎土のものである。

383の土師器甕、370・372・374・375の須恵器杯身、387～389の木製品は下層から出土したもので、383はこの最下部から出土した。383は口径17.8cm、器高19.8cmのほぼ完形に復元される甕である。球形の体部から口縁部が外反しており、口縁端部に沈線が1条巡る。

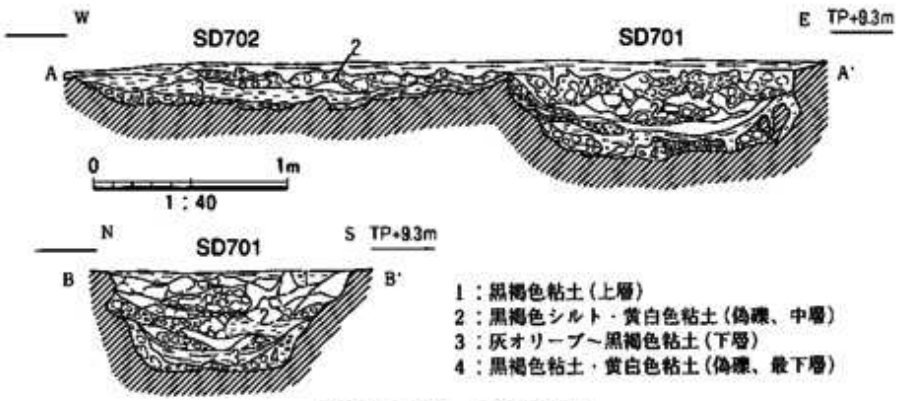


図88　SD701・702断面図

内面はハケ調整、外面はハケ調整の後に口縁部をヨコナデ調整する。色調は暗灰褐色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。370は口径14.0cm、器高4.8cmで、立上がりはほかのものに比べて短く、端部も丸くおさめられる。372・374・375は口径が10.3～11.7cmで、立上がりは高く、端部が面をなす。底部外面のヘラケズリは上方まで及んでいる。これらのうち、372・374・375はTK23型式～TK47型式に属し、383もこれと同時期のものと思われる。一方、370はTK10型式に属し、ほかのものよりも新しい。

387はヨコヅチである。[渡辺誠1985]による分類のB類に属する形態で、全長34.6cm、敲打部長19.3cm、柄長15.3cm、敲打部径6.9cmである。敲打部と柄の境は明瞭だが、直角ではなく、若干角度が付いている。敲打部の一部に硬質な物体を敲いたような平坦面がある。木取りは敲打部に幹を用い、柄を削り出している。B類は民具との比較から豆打ち用と推測されており、本例は転用された可能性があろう。しかし、樹種を同定していないため、用途を判断するには、現状では材料が不十分である。

388は片方の端部寄りに方形の孔が開けられた木製品で、54.8cmが残存する。腐食が著しいが、方形の孔の大きさは、長辺9.3cm、短辺3.7cmである。この孔を

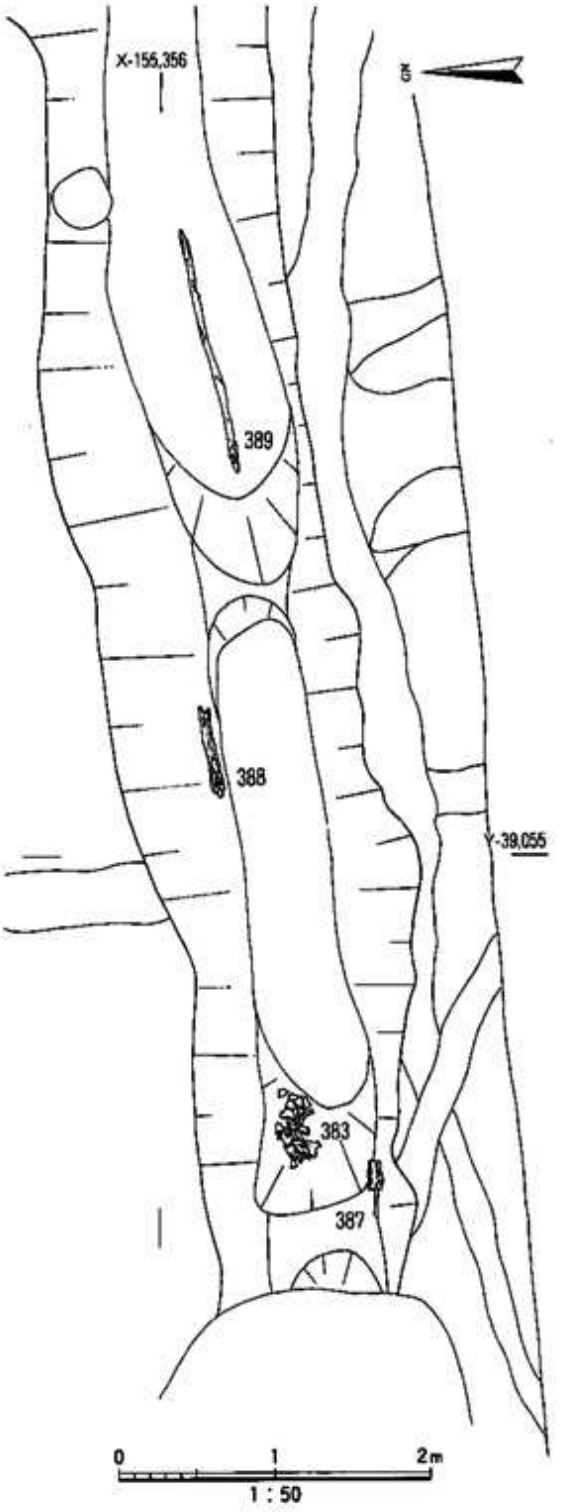


図89　SD701遺物出土状況平面図

ほぞ孔と考えれば、建築部材と考えることができよう。丸太を半分に割った後で、断面が長方形になるよう加工したと推測される。

389は一方の端部が尖り、他方に枝分かれ部分があるものである。長さは152.6cmが残存し、最大径は4.6cmある。大部分に樹皮が残されたままで、先端を尖らせたり枝を払うのに金属製の刃物が用いられている。杭の一種であろう。

381の土師器高杯、382の須恵器甕は最下層から出土した。381は脚部中位に不明瞭な段をもち、裾部は緩やかに広がる。裾部はナデ調整で、脚柱部の内面にはシボリ目が残る。

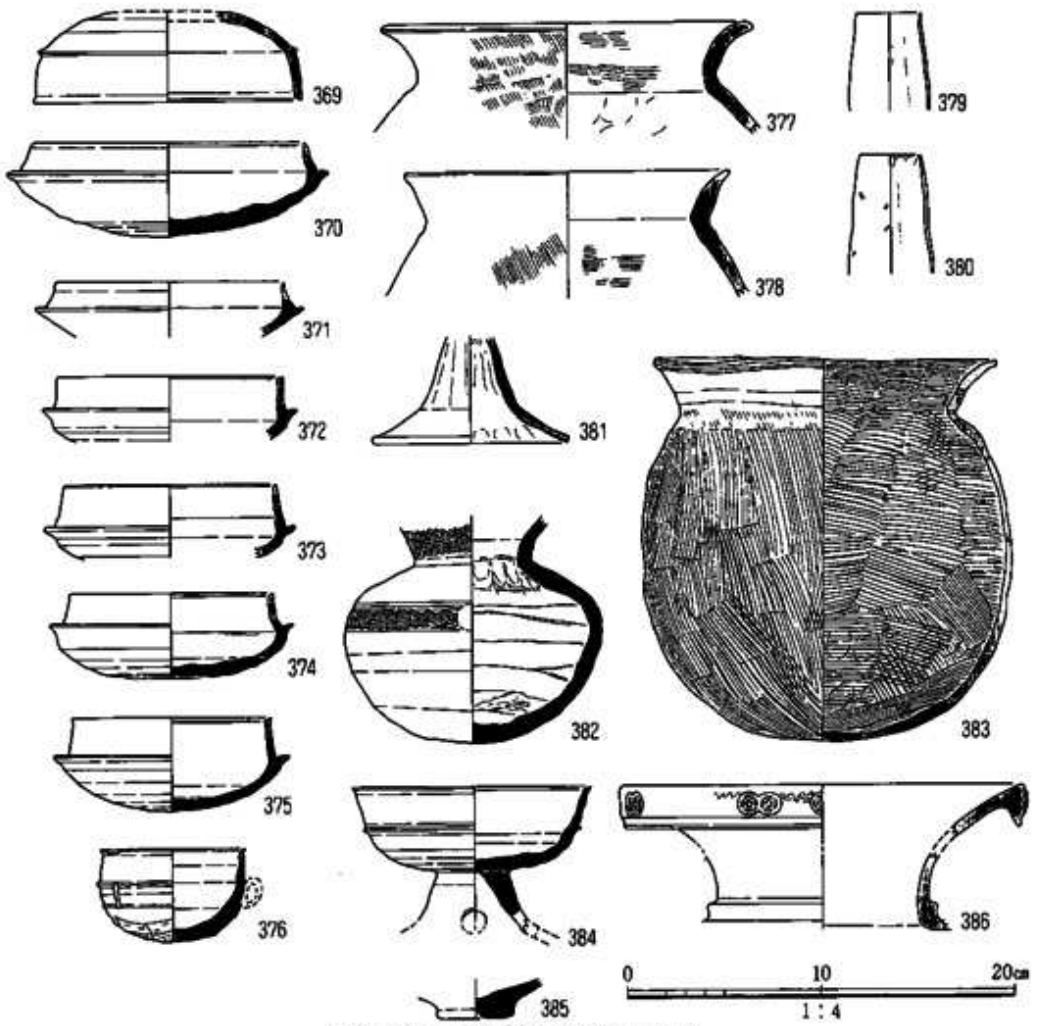


図90　弥生～古墳時代の遺構出土土器
SD701(370～376・381～383)、SD702(377)、SD703(369)、SD704(385)、
SX702(384)、SX703(378～380)、SX704(386)

382は孔が欠損し、頸部の上位と体部に櫛描波状文が施されている。体部の波状文の上下には沈線が巡る。これらは5世紀後半のもので、382はTK208型式に属するものと思われる。

以上からSD701は5世紀後半に掘削され、6世紀中頃に埋め戻されたと考えられる。

SD702(図88・90、図版21)　幅1.8～2.2m、深さ0.2mの浅い溝で、SD701と交差し、西南西と北東へ向って調査区外に延びる。埋土(図88)の上層と中層はSD701のそれと繋がり、下層は灰黄色粘土質シルトからなる水成層、最下層は14層以下の層準に由来する偽礫層で、それぞれ、機能時堆積層、加工時形成層に相当する。底面はSD701の南北双方でSD701に向って下降する。以上からSD702とSD701は併存した可能性もあろう。遺物は主に下層から出土し、土師器甕377のほか、須恵器や炭化材が見られる。

377は緩く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。外面はタテハケの後、口縁部がヨコナデで調整され、内面は口縁部がヨコハケ、体部上半がナデで調整されている。色調は灰白色で、胎土中に長石・チャート粒を含む。5世紀後半に属するものであろう。

SD703(図90、図版47)　東端で検出した平面形がコ字状をなす溝である。幅0.3m、深さ0.05～0.10mで、東西の間隔は3.4mある。竪穴住居の周壁溝かと思われたが、内側で柱穴や竈などの遺構は検出されなかった。西側の溝から須恵器杯蓋369が出土した。口径が13.8cmで、天井部と口縁部の境に稜が巡る。TK208型式に属するものと思われる。

このほかにも幅0.3m、深さ0.1m前後の小溝を多く検出した。遺物は少ないが、時期が判明したものはいずれも5世紀後半に属する。

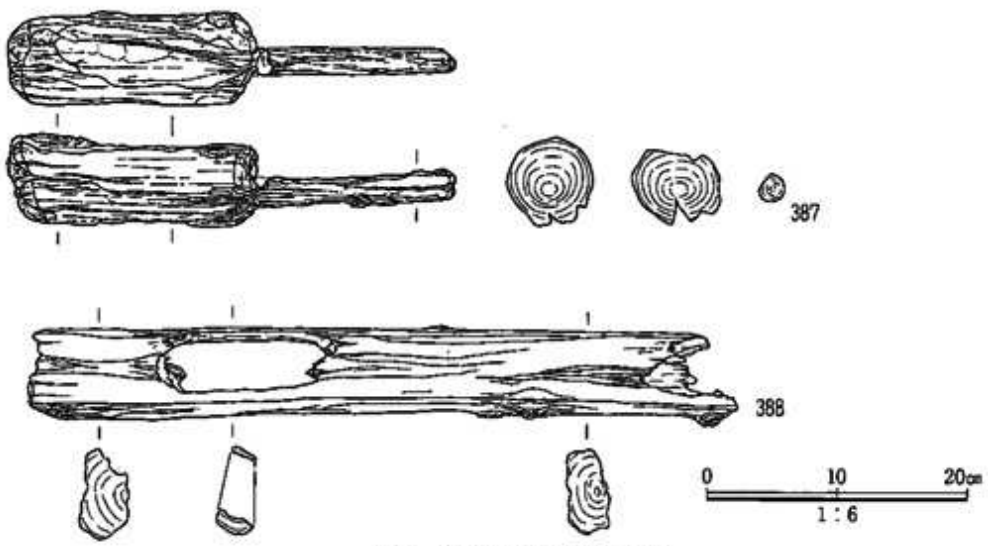


図91　SD701出土木製品(1)

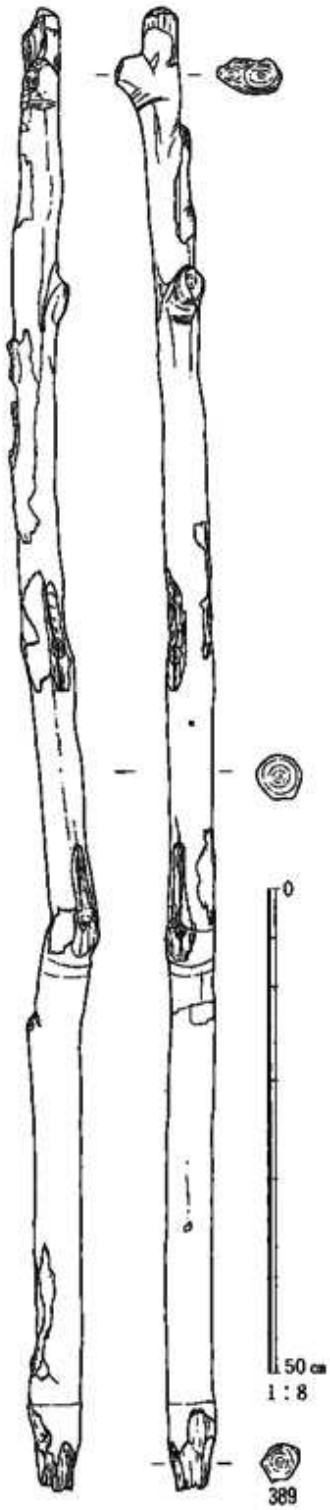


図92　SD701出土木製品(2)

b．土壙

SK701　調査区東部で検出し、切合い関係からみてSD703より新しい。平面形は直径0.4m、深さ0.3mの円形で、土師器・須恵器の小片が埋土から出土している。

c．ピット

調査区西部を中心に、円形の小穴を15基検出した。直径は0.2～0.4m、深さ0.05m前後で、柱痕跡が認められたものはなかったので、柱穴ではなく、性格不明の遺構である。

d．落込み

SX701　SD701内で検出した性格不明の落込みである。埋土はおもに埋戻し土からなり、SD701の埋土中層を切り、上層に覆われている。また、SD701を埋戻す際、SX701の周囲に地山を主体とする偽礫を盛土状に積み重ねていることが確認された。SX701はSD701の埋戻しと同時に造られて、間もなく埋められたと考えられる。5世紀後半～6世紀前半の土師器・須恵器が出土している。

SX702(図90、図版47)　調査区東端で確認したもので、SD701に切られる。須恵器無蓋高杯384や土師器が出土した。384は口縁端部に内傾する面をもち、体部に稜が巡る。脚部は4方にスカシ孔が開けられ、裾部は欠損するが、緩く広がると思われる。TK208型式に属するものと思われる。

SX703(図90・93～95、図版22・47・48、表11)　SD701・SX701に切られる不整形な落込みである。当初は北半部だけを一つの遺構と考えていたが、北・南半部の埋土の状況が酷似しており、出土遺物に接合関係があることから、一つの遺構として報告する。埋土は図93のようで、上層が炭化材・少量の焼土を含む黒褐色粘土質シルト層、下層が14層以下の偽礫を含む灰褐色シルト質粘土層である。南半部からは土師器・製塩土器がまとまって出土し、この周辺で19点の滑石製臼玉を検出した(図93、図版22)。この

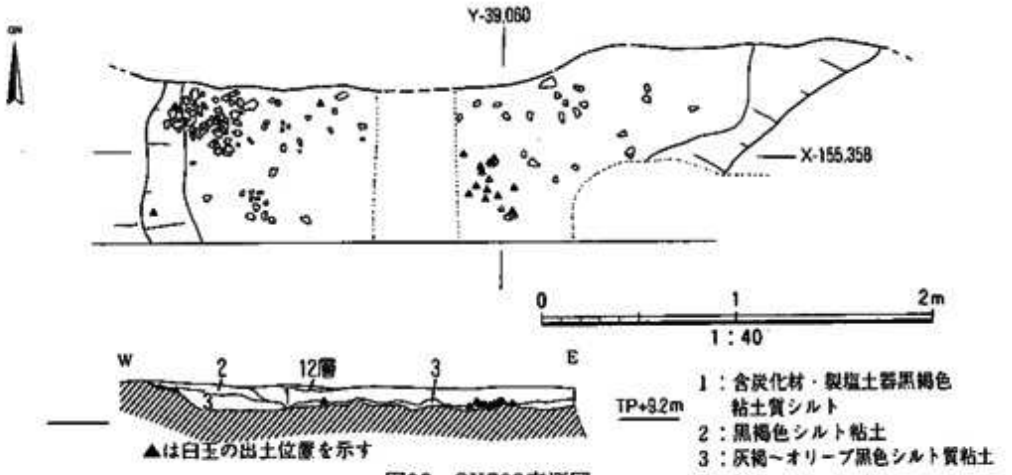


図93　SX703実測図

ため埋土を持ち帰って水洗選別した結果、さらに37点の白玉が見つかり、種子などの植物遺体も採集できた。

遺物は土師器甕378、製塩土器379・380(図90)、白玉390～445(図94、図版48)、須恵器の小片などが上層から出土した。378は外傾する口縁部をもち、端部が丸くおさめられる。口縁部はヨコナデ調整で、体部は内外面ともハケ調整である。色調は灰白色で、胎土中に長石・チャート・雲母粒を含

図94　SX703出土白玉(実物大)

表11　SX703出土白玉計測値一覧表

番号	直径×厚さ(mm)	408	0.46×0.24	427	0.46×0.18
390	0.44×0.22	409	0.45×0.23	428	0.44×0.25
391	0.45×0.17	410	0.45×0.26	429	0.46×0.22
392	0.45×0.20	411	0.47×0.20	430	0.46×0.23
393	0.46×0.24	412	0.45×0.20	431	0.48×0.43
394	0.45×0.23	413	0.46×0.20	432	0.46×0.22
395	0.45×0.16	414	0.45×0.24	433	0.45×0.16
396	0.47×0.21	415	0.46×0.19	434	0.49×0.34
397	0.44×0.33	416	0.47×0.24	435	0.47×0.25
398	0.46×0.25	417	0.46×0.25	436	0.46×0.22
399	0.46×0.19	418	0.47×0.25	437	0.45×0.25
400	0.47×0.25	419	0.47×0.24	438	0.47×0.24
401	0.48×0.29	420	0.46×0.20	439	0.47×0.18
402	0.46×0.23	421	0.47×0.25	440	0.47×0.24
403	0.46×0.28	422	0.46×0.23	441	0.47×0.19
404	0.46×0.26	423	0.44×0.23	442	0.47×0.25
405	0.45×0.22	424	0.45×0.21	443	欠損×0.14
406	0.52×0.38	425	0.45×0.22	444	欠損×0.17
407	0.45×0.27	426	0.46×0.22	445	欠損×0.16

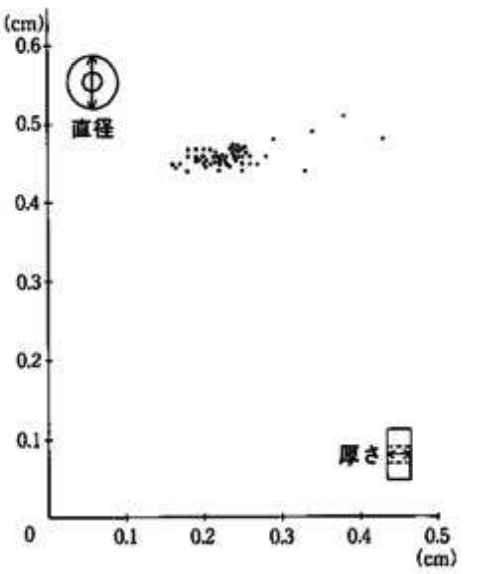


図95　白玉計測値の分布

む。製塩土器は口径が3.3cm前後で、やや下膨れぎみの体部をもち、口縁部から体部上半は内傾する。調整は外面をユビナデし、内面は横方向のナデを基調とする。380の外面には指掌痕が残る。色調は379が淡赤褐色、380が淡黄色で、後者の方が硬質に焼き上がっている。胎土中に長石・雲母粒を少量含む。色調・焼成における2者はほぼ同量程度出土した。これらの年代は伴出した須恵器小片や製塩土器の特徴[京嶋覚1992]から、5世紀後半でも比較的古い頃のものといえる。

滑石製臼玉は56点出土した(図版48、表11)。臼玉の直径は0.46cm付近に集中し(図95)、厚さは403・409のような0.2cm前後が多く、431のように0.3cmを超えるものは例外的である(図94)。臼玉の直径および厚さが比較的揃っているのが本資料の特徴といえる。穿孔は片方から行われており、その裏面に剥離痕が見られるものが多い。穿孔方向に平行して側面を研磨しており、側面にはこれと直交方向の稜線がかすかに見られる。色調はすべて緑灰色を呈する。

vi)弥生時代後期(図87、図版20)

弥生時代に属すると推測される遺構としてSD704とSX704がある。双方から弥生土器のみが出土したことから、当該期の遺構と判断した。しかし、遺物量が多くないことと、前述した古墳時代の遺構からも同時期の土器片が出土していることからみて、遺構の時期比定は推測の域を出ない。

SD704(図90)　調査区中央で検出した南北方向の溝で、南で西に緩くカーブを描く。幅0.5m、深さ0.15mで、断面はU字形である。埋土は黒褐色粘土質シルトで、炭化物のラミナが認められる。切合い関係からみてSX703よりも古い。甕の底部385(図

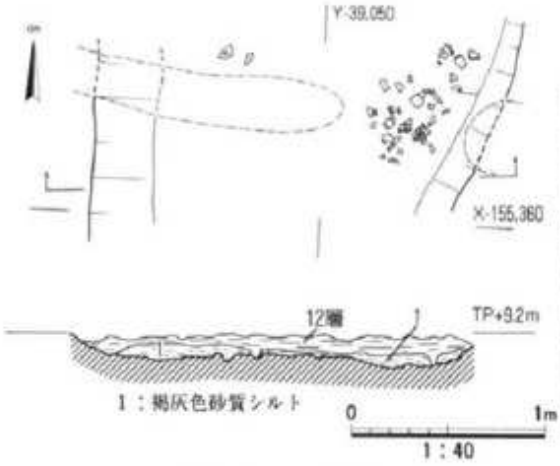


図96　SX704実測図

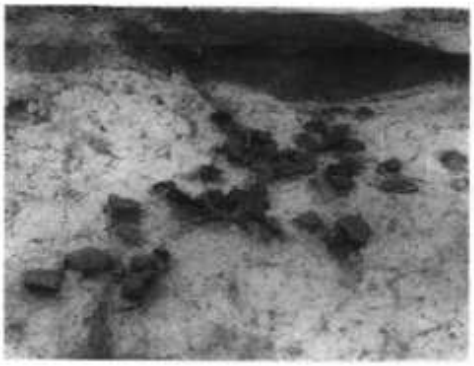


写真18　SX704遺物出土状況(北から)

90)が出土した。畿内第Ⅴ様式に属するものと思われる。

SX704(図90・96、写真18)

調査区東部の南壁際で検出した浅い落込みである。東西幅2.1m、深さ0.15mである。埋土は褐灰色砂質シルトで、壺386の破片がまとまって出土した(図96、写真18)。当遺構を切るSD701からも同一個体と思われる破片が出土した。

386(図90)はくびれた頸部から外反する口縁部をもち、その端部は垂下する。端面には櫛描波状文を施した後、同心円の線刻を施した円形浮文を貼付けている。頸部には突帯が巡る。色調はにぶい黄褐色で、胎土中に長石・角閃石・雲母粒を多く含む。畿内第Ⅴ様式前半に属するものであろう。

vii)縄文～弥生時代中期初頭(図97)

ここでは14層上部で検出した縄文土器片集中部と、14層および15層から出土した石鏃、古墳時代以降の層準から出土した遊離資料の石鏃について述べる。

なお、調査区西端の15層下面では浅い落込みが検出されたが(図97)、人為的なものかどうか明らかでない。

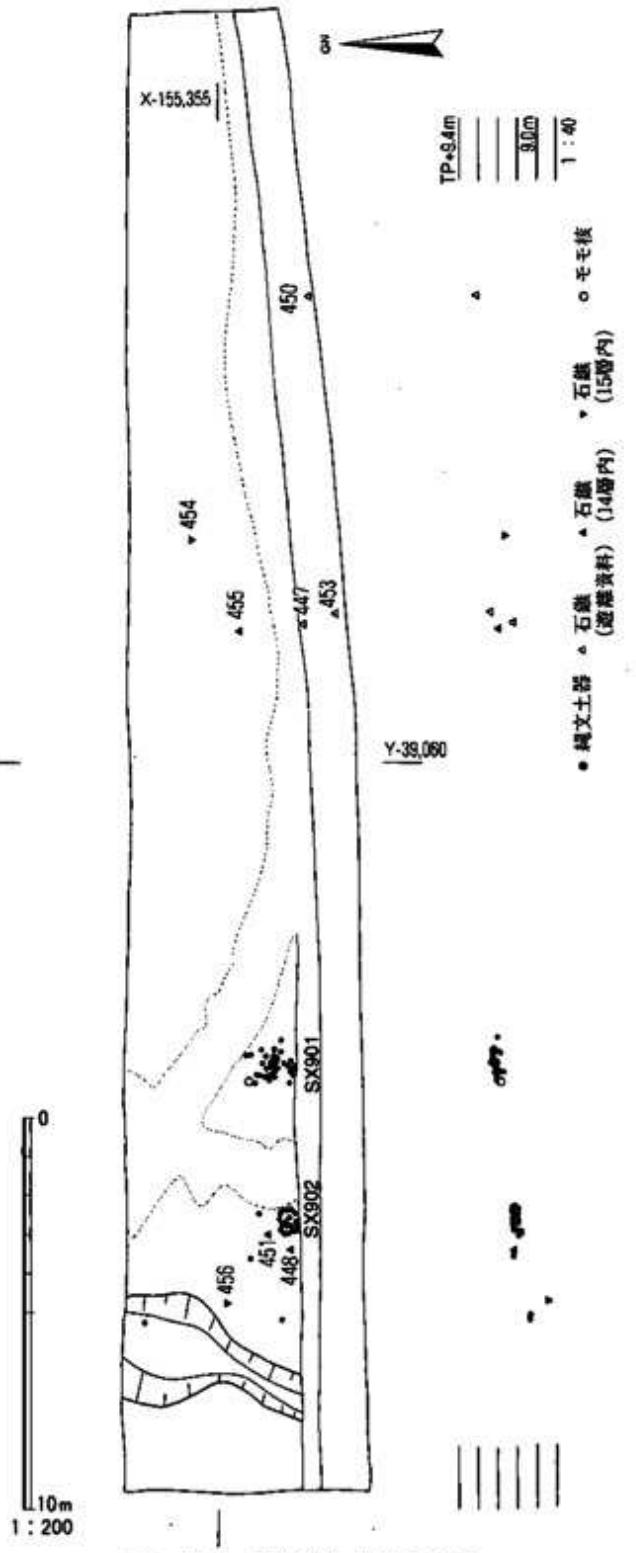


図97　縄文～弥生時代の遺物分布図

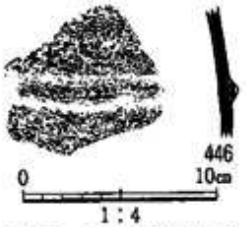


図98　SX902出土土器

a．縄文土器片集中部

SX901・902(図97・98)　14層上部で検出した。範囲はいずれも直径1m前後である。それぞれで20点前後の破片がまとまっていた。西側のSX902に深鉢446が含まれていた。

446(図98)は緩く内傾する頸部に断面三角形の突帯が1条貼付けられ、突帯頂部に刻み目が施されている。内外面ともナデ調整である。色調は灰黄褐色で、胎土中に石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。縄文時代晩期終末の長原式土器と思われる。このほかにも突帯が貼付けられた破片があり、中には刻み目が施されないものもある。SX901からは器形のわかる破片が見つからなかったが、土器片の色調・胎土は近似しているので、SX901と同時期のものと思われる。

なお、SX901から植物遺体としてモモの核が1点出土した。周辺遺跡での出土例中では古い時期の資料であり注目される。

b．石鏃(表12、図97・99、図版47)

石鏃は10点出土した。14層中から出土した3点、15層中の2点以外は遊離資料である。出土位置は図97に示した。これらはすべてサヌカイト製で、以下、形態ごとに記述する。

447は尖基無茎式石鏃である。平面形が木葉形であることからG－1類に属する。作用部の側縁は外湾し、粗い鋸歯状の調整を行う。図右面の右下部に主要剥離面を残す。切先角は65°である。SD701上層から出土したが、本来は弥生時代前～中期初頭のものである。

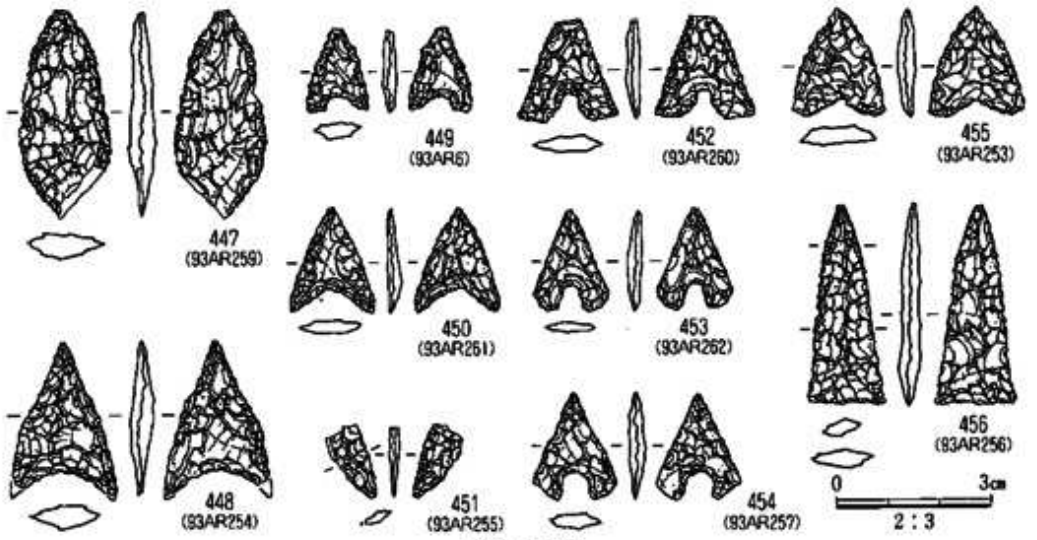


図99　石鏃

表12　石鏃一覧表

番号	層位・遺構	形態	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
447	SD701上層	尖基無茎式	(4.01)	1.75	0.48	(3.0)
448	14層	凹基無茎式	2.95	1.99	0.44	(1.5)
449	2層	凹基無茎式	(1.60)	1.21	0.26	(0.6)
450	SD701上層	凹基無茎式	2.01	1.63	0.24	0.6
451	14層	凹基無茎式	(1.36)	(1.00)	(0.17)	(0.2)
452	12層	凹基無茎式	(2.00)	1.91	0.27	(0.8)
453	SD701上層	凹基無茎式	1.96	0.45	0.22	0.5
454	15層	凹基無茎式	1.94	1.44	0.21	0.6
455	14層	凹基無茎式	2.05	1.81	0.32	1.0
456	15層	平基無茎式	3.81	1.42	0.39	1.6

括弧を付したものは残存値を示す

448～455は凹基無茎式石鏃である。448は基部の抉りが浅く、逆刺の先端は尖ることからE－2類に属する。作用部の中ほどに鈍い肩を作る。図右面の下半部に主要剥離面を広く残す。切先角は45°である。縄文時代晩期のものと考えられる。14層から出土した。449はB－2類に属する。作用部の側縁には粗い調整を行う。基部の抉りは浅く、逆刺の先端も不定形である。主要剥離面と先行剥離面を広く残す。切先角は50°である。2層から出土したが、縄文時代晩期のものであろう。450は平面形が二等辺三角形で、逆刺の先端が尖ることからB－2類に属する。主要剥離面と先行剥離面が残る。切先角は50°である。SD701上層から出土したが、本来は縄文時代後～晩期のものであろう。451は厚さ1.7mmと薄く作られている。14層から出土した。452は作用部の側縁が直線的で基部の抉りが浅く、逆刺の先端がコ字状に作られていることからB－2類に属する。図左面の右側縁に先行剥離面が残る。12層から出土したが、本来は縄文時代前～後期のものである。453は作用部の側縁が直線的で、逆刺の先端は円いコ字状に作られていることからB－2類に属する。図右面の中央に主要剥離面が小さく残る。切先角は45°である。SD701上層から出土したが、本来は縄文時代前～後期のものであろう。454は作用部の側縁が直線的で、逆刺の先端はコ字状に作られていることからA－2類に属する。切先角は55°である。主要剥離面と先行剥離面が残る。縄文時代早～中期のものと考えられる。15層から出土した。455は平面形が正三角形に近く、逆刺の先端が円く作られていることからA－2類に属する。周縁の押圧剥離は比較的ていねいであるが、中央に主要剥離面を残している。切先角は75°である。14層から出土したが、本来は縄文時代早～後期のものであろう。

456は平基無茎式石鏃である。平面形は縦長の二等辺三角形で、基部を直線的に作ることからE－1類に属する。作用部側縁の押圧剥離は深くていねいに行われている。切先角は35°である。縄文時代早期のものと考えられる。15層から出土した。

3）小結

今回の調査では平安時代と古墳時代の遺構の検出がおもな成果としてあげられる。

まず平安時代では掘立柱建物やこれに伴う柵、井戸などを検出した。これらの遺構から出土した土器の時期は、平安時代Ⅱ～Ⅲ期古段階に当り、建物や柱穴の重複関係からみても少なくとも２回の建替えが行われたと推測される。集落景観として、柵SA401を挟んで西半に建物、東半に畠があった可能性が高い。この耕作地は建物と近接することから、屋敷地内に含まれる可能性もあろう。そのばあい、東端で検出された柵SA402は屋敷地の東境か、あるいは隣接する別の屋敷地の西境に相当するかもしれない。この集落が営まれる前後の時期は耕地であったようである。従来より長原遺跡では、平安時代末～鎌倉時代初期にかけて、それまで散在していた集落が次第に集村化していくとされている。本調査地も平安時代後期以降の集落遺構は検出されず、耕地に転化したと考えられることから、長原遺跡における集落動態の典型的な例を示していると思われる

古墳時代の遺構については明確な建物は確認されなかったが、集落に関連すると思われる溝や土壙を検出した。また、SX703は滑石製臼玉や製塩土器が多量に出土したことから、祭祀に係わる遺構の可能性もある。遺構の年代は５世紀後半が主体で、もっとも新しいと推定されるSD701が埋戻されるのは６世紀中頃と考えられる。調査地の東側でも５世紀後半～末にかけての集落が見つかっており[大阪市文化財協会1991b]、６世紀前半になると帆立貝形前方後円墳の長原七ノ坪古墳が築造される[大阪市文化財協会1987b]。また西側約250ｍの場所では５世紀後半の集落の廃絶後に６世紀中頃の帆立貝形前方後円墳である長原南口古墳を築造したことが明らかになっている[大阪市文化財協会1995a]。今回の調査地の東西で類似した状況を見ることができ、６世紀前半～中頃にかけて土地利用の画期が想定されよう。また、５世紀後半の景観として、SD701が集落の周囲を区画する溝の可能性も考えられるが、調査地の南北に近接する範囲での、遺構分布は十分に判明しておらず、今後の調査・検討課題といえよう。

また、縄文時代前半に属する石鏃や、縄文時代晩期終末の土器片集中部、弥生時代後期の遺構も、散発的ではあるが、当期の長原遺跡を考える上での新資料となった。

第Ⅴ章　長原遺跡東南地区の調査結果

第1節　NG93－4次調査

1)層序とその遺物

i)層序(写真19)

現代盛土下には、長原4～13層が堆積していた。ただし、長原7層以上の地層が堆積していたのは西区東部のみで、調査地の約1／3であった。地層断面の十分な記録がないため、層序表と断面図は掲載できなかった。

出土遺物が多かったのは長原4層で、土師器・黒色土器A類・同B類・瓦器などが見られる。瓦器は初期のものが出土しているが、量は少ない。

ii)縄文時代以前の石器遺物(図100、図版49)

457は長原9C層から出土した。両面に上下から対向した加撃による剥離面があり、上下縁にも細かい剥離面が並んでいる。さらに、図の中央の面にあるように側縁に垂直割れを起していることからクサビと考えられる。重さは8.16gである。

458・459は長原12／13層漸移帯から出土した有茎尖頭器である。458は先端と基部が古い折れによって欠損している。調整は両面とも右側縁から樋状剥離が深く入り込むが、左

写真19　93－4次調査地の地層断面(南から、東区東部)

側縁には末端がステップを起した浅い剥離面が並んでいる。調整の順序は左側縁→右側縁である。側縁の形を修正するための細かな調整は所々に施されている。2.14ｇである。

459(図版49)は完形で、全長7.06㎝、最大幅2.33㎝、茎部の長さは1.37㎝である。なお、茎部の長さは左右の逆刺の先端を結ぶ線の中央から末端までを計測した。身部の平面形は細身の二等辺三角形を呈し、側辺は直線的で、鋸歯状に加工している。逆刺の形状は左右で異なり、一方の抉りが深く、もう一方は抉りをもたない。茎部の平面形は逆三角形である。加工について見ると、樋状剥離は片面で顕著である。もう一方の面では右側辺の樋状剥離が中央よりも左側にまで及ぶが、左側辺のそれは短く、末端がステップで終わるもので、斜行はしていない。また、両面とも身部の左側辺の下端にある剥離面は茎部の剥離面を切っており、この部分では茎部の作り出しが身部の整形の前に行われていることがわかる。なお、鋸歯状の剥離は細部調整の中では最終的に行われている。この剥離は一部を除き、片面のみに集中的に施している。

460・461は長原13層から出土した。460は点状打面の剥片である。末端はヒンジフラクチャーを起している。背面は横方向からの加撃による広いネガティブな面と、小さな先行剥離面とで構成される。重さは0.86ｇである。461は細部調整のある剥片である。素材の

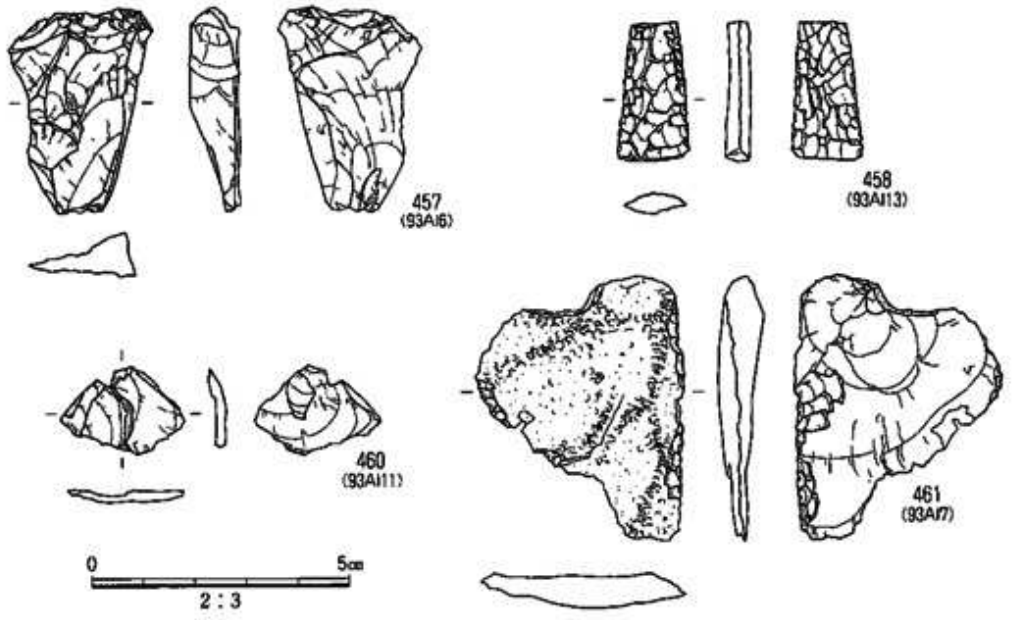


図100　93－4次調査出土の石器遺物
NG9C層(457)、NG12／13層漸移帯(458)、NG13層(460・461)

剥片は原面上打面で剥離され、背面にすべて原面を残している。細部調整は左右の側縁にあり、背面と主要剥離面の両方から施している。重さは13.41gである。

これらはすべてサヌカイト製である。

2）遺構とその遺物

調査区の南半は大正川の旧河道で、本来の遺構面は残存していなかった。また、東区東端部も攪乱が著しく、遺構面が残存していなかった。

i）平安時代（図101、図版23）

東区西端で井戸、西区を主とした範囲で柱穴を長原4層下面で検出した。

SE401（図102、図版23・49、写真20）

掘形の平面形は楕円形で、長径は約1.3mである。井戸側の直径は約0.4mで、深さは約2mであった。井戸側には上部に2段重ねの曲物、下部に桶側が用いられていた（図版23）。埋土の上部は埋戻し土、下部は水成層である。

写真20　SE401検出状況（南から）

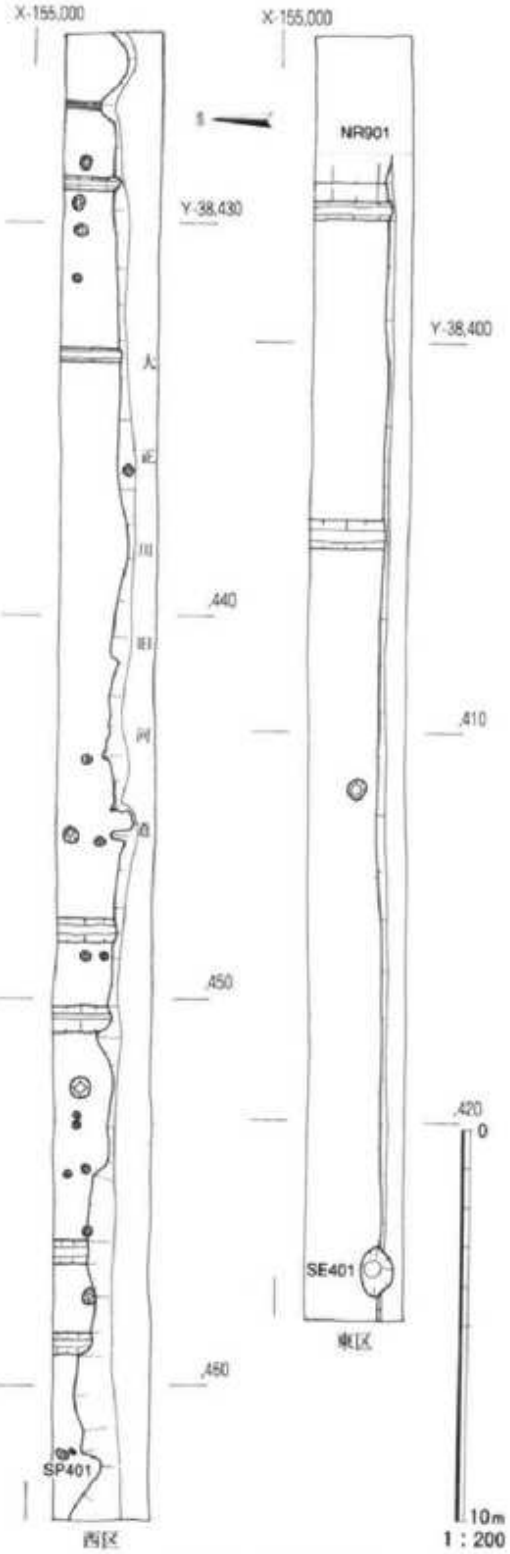


図101　遺構平面図

462～468(図102)はおもに上部から出土した遺物である。462は口径9.6cm、器高2.9cmの土師器小皿である。口縁部の一部に煤が付着する。463は口径12.8cm、器高4.6cmの土師器椀である。高台はなく、調整はナデで、体部外面の下半にはユビオサエ痕が認められる。色調は灰白色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。465～467は土師器甕である。口径16.0～18.8cmの外傾する短い口縁部をもち、その器壁は厚い。口縁部の調整はヨコナデで、体部外面にユビオサエ痕が顕著に認められる。色調は灰黄～黄橙色で、胎土中に石英・長石・雲母粒を含む。468は口径23.3cmの土師器の羽釜で、短く外傾する口縁部の端部に面をもつ。頸部のやや下方に鍔が巡る。体部はやや長胴ぎみである。口縁部と外面の鍔より上位はヨコナデ調整、ほかは斜め方向のナデ調整である。色調は浅黄橙色で、胎土中に石

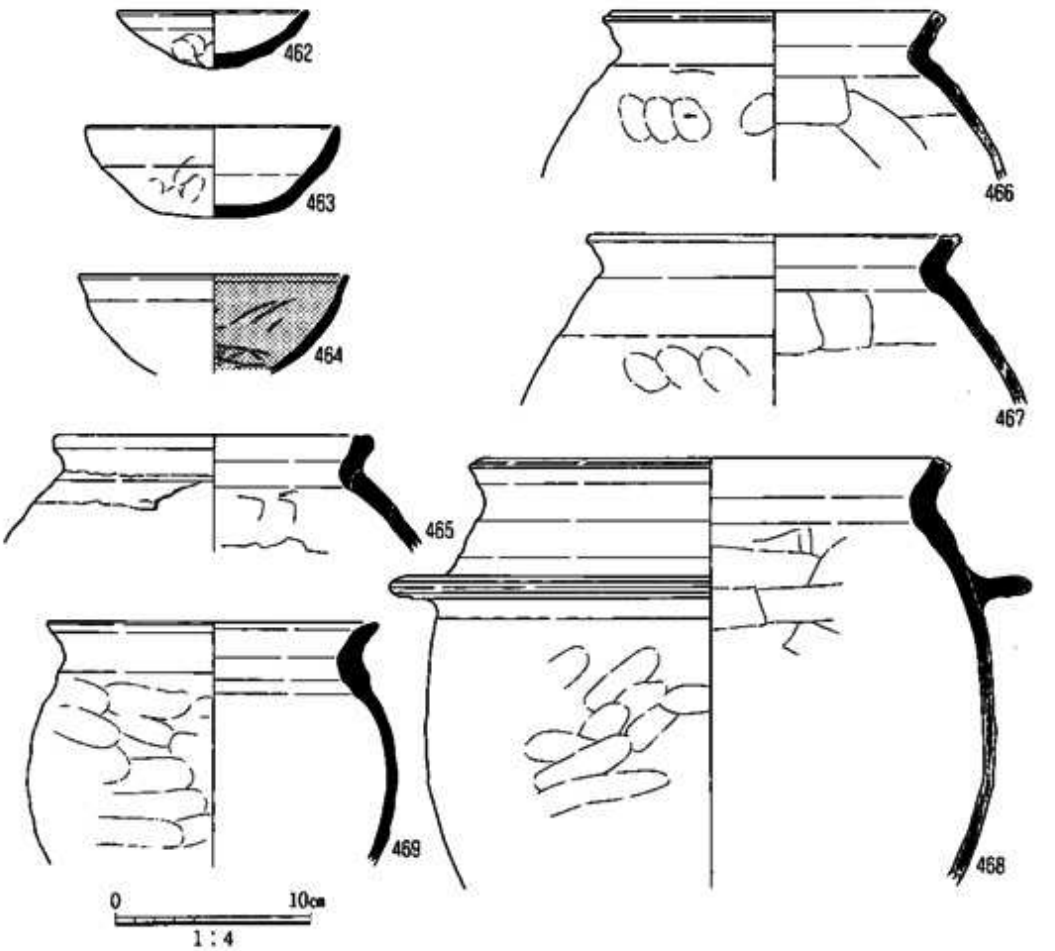


図102　平安時代の遺構出土土器
SE401(462～468)、SP401(469)

英・長石・雲母粒を含む。**464**は黒色土器A類の椀である。口径13.7㎝で、内面にはヘラミガキがていねいに施されている。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属し、10世紀末～11世紀初め頃のものであろう。ほかに植物遺体としてモモ核などが出土した。

写真21　NR901西川辺川検出状況(南から)

柱穴　約20基を検出した。その大半は西区に分布したが、調査範囲が狭小であったため、建物として復元するには至っていない。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.3～0.4m前後のものが多い。西区西部の**SP401**から土師器甕**469**が出土した。口径は16.8㎝で、外傾する短い口縁部をもち、その器壁は厚い。口縁部はヨコナデ調整で、体部外面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。色調は明赤褐色で、胎土中に石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。**SE401**と同時期のものと思われる。

長原4層に含まれる遺物からみても、他の柱穴も同様な時期のものである可能性が高い。

ii)縄文・弥生時代

NR901西川辺川(写真21)　東区東端で検出した自然流路である。東側は攪乱によって壊されており、西肩の一部を確認したに留まった。周辺では80－3次、89－23次、90－5次、92－9次調査などで連続する部分が検出されており、当地区を蛇行して北流することが知られている[大阪市文化財協会1997b]。遺構検出面は長原9A層上面である。

3)小結

本調査では、有茎尖頭器の出土、平安時代中期の集落遺構の検出が注目される。

有茎尖頭器は長原遺跡では93年度までに13点出土しており、そのほとんどがサヌカイト製である。今回出土した**459**は平面形態においては91－21次調査の出土例と類似しているが、意識的に鋸歯状の側辺を作り出そうとしている点で異なる。側辺を鋸歯状に仕上げる例は、長原遺跡ではほかにNG14次調査の例があるが一般的ではない[田島富慈美1993]。

後者に関しては、東側に近接する89－23次、92－9次調査でも、同時期の掘立柱建物や柱穴群が検出されている[大阪市文化財協会1997a・1999]。また、周辺では長原4層から黒色土器の出土量も多い。一方、北西や南側に近接する調査地では同様な遺構は稀薄である。したがって、本調査地とその東側に小規模な居住域が展開する可能性がある。

第2節　NG93－5次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図103、図版24、表13)

調査区の南半分は大正川の旧河道に当っていたため、北・西壁面を図示する。層序は下表のとおりである。地層の残存状況は西端部で良好で、それ以外は大正川改修に伴う地層である1b層の段階に削平を被っていた。2a～2c層は大正川旧河道に堆積した水成層と思われる。3層以下の地層は周辺地域で標準的に認められるもので、表中に示した長原遺跡標準層序に対比することができる。10層は調査区中央部で検出した自然流路を形成した水成層で、長原15層の中に対比できると思われる。

ii)縄文時代の石器遺物(図104、図版49)

各層から出土した遺物のうち土器はいずれも細片で、図化しうるものはなかった。ここ

表13　93－5次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG0	0層	現代客土	25			
NG1	1a層	現代作土	10			
	1b層	現代客土	40			
	2a層	粗粒砂～大礫	≦50			客土
	2b層	灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト	≦40			水成
	2c層	灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト	≦10			水成、NG9-14に由来
NG3	3層	含小礫オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト	≦13	▼整地	土師器・瓦器	作土
NG4	4層	含小礫褐色(10YR4/4)シルト	≦5	▼小溝群	土師器・黒色土器・瓦器	作土
NG7	5層	含砂礫灰黄褐色(10YR4/2)粘土	≦12	▼ピット群　SD701	土師器・須恵器	
8Ci	6a層	にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～粗粒砂	≦14			水成
8Cii	6b層	灰黄色(2.5Y6/2)シルト～細粒砂	≦15			水成
NG9	7層	灰オリーブ色(5Y5/2)粘土～シルト	≦5	▲SD901		
NG12～13	8層	含火山灰黄灰色(2.5Y5/1)シルト	7		石鏃・剥片・チップ	
NG14	9層	含細粒砂黄褐色(2.5Y5/3)シルト	7			
NG15	10層	灰オリーブ色(10YR5/6)シルト～砂礫	≦160			水成
	11層	含中粒砂オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト	25	▲NR1501		
	12層	含粗粒砂オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土～シルト	≦70			
	13層	明緑灰色(7.5GY7/1)粘土	≦90			

▲：上面検出遺構　▽：下面検出遺構　↓：基底面検出遺構

では、7層(長原9層)以下の層準から出土した石器遺物を報告する。出土位置は図106に示した。

474は7層から出土した、原面上打面の剥片である。背面には大きく広がるネガティブな面と、周縁の原面を加撃してできた小さなネガティブな面がある。主要剥離面はバルブが発達せず平坦であるが、途中で段をなして末端に広がってゆく。末端は直線的で小さな剥離面が2個所認められる。重さは11.73gである。

471～473は7・8層(長原9～13層)から出土した。471は剥離時に打面部が欠損した剥片である。背面には2枚のネガティブな面があるが、剥離の方向はわからない。重さは0.12gである。472は原面上打面の剥片である。剥離時に打点から垂直割れを起している。背面には原面と下方向からの加撃による先行剥離面がある。重さは0.06gである。473は剥離面打面の剥片である。上縁と背面の左下に原面を残す。背面には上方からの加撃による先行剥離面が2枚ある。剥離時に主要剥離面の左側が折れている。1.61gである。

470は8層(長原12～13層)から

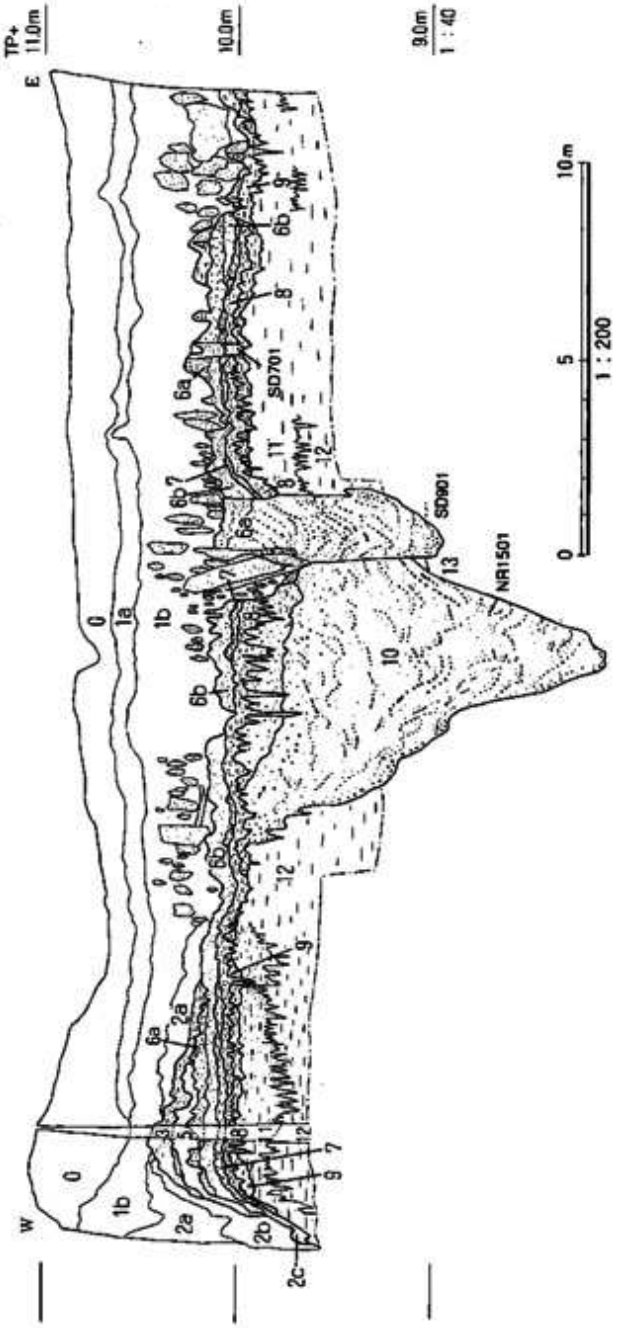


図103　93－5次調査地の地層断面

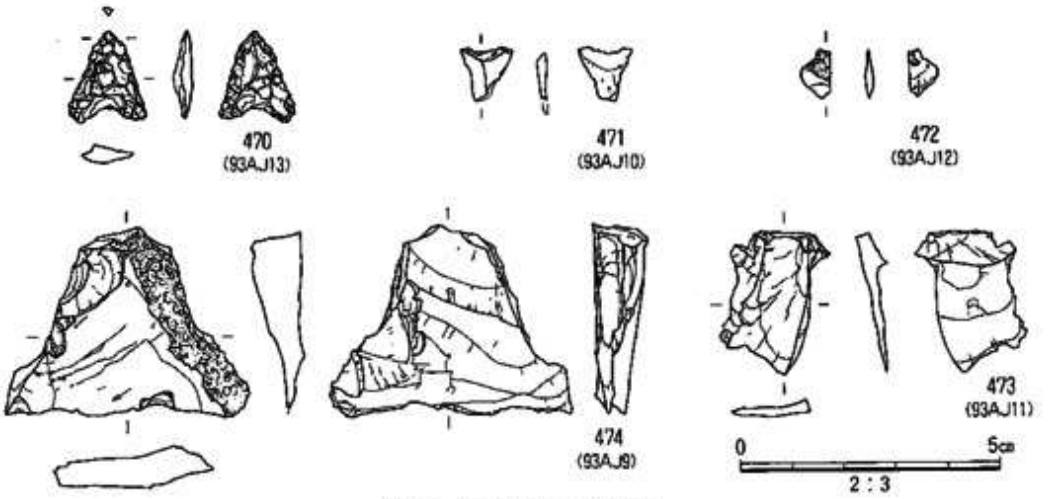


図104　縄文時代の石器遺物
7層(474)、8層(470)、7・8層(471～473)

出土した(図版25)凹基無茎式石鏃である。逆刺が丸く仕上げられていることからB－2類に相当する。切先の先端の角度は85°で、作用部のそのほかの部分は40°である。重さは0.56gである。

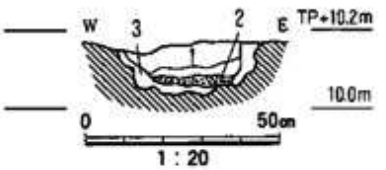
また、8層の土壌を持ち帰って水洗選別を行ったところ、チップを数点捕集した。

これらの石器遺物はすべてサヌカイト製である。時期は縄文時代に相当し、なかでも470は縄文時代前～中期のものと考えられる。

2)遺構とその遺物

i)平安時代後期・鎌倉時代(図106)

小溝群　4層下面で検出した東西方向の小溝群である。本来は全面にあったと考えられるが、特に南半は大正川の開削により削平が著しい。検出面での幅は約0.2m、深さは0.03mである。底面には掘削痕であろう凹凸が見られ、耕作に係わるものと思われる。

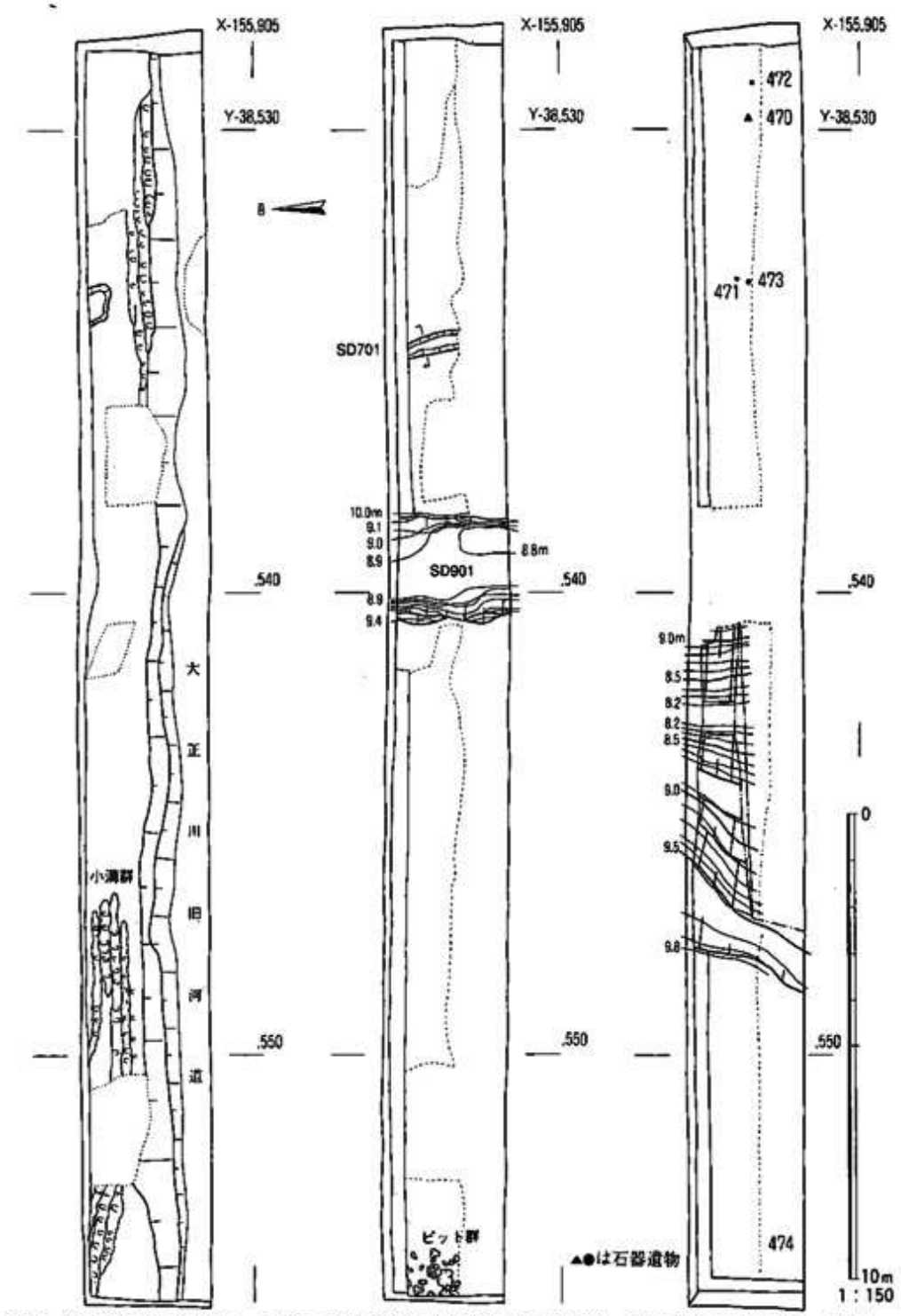


1：含細粒砂黒褐色粘土質シルト
2：暗褐色細粒～粗粒砂
3：含細粒砂暗灰黄色シルト

図105　SD701断面図

ii)古墳時代後期(図106)

SD701(図105)　調査区東部の6a層上位の4層基底面で検出した南北方向の溝である。検出面での幅は0.37m、深さは0.14mである。壁面には凹凸が見られ、溝の開削時の掘削痕と思われる。埋土は大きく3層に分けることができる。下層は初期に流れ込んだシルト、中層は水



平安・鎌倉時代（4層下面）　弥生・古墳時代（5層下面・7層上面他）　旧石器・縄文時代（7・8層内、11層上面）

図106　遺構平面図

が流れたようすを示す水成の砂、上層は粘土質シルトからなる。遺物は6世紀頃に属する須恵器杯蓋の細片のみであるが、周辺調査地での状況からみて当該期の遺構と判断した。

ピット群　調査区西端にのみ遺存していた5層下面で検出した。直径0.03～0.15㎝、深さ0.03～0.10㎝で、平面形が不整形な小穴が集中して見られた。

iii)弥生時代(図106)

SD901(図103、図版25)　調査区中央の7層上面で検出した南北方向の溝である。検出面での幅は2.2m、深さは1.2mである。埋土はシルト～粗粒砂からなる水成層で、ラミナが顕著に認められたことから激しい水流のもとで堆積したことがうかがわれ、垂直に立上がる壁は侵食された結果としての形状と思われる。したがって、本来の規模は正確には知り得ない。遺物は出土しなかったが、周辺での調査例から当該期の遺構と判断した。

iv)旧石器時代(図106)

NR1501(図103、図版25)　調査区中央の11層上面で検出した南北方向の自然流路である。東肩を**SD901**によって壊されているが、幅は約9mで、深さは1.9mある。長原15層段階の侵食が形成の要因である可能性が考えられる。

3)小結

今回の調査は、調査区の南半分が大正川によって破壊されていたので狭い範囲でしか行えなかった。しかし、周辺の調査とつながるいくつかの遺構を検出することができた。

SD701の続きは南に隣接して行われた91－1次調査で検出されており、6世紀後半～7世紀前半の用水路と考えられている[平田洋司1991]。また、**SD901**は本調査区の南北で続きが見つかっており、[大阪市文化財協会1995a]で「川辺1号用水」と総称されている。その年代は縄文時代晩期～弥生時代中期初頭に位置づけられる。

一方、東に隣接する93－4次調査地(本章第1節)では平安時代の集落遺構が多く検出されたが、本調査地では全く検出されず、集落分布を考える上での手がかりを得ることができた。

第3節　NG93－8次調査

1)層序(図107、表14)

調査区は塚ノ本古墳の墳丘中心のやや西側を縦断する位置にあり、北周濠内に相当する北区と墳丘上に相当する南区では、地層の堆積状況に違いが認められた。

北区では、低位段丘構成層に相当する10(長原14)層の上位に1～7a(長原1～7)層が堆積していた。周辺調査の結果からみて、周濠内にのみ堆積するのは5～7a層と考えられる。7a層はラミナが変形していたことから、人間によるなんらかの活動があったものと思われる。6c(長原6Bi)・6a(長原6Ai)層は作土の可能性がある。

これに対して、南区では現代作土の1層直下で古墳の盛土が検出された。その下位には7b(長原7B)層(古墳築造時の旧表土)、8(長原8～12)層、9(長原13)層が堆積していた。

2)遺構とその遺物

鎌倉時代の溝(堀)と、塚ノ本古墳が検出された。遺物は細片ばかりで、時期の判明する

表14　93－8次調査地の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG1	1層	現代作土	25			
NG2	2a層	含礫粗砂黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂	8			作土
	2b層	黄褐色(2.5Y5/4)細粒～中粒砂	12			作土
NG3	3a層	オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂	8			作土
	3b層	黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～細粒砂	12			作土
NG4	4層	含粗粒砂にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質粘土～細粒砂	15	SD401		作土
NG5	5層	にぶい黄橙色(10YR7/2)粗粒砂	≦50			水成
NG6Ai	6a層	暗オリーブ色(5Y4/3)砂質シルト	4			作土？
NG6Aii	6b層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト	10			水成
NG6Bi	6c層	緑灰色(7.5GY6/1)中粒～粗粒砂	8			作土？
NG6Bii	6d層	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト～細粒砂	10			水成
NG7	7a層	オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粘土	≦30	ー落込み		水成,擾乱
NG7B	7b層	含中粒砂黒褐色(10YR3/2)シルト	6	▲塚ノ本古墳		暗色帯
NG8-12	8層	含中粒砂灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂	8			
NG13	9層	含粗粒砂明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粘土	≧20			
NG14	10層	オリーブ灰色(10Y5/2)粘土	≧20			

▲：上面検出遺構　ー：地層内検出遺構　↓：基底面検出遺構

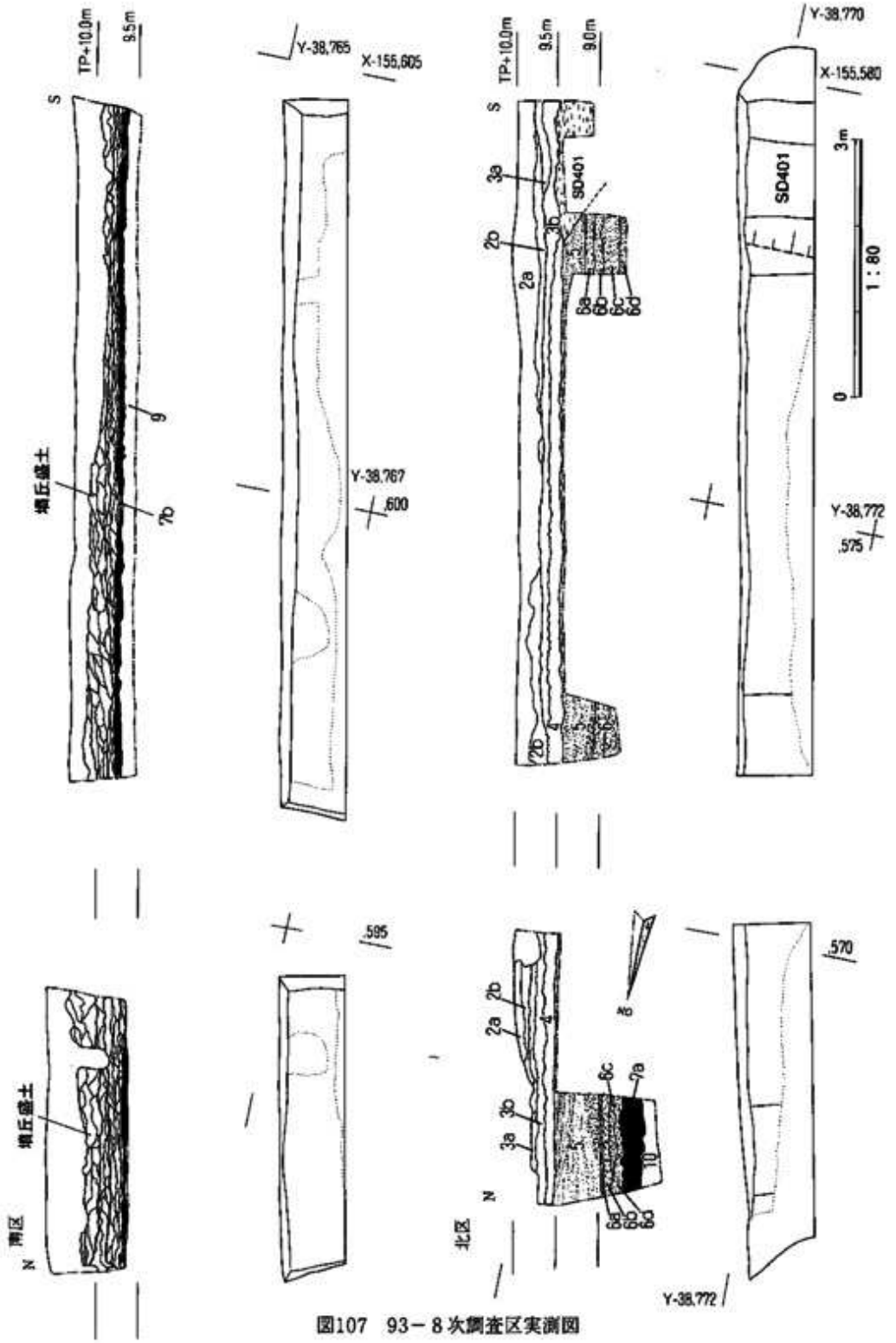


図107　93－8次調査区実測図

ものはなかった。

ⅰ)鎌倉時代(図107)

SD401　北区断面の4層基底面で観察した東西方向の溝である。本遺構の続きはこれまでにも多くの調査で検出されており、一町四方の区画溝(堀)であることが明らかとなっている。これに関する遺構の分布や連続性は[大阪市文化財協会1993]で整理されており、それによれば、溝の掘削時期は平安時代後期で、鎌倉時代を通じて機能していたとされる。SD401は区画溝北辺のほぼ中央部に位置する。

ⅱ)塚ノ本古墳(長原1号墳、図107・108)

前述したように、北区は塚ノ本古墳の周濠内、南区は墳丘上に相当する(図108)。しかし、掘削深度の制限からいずれの地区でも平・断面において墳丘・周濠の上端・下端を検出できなかった。また、調査範囲内では埋葬施設や埴輪の樹立は確認されなかった。

墳丘の盛土はTP+9.8mの7b(長原7B)層の上面に行われており、0.1～0.6mの厚さで遺存していた。盛土は3層に大別することができた。上層は9(長原13)層の下部から10(長原14)層、中層は9(長原13)層上部、下層は7b層をそれぞれ母材としており、長原遺跡の標準層序が逆転している状況が見られた。盛土の個々の単位は水平方向に積まれ、各層の上面もほぼ水平であった。これは、墳丘を築くために当時の地表から徐々に採土して、順次盛土を行っていった結果であると考えられる。また、盛土最下部の偽礫と当時の地表にあった7b層は重圧で押潰され、水平なラミナのように変形している状況が看取された。

表15　塚ノ本古墳とその周辺に関する既往調査と成果

番	調査主体	調査次数	面積㎡	主な成果	出典
①	長原遺跡調査会	NG1 (32工区)	8600	墳丘・周濠を横断。墳丘の南西に原位置の円筒埴輪を検出。墳丘に平坦面(テラス?)あり。南西の外堤上に埴輪円筒棺発見。地籍図より東面の前方後円墳を想定。	長原遺跡調査会1978
②	大阪文化財センター	近畿道		墳丘の西裾、西周濠を検出。埴輪円筒棺5基・木蓋土壙墓1基を発見。東南面の前方後円墳を想定。	大阪文化財センター1978
③	大阪市文化財協会	NG84－70	60	墳丘と南東周濠をトレンチで確認。	大阪市文化財協会1992
④	同上	NG85－6	7	北周濠で外堤上端を検出。北東周濠をボーリング探査するも周濠内堆積物が出土。	大阪市文化財協会1987a
⑤	同上	NG85－35	40	北周濠で外堤上端を検出。	大阪市文化財協会1987c
⑥	同上	NG86－24	60	北周濠で外堤上端・円筒棺1基を検出。	大阪市文化財協会1988
⑦	同上	NG88－18	104	北東周濠を横断。周濠の上・下端、墳丘の基底部を検出。周濠内NG6層底から船橋O－Ⅰの小型丸底壺が出土。	大阪市文化財協会1990b
⑧	同上	NG93－8	22	墳丘中央西寄りと北西周濠を断面調査。	本書
A	同上	NG85－18	450	塚ノ本古墳北側の敷地。129号墳を検出。	
B	同上	NG86－54	205	北側の東西道路。149号墳を検出。	大阪市文化財協会1993
C	同上	NG86－58	680	東側の南北道路。150・151号墳を検出。	同上
D	同上	NG86－58	245	南側の東西道路。152号墳を検出。	同上

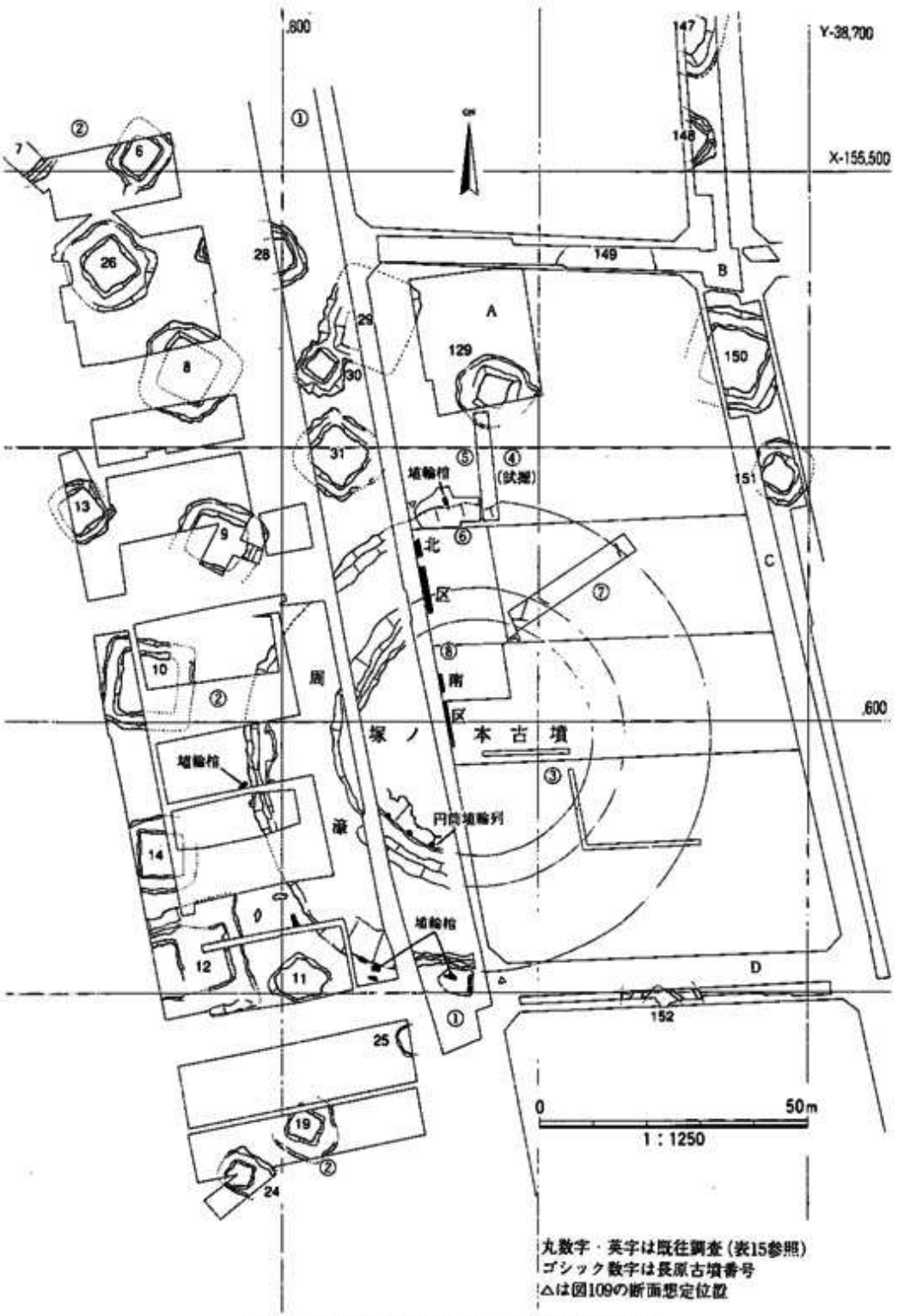


図108　塚ノ本古墳周辺と93－8次調査区の位置

3)塚ノ本古墳に関する検討

塚ノ本古墳に関する既往の調査(図108、表15)と今回の調査の成果を併せて、同古墳の概要を記しておきたい。

i)古墳の立地

河内台地から北へ張出した瓜破台地の東縁部で、瘤状に東へ突出した地形上に立地する。東側は古長原川[趙哲済1994]などが流れ込む谷地形となっている。古墳が築造された場所は、谷底から約1m崖状に高くなっていたものと復元される[高橋工1999]。

ii)墳形と規模

初期の調査(表15の①・②)では、おもに地籍図と水田畦畔の乱れから、東面または東南面する100mクラスの前方後円墳であるとが想定されていた。しかし、その後の③・④・⑦調査では南東・北・北東の位置に周濠が検出され、C・D調査では周濠または前方部らしきものは発見されなかった。東か南南東方向へ前方部が取付くとすればC・D調査のいずれかで墳丘か周濠が検出されるはずであるから、大型の前方部をもつ前方後円墳の可能性は否定されたといってよい。しかし、この方向に当る近接地は未調査で、この方向に短小な前方部を設けた帆立貝式前方後円墳、または造出し付き円墳の可能性は否定しきれない。現状では円墳説を最有力として、この2者を加えた3つの可能性がある。また、円墳と仮定して復元したばあい、墳丘の基底部での直径は約55m、周濠を含めた直径は約86mである。この規模は豊中市大塚古墳(墳丘径56m)[豊中市教育委員会1997]とほぼ同じである。

iii)墳丘の外表施設と墳丘の築造方法・埋葬施設

比較的広範囲に周濠・墳丘を検出した①・②調査でも、葺石ないしその転落石とおぼしき石は発見されておらず、葺石は当初からなかったとみてよい。

①調査で埴輪列の内側に緩斜面があることが報告されており、埴輪が原位置を保って出土したことを併せ考えると、この緩斜面はほぼ当初の形状に近いと考えられる。となれば、この緩斜面は

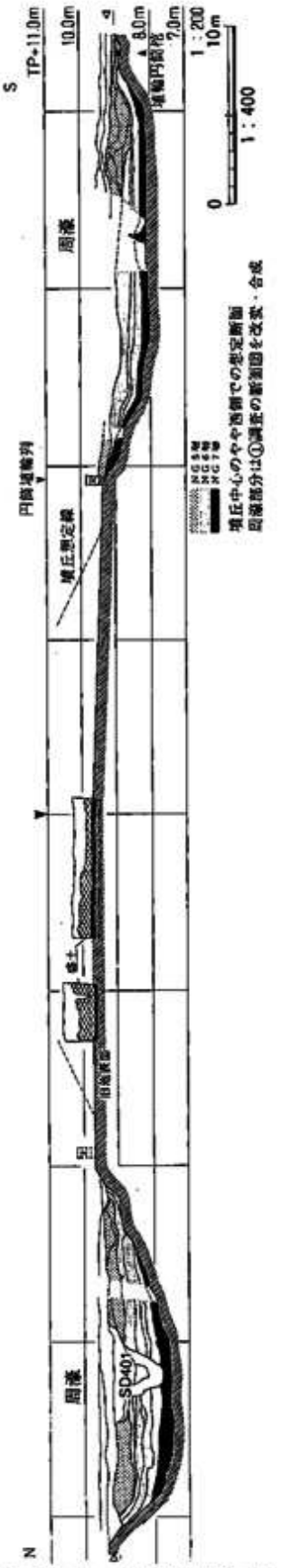


図109　塚ノ本古墳模式断面図

1段目のテラスに当るとみてよく、少なくとも2段以上の段築があったことになる(図109)。また、この緩斜面には盛土は行われておらず、墳丘の1段目は地山を削り出して成形されたと考えられる。一方、盛土が確認されたのは、①調査では「中心に近い部分」、⑦調査でも1段目テラスの外縁から約1.5mほど内に寄った地点からで、墳丘2段目以上が盛土によって成形されたことは確実である。1段目を地山削り出し、2段目以上を盛土によって築く設計は、長原古墳群内では高廻り2(長原170)号墳や一ケ塚古墳と共通する。

盛土の工法については、現在、長原古墳群で3種類が想定可能である。第1は、墳丘盛土部分の下から上までを水平に盛土してゆく工法で、水平方向に偽礫の分層が可能であり、長原57号墳・高廻り2号墳・南口古墳(長原181号墳)など、比較的大型の古墳でみられる。第2は、まず墳丘の中心に小高い盛土を行い、周囲を盛り上げてゆく工法で、偽礫の分層線は中心から外側へ向って下がるものが多く、高廻り1(長原169)号墳でみられる。第3は、墳丘外縁を土手状に盛り上げて、その内部を埋めてゆく工法で長原179・180・200号墳など小型の古墳に多くみられる。当然、第1～3の工法は、それぞれを複合して行っていることも考えられるが、①・⑧調査の成果からみると塚ノ本古墳の墳丘2段目は第1の工法を採用したとみられる。

埴輪列は、①調査で原位置を保つ円筒埴輪2本と1本分の掘形が検出された。1段目テラスの内側に樹立されていたようで、間隔は4.7mと広く、個々の埴輪を樹立する際の平面円形の掘形が掘られている。復元される埴輪列の直径は約43mで、計算上28本の埴輪が樹立されていたことになる。出土した埴輪の種類は円筒埴輪のほか、①調査で大型の家形埴輪の破片が出土している。この家形埴輪は円柱と鰭飾りをもち、高床式の入母屋造家と考えられている[大阪市文化財協会1991a]。

埋葬施設については、⑧調査で墳丘の想定中心から4.5m西側を調査したが、その痕跡すら見い出せなかった。2段以上の段築があり、盛土の厚さがもっとも残りのよい部分でも0.6m程度しか遺存していないことから、すでに削平されている可能性が高い。

iv)周濠と遺物の出土状況

周濠の規模は、①調査では、北周濠は幅16mで、深さ1.8m、南周濠は幅18.5mで、深さ1.0m、②調査では、西周濠は幅17mで、深さ1.4m、⑦調査では、北東周濠は幅20mで、深さ1.0mである。

周濠内の堆積物は大まかに分けて、下から黒色系の粘土、緑色系のシルト～粗砂、黄色系の砂礫の3層で、それぞれ長原7・6・5層に対応する。長原7層には墳丘から崩落し

たと考えられる埴輪が多量に含まれており、墳丘盛土が流出・再堆積した部分も含めて、長原7B層の範疇で捉えることができる。また、⑦調査では長原6・7層相当層の境目から船橋O－I型式に属する小型丸底壺が出土していて、築造時期については船橋O－I型式の時期以前で、さほど隔たらない時期と考えられる。長原6層には踏込みが顕著にみられるが、作土である確証は現段階で得られていない。①・②調査では長原5層上に平安時代の遺構が検出されている。

これらのことからみて、周濠内は、古墳築造後さほど隔たらない、船橋O－I型式の時期以前に黒色粘土層が堆積し、以降徐々に長原6層が堆積したのち、奈良時代末に属する長原5層の砂礫によって一気に埋没したものと考えられる。なお、②調査では塚ノ本古墳の東側を、南西から北東方向に流れる土手を伴う流路Aが検出されており、同流路を卓越して面的に拡がる砂礫層の存在が報告されている。この層は上下の地層との関係や周辺調査の結果からみて長原5層に比定することができる。このことから、塚ノ本古墳周濠を埋没させた長原5層は同流路からもたらされた可能性が高い。

v)墳丘体積の試算

前項で述べた周濠の幅・深さのデータから、周濠の深さを1.45m、上端の幅を18m、下端の幅を11m(いずれも平均値)と仮定したばあい、周濠の掘削によって排出される土量は約4,489m^{3}である。さらに、埴輪列の内側に1.5mずつの平坦面を控え、2段目基底の直径を40mとし、35°の傾斜(大塚古墳参考)で盛土を行ったばあい、盛土の高さは5.370m、墳頂には直径24.66mの平坦面ができる。この試算からも主体部が遺存する可能性は非常に低いといえる。

別表　長原遺跡の標準層序1995

区分	層序	層相	層厚(cm)	自然現象・自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C14yB.P	時代
沖積層（難波累層）上部層I	NG0層	現代客土	−				近代・現代
	NG1層	現代作土	15-25				
	NG2層	含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂	6-24	[illegible]	↓小溝群・畝溝　青花・唐津・瀬戸美濃・信楽など	(400)	近世
	NG3層	含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト	13-20		↓小溝群・畝間・島畠　瓦質土器・陶磁器　瓦器（IV～V期）		室町
	NG4A層	暗灰黄色細質砂～シルト 30～45cm：含細礫質灰色中粒砂	8-15		瓦器（III～IV期）		
	NG4B層 i	暗灰色砂質シルト	av.20		瓦器 黒色土器 [illegible] 須恵器 土師器／←水田面　↓小溝群・畝溝　瓦器（II～III期）		鎌倉
	ii	含細礫質灰色中粒砂	av.5				
	iii	灰色砂質シルト	av.15		←水田面　↓小溝群・畝溝　瓦器（I～II期）	(800)	
	NG4C層 i	明黄褐色砂質シルト	av.20		▽掘立柱建物　←水田面　平安I～III期		平安
	ii	にぶい黄褐色シルト質砂	av.20			(1200)	
	NG5A層	灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を挟在	30-60		平城宮V～VI　←畦畔		奈良
	NG5B層	青灰色粗粒～極細粒砂	2-8		←水田面　平城宮II		
	NG6A層 i	明青灰色砂・粘土質シルト	≦20	タニシ		(1300)	
	ii up.	明緑灰色中粒～細粒砂	≦3		←ヒトと偶蹄類の足跡		
	ii lw.	粘土質シルト薄層と極細粒砂薄層の互層	av.10		←水田面		
	NG6B層 i	含砂・灰黄褐色～暗灰色シルト質粘土	≦15	タニシ	飛鳥II～IV		飛鳥
	ii	灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂	≦5	←畦畔	飛鳥II　←水田面	(1400)	
	NG7A層 i	含砂灰色粘土	av.10		←水田面　飛鳥I		
	ii	含砂黒褐色シルト質粘土	av.15		↓掘立柱建物		古墳後期／古墳中期
上部層II	NG7B層 i	黒褐色砂・礫質粘土	≦35		←長原古墳群　埴輪（II～V期）・須恵器（～TK10）	(1600)	
	ii	褐色極細粒砂～粘土質シルト	≦20		(←水田面：八尾南遺跡)　庄内式・畿内第V様式		古墳前期
	iii	黄褐色粘土質シルト	≦3		↓方形周溝墓・竪穴住居	(1700)	弥生後期
	NG8A層	青灰～黄灰色砂・礫～粘土	≦40		←方形周溝墓・溝　畿内第III・IV様式・凸基式石鏃	(2000)	弥生中期
	NG8B層	暗褐色砂質シルト	av.10				
	NG8C層 i	にぶい黄褐色極細粒砂～中粒砂	av.35		[illegible]石鏃　←ヒトの足跡		
	ii	黄褐色シルト質粘土	≦15	←畦畔	←水田面・溝・自然流路の堤　←石器製作址・畿内第II様式・石斧　畿内第I様式・長原式・石鏃		弥生前期
	NG9A層	灰色シルト質粘土	av.10				
	NG9A層	黒褐色砂・シルト質粘土	3-15				
	NG9B層 i	灰オリーブ～黒褐色砂礫	≦90				
	ii	暗灰黄色シルト質粘土	10-40		[illegible]I様式・[illegible]		
	iii	灰オリーブ色シルト質粘土	3-14		土器 石棒	(2300)	
	iv	暗灰オリーブ色シルト質粘土	8-30	アラカシ イヌガヤ	▽石器製作址　晩期長原式・石斧の柄・弓		縄文晩期
	v	灰オリーブ色シルト質粘土・砂	10-35	←根株	▽土器埋納　▽竪穴住居・貯蔵穴　←晩期滋賀里II/IV式 凹基式石鏃		
	NG9C層 i	黒褐～暗灰色含シルト質粘土	2-8			(3000)	
	ii	灰色シルト質粘土～砂礫	3-10		後期四ツ池式　後期福田KII式（八尾南遺跡）		縄文後期
	iii up.	オリーブ黒～灰色シルト・細粒砂質粘土	7-25				
	iii lw.	暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	av.5	←火山灰層準			
	NG10層	暗灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト	≦80	←流路			
	NG11層	灰色シルト質粘土	≦16	←乾痕		←4020±130B.P.(GaK-11323)	
中部層	NG12A層	有機質黒褐色腐植質粘土～シルト	≦15		中期北白川C式・石鏃	←4740±140B.P.(GaK-14942)　←4900±140B.P.(GaK-14941)	
	NG12B層 i	NG12BC層 暗灰色細粒シルト～粘土質シルト 5～20m：暗灰色細粒砂質シルト	av.20	←地震?			
	ii	暗黄灰色シルト質火山ガラス	av.10	[illegible]			
	iii	白灰～灰色火山ガラス質シルト	av.10		中期船元II式		縄文中期
	iv	黄灰色砂礫	≦15		▽土器　▽石器製作址　凹基式石鏃	←4980±100Ch (GaK-14940)	
	NG12C層	暗灰色シルト質極細粒砂～シルト	≦45	←乾痕			
	12/13層漸移帯	暗灰色細粒シルト（～腐植・黒斑）	≦5	←鬼界アカホヤ火山灰層	[illegible]・[illegible]	←6300	縄文草創期
下部層	NG13A層 i	灰色細粒シルト	≦3				
	ii	灰黄～灰白色細粒シルト（火山灰質）	av.7	←[illegible]火山灰層準	▽石器製作址　削器・ナイフ形石器・剥片・石核	(15000)	
低位段丘構成層	NG13B層 i	黄褐～灰黄色シルト質粘土	≦5	←乾痕	?剥片・石核		
	ii	黄灰色粗粒シルト質火山灰	≦5	←平安神宮火山灰層		←25000	後期旧石器
	NG13C層	暗灰黄～暗褐色シルト質粘土	av.12	↓乾痕			
	NG14層 up.	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土	20-80		剥片		
	lw.	灰色砂礫～砂質シルト			▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・翼状剥片石核		
	NG15層 up.	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫	150-450				
	lw.	シルト・砂礫		ヒメマツハダ　←ナウマンゾウの足跡			
中位段丘構成層	NG16A層	暗灰～灰黄色シルト・礫混り砂互層	≦150	←化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石			
	NG16B層 i	暗褐色腐植質粘土	≦20	←吾彦火山灰層準		←87000	
	ii	灰色火山灰質砂質粘土	≦20	←北花田火山灰層準		←91000	
	iii	灰色砂礫	≦40				中期旧石器
	（未命名層）	灰色砂礫～砂質粘土	40-70				
		暗緑色粗粒砂質粘土		←ゾウの足跡状の凹み			

←；上層検出遺構　↓；下層検出遺構　▽；地層内検出遺構

Ch：炭　Si：土壌

［趙哲済1997］に加筆

引 用・参 考 文 献

石田茂輔1967、「日葉酢媛命御陵の資料について」:『書陵部紀要』第19号　宮内庁書陵部、pp.37－62

大阪市文化財協会1987a、「社屋・倉庫建設工事に伴う長原遺跡試掘調査(NG85－6)略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127－132

1987b、「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－23)略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.149－185

1987c、「大同ドリンコ倉庫兼事務所建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－35)略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.186－192

1988、「城下部擁壁工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG86－24)略報」:『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.176－187

1990a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1990b、「森義雄氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88－18)略報」:『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.271－278

1991a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1991b、「東野稔氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG89－25)略報」:『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.148－167

1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1995b、「能澤淳二氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG93－18)略報」:『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.118－140

1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ

1997c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ

1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ

大阪文化財センター1978、『長原』

岡村勝行1991、「家形埴輪について」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.150－155

川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」:『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会、pp.95－164([川西宏幸

1988]に再録)
1988、『古墳時代政治史序説』 塙書房
京嶋覚1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294－306
1992、「長原・瓜破遺跡の製塩土器」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.155－160
1993、「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.241－258
古代の土器研究会編1992、『古代の土器1　都城の土器集成』
櫻井久之1993、「古墳時代の算盤玉形紡錘車」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.259－267
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114
佐原眞1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2　東京堂出版、pp.53－72
菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.367－388
高井健司1992、「コンピュータを利用した版下の作成」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.3－6
高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79－106
田島富慈美1993、「有舌尖頭器における剥離面の検討－大阪市内の出土例から－」：『旧石器考古学』47　旧石器文化談話会、pp.185－193
辰巳和弘1990、「形象埴輪と古代王権祭儀」：『高殿の古代学』　白水社、pp.91－146
田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ
趙哲済1994、「長原遺跡における旧石器調査の現状」：大阪市文化財協会編『文化財論集』、pp.73－84
1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41－44
1997、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ、pp.14－18
豊中市教育委員会1997、『摂津豊中大塚古墳』
長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所学報第26冊
平田洋司1991、「4基の古墳と長原古墳群」：大阪市文化財協会編『萩火』33号
南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『萩火』8号
森島康雄他1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社、pp.315－337
渡辺誠1985、「ヨコヅチの考古・民具学的研究」：『考古学雑誌』第70巻第3号　日本考古学会、pp.52－93
渡辺昌宏1982、「大阪府美園遺跡1号墳出土の埴輪」：『考古学雑誌』第67巻第4号　日本考古学会、pp.79－93

あ と が き

本年で19年目を迎える長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査も終盤にさしかかり、事業完了時には残る年度の報告書もすべて刊行するべく、職員一丸となって努力している。その点では、現場での新鮮なイメージを即座に伝えうる状況に近づいて行くといえるのかもしれない。

しかしながら、当年度には本事業だけでなく、8冊の報告書が刊行される見込みであり、当協会始まって以来のハイペースで報告書が作成された。そのような状況にあって、存分に発掘調査時の想いを盛り込むことに困難な兆しも見え、本書では十分な遺構・遺物の検討が行えなかったということが反省される。この点については、本書での事実記載を踏まえた上で、今後、調査員個々の研究を通じて考究する所存である。

末筆ながら、本書を成すに当っては、関係各位から並々ならぬご協力を賜った。深謝の意を表するとともに、今後とも文化財保護と当協会事業へのご理解とご支援を賜るようお願いする次第である。

（永島暉臣慎）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

M　MT15型式　49, 74
　MT85型式　69
O　ON46段階　29, 37
T　TK10型式　22, 69, 131
　TK23型式　18, 27～29, 37, 75, 130, 131
　TK43型式　27, 29
　TK47型式　75, 131
　TK208型式　18, 27, 29, 37, 72, 75, 133, 134
　TK209型式　69, 130
　TK217型式　16, 67, 123
あ　朝顔形埴輪　75, 82, 88, 89, 115
　飛鳥Ⅰ　5, 53, 58, 66, 69, 70
　飛鳥Ⅱ　41, 53, 58
　飛鳥Ⅲ　123
　当て具痕　22, 67, 69
　綾杉文　100
い　家形埴輪　6, 75, 89～100, 106, 109～112, 156
　生駒西麓産　53
　石匙　59
　井戸　3, 16, 37, 78, 80, 123, 128, 140, 143
　入母屋造家　89, 94, 100, 106, 109, 156
う　ウシ　42, 58, 122
　臼玉　28, 31, 37, 134～136, 140
　ウマ　58, 115, 130
　馬形埴輪　78
　ウリ類　58, 130
え　円筒埴輪　6, 75, 82, 83, 85～88, 107, 109, 111, 156
お　桶側　143
　押縁　89, 91, 94, 95, 100
か　灰釉陶器　125, 127
　角閃石　30, 49, 53, 67, 69, 85, 87, 89, 100, 137, 138, 145
　囲形埴輪　6, 100, 106
　笠部　78, 102
　飾り板部　104
　火山ガラス　20, 47
　カシ類　107, 109
　滑石製品　28, 31, 37, 134, 136, 140
　鎌　47, 53
　唐津焼　13, 117
　側柱建物　26, 27, 125
　乾痕　114
　韓式系土器　29, 37
き　掻口縁　83, 88
　畿内第Ⅳ様式　69
　畿内第Ⅴ様式　137
　衣蓋形埴輪　6, 78, 100～102
　鋸歯文　104
　切妻造家　89, 91, 94
く　偶蹄類　44, 46, 55
　草摺形埴輪　6, 104
　クサビ　34, 141
　楕葉型瓦器椀　40
　管玉　31
　黒笹90(K－90)号窯式　127
け　畦畔　19, 23, 38, 42～44, 46, 55, 56, 119, 128, 155

	結晶片岩	32
	建築部材	132
	畎畝	56
こ	小型丸底壺	157
	昆虫遺体	130
さ	榾	3，123，126，127，140
	削器	33
	サンショウ属	58
し	滋賀里Ⅳ式	49
	四注屋根	100
	忍岡系対称文	102，104
	島畠	19，23，38，41，43
	周濠	6，7，10，71，72，80，81，83，109，112，151，153，155～157
	縄蓆文タタキ	30
	縄文土器	47，122，137，138
	植物遺体	28，38，58，69，126，135，138，145
	人物埴輪	78
す	水洗選別	9，28，32，135，148
	水田	23，41，42，44，49，53，55，58，81，128
	スカシ孔	29，69，75，76，85，87，89，91，92，98，100，134
	鋤(先)	7，23，84，107，109
	犂溝	13，41，55，61，62，78，123
せ	製塩土器	26～28，31，47，130，134～136，140
	石核	34，36
	赤色顔料	94，102，107
	石錐	33
	石鏃	3，9，11，12，17，33，59，122，137～140，148
	磚	49
そ	総柱建物	26，37，123
	算盤玉形紡錘車	18
た	高床式	94，109，156
	叩き石	46，52
	立飾り部	78，100
	竪穴住居	37，133
	盾形埴輪	6，102～104，107
	炭化米	126
	丹波焼	13，119
ち	鳥足文タタキ	30，37
	直弧文	104
つ	束柱	26
	造出し	6，109～112，155
	壺形埴輪	6，88，111
て	鉄製品	23，47，53，56，58
と	陶質土器	29，30，37
	刀子	47，53
	東播系(須恵器)	47
	動物遺体	47，58，69，115，130
	土錘	60，62
	鞆形埴輪	6，111
な	ナイフ形石器	13，34
	長原式	138
に	二重口縁壺	84
	鶏形埴輪	6
は	羽釜	67，144
	白磁	73
	筒部	104
	埴輪列	111，155，156，157
	破風板	75，76，78，89，91，94，95，109
	梁材	94
ひ	微細石器遺物	32，34
	肥前陶磁器	13，44，47，123
	備前焼	44，47，117
	ヒョウタン類	130
	平瓦	49，52
	鰭飾り	78，156

ふ 船橋O－I式 157
布留式 29, 69
墳丘 6, 10, 72, 78, 80, 82～84, 109, 111, 118, 151, 153, 155～157
へ 平安時代II期 126, 140
平安時代III期 125～128, 140, 145
平安神宮火山灰 47
ヘラ記号 22, 29, 75, 82, 87, 123
ほ 紡錘車 3, 18
掘立柱建物 3, 19, 23, 36, 37, 123, 140, 145
ま 勾玉 28, 31, 37
曲物 23, 143
マダイ 69
マツ類 58
丸瓦 49
み ミニチュア竈 19, 22
ミニチュア甑 75
ミニチュア鍋 56
む 棟木 95
も 木製品 7, 23, 47, 53, 58, 83, 84, 107, 130, 131
モモ 28, 58, 69, 138, 145
や 大和型瓦器椀 40, 49
ゆ 有茎尖頭器 4, 9, 32, 34, 141, 145
靭形埴輪 104
よ ヨコヅチ 131
寄棟造家 89, 106
ら ラミナ 44, 46, 65, 72, 117, 136, 150, 151, 153
り 緑釉陶器 47

〈地名・遺跡名など〉

い 一ケ塚古墳 5～7, 71～73, 75, 78, 80, 83～112, 156
う 馬池谷 3, 5, 18, 19, 23, 37, 43, 44, 47, 53, 58, 59, 62, 70, 71
か 川辺1号用水 150
こ 古長原川 155
小谷 3, 5, 18, 59, 64, 65, 70
さ 佐紀陵山古墳 102
猿投窯 127
し 七ノ坪古墳 140
た 大正川 9, 143, 146, 148, 150
高廻り1号墳 156
高廻り2号墳 110, 111, 156
つ 塚ノ本古墳 9, 10, 109, 110, 151, 153～157
と 豊中大塚古墳 155
な 長原古墳群 9, 109, 112, 115, 156
に 西川辺川 145
ひ 東除川 7, 8, 118～120
ふ 古市古墳群 109
み 美園古墳 109, 111
南口古墳 140, 156

Archaeological Reports

of

Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XIII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1993

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

LC : Lithic concentration
NR : Natural stream
SA : Palisade or fence
SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Posthole or pit
SR : Paddy field baulk
SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work 1
S.1 The outline of excavations in 1993 1
1) Excavations 1
2) Procedure of publishing this report 2
S.2 Outline and progress of excavations 3
1) South-eastern sector of the Uriwari Site 3
2) Western sector of the Nagahara Site 3
3) South-western sector of the Nagahara Site 5
4) Southern sector of the Nagahara Site 7
5) Central sector of the Nagahara Site 8
6) South-eastern sector of the Nagahara Site 9

Chapter II Results of research in the South-eastern sector of the Uriwari Site and the Western sector of the Nagahara Site 11
S.1 Research area UR93-14 11
1) Stratigraphy and finds from each stratum 11
2) Features and finds 12
i) From the Edo to Modern Periods 12
ii) The Edo Period 13
iii) The Muromachi Period 13
iv) From the Asuka to Nara Periods 16
iv) The Kofun Period 17
3) Conclusion 18

S.2 Research area NG93-34 19
1) Stratigraphy and finds from each stratum 19
2) Features and finds 19
i) The Muromachi Period 23
ii) The Kamakura Period 23
iii) The Kofun Period 23
iv) From the Palaeolithic to Jomon Periods 32
3) Conclusion 36

S.3 Research area NG93-68 38
1) Stratigraphy and finds from each stratum 38

2) Features and finds 41
i) The Edo Period 41
ii) From the Heian to Kamakura Periods 41
iii) The Nara Period 42
3) Conclusion 43

S.4 Research area NG93-71 44
1) Stratigraphy and finds from each stratum 44
2) Features and finds 53
i) The Edo Period 53
ii) The Muromachi Period 53
iii) From the Heian to Kamakura Periods 55
iv) Before the Asuka Period 58
3) Conclusion 58

S.5 Research area NG93-82 59
1) Stratigraphy and finds from each stratum 59
2) Features and finds 61
i) The Edo Period 61
ii) The Muromachi Period 62
iii) The Kamakura Period 62
iv) The Late Heian Period 64
v) From the Asuka to Nara Periods 64
vi) Before the Asuka Period 65
3) Conclusion 70

Chapter III Results of research in the South-western and Southern sector of the Nagahara Site 71
S.1 Research area NG93-6 and NG93-7 71
1) Stratigraphy and finds from each stratum 71
2) Features and finds 78
i) From the Kamakura to Edo Periods 78
ii) From the Late Kofun to Nara Periods 81
iii) The Ichigazuka Kofun 83
3) Conclusion 109

S.2 Research area NG93-22 113
1) Stratigraphy and finds from each stratum 113
2) Features and finds 115
i) The Edo Period 115
ii) The Muromachi Period 117
iii) From the Heian to Kamakura Periods 117
iv) The Asuka Period 117

3) Conclusion 118

S.3 Research area NG93-31 119
1) Stratigraphy and finds from each stratum 119
2) Conclusion 120

Chapter IV Results of research in the Central sector of the Nagahara Site ... 121
S.1 Research area NG93-76 121
1) Stratigraphy and finds from each stratum 121
2) Features and finds 123
i) The Edo Period 123
ii) The Middle Heian Period 123
iii) The Early Heian Period 128
iv) The Asuka Period 128
v) The Kofun Period 129
vi) The Late Yayoi Period 136
vii) From the Jomon to Middle Yayoi Periods 137
3) Conclusion 140

Chapter V Results of research in the South-eastern sector of the Nagahara Site 141
S.1 Research area NG93-4 141
1) Stratigraphy and finds from each stratum 141
2) Features and finds 143
i) The Heian Period 143
ii) From the Jomon to Yayoi Periods 145
3) Conclusion 145

S.2 Research area NG93-5 146
1) Stratigraphy and finds from each stratum 146
2) Features and finds 148
i) From the Late Heian to Kamakura Periods 148
ii) The Late Kofun Period 148
iii) The Yayoi Period 150
iv) The Palaeolithic Period 150
3) Conclusion 150

S.3 Research area NG93-8 151
1) Stratigraphy 151
2) Features and finds 151
i) The Kamakura Periods 153
ii) The Tsukanomoto Kofun 153
3) Investigation of the Tsukanomoto Kofun 123

i) Geographical settng of the Tsukanomoto Kofun 123
ii) Size and shape of the mound 123
iii) Surface accessories, the construction process of the mound and burial ..... structure 128
iv) Moat and associated finds 128
v) Reconstruction of the mound volume 155

Table of Stratigraphy at Nagahara Site 1995 159

Bibliography 160

Postscript
Index
English Contents and Summary
Reference Card

ENGLISH SUMMARY

The Nagahara and Uriwari sites are located in the south-eastern part of Osaka City, Japan, and are composed of archaeological features from the Palaeolithic through to the Pre-Modern Period (AD 1603~1868). This volume reports the results of 13 excavations at the Nagahara and Uriwari sites (total area 2357 square meters) carried out during fiscal 1993.

Major finds from each period are summarized as follows.

A Palaeolithic backed blades (so called knife-shaped stone tool) were found in the western sector of the Nagahara site and south-eastern sector of the Uriwari site.

Stone implements from the early half of the Jomon Period were found in the western, central and south-eastern sectors of the site. Especially significant are the two Incipient Jomon Period tanged points found in the south-eastern sector of the site (NG93-4), these bring the total number of tanged point found at the Nagahara site to thirteen. Additionally, a cluster of Final Jomon Period pottery vessels were found at NG93-76. Pottery vessels of the same period were found from the western slope of Umaikedani (Umaike Valley) in the western sector of the Nagahara site (NG93-71).

Results for the Yayoi Period were poor with only a few features identified as Late Yayoi Period found at NG93-76.

There are two major points in Kofun Period features. First, we present the investigation results of two, large scale *kofun* (mounded tombs). To date, over 200 kofun have been investigated at the Nagahara site. Of these, most are miniature (5~10 meter-long sides) *hofun* (terraced, square mounded tomb) constructed between the latter half of the 5th century and the early half of the 6th century. The two *kofun* found at excavations, are much larger and older than the others. They will be indispensable material for the study of political power in this area during the Kofun Period.

Investigation in the south-western sector of the Nagahara site (NG93-6 & 7) included the excavation of early 5th century Ichigazuka Kofun (Nagahara Tomb No. 85). Excavation results have revealed Ichigazuka Kofun to be a 47.4m diameter *enpun* (circular mounded tomb) with a square projection on the eastern side and a 14m wide moat. A large number of *haniwa* (clay figure) were recovered from the moat, and it is beleived that at least seven house-shaped *haniwa* were arranged around the center of the mound. In addition to these, a wooden spade was found in the moat, such finds are rare. These results indicate that Ichigazuka Kofun comes from the earliest phase of Nagahara Tomb Cluster's construction, and identifies it as the second largest *kofun* found in the cluster.

A trench was excavated transversing the Tsukanomoto Kofun (Nagahara Tomb No. 1) in the south-eastern sector of the Nagahara site. The results from this, and previous

limited investigations have begun to clarify its original form. The Tsukanomoto Kofun has been identified as an approximately 55m diameter *enpun* (circular mounded tomb) with an 18meter wide moat, making it the largest within the cluster.

Second, investigations this year have revealed residential district of the sites. Archaeological features were found dating to between the latter half of the 5th and the early half of the 6th centuries in the central sector of the Nagahara site (NG93-76). One of these is a wide ditch, which has been interpreted as a division between the residential section and the rest of the settlement. A small branch valley named 'Kotani' was revealed by excavations on the western side of Umaikedani at NG93-82. This is the first such geological feature to be found at the Nagahara site. Archaeological evidence suggests that this was a residential area after the 5th century. An abacus bead shaped spindle whorl, found at UR93-14, with a strong association with Korea, may be crucial in identifying the origin of the people who settled this area.

Evidence from almost every excavation suggests that this area was extensively used for agricultural purposes from the Asuka to Pre-Modern Period. Between the 7th and 8th centuries however, large scale development is evident, not only on the plateau, but also within the valley and around the Nagahara Tomb Cluster. At NG93-76 and NG93-4, excavations revealed small, Early to Middle Heian Period (9th-10th century) residential areas, these settlements disappeared in the 11th century however. This evidence confirms the current theory that the small, scattered settlements were amalgamated into a single village during the 11th century.

Further Reading

Aikens, C. M. and T. Higuchi,
1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer (eds),
1996 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., (ed.)
1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Studies, Tokyo.
1992 *Archaeological study of Japan*. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.

The Osaka City Cultural Properties Association
1978-96 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-VI, Osaka. (In Japanese)
1989-99 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XII, Osaka. (In Japanese, with English summary except for Vols. I-III)
1998-99 *Archaeological Reports of the Eastern Sector of Nagahara site* Vols. I-II, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはっくつちょうさほうこく13
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告XIII
副書名	1993年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	久保和士・田中清美・高橋工・大庭重信・松本百合子・小田木富慈美・Robert Condon・岡村勝行・宮本康治・永島暉臣慎
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35　TEL.06-6943-6833
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしながはらにし 長吉長原西2・4丁目 ながよしかわなべ 長吉川辺1・3丁目 ながよしながはら 長吉長原3丁目 ながよしながはらひがし 長吉長原東3丁目	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	4次　19930419～19930720 5次　19930419～19930601 6次　19930419～19930930 7次　19930419～19930930 8次　19930419～19930427 22次　19930621～19930716 31次　19930719～19930727 34次　19930727～19931221 68次　19931117～19940202 71次　19931129～19940210 76次　19931217～19940318 82次　19940124～19940312	168 74 590 197 22 95 36.8 367 188 263 210 146	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査
うりわりいせき 瓜破遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 うりわりひがし 瓜破東8丁目	27126	—	34° 35′ 50″	135° 33′ 20″	14次　19930621～19930828	166	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落 田畑 古墳 その他	旧石器時代		ナイフ形石器
		縄文時代	石器集中部1 土器片集中部2	有茎尖頭器・石鏃・石錐・石匙 長原式土器・モモ核
		弥生時代前期	用水路	石鏃
		弥生時代後期	溝・落込み	壺・甕
		古墳時代	古墳2基 掘立柱建物3棟 溝・土壙	土師器・須恵器・円筒埴輪・形象埴輪(家・衣蓋・盾・靭・草摺形) 韓式系土器・製塩土器・滑石製品・木製勾玉・曲物・ヨコヅチ・ウマ骨
		飛鳥～奈良時代	畦畔・用水路	土師器・須恵器・ミニチュア土器(竈・甑)・土錘・鉄製鋤先・マダイ骨
		平安時代	掘立柱建物3棟 井戸・畦畔・用水路	土師器・黒色土器・灰釉陶器
		鎌倉～江戸時代	畦畔・島畠・用水路	土師器・瓦器・陶磁器・瓦・杭
瓜破遺跡	集落 田畑 その他	旧石器～縄文時代		ナイフ形石器・石鏃
		古墳時代	土壙	須恵器・算盤玉形紡錘車
		飛鳥～奈良時代	溝	土師器・須恵器
		鎌倉～江戸時代	用水路・井戸・土取り穴	土師器・瓦器・陶磁器

原色図版

周濠内円筒埴輪出土状況(北から)

近景（西から）

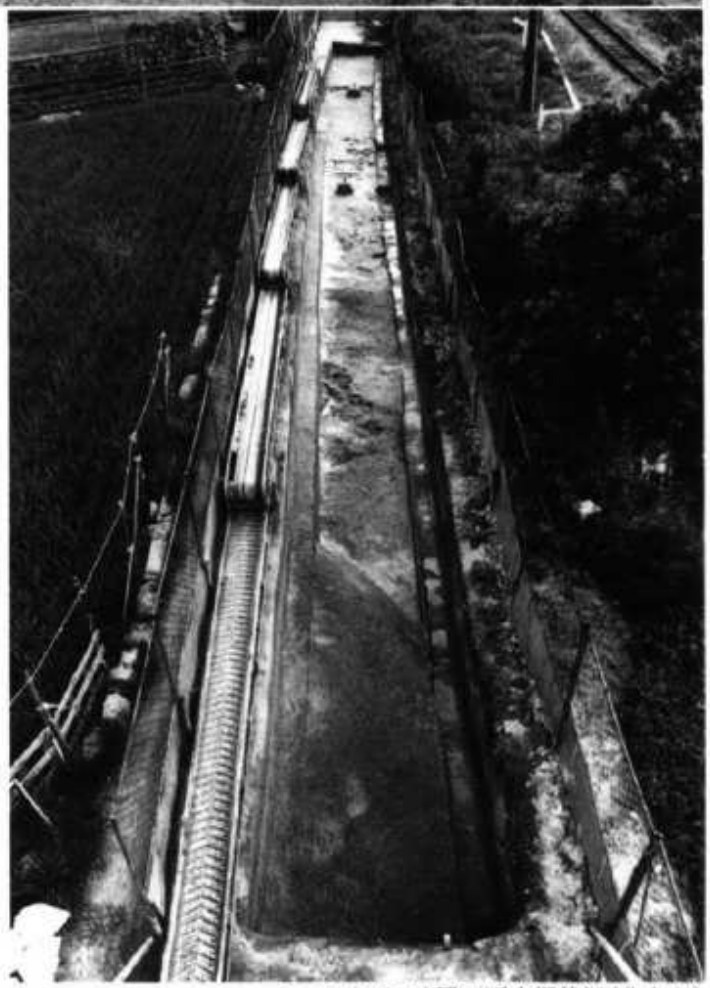
周濠近景（南から）

家形埴輪1・2

家形埴輪1

図　　版

地層断面とSD601(北から)



7・8(NG6)層下面完掘状況(北から)

完掘状況（南から）

SK701断面（西から）

北壁断面（南西から、西部）

古墳時代の遺構全景（東から）

SB701(北から)

SB702(北から)

SD706遺物出土状況(北から)

鎌倉時代の遺構全景(東から)

図版六　長原西地区93―68次調査地　地層断面

東壁断面と22(NG6Ai)層上面の状況(南西から)

22層以下の地層断面(西から)

22層上面検出足跡の
完掘状況(西から)

15(NG4Bii～iii)層上面の水田(南から)

東区　地層断面（南西から）

西区　地層断面（南から）

「馬池谷」西斜面全景（西から）

「馬池谷」西斜面全景（東から）

SD404杭列および断面（南から）

3b（NG3）層上面の水田（東から）

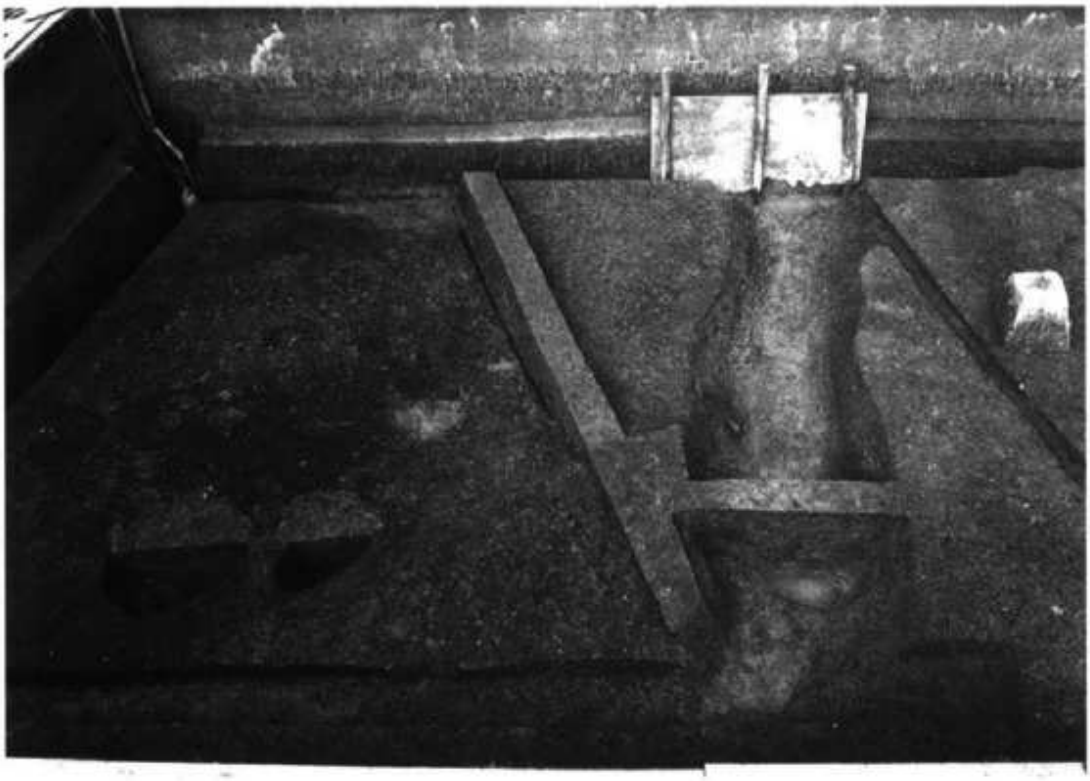
図版一一　長原西地区93―82次調査地　地層断面・「小谷」

西壁断面（東から）

「小谷」完掘状況（南東から）

完掘状況(西から)

7e(NG7A)層上面須恵器165状況(東から)



飛鳥時代の遺構（南から、西部）

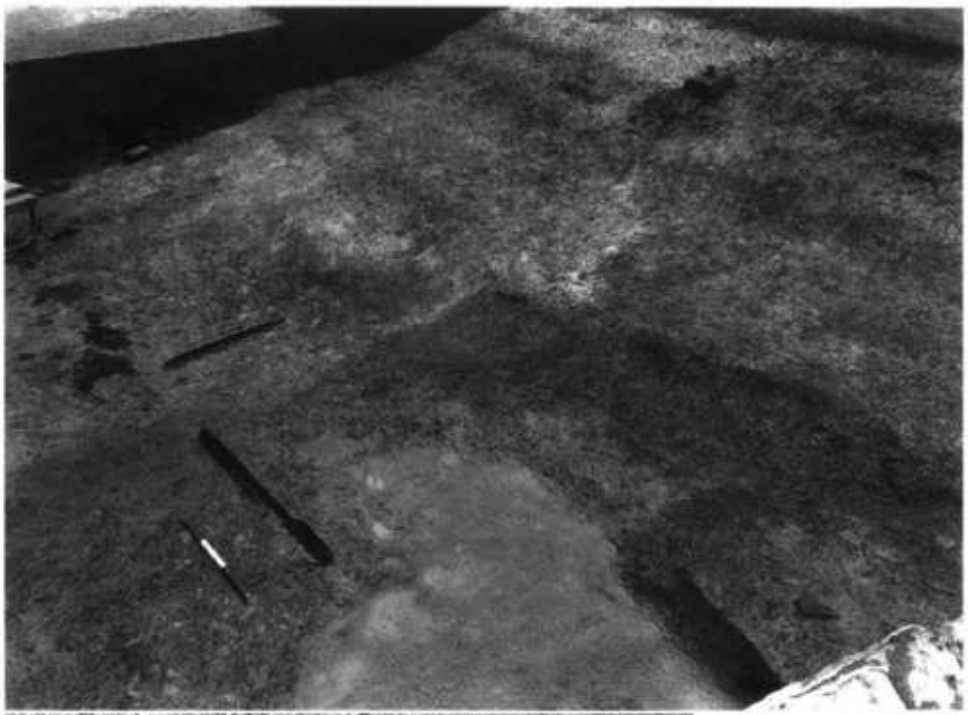
室町時代の遺構全景（西から）

調査地遠景（北西から、右端は馬池、左奥は二上山）

一ケ塚古墳全景（西から）

円筒埴輪出土状況（北から）

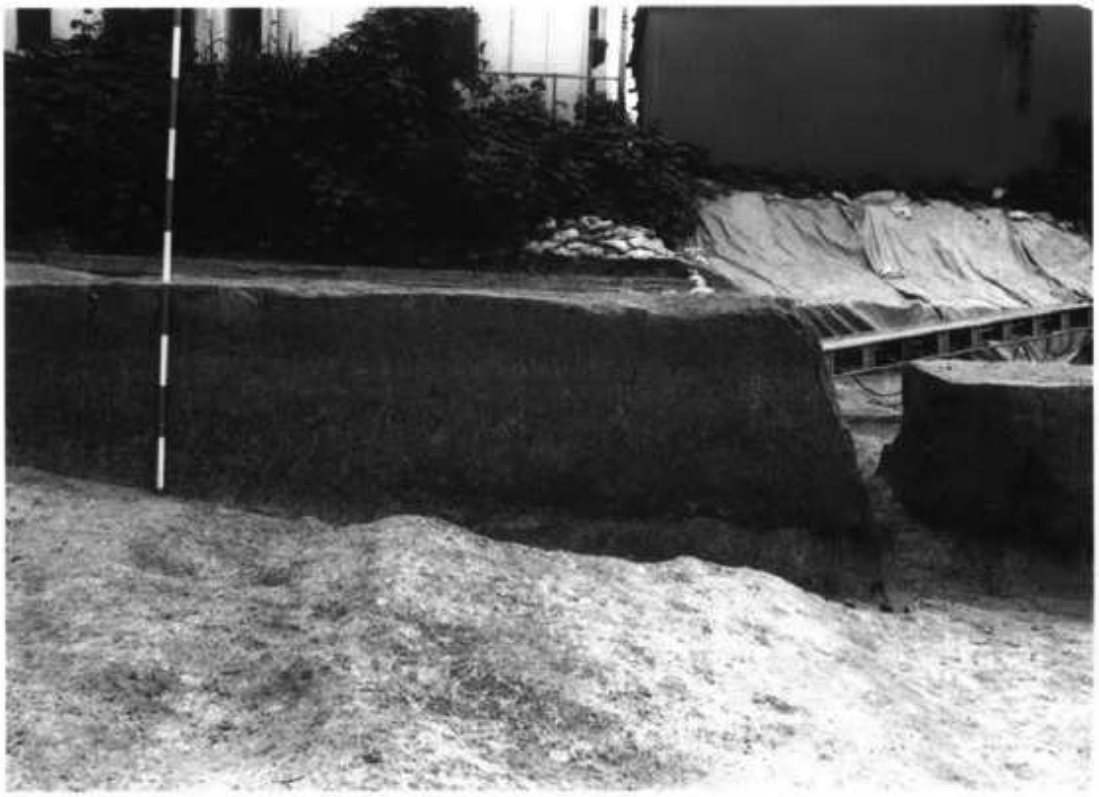
周濠完掘状況（北から）



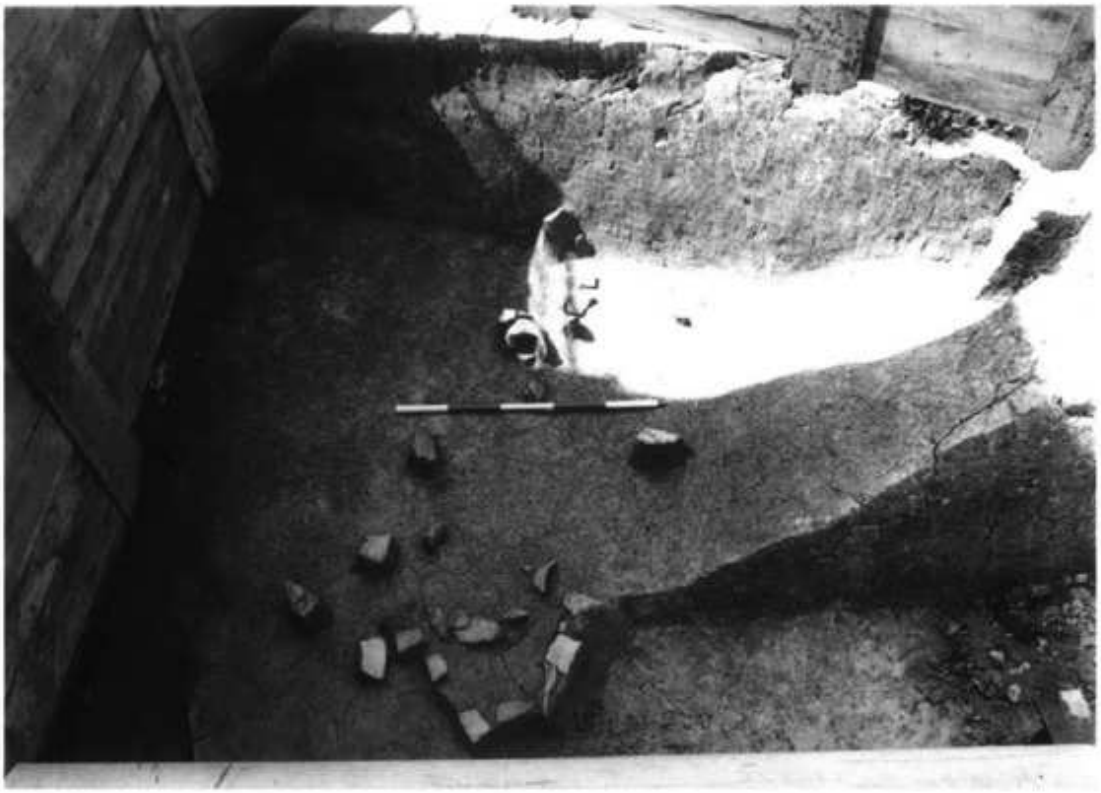
鋤346・棒状木製品348出土状況
（南西から、右側が墳丘）

鋤346出土状況（東から）

鋤347出土状況（南から）



一ケ塚古墳周濠断面（北から）



SD601遺物出土状況（南から）

図版一八　長原南地区93―22次調査地　近景・地層断面

調査地近景（南から）

東壁断面（南西から）

SD701（東から）

中世・近世の遺構全景（北から）

弥生・古墳時代の遺構検出状況（西から）

同完掘状況（西から）

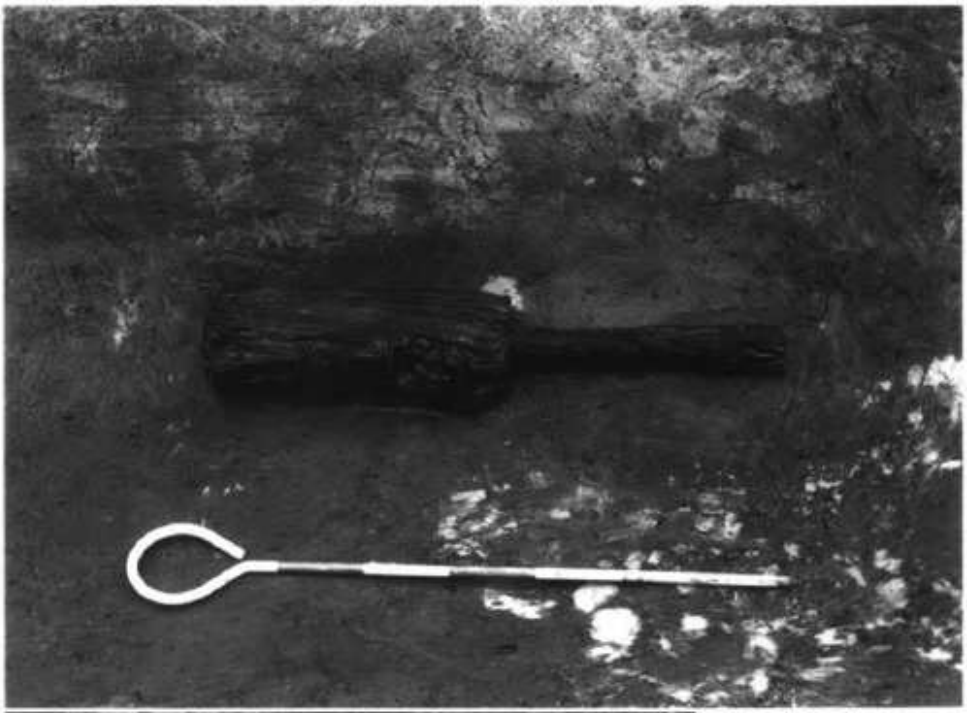
飛鳥時代の遺構検出状況（西から）

平安時代中期の遺構検出状況（西から）

南壁断面（北西から、東部）

SD701断面（西から）

SD701・702断面（南東から）



SD701ヨコヅチ387出土状況
（北から）

SD701木製品388出土状況
（北から）

SX703遺物出土状況（西から）

西区　全景(西から)

西区　全景(東から)

東区　全景(西から)

東区　SE401(西から)

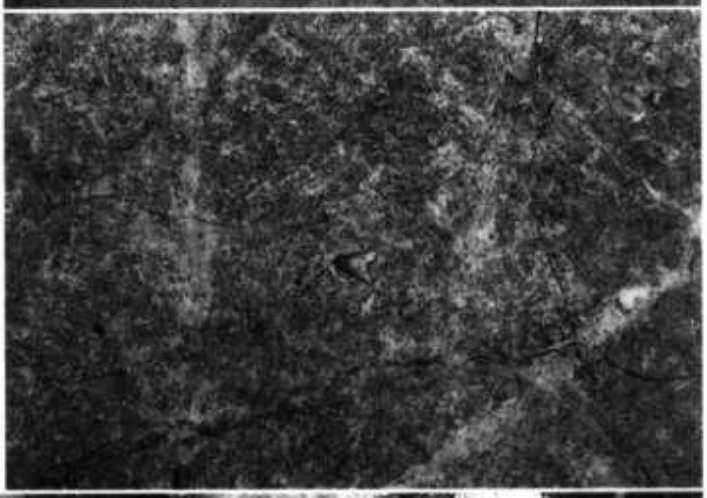
図版二四　長原東南地区93―5次調査地　全景・地層断面

完掘状況（東から）

西壁断面（東から）

NR1501断面（南から）

8（NG12～13）層石鏃470出土状況



SD901（南東から）

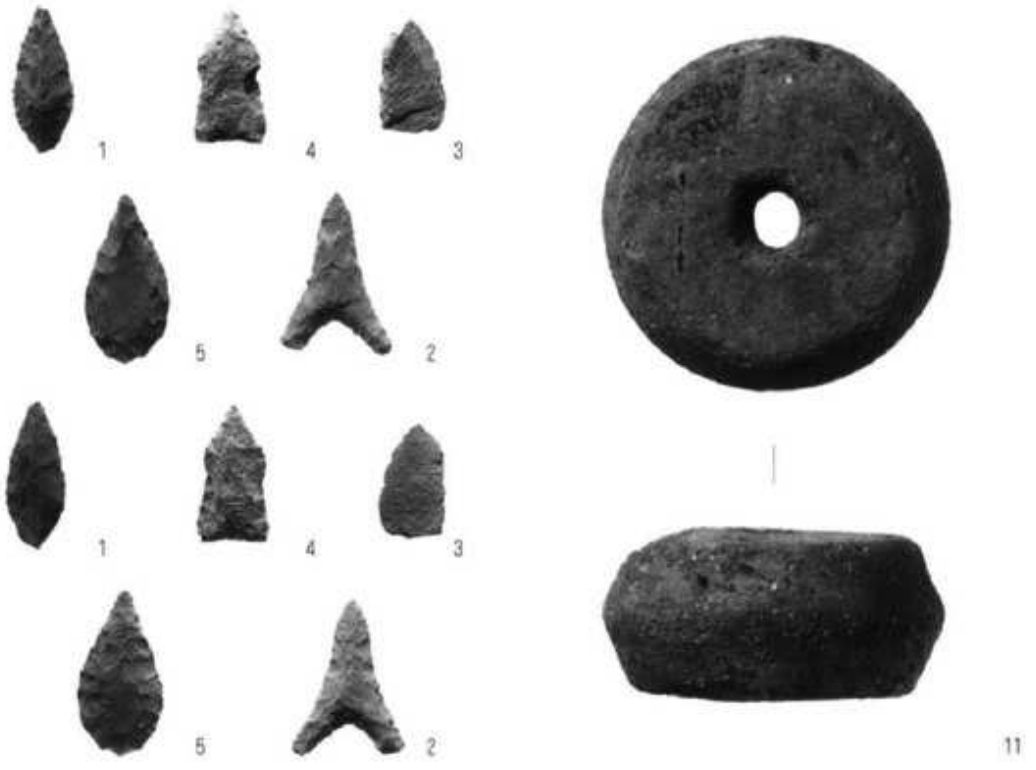
図版二六　長原東南地区93―8次調査地　全景・地層断面

南区　全景(南から)

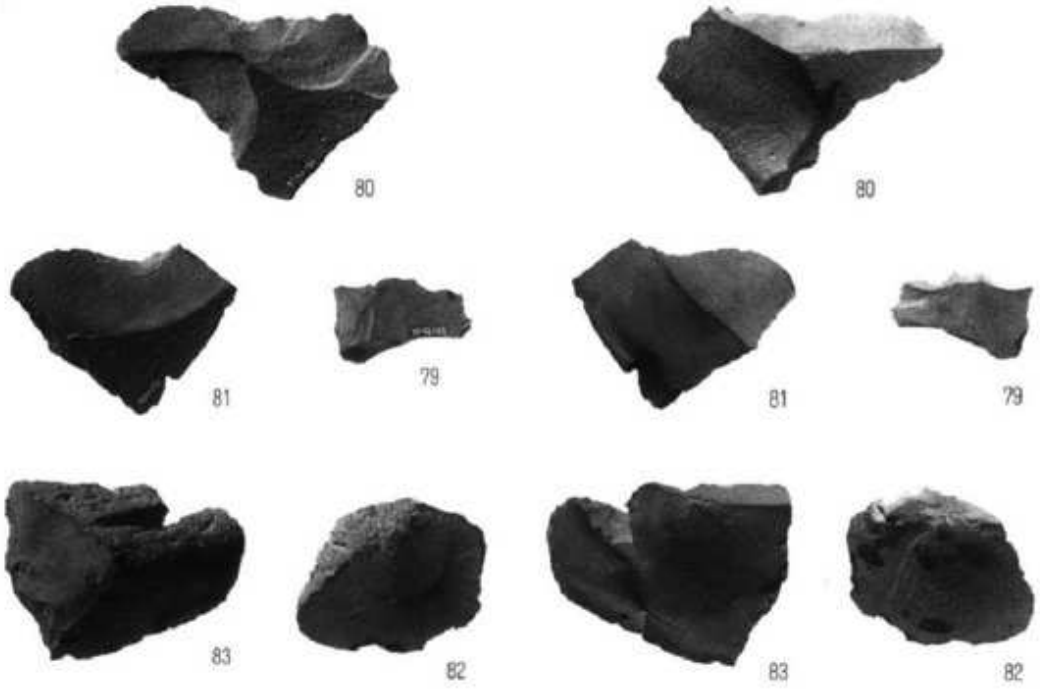
南区北半　塚ノ本古墳墳丘盛土上面(南から)

南区北半　完掘状況(南から)

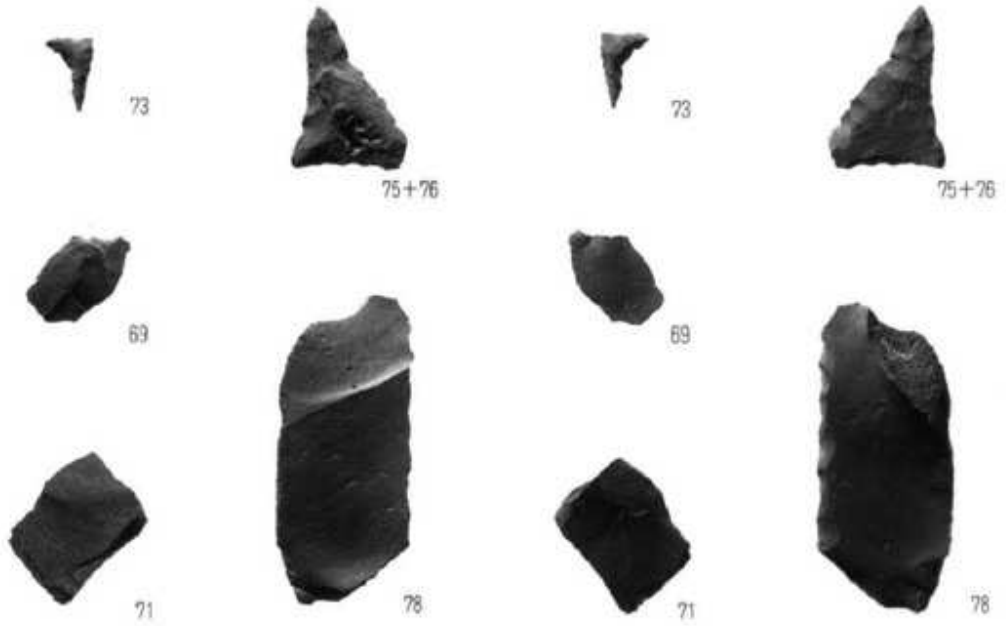
北区　地層断面(南から)



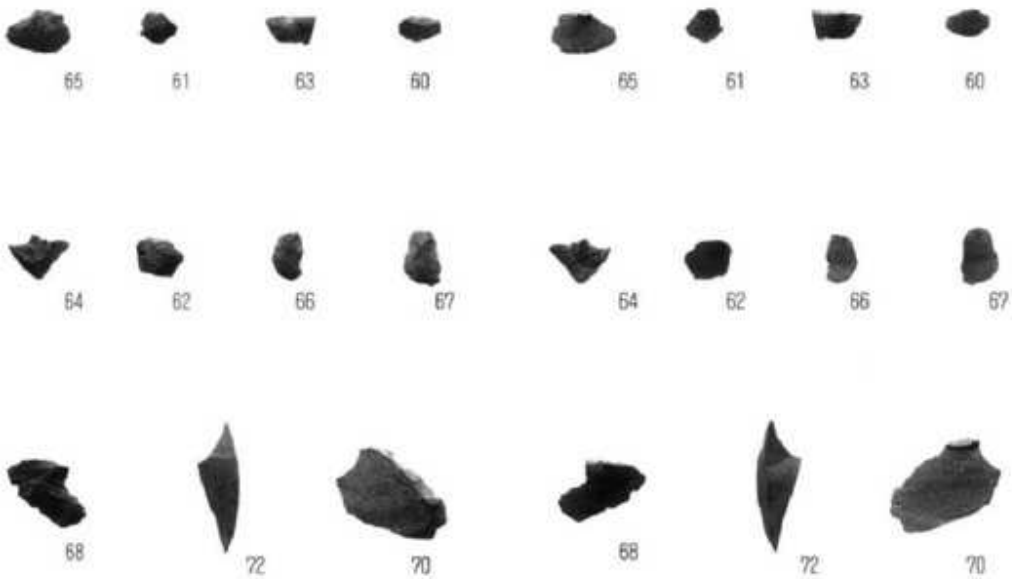
UR93－14次：SK204(3)、SD602(5)、SD701(4)、SK701(11)、8層(1・2)



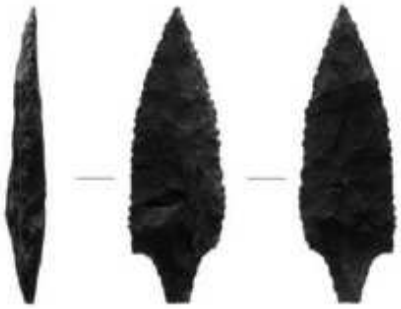
93－34次：SB702(83)、SD701(82)、SD708(81)、13層(79・80)



LC1201　削器・石錐・石鏃未製品・剥片・クサビ剥片



LC1201　剥片・クサビ剥片


74

77

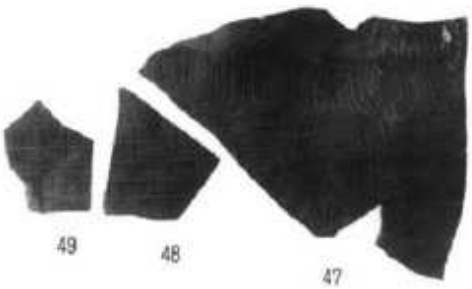
27

28

26

25

31

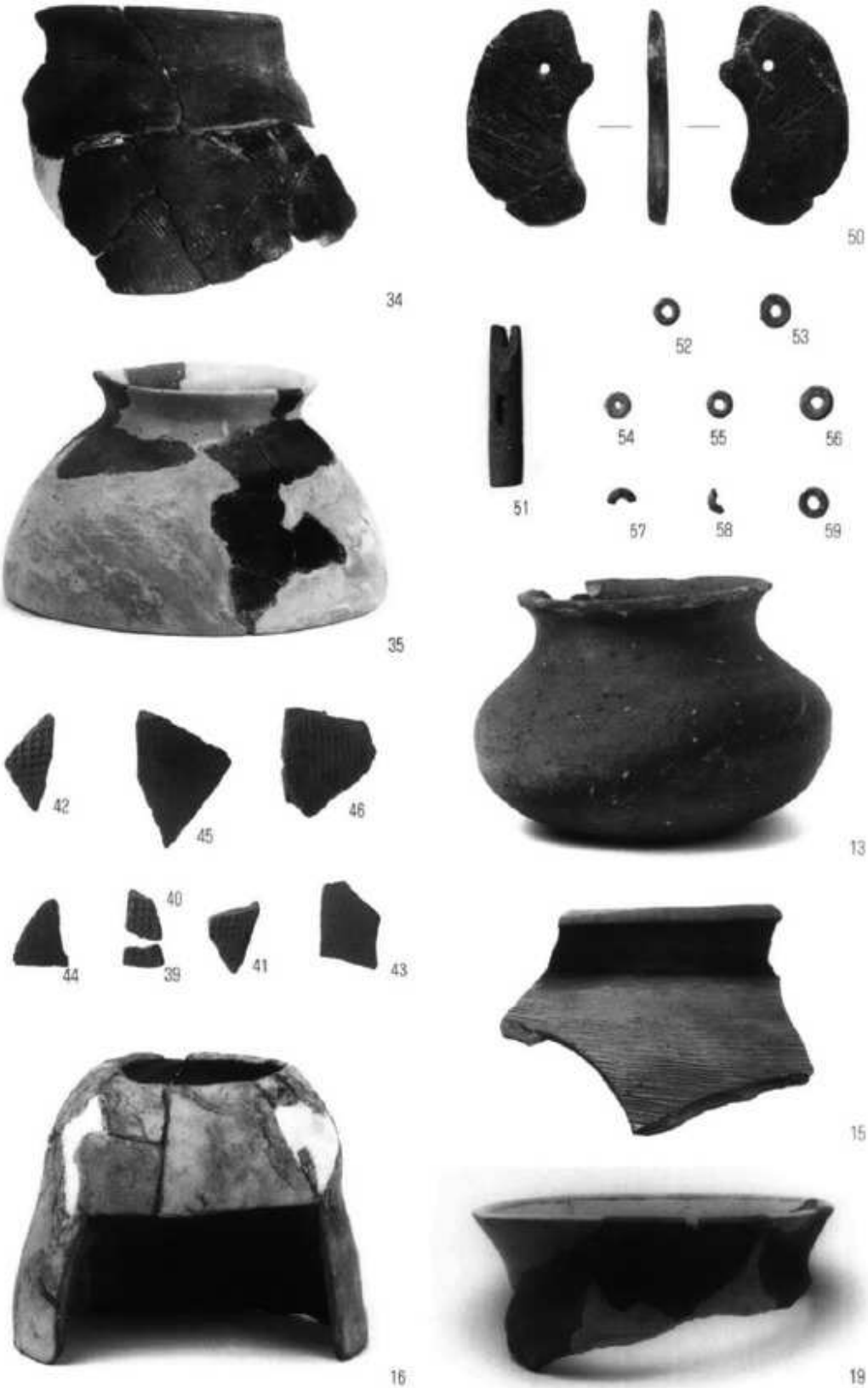

49 48 47

38

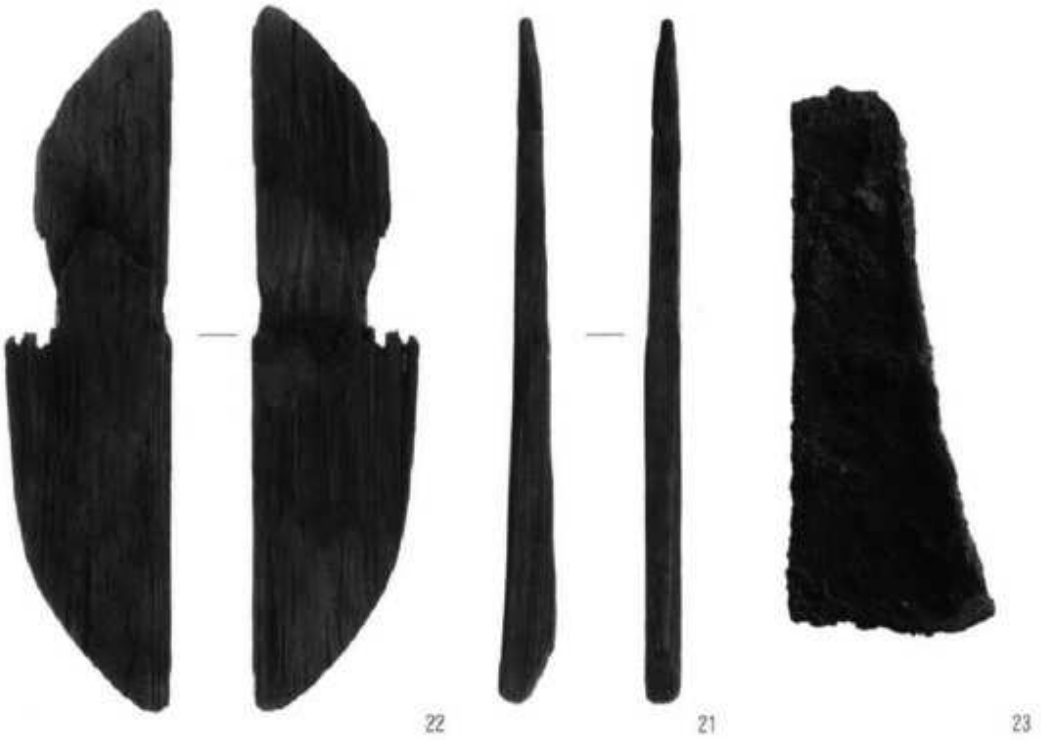
37

SB703(31)、SD707(27)、SD705(25・26)、SD706(37・38)、SD709(28)、SD701(49)、LC1201(74)、10a～10d2層(77)、10e層(47)、10e～13層(48)

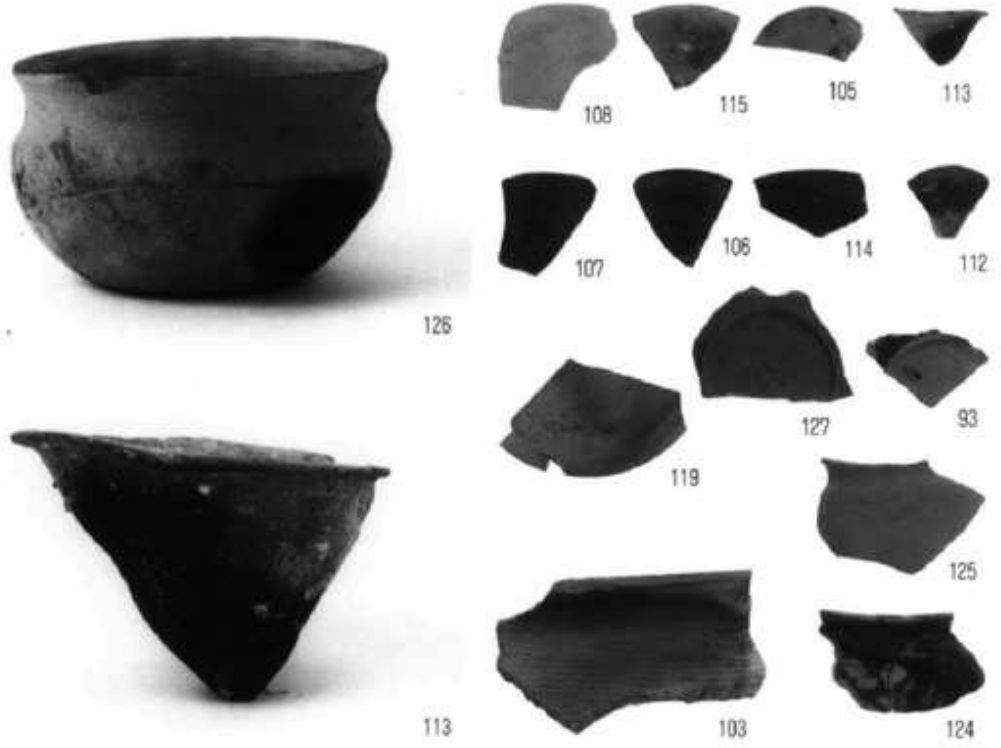
図版三〇　長原西地区93―34次調査地　遺構・包含層出土遺物（二）



SD701(45)、SD705(50・52～58)、SD706(34・35)、SP702(51)、9層(13・15・16)、10e層(41・43)、11層(19・39・40)、13層(44・46・59)、11～13層(42)

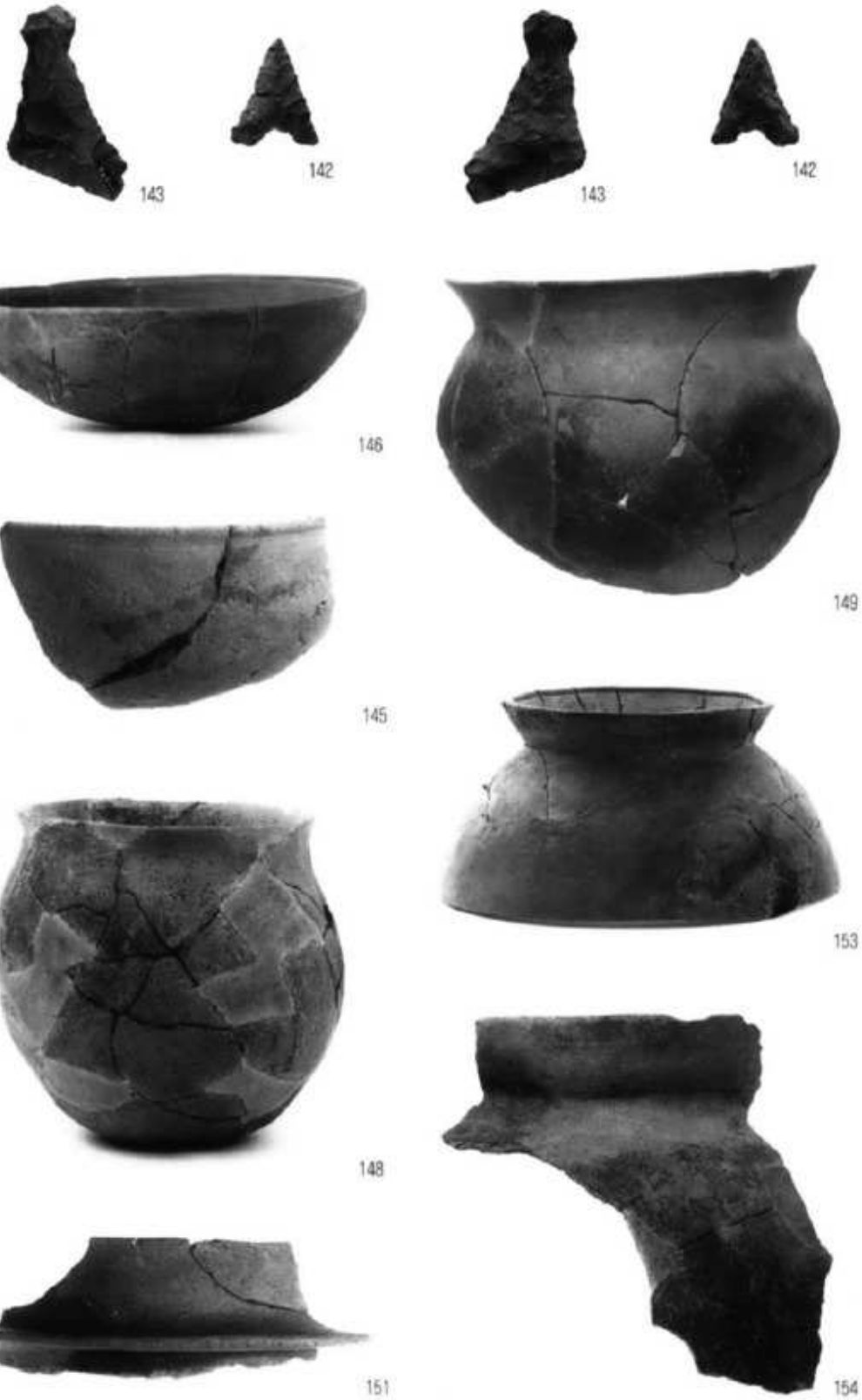


93－34次：10e層(23)、12層(21・22)



93－71次：SD401(113)、1層(93)、3a層(103)、4a層(105～108)、4b層(112・114)、4d層(115)、4e層(119)、5a層(124～126)、6a層(127)

SD404(138・139)、5a層(135)、7a層(136・137・140・141)



3c層(143)、4c層(142)、7e層(145・146・148・149・151)、7f層(153・154)

SD402(155)、6a層(156)、7c層(159)、7d層(164)、7e層(157・158・160～163・165)

169

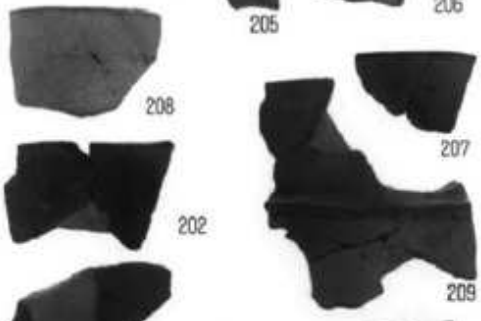
198

199

204

200

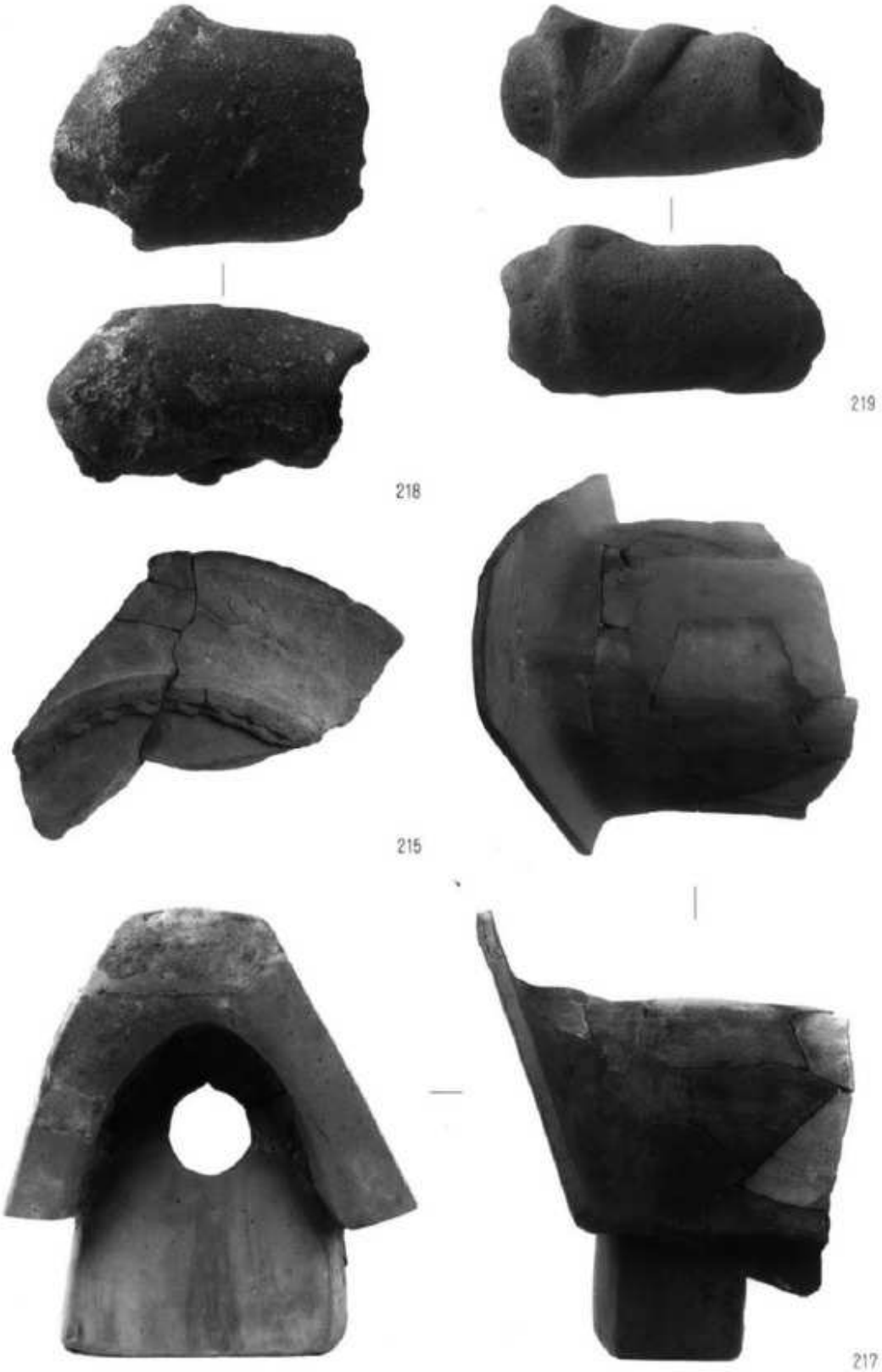
210
205
206


208
207
202
209

212
211
203
214
213

201

SD601(200～203)、5層(214)、7a層(169・198)、9層(206)、
10層(199・204・205・207～213)



SD601(215)、4～8層(218)、7a層(219)、10層(217)

223

226

224

225

227

229

231

234

228

235

237

土師器(223)、円筒埴輪(224～229・231・234・235・237)

238

240

239

241

248

249

247

250

円筒埴輪(238～241)、朝顔形埴輪(247～250)

251

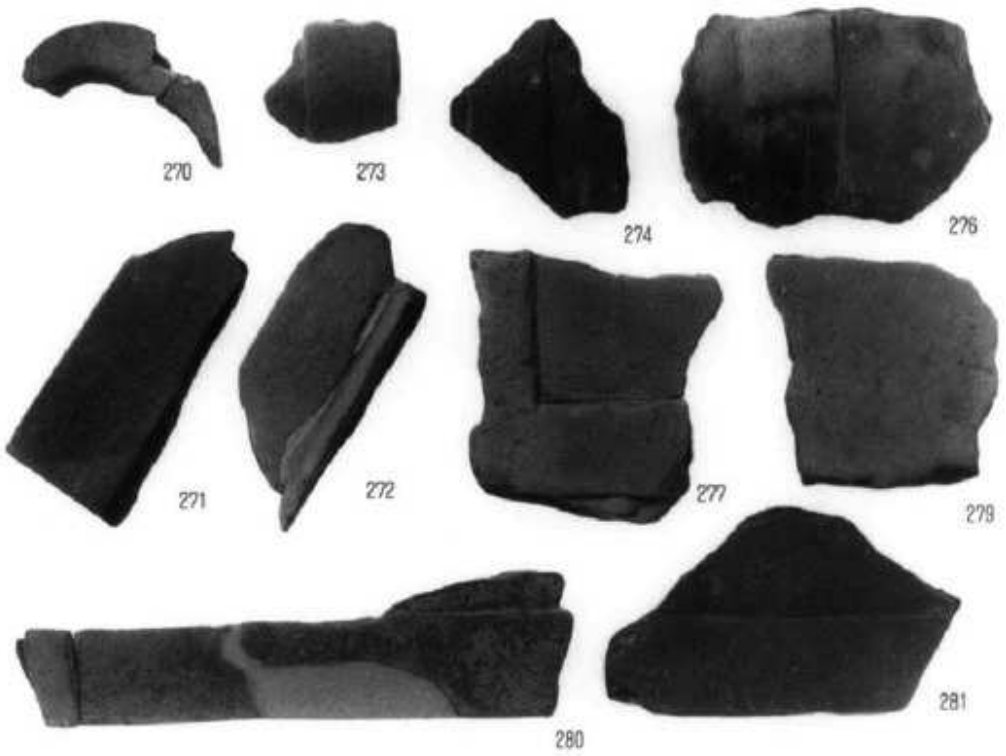
家形埴輪 1

252

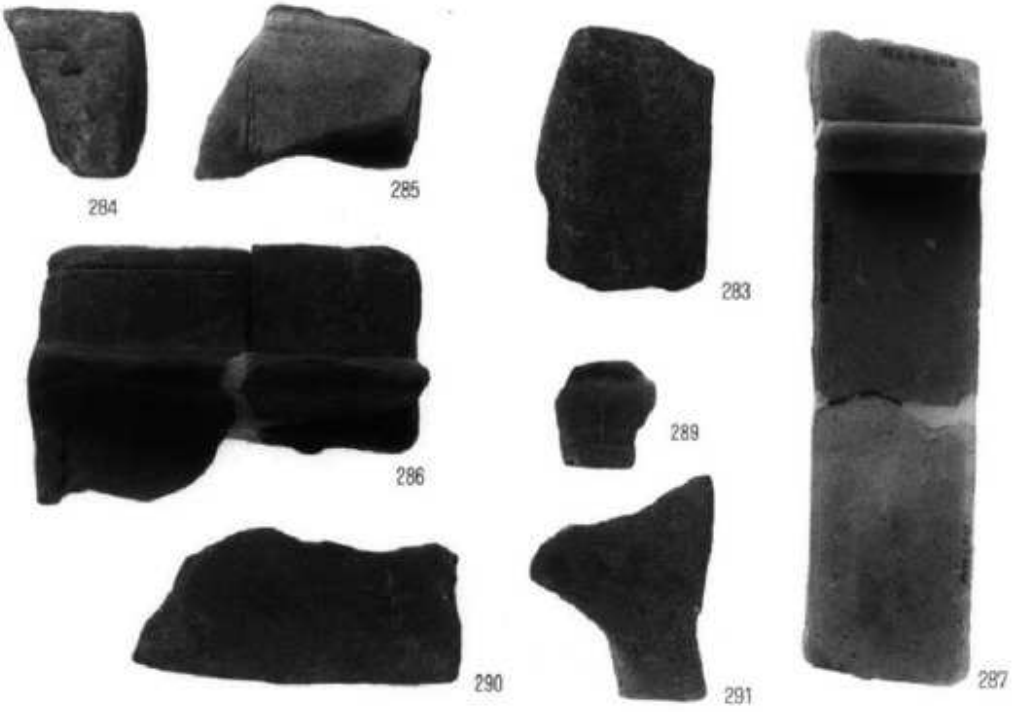
家形埴輪 2

家形埴輪1（251）、家形埴輪2（252～256・258・259）、家形埴輪3（261・262・264・265）

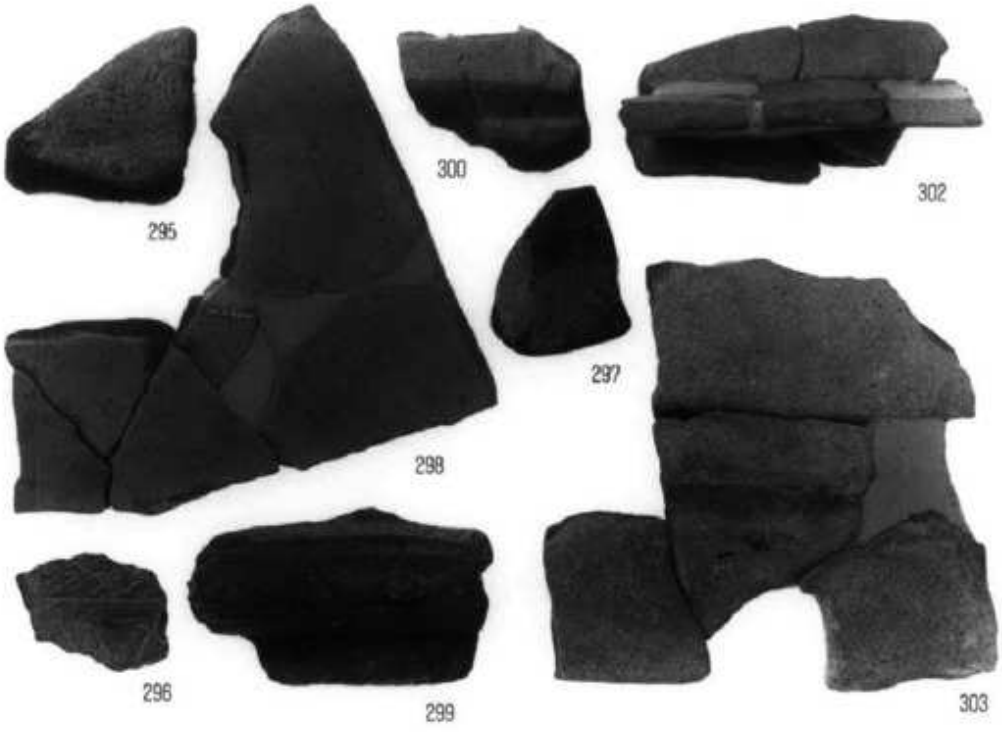
家形埴輪4（266～268）、家形埴輪5（269・282・288）、
家形埴輪6（292～294）、不明形象埴輪（345）


270
273
274
276
271
272
277
279
280
281

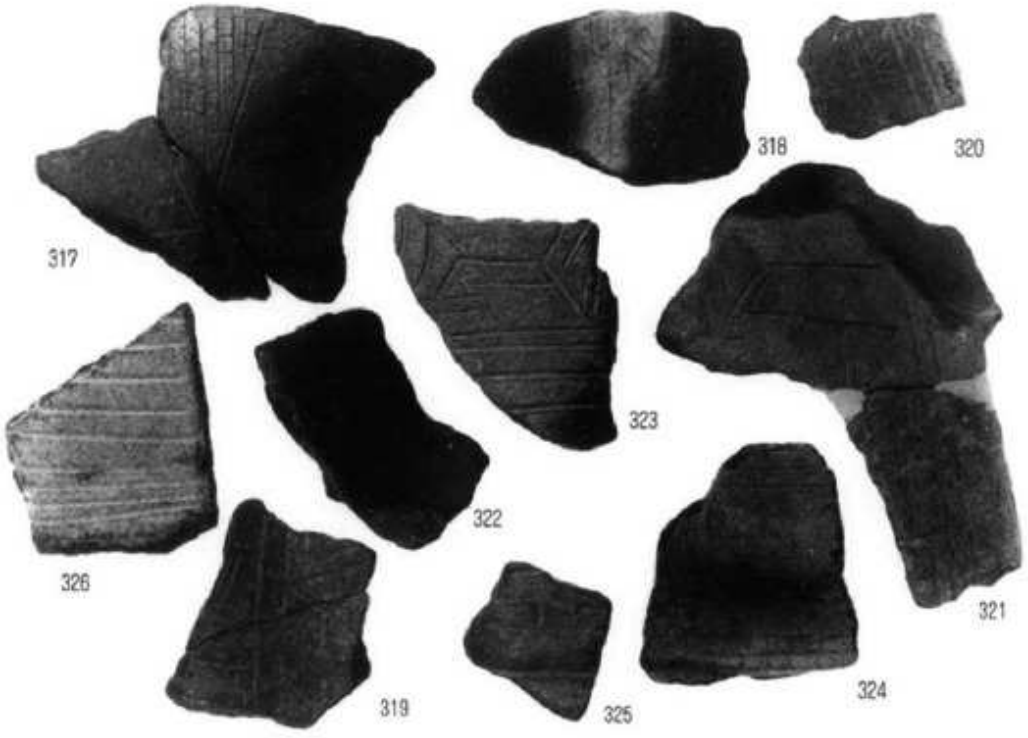
家形埴輪5


284
285
283
289
286
290
291
287

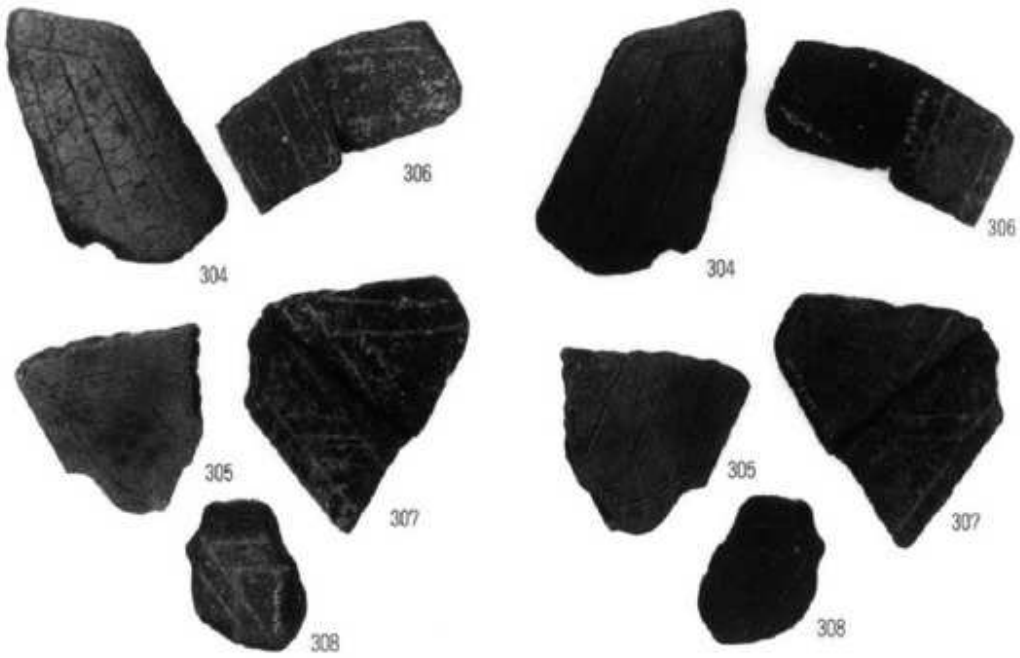
家形埴輪5



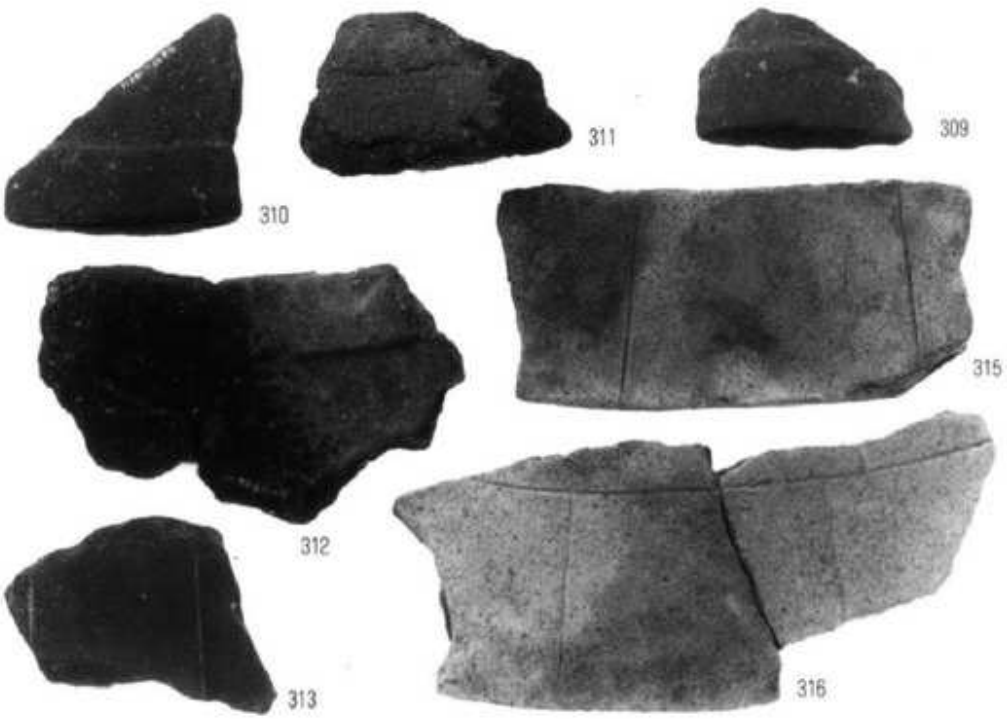
家形埴輪 7（300・302・303）、他の家形埴輪（295～299）



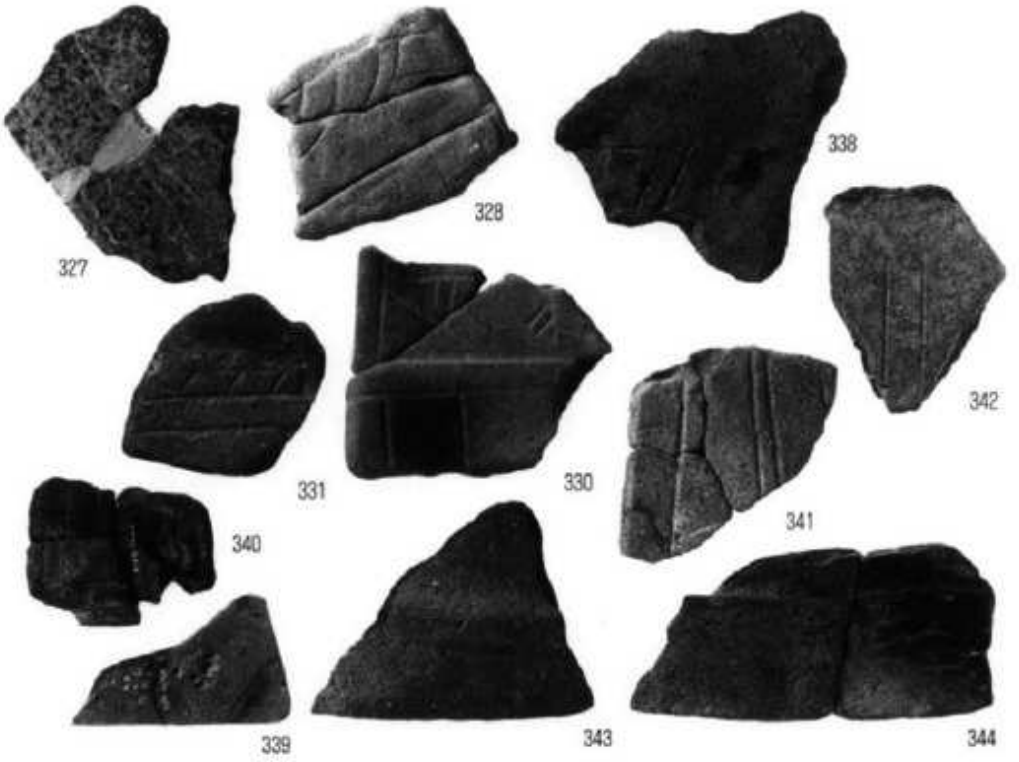
盾形埴輪


304
306
305
307
308
304
306
305
307
308

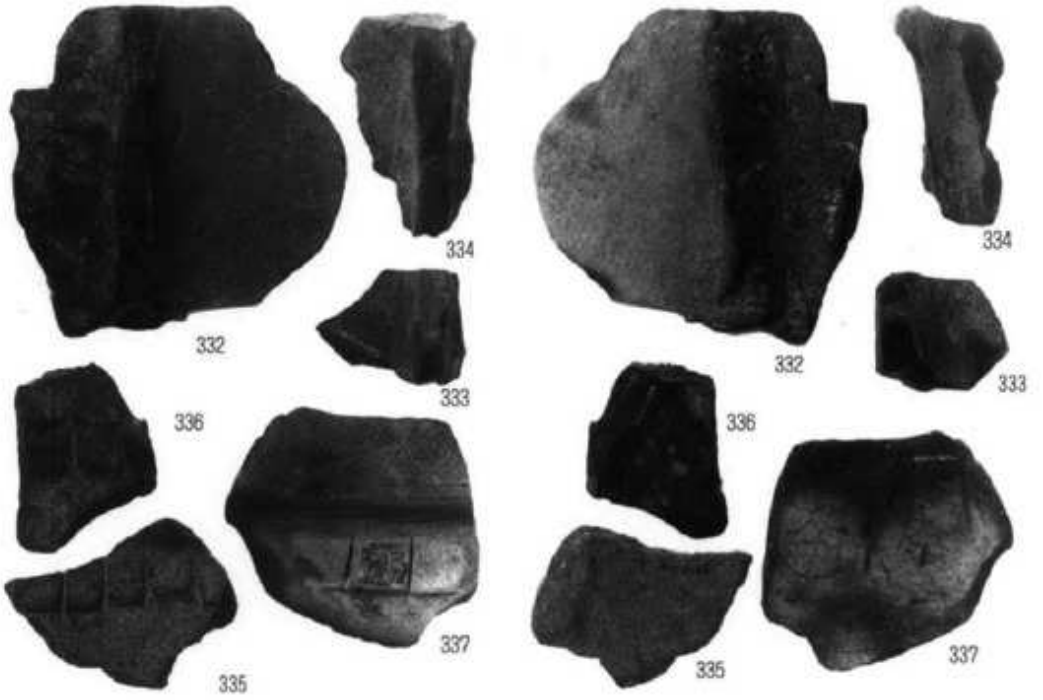
立飾り部


310
311
309
315
312
313
316

笠部



靫形埴輪(327・328・330)、草摺形埴輪(331)、不明形象埴輪(338～344)



不明形象埴輪